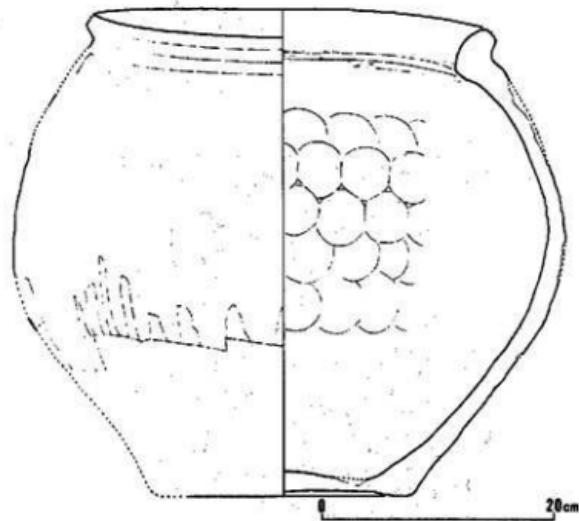


博 多

— 第6次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集



1986

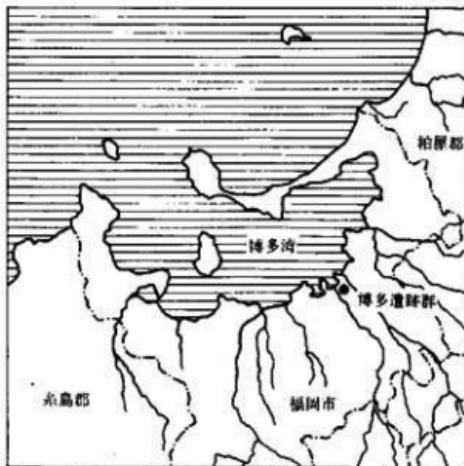
冷泉町155番地内遺跡調査会

福岡市教育委員会

博 多

— 第6次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集



遺跡略号 調査番号
HKT-6 7932

1986

冷泉町155番地内遺跡調査会

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はアジアの拠点都市として、国際都市作りを進めています。

福岡市博多区にある旧博多部は、江戸時代には城下町福岡に対し、商業都市でしたが、そのルーツは中国大陆、朝鮮半島を中心とした東アジア各地との貿易で栄えた中世都市「博多」に求められます。

昭和51年に始まった地下鉄工事にともなう発掘調査で、中世都市「博多」に考古学のメスが入れられて以来、福岡市ではこの地域を博多遺跡群と呼び、様々な開発に際して発掘調査を進めて参りました。

今回報告する6次調査は、博多遺跡群の民間開発事業における最初の段階の発掘調査です。諸般の事情で報告書の刊行が遅れましたが、本書が様々な場で活用されるよう念願しております。

また、調査から整理報告までご協力をいただきました株式会社錢高組福岡支店をはじめとする多くの方々に心から謝意を表します。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本報告書は、福岡市博多区冷泉町155番地のマンション建設にともなう博多遺跡群第6次調査の報告書である。

調査組織は以下のとおりである。

調査委託 株式会社鉄高組 福岡支店

調査主体 冷泉町155番地内遺跡調査会

代表 井上剛紀 (福岡市教育委員会文化課長)

柳田純孝 (同 埋蔵文化財第2係長)

調査担当 折尾 學

整理担当 森本朝子

2. 本文の執筆は、1. 調査に至る経過と遺跡の概要の項を折尾學が、以外を森本朝子が行った。

3. 本書に使用した写真は、白石公高、宮島成昭が撮影したものである。

4. 本書に使用した遺構実測図は、高倉浩一、常松幹雄、菅野都がおこなった。

5. 本書に使用した遺物実測図は、森本、小畠弘己、林田恵三、撫養久美子、トレースを小畠撫養、植田令子が行った。

6. これらの発掘調査、報告書作成に係る遺物、写真、図面等の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理される。

7. 本文中で使用した貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 V 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第105集 別冊 1984)に掲っている。

8. 本書の編集は、折尾と協議のうえ、森本、池崎謙二が行った。

9. 調査データは以下の通りである。

遺跡調査番号	7932		遺跡略号	HKT-6	
地番	博多区冷泉町155番地		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,035.14m ²	対象面積	1,035.14m ²	調査面積	640m ²
調査期間	昭和55年3月5日～4月31日				

目 次

1. 調査に至る経過と遺跡の概要	1
2. 出土遺物と造構について	2
3. 貿易陶磁器について	16
4. まとめ	35

図 版 目 次

Fig. 1 博多第6次調査区遺構全体図(1) 上部検出遺構(1/100)	折込み
Fig. 2 博多第6次調査区遺構全体図(2) 下部検出遺構(1/100)	折込み
Fig. 3 A区9号上塙と9号上塙出土遺物	3
Fig. 4 A, B区21号土塙と21号土塙出土遺物	4
Fig. 5 C区61号、86号、87号上塙と61号、86号、87号上塙出土遺物	5
Fig. 6 E区63号土塙と63号土塙出土遺物	7
Fig. 7 C区69号土塙	8
Fig. 8 C区69号土塙出土遺物	9
Fig. 9 D区70号土塙と70号上塙出土遺物	10
Fig. 10 D区71号土塙と71号土塙出土遺物	11
Fig. 11 C区102号土塙	12
Fig. 12 C区102号上塙出土遺物	13
Fig. 13 D区108号土塙と108号土塙出土遺物	14
Fig. 14 E区111号土塙と111号土塙出土遺物	15
Fig. 15 出土遺物 青磁(1)	17
Fig. 16 出土遺物 青磁(2)	18
Fig. 17 出土遺物 青磁(3)	20
Fig. 18 出土遺物 定窯・磁州窯系の陶磁	22
Fig. 19 出土遺物 広南風の白磁(1)	24
Fig. 20 出土遺物 広南風の白磁(2)	25

Fig. 21	出土遺物 広南風の白磁 (3).....	26
Fig. 22	出土遺物 広南風の白磁 (4).....	27
Fig. 23	出土遺物 白磁 (1).....	29
Fig. 24	出土遺物 白磁 (2).....	30
Fig. 25	出土遺物 白磁 (3).....	32
Fig. 26	出土遺物 白磁 (4)、その他	33

写 真 図 版

巻頭カラー 博多遠跡群第6次調査出土遺物

- (1) 水注 越州窯系青磁
- (2) 玩具・犬 景徳鎮窯系青白磁

- PL. 1 造構全景
- PL. 2 9, 21, 61, 86, 87号土壤
- PL. 3 63, 69号土壤
- PL. 4 70, 102, 108, 111号土壤
- PL. 5 青磁 (1)
- PL. 6 青磁 (2)
- PL. 7 高麗青磁、定窯・磁州窯系陶磁
- PL. 8 定窯・磁州窯系陶磁、広南風の白磁
- PL. 9 広南風の白磁
- PL. 10 白磁、その他の陶磁

表紙 A区21号土壤出土の甕 Fig.4 の遺物とともに、底部から浮いた形で出土。陶器C群に属する。褐緑色の釉が器内外に施されるが、大部分カイラギになる。器内上半部に楕円形の叩き跡がある。火にあたり表面の剥落が著しく、胎も黒灰色にやけている。(2ページ参照)



1 水注 越州窯系青磁

2 玩具・犬 景德鎮窯系青白磁



1. 調査に至る経過と遺跡の概要

宋人百堂に関連する東西南北の溝、
大間街割関連の現在街割平行の溝、
中国系商人で船主の存在を裏付ける墨書き陶磁器、
中国大陆7州15窯製作の多種大量の輸入陶磁器、
各時代の建物と井戸群、
鎮西探題の北条氏を襲撃、衆首されたと考えられる菊池一族110体の首級、
など、昭和52年12月に始められ、昭和56年3月に終結した博多市街の地下鉄工事に伴う発掘調査は博多中世史研究に多大なる貢献をしたと言えるであろう。

正直なところ、地下鉄工事以前の考古学は奈良・平安時代の古代史関連までが精一杯のことろで、中世史関連遺跡の発掘調査は元寇防壁を除いて皆無に等しく、調査されたとしても偶然性に頼るところのものであり、問題意識をもち得ない段階であった。そのような意味で地下鉄関連の博多市街の調査は暗中模索手さぐり状態であって、かくも大きな成果を上げられるとは想像できぬ事であった。現在、博多出土の資料は研究者や一般の人々の収集を始め、わが国はもとより、中国、韓国、東南アジア、イギリス等の陶磁器研究者の目で直接確かめられ、重要な価値付けをされているところである。

今も続けられる博多市街の再開発工事に伴う発掘調査は、地下鉄工事に伴う発掘調査の成果が基盤となっているのである。

さて、ここに報告する「博多区冷泉町155地内」の遺跡は、博多遺跡群第6次調査である。昭和54年11月9日付で開発行為の届出が提出され、同年12月に試掘を行い、昭和55年3月初旬より同年4月一杯まで発掘調査を行ったものである。現在の発掘調査のほとんどが、開発者の文化財に対する認識の深い自発的届出事業であるのに比べ、当時の発掘調査は開発者の自発的届出が皆無で、通りがかりの人々の通報によるところがほとんどであった。故に文化財保護の精神を開発者に理解して頂くのに長時間を要した訳である。調査、費用等が開発側に委ねられるところから、開発者の抵抗は厳しく、理想的予算数値に達せず、調査費用、期間、面積は行政側に大幅な譲歩と妥協を強いられた。故に調査は上層から下層へと一枚一枚剥がす理想的調査とはならず短絡した方法となった事を、博多市街、博多遺跡群発掘物語の中に銘記しておきたい。

遺跡の成果を記述する

奈良・平安時代の方形の木枠組井戸、鎌倉時代の木桶主体の井戸、木桶の上部に瓦を桶状に組合せた井戸、正体不明の柱穴群、それに11、12世紀代中心の多種多様の輸入陶磁器である。

○調査組織 文化部長 志鶴幸弘・文化課長 井上剛紀・埋蔵文化財第2係長 柳田純孝
(昭和54年代) 調査担当 折尾学 池崎謙二 浜石哲也・整理担当 森本朝子

2. 出土遺構と遺物について

次に比較的のしっかりした状態で検出された遺構をいくつか選んで紹介する。

9号土壤 Fig. 3 (PL.2) A区検出の井戸である。縦板で囲った底部70cm余りが残っていた。上部は既に早く削平されている。径70cm、掘方は削平部で120cmを計る。遺物は多くない。1は白磁平底皿III類。白化粧がしてあり、口縁は後をつけて水平に外にひき出している。他に3個体ある。2は淡オリーブ色の青磁碗。胎土は灰色堅緻やや粗、氷裂のない透明釉がかかる。3、青磁鉢の底部。平底で全面施釉。灰黄色の胎土にオリーブ色透明釉が薄くかかる。外底に径3.5cmの器物の跡が輪形に残る。同じ胎土の器を、重ね焼したものであろう。4も同じような底部だが、底部より2cmほど上に、重ね焼の白い耐火土の目跡がある。胎土は灰色、釉は灰オリーブ色不透明である。3、4はFig.17の1のような器物の底部と思われる。陶器B群の鉢よりは格段に良質で、越州窯風の青磁である。5は陶器C群Y字口縁甕。褐色不透明釉が内外に施され、外には斜めの、内には青海波風の叩き目がある。図示した実測可能のものに次のような小片がある。白磁碗0-II、II、IV、V、IX類、同平底皿0-I、II、VI類、青白磁壺、陶器はA群を中心に黄釉細縁盤、磁灶窯の斗温山窯産青釉壺(21号土壤参照)など、B群平鉢2、四耳壺および群外の頭無四耳壺。11、12世紀の白磁が中心であるが、2~4の青磁、斗温山窯の青釉壺に注目したい。

21号土壤 Fig. 4 (PL. 2) A、B区にまたがる土壤。深さ25~20cmで90cm×170cmほどのくびれのある長円形を呈する。遺物は底部より浮いた形で出土した完形に近い器物と、他に小片ばかり285片におよぶ白磁片をはじめ、国産の土器、須恵器、瓦器碗、土師皿(へら切底2に糸切底1の割)、A群に属する陶器多數、B群の壺、C群の無釉盤口水注、擗鉢などがある。又越州窯系青磁の壺片と注口がある。白磁片は碗II類が最も多く、11世紀を中心とする廃棄物処理穴に、重複して設けられた火葬墓の可能性がある。

1、2はへら切離しの土師器で、2の内面は磨かれ、こて跡がある。3は白磁碗II類でFig.23の2の形、灰白色胎に水緑色の釉がかかる。氷裂があり、露胎はうす茶を帯びている。外底にハマの一部が接着している。4、同じくFig.23、6と同形の碗。5、6は高台付白磁皿のI~2に属し、他に2個体がある。7は白磁平底皿、うすくオリーブを帯びた透明釉がかかり、氷裂がある。8は、平茶碗型の黒釉の茶碗である。胎はベージュ色、釉は口縁近くではマホガニー色で、底の方ほど厚くなり黒くなる。表面に青く輝く部分がある。口唇と釉尻では銹茶色。火に会い、釉表は壊っている。同様の破片があと1個分ある。9は8と似た器形であるが、胎は黒っぽい灰色で粗く、露胎は茶褐色。いわゆる建蓋に近い。釉は茶を含む黒で水裂ではなく、黄土色の禾目がかすかに出ている。10は陶胎の皿。灰色の胎土には白い砂や黒い点が少し混る。黒っぽいオリーブ色の釉がかけられ、口で合せて焼いている。口縁の造りに特徴があるが、B群

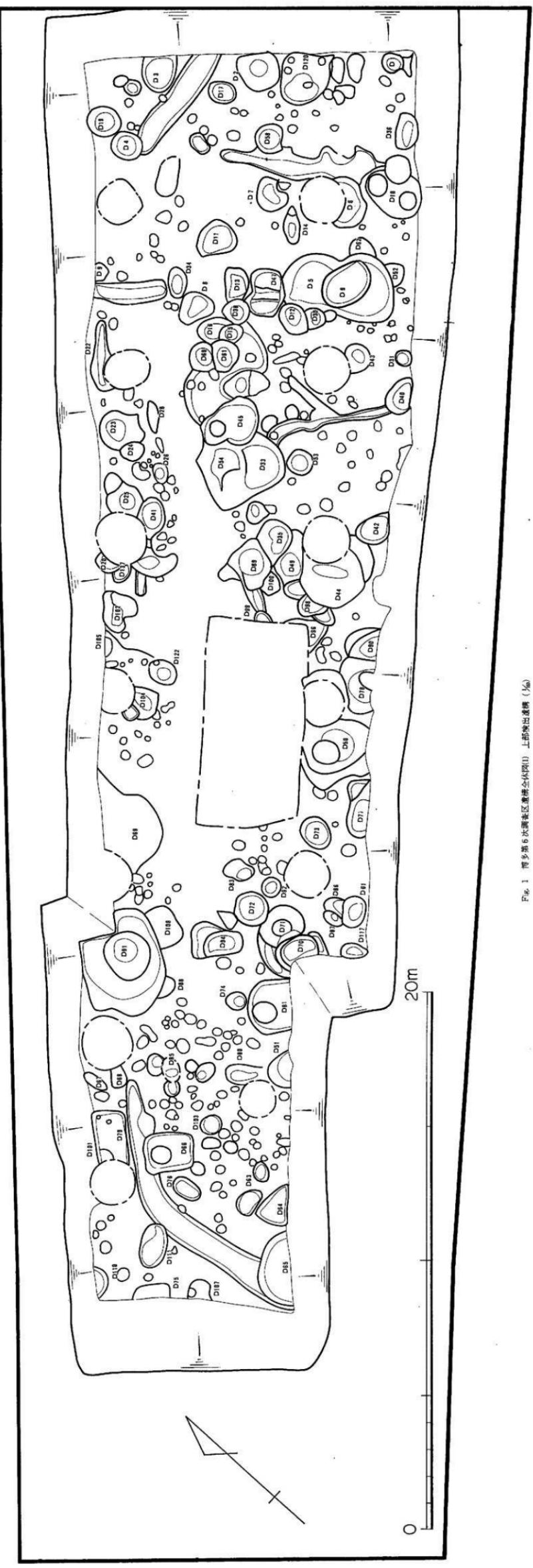
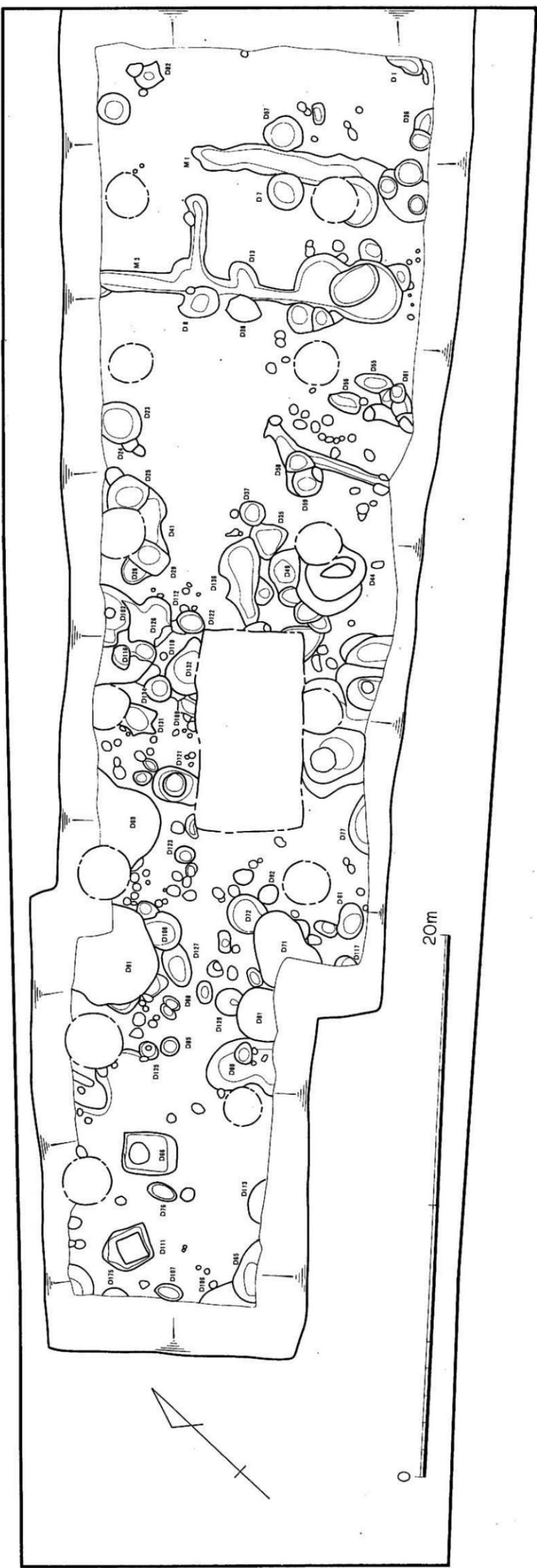


Fig. 1 南乡第五次测井层位图(1) 上部突出油藏 (1/6)

Fig. 2 博多第6次測量区岩体全体圖(2) 下部断面圖 (1/5)



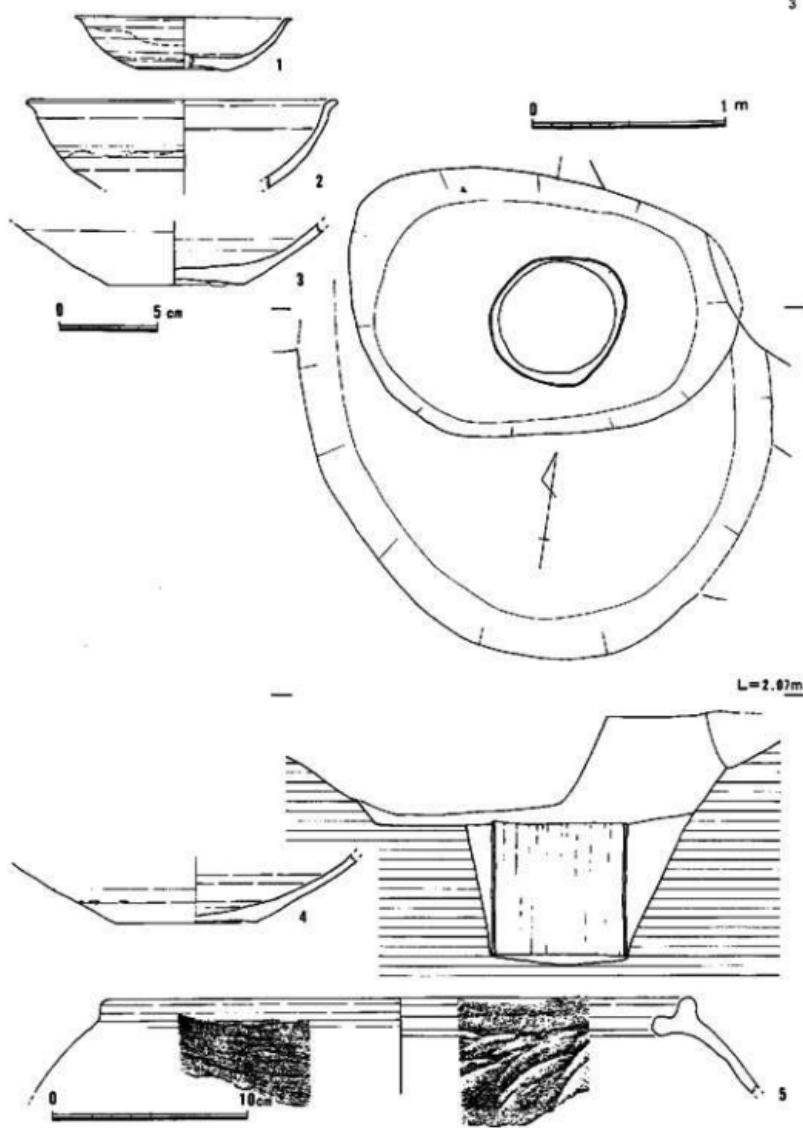


Fig. 3 A区9号土壤と9号土壤出土遺物

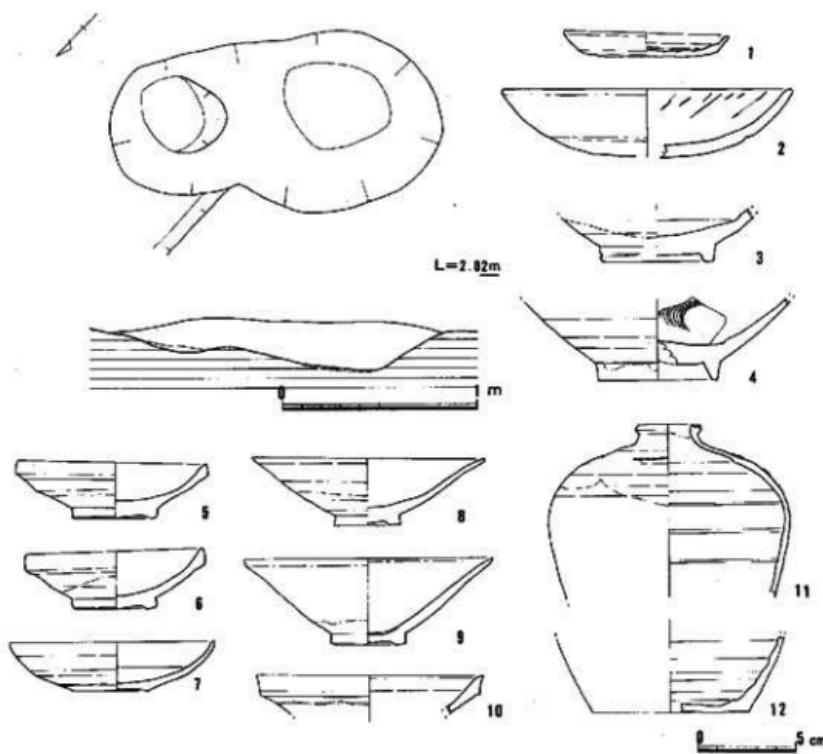


Fig. 4 A, B区21号土壤と21号土壤出土遺物

の陶器である。やや茶色がかかったもう1個体がある。11、12はA群の陶器で、小口瓶とよく似た特徴がある。ただ胎土はやや良質で、釉色は淡く、茶がかかったオリーブ色の透明釉で、冰裂がある。この二つは別個体だが、ちょうど二つを合せたほどの器高で完結し、12cm余りの壺になると思われる。今までの資料では、泉州磁灶窯系の壺のうち、現在は南安県に入っている斗温山窯の壺が、最も似ている。5～9の遺物は本報告書の表紙に図示した壺を中心に発見されている。また、この一括遺物以外の小片ばかりの中には内面に片切形の割花文と櫛による刺突文を施し、外面には粗い櫛で一面に斜線を施した青磁片がある。胎土灰色。オリーブがかかった透明釉がかかり冰裂がある。同安窯系の青磁で、一括遺物より古い遺物の可能性がある。

2. 出土遺物と造塙について

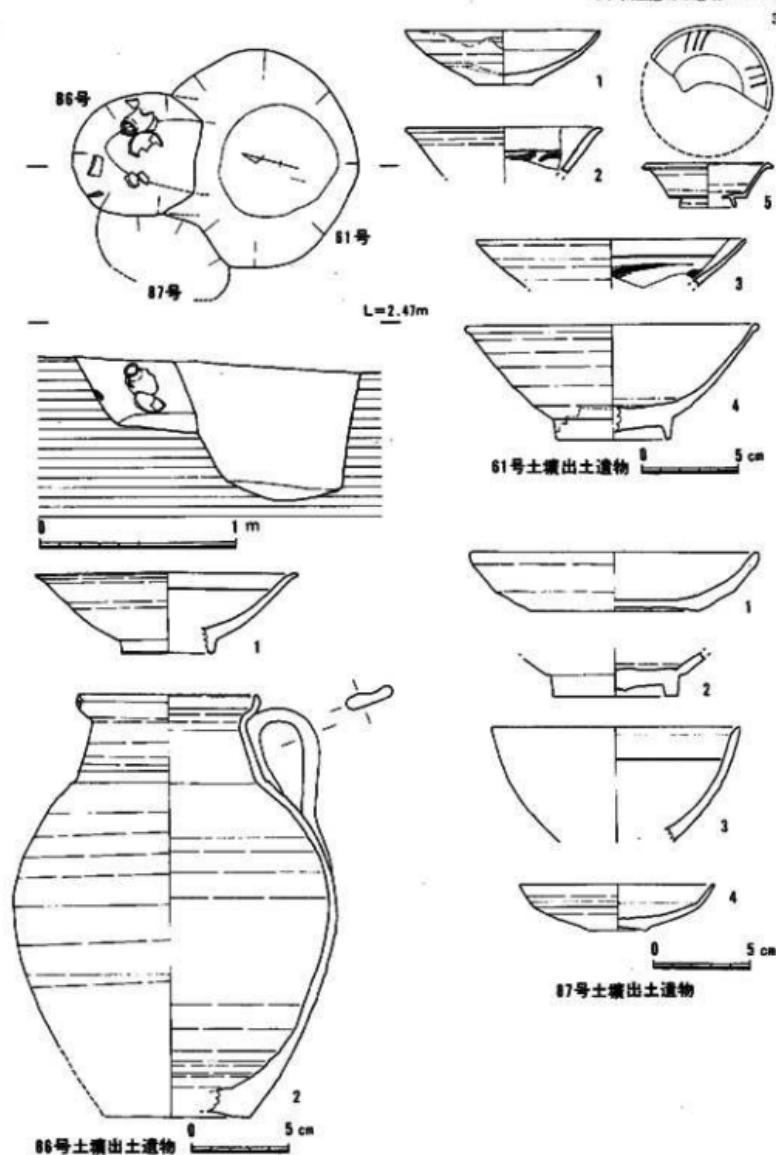


Fig. 5 C区61号, 86号, 87号土壤と61号, 86号, 87号土壤出土遺物

61号、86号、87号土壤 Fig. 5 (PL. 2) C区検出の土壤である。61号は径120cmのほぼ円形の土壤で、86号、87号土壤と重なるが、前後関係は、断定できない。

61号土壤 古墳時代の土師器を含む土器、須恵器、研磨土器、土師小皿などと、白磁、陶器片が出土した。1は白磁平底皿I類、2は白磁透明釉の白磁小碗、Fig.24の1に近いもの。3はFig.23の6の類、4はVI-3類だが、口縁は水平に削らず、玉縁のようにふくらんでいる。5はFig.18の北方系陶磁に属する杯で、黄ばんだ白の、青のような細かい胎土に透明釉がかかっている。水裂が少し出ており、釉下には緑がかかった焦茶色の線が三本づつ、四方に描かれている。高台の造りは70号土壤の黒釉杯によく似ている。図示した以外の輸入陶磁には白磁碗II-1と4、IV、V、VI類、白磁高台付皿I類、平底皿II-4、III類、白磁耳つき小壺、陶器A群の小口瓶、盤、準A群褐色四耳大壺、B群の壺と、茶入れのような褐色緻密な胎に、焦茶色の釉がかかること手の小壺片がある。

86号土壤 1は白磁碗0-II類の無文、2、陶器の把手つき無釉盤口瓶である。胎七はB群に近く、乳褐色で黒ごまがたくさん吹き出している。把手の対面では、口縁をつまんで注口を作り出している。他に陶器C群の捏鉢、土器、須恵器の小片がある。

87号土壤 1は糸切底の土師皿、2は白磁碗、3は同じくV類、4は白磁平底皿III類である。他に白磁では碗0-II、IV、V、VI類があり、高台付皿II類、平底皿III類、と壺片がある。又、同安窯系の碗II類、皿II類と粗質の高麗青磁、陶器A群黄釉盤の小片もある。

以上三つの土壤は、61号が12世紀、87号は13世紀まで遡る遺物を含み、86号の遺物は白磁皿の12世紀前半は確實だが、陶器は不明。遺物が少なく時期の確定は難しい。

63号土壤 Fig. 6 (PL. 3) E区検出の土壤である。長さ1mのそら豆形で、腹に当る處に径25cmの穴が後から掘られている。遺物は古い穴の上面で出土している。1~4は土師皿、すべてへら切底、他に小皿4個体があるがみなへら切底である。5~10は白磁で、5、碗IV類、6は同じくV類だが胎土は精良で器壁は薄い。口縁の外反が強い。黄土色透明釉がかかっているが水裂はない。7~9は平底皿III類、10はこれらの皿に似た胎・胎の白磁で、壺の口であろうか。11は灰色堅硬な胎に貼青磁のような釉が厚くかかっている。しかし龍泉窯には見られない形である。12、黒釉磁壺。胎土は灰白色磁質、黒褐色の鉄釉がかかっている。露胎は赤茶色。13、黒釉碗。淡灰色でやや粗い胎土に、茶を含んだ黒い釉がかかっている。細かいビンホールが柑皮状に見える、口縁外反の天目碗である。14、褐釉盤。器形、施釉法、窯詰法は基本的には黄釉盤と同じ。胎土は砂が多く、灰色に堅く焼けている。褐色のあまり光らない釉がかかっている。図示したものの他に白磁碗II-1、IV、V類があり、平底皿III類、Fig.24の2と同類の小碗、青白磁碗・皿がある。陶器ではA群の細縁小形黄釉盤、準A群大形褐色四耳壺、B群の壺、C群の捏鉢3がある。黒褐釉が内面にのみかかる行平もある。染付小片も1個あるが、これは他からの流れ

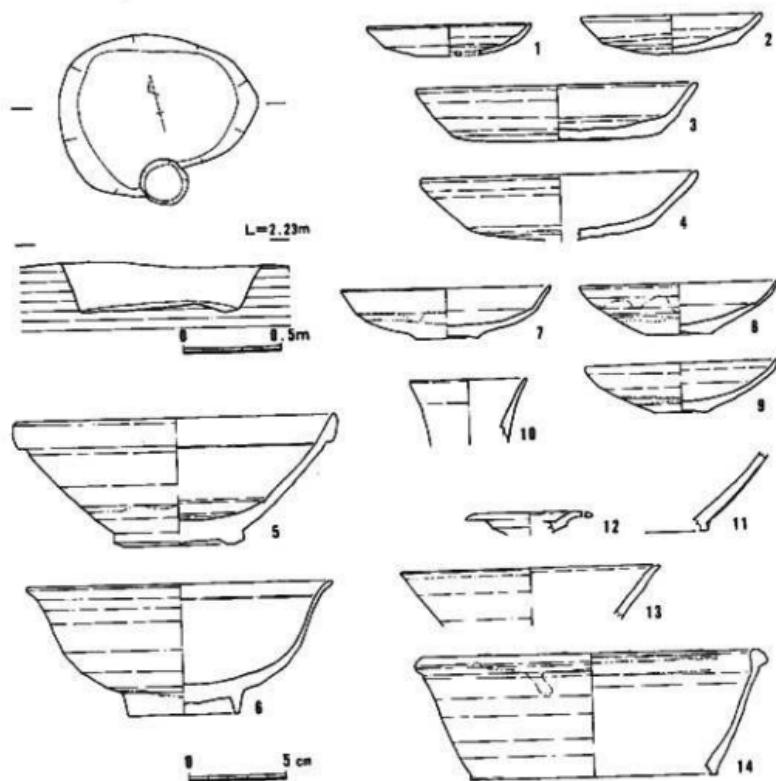


Fig. 6 E区63号土壤と63号土壤出土遺物

こみで、全体として11世紀後半～12世紀前半の遺物と捉えることができる。

63号土壤 Fig. 7、8 (PL.3) C区検出の近世井戸。下層の構造縦板が二段、井戸瓦が二段を残している。瓦や板の裏側にたががはめてある。井戸は最下層に砂を敷き、小石を二層に分けてつめている。その上の砂層から土層にかけて、上の瓦がなだれ込んでいる。掘方からの遺物は多く、平安時代の須恵器、土器から伊万里まで、大きく5期に分けられる。輸入陶磁を含まない1期、白磁碗II、V類を中心とする2期、龍泉窯青磁I～III類を含む3期、明染付・李朝III・備前播鉢を含む4期、伊万里(蒟蒻判)などの5期である。2期の遺物が実測可能のものが多くまとまっていた。

1、土師皿。へら切底である。2、青白磁碗。3～13は白磁で、3は碗II-1類。4、同II-4類。5はV類。7、8はFig.23の6、9に当たる。6も8と同じ類か。9～11は平底皿III類。12は、白磁

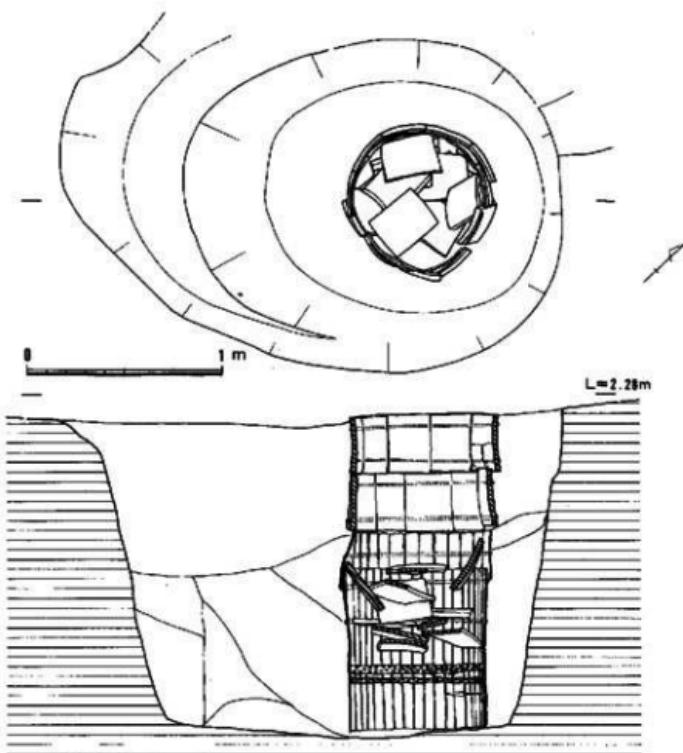


Fig. 7 C区69号土塚

碗II類と同じような灰白色でやや粗い胎、淡オリーブがかった透明釉で、細かい冰裂がある。蓋子のへたを象ったような形の蓋。13は、胎土は12の蓋に似るが、乳白色で冰裂のある釉がかかっている。非常に部厚い造りの合子身である。このような形の合子は廣東省の諸窯と、福建省の南安などで報告例がある。当遺跡では他に同形のもの2個体と、Fig.26の26に示した小形1個体、計4個がある。14、15は黒釉碗。14は赤褐色に白い砂粒が混じる粗い胎土に黒褐色の釉。釉はつやがなく、大きなピンホールが並び、流釉現象もなく焼成不足と思われる。15は小片であるが、胎土は暗灰色で比較的こまかく、釉は褐色を帯びた黒で口唇は銹色、禾目はない。いずれも口縁外反の範疇に入れられる器形の碗である。図示したものの他に、白磁碗II-4、0-1、V類。陶器はA群の小口瓶、黄釉褐彩盤と壺、準A群褐釉四耳大壺、B群四耳壺、C群捏鉢、そしてその他の頭無壺があり、全体として11世紀～12世紀前半の遺物である。

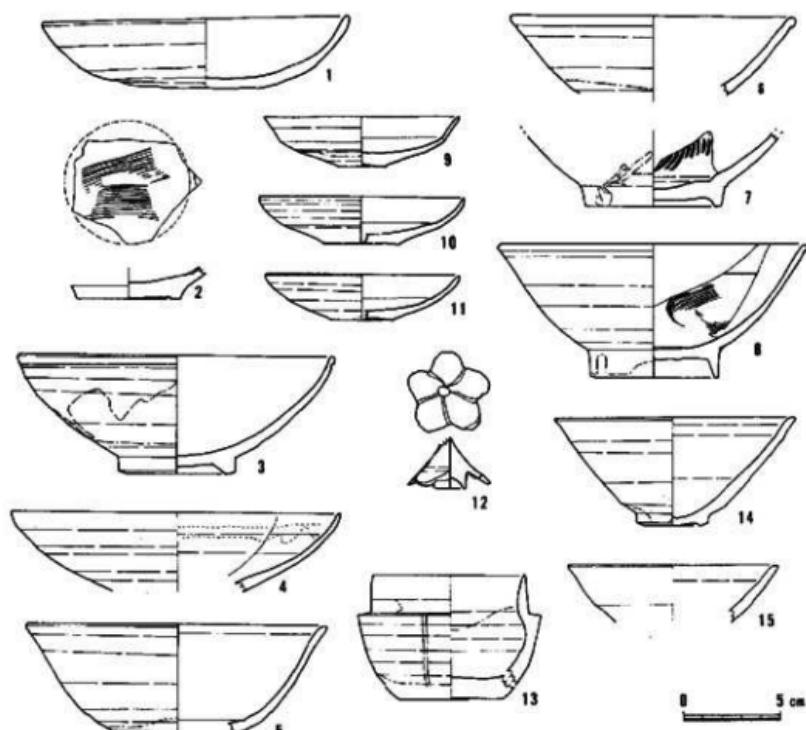
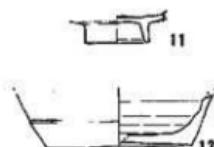
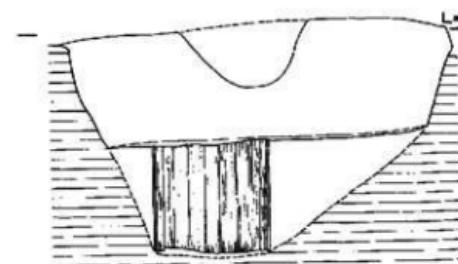
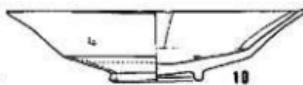
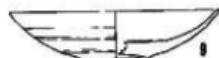
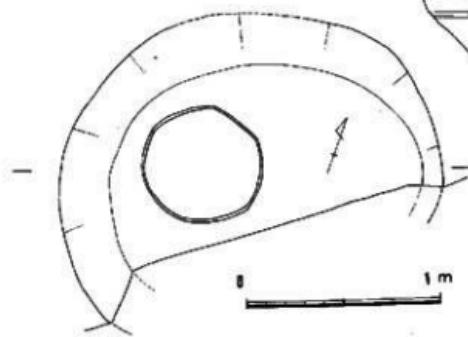


Fig. 8 C区69号土塗出土遺物

10号土壤 Fig. 9 (PL. 4) D区検出の井戸。最下部の桶枠のみが残る。遺物にはこんろの目皿や、陶器など、新しいものがある他は、11世紀に属するものがまとまっている。1～4は瓦器、2、3はいずれも体外下半部に指頭痕があるが、その上からよくなじで跡を消している。5～9は白磁で、5は碗II-1類。6はII-5類。7はII-4類。8はIV類。9は平底皿II類である。12は陶器A群で、青黄色の釉が流れしており、磁灶窯斗温山の小口壺底部である。10、11はFig. 18にまとめた北方系の陶磁で、10はベージュ色の土に白化粧をし、クリームがかった透明釉をかけている。疊付以下露胎で、内底には小さな目跡がある腰折の皿。11は灰がかかった白い、粉っぽい胎土の杯で、漆黒の釉をかける。高台胎以下露胎。口縁と見込で釉を削りとっている。他に実測不能の小片として、白磁ではFig. 22の1～3と同類の碗、平底皿O-I、II類、陶器A群黄釉盤、行平がある。又、内面に劃花文を施し、余白を描による刺突文で埋め、外面

博多遺跡群第6次調査

10



0 5 cm

Fig. 9 D区70号土壇と70号土壇出土遺物

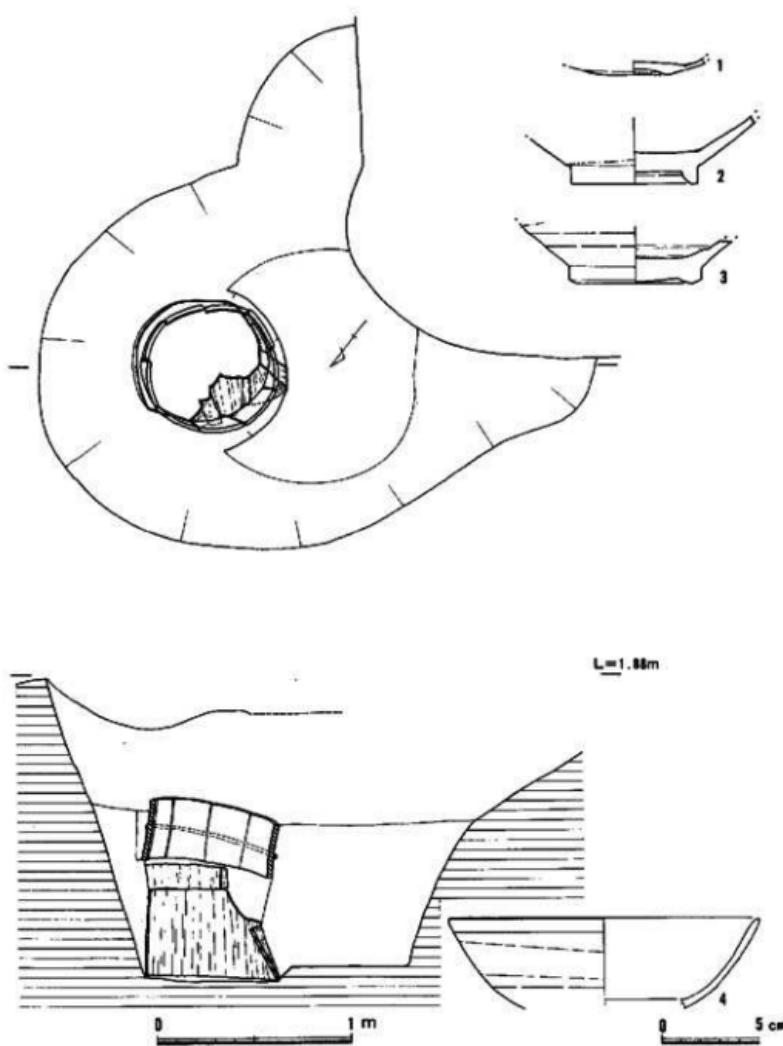


Fig. 10 D区71号土壤と71号土壤出土遺物

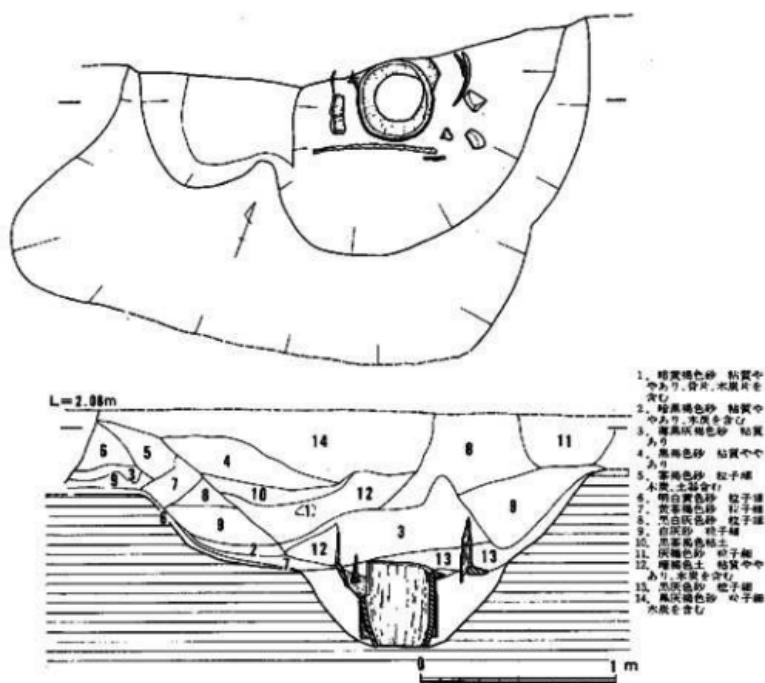


Fig. 11 C区102号土壤

では粗い櫛による平行斜線を施した同安窯系の青磁碗小片がある。6の外底にある「供」の墨書は、Fig.16の9の他、36ページに図示した天目碗にも見られ、この四個をほぼ同時代のものと考えることができる。

71号土壤 Fig.10 D区検出の井戸。下部は桶組、上部は井戸瓦を組んでいる。土器、須恵器、土師皿、瓦器碗、瓦などの小片、口禿を含む白磁、黄釉盤や、陶器C群の甕などの小片、ころろ、輪形のハマなどが見られた。長い期間の遺物が含まれているが、中では図示したような実測可能の破片を残した時期の跡が濃いといえる。図はいずれも11~12世紀の磁器である。1、青白磁の皿。2、白磁碗II-4類、3、白磁碗IV類、4、白磁碗V類。

102号土壤 Fig.11、12 (PL. 4) C区検出の井戸である。最下部に一本をくりぬいた井戸枠を据えてあった。上部はやや崩れているが、縦板を組んで四角い枠を造っていたと思われる。掘方の埋土は図で見る如く大変複雑な様相を呈している。遺物は⑩、⑤、⑬層より出ている。1

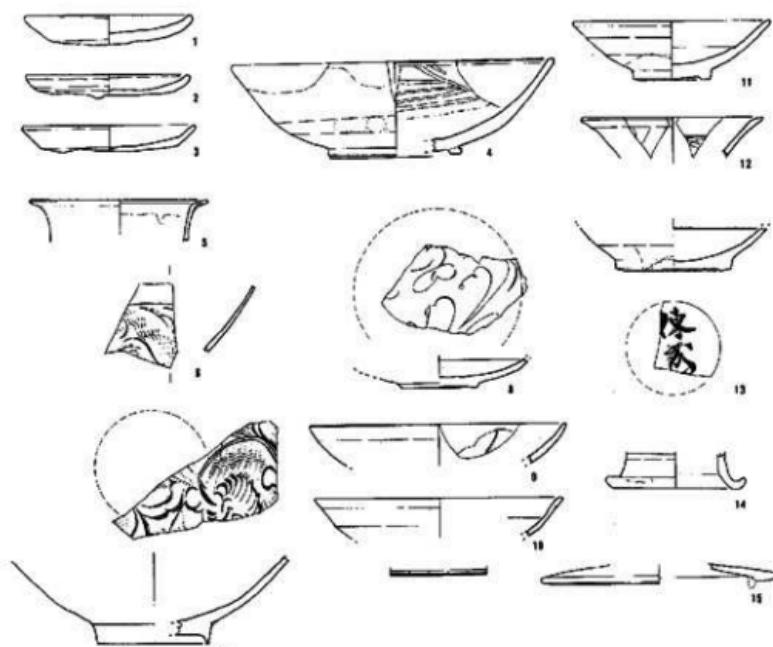


Fig. 12 C区102号土壙出土遺物

～3、へら切底の土師皿。4は瓦器碗。5～7は青白磁で、5は瓶の頸。6、7は同一個体の碗。高台内まで施釉され、外底の中央のみ露胎である。8～14は白磁。8、9は平底皿O-I類で、Fig.20、21と同類。10は高台付皿III類で無文の例である。11は同じくI類。12は小碗でFig.24の1に属する。13は碗IV類で外底に墨書きが見られた。14は白磁碗II類と似た胎・釉で、何かの脚もしくは台と思われる。15は緑釉の蓋で、胎土はベージュ色精良、もとは黄味のある緑釉で光沢があったと思われるが、現在では大部分銀化している。華北の製品との指摘もあるが、詳しく述べは今後の研究にまちたい。以上その他に実測不能の小片として、青白磁の灯台、もしくは香炉と思われる破片、越州窯系青磁でFig.15の10と同じ形の破片で、11の類の瓶の頸と思われるもの、同じく小瓶、碗などの破片がある。又、白磁碗はVI-4類に分類される鉄絵文のある鉢もある。又、白磁碗II、IV類を中心にV、VI類も僅か見られ、平底皿III類、水注の注口もある。陶器はA群のI類、広縁の黄釉盤、II類の盤、III類の蓋があり、褐釉のかかる行平や準A群の褐釉四耳大壺がある。B群の瓶、C群の蓋や長胴四耳蓋、探鉢3がある。これらも11～12世紀前半の遺物と考えることができる。

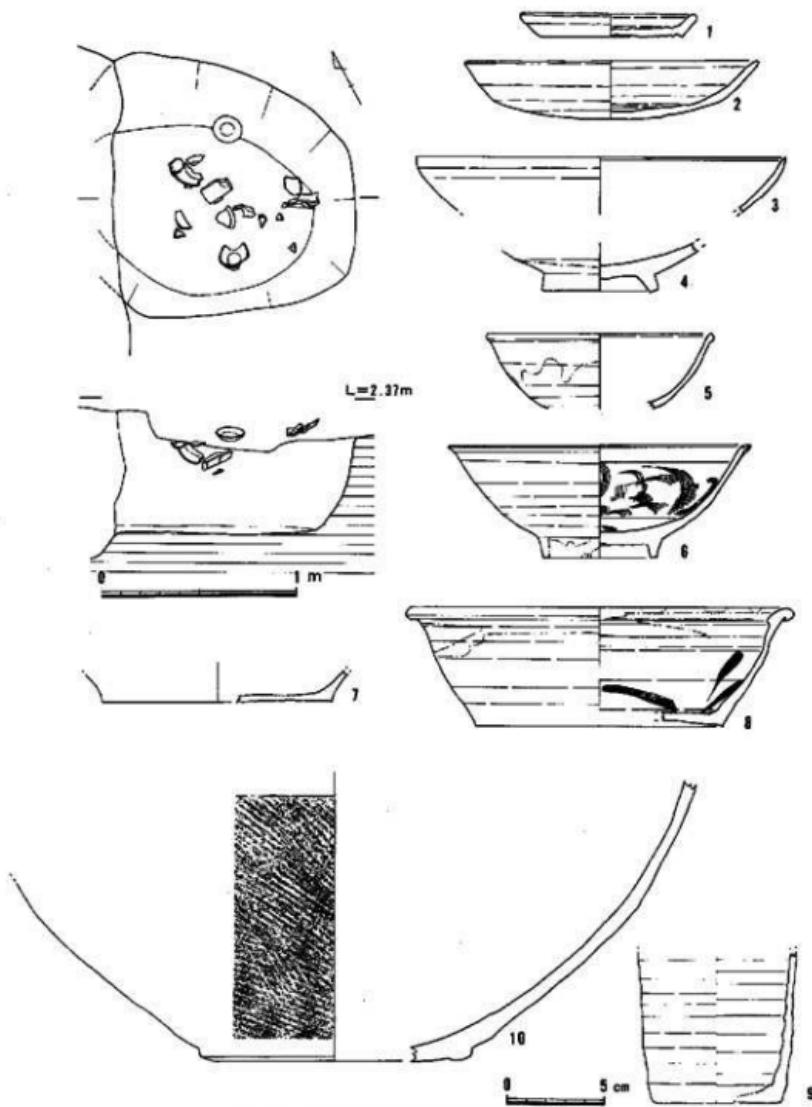


Fig. 13 D区108号土壤と108号土壤出土遺物

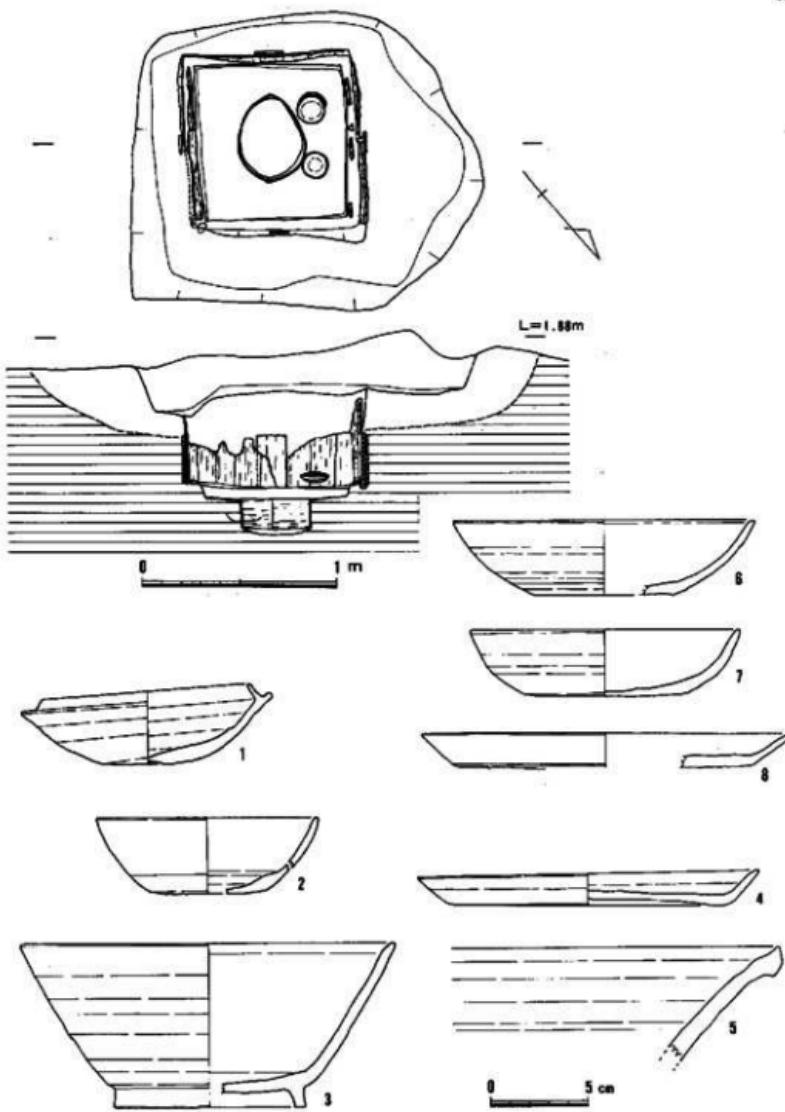


Fig. 14 E区111号土壙と111号土壙出土遺物

108号土壌 Fig.12 (PL. 4) D区検出の土壌。一部発掘域外にかかり全体を掘り出すことはできなかった。遺物は上部から一括検出された。1は糸切底の土師小皿、2はへら切底の土師皿である。3～6は白磁碗。3は大ぶりなII類、4はII-1類、5は小碗で、Fig.24の4と同類、6はVI類で内に櫛描文、外は無文の例である。7～9は陶器のA群で、7はIII類の盤、内面には黒褐釉がかかっている。8は青みの強い黄釉褐彩盤、小型で、口縁は中細とでもいべきか、細めの広縁である。9はIII類の小口瓶。10はC群の捏鉢である。口縁は欠けるが、捏鉢2であろう。以上の他に、白磁の碗IV、VI類、Fig.23の6の類、高台付皿I-1、III類と、陶器A群に属する褐釉壺、準A群の褐釉四耳大壺がある。

111号土壙 Fig.13 (PL. 4) E区検出の井戸、今回の調査で検出されたしっかりした遺構の中では、最も古期に属するものである。下部には曲げ物の枠を据え、上部は縱板を組んで四角の枠を作っている。板のつなぎ目には裏から板を当てている。遺物はやや古式の須恵器を含む平安時代の土器、須恵器、かまとなどが大量にあったが、中国陶磁は白磁碗IV類の小片1個のみで、他からの混入と思われる。

3. 貿易陶磁器について

今回の調査では、これまで博多のみならず太宰府、京都など北宋末の遺物を出す地方でも、かつて報告されたことのない多種多様の中国陶磁が出土した。11世紀末以降の遺跡例は各地でも増加する一方なのだから、各地にないということは、博多の歴史的立地条件からみて、とりもなおさずそれ以前の遺物であることを推測させた。現時点では実年代を確定することは難しいがこれらの新顔の中には確かに11世紀末よりは早い時期に生産されたと考えられるものがある。次にそれらをできるだけ多く紹介しておくこととする。

青磁 ここでは博多で遺物整理の際に龍泉窯系や同安窯系と分類している以外の青磁をまとめた。Fig.15(PL. 5)は広義の越州窯系の青磁である。1、皿。胎は灰褐色精良、オリーブ色の透明釉が薄くかかる。光沢あり氷裂はない。内底には細い線彫の精緻な花噴鳥が二羽、追いかけて描かれるが、小さい山ひびが入っている。全面施釉の蓋筒底には円形に白い珪砂が附着している。A区。2、香炉蓋。胎は嵩色を呈し精良。帯オリーブ透明釉が、表裏ともにかかっている。氷裂はない。唐草を透し彫で表わしている。同じ意匠の香炉は浙江省上虞寺前窯や臨海許市窯などの北宋窯址で出土している。A区下層。3、器形不明。胎土、釉とも2と同一個体というほどよく似ているが、器内上半は露胎で接合は無理。炉である可能性もあるか。A区。4、碗。胎土精良、灰色。オリーブ色の釉は薄いが光沢がある。外底は全面施釉で、円形に珪砂附着。E区。5、割花瓶。胎土は嵩色～暗灰色。細かい。器外は底まで全面施釉だが、器内は露胎である。オリーブ色透明釉には氷裂がある。外底には砂目附着。割花文があり器壁は厚い。E区。6、蓋。胎は精良緻密で灰色。オリーブ色の釉が全体にかかる。身受け先端部

3. 貿易陶磁器について

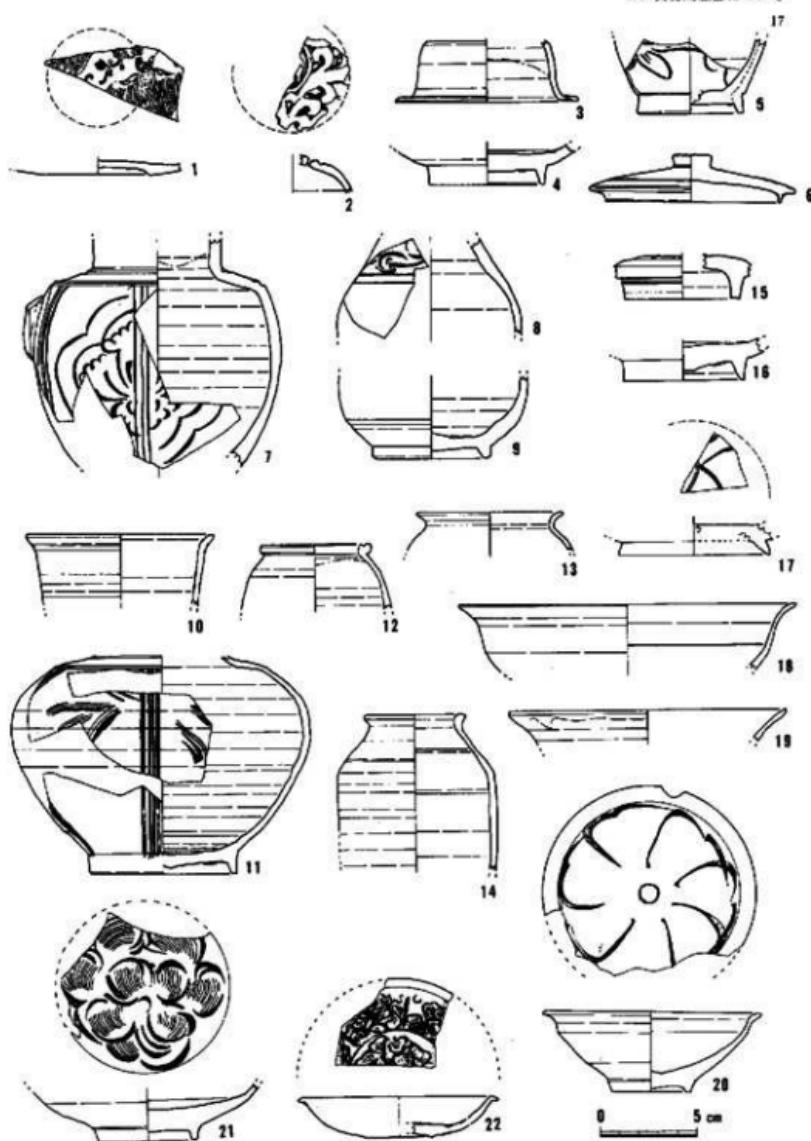


Fig. 15 出土遺物 青磁 (1)

博多遺跡群第6次調査

18

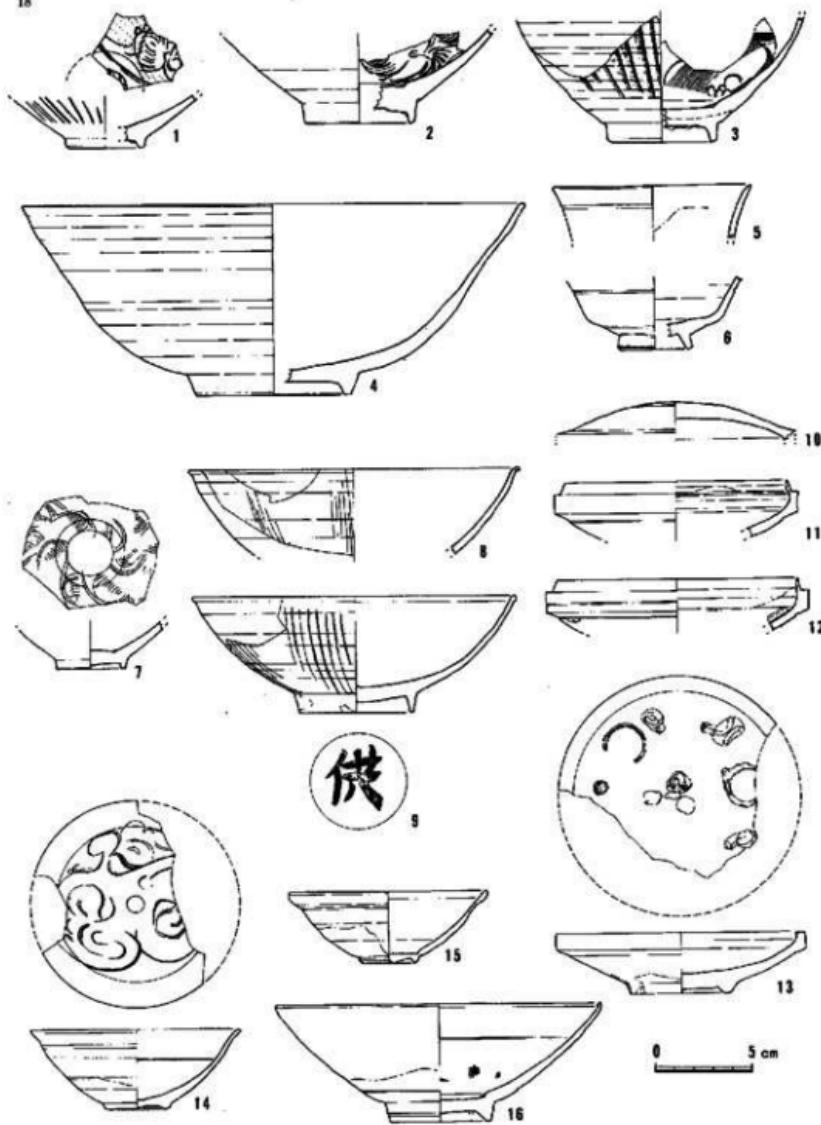


Fig. 16 出土遺物 青磁 (2)

に耐火土附着。A区。7、水注。胎土は淡灰色堅緻。オリーブ色の透明釉が薄くかかる。瓜形の体は二本組の凸線で、六分している。胴の両側面に窓を描き、中に花文を配する。丸のみ彫である。らっぽ状の頭と曲った注口、把手がつくと思われる。頭の付根と肩に凸線をめぐらし、はっきり区割している。内壁は露胎で器壁は厚い。B区下層。他に同類の破片が7、8個体分ある。8、9は同一個体で、洋梨形の壺。肩部に劃花文がある。胎土、釉とも7の水注とよく似ている。器内底部を除いて全体に施釉され、高台置付に耐火土が附着している。B区42号土壤。10、11、水注。別個体だが大変よく似ていて、同一窯のものと思われる。胎土は灰色で精良緻密、薄造りである。釉は帯オリーブ透明釉で冰裂がある。器内外とも全面施釉で外底に四個、大きな横長の砂目跡がある。10はC区122号土壤、11はB区24号と31号土壤出土。他に2~3個体分の破片があり、頭部に把手のついたものもあった。7や11、12のような水注の器形は、浙江省の北宋の青磁窯では、上虞寺前窯(上図1)、鄧県小白市窯、温州西山窯、紹興上灶、官山窯、慈谿窯、蘭溪嵩山窯(上図2、3)など、多くの窯址で報告されている。我国では、伝大津市南滋賀町勤学堂出土の白磁の例があり、北宋中期の典型作とされるが、最近の蘭溪の報告では北宋早期の形と考えられている。

12、瓶。胎土は暗灰色精良。釉は灰緑色不透明で冰裂あり。B区33号土壤。13、壺。胎土は淡灰色堅緻。釉はオリーブ色不透明で冰裂なく、残部に露胎はない。A区。14、瓶。胎土は暗灰色に黒点が少々混る。灰色の釉は口から肩にかけてはよく熔けて光沢があるが、下部は白くかけている。内部は口以下露胎。口に砂と他器を剥ぎとった跡があり、重ね焼をしている。B区。15、蓋。胎土は淡灰色精良、焼成良。帯オリーブ透明釉がかかり、上面に鋭三角形の砂目跡がある。A区。17、碗。胎土灰褐色、小孔多し。茶オリーブ色透明釉には冰裂がある。C区121号土壤。18、19、碗の口縁部。灰色の胎土にオリーブ色の釉がうすくかかる。D区、B区。20、小碗。胎土は灰色、よく磁化している。灰緑色半透明の釉は全面施釉で、外底に硅砂がいっぱい附着している。D区。21、高台付皿。胎土は灰緑色堅緻、オリーブ色の釉が全面に薄くかかる。外底に耐火土附着。B区下層。22、平底皿。全面施釉で底に4もしくは5か所目砂が附着している。印花文があり、釉は暗い青緑色でやや厚めにかかる。A区。



1. 上虞寺前窯 文物1963-1
2.3 蘭溪嵩山窯 考古学集刊2 1962

博多遺跡群第6次調査

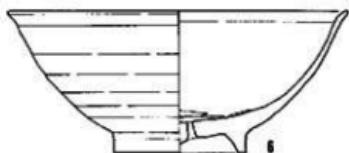
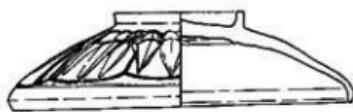
20



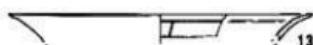
2



3



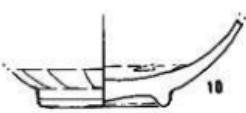
12



13



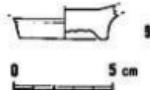
14



10



15



11



16

0

5 cm

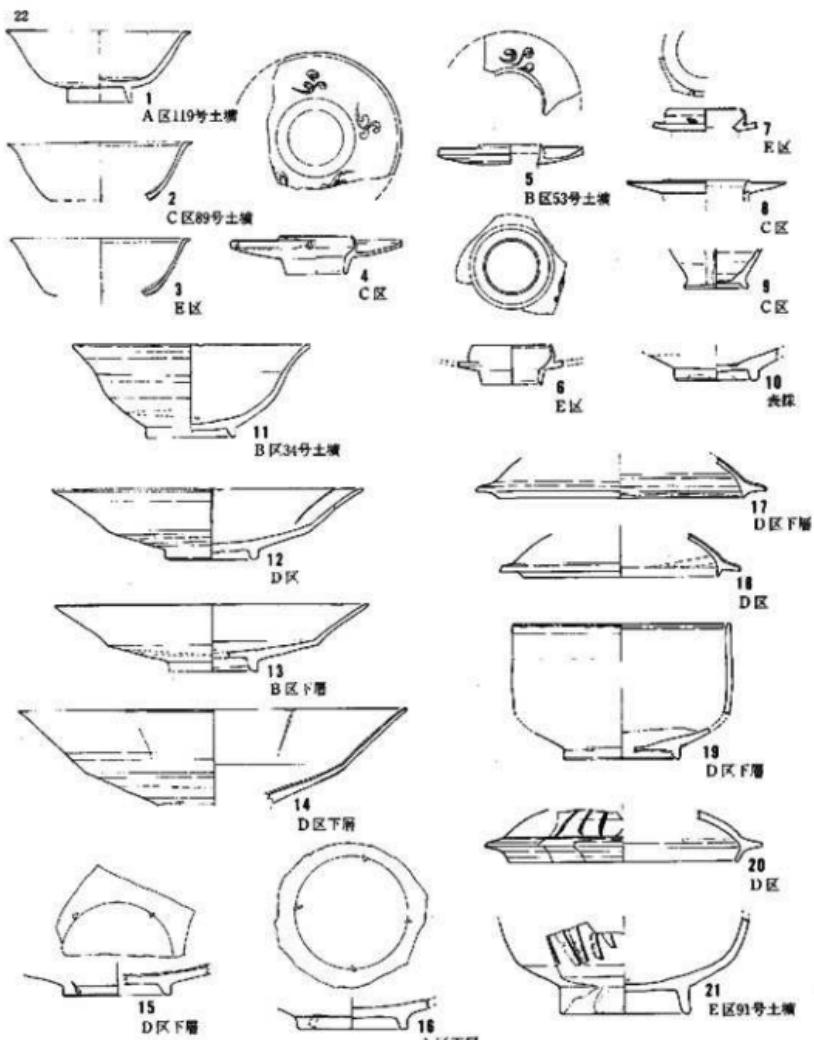
Fig. 17 出土遺物 青磁 (3)

Fig.16 (PL. 6) 1～6は越州窯系でも、もう一つ新しい傾向を見せている。7以下は外底、あるいは体下半露胎という点からも、相異点の大きな青磁といえる。1～3は碗で、胎上はいずれも灰色堅緻、釉は底部の全面に施釉。外底に耐火土が附着している。2はガラス質の釉で非常に光沢がある。文様から、広州西村窯との指摘もあるが、西村窯では釉は底までかからないのが普通と報告されているので、やはり浙江省周辺に生産地を求める。これらは北宋後期の様式の青磁と考えられる。1からA区、E区、A区。4、鉢。胎土は灰色の土に黒い粉を混ぜたように見える。びっしりと細かい氷裂がある淡オーリーブ透明釉がかかる。器全体に施釉の上、疊付のみ削って露胎をしている。5、6は同一個体で暗灰色の胎土にオリーブ色の釉がかかる。光沢がある。器内と高台以下には施釉していない。炉か。A区下層。7以下は外底あるいは体外の下半が露胎の青磁である。7、小碗。胎土灰白色、縁がかった透明釉がかかる。氷裂あり、外底は露胎で橙色を帯びている。8、9、同類の碗である。胎土は灰白色少々ごま混り。淡オーリーブ透明釉がかかる。外底露胎。B区42号土壠、E区。他に10個体近くある。10～13 合子、同類の合子で、器内には小杯や皿3個と蓮を配していたものであろう。大部分はずれ落ちて痕跡のみが残っている。胎土は灰色でやや粗く、露胎や釉尻にシブが出る。白化粧の認められるものがある。釉は淡色の灰オーリーブで、半透明。10～12はA区、13はC区。他にFig.15の8、9の壺と共にB区42号土壠から出た大きな底部がある。14、小碗。胎土は灰白色、露胎部は赤茶がかる。茶色っぽいオリーブ色の釉が不均等につく。氷裂がある。口縁部は虫喰になりやすく、茶色にやけることが多い。D区下層。他に10個体以上がB区を中心に見られた。15、小碗。胎土、釉ともに14とよく似ている。B区35号土壠。同じ土壤よりの1個と、D区72号土壠よりの1個を含む8個体がある。16、碗。胎土は淡灰色でやや粗い。露胎は赤茶がかる。釉はオリーブ色で濁り、氷裂がある。B区下層出土。この碗は1例のみであるが、釉色がやや明るく、口縁が内折せず、器内に描画文のある例は、数個体の破片があった。10～16は、胎上や釉に似通った印象が強く、それは白磁碗II～3類や、平底皿III類につながっていくものであることに注目しておきたい。

Fig.17 (PL. 7) 1～3は、これまで陶器B群に分類したものであるが、今回の調査区では青磁としないわけにいかない高品質のものがあった。これは陶器B群を、主として越州窯系の青磁の末裔と捉えることの根拠になりうるものであろう。1、鉢。胎土暗灰色やや粗。オリーブ色の釉がかかり、口縁と体外下部に重ね焼の砂目跡が残る。E区。底はA区9号土壠で出土した、Fig.3の3、4の類と思われる。2、蓋。胎土は灰色、灰オーリーブ色の釉がかかる。底部は火まわりが悪く焼成不良のまま。A区。3、皿。胎土は暗灰色、白砂まじり。オリーブ色半透明の釉が内面と外上部にかかる。きっちりと底を削った平皿である。A区。

4以下は高麗青磁である。4、5は鉢にかぶせる蓋である。胎土は灰色。釉は越州窯系のものに較べて青みがあり、厚く、透明性に欠ける。鉢の先端部のみ釉を削っており、この部分と内

西多遺跡群第6次調査



0 10cm

Fig. 18 出土遺物 定窯・磁州窯系の陶磁

都天井部に珪砂の目跡がある。B区54号土壙、A区。6、碗。胎土は淡灰色に白砂まじり。釉はやや黄味がかる。疊付のみ露胎でれんが色を呈す。内底には大きな砂目が5個残り、山ひびが入っていて液体は盛れない。B区23号土壙。7、8、10、碗。施釉法や目跡に、6と同じ特長を持ち、不透明な釉と粗厚な底部をもつ碗である。7からD区94号土壙、B区、B区54号土壙。9は上の3例と異なり、底部全面施釉で、疊付と内底に目跡4個がある。D区。11~16は碗もしくは皿で、いずれも灰色の胎土の上に青緑色の透明釉がかかる上質青磁である。12、14、16には冰裂がある。底部では釉は全面施釉の上、疊付のみ削りとっている。数か所におく目に青磁を用いている。11よりA区、表採、B区58号土壙、D区、B区、C区下層。これらの高麗青磁は、10~11世紀に生産されたものといわれている。

Fig.18 (PL.7・8)では、定窯もしくは磁州窯系の遺物を紹介する。1~9は粉白色の精良な胎土で、非常に薄い造りの小形品である。1~3は高台の高い杯で、漆黒の光沢のある釉がかかる。釉は高台まで達せず、また、口縁部と見込では施釉後に釉を削りとっている。1からA区119号土壙、C区89号土壙、E区。この他にFig.9、11も同類である。4~8は杯托で、かすかに茶を帯びた透明釉がかかり、釉下には茶緑色を帯びた黒で文様が描かれている。Fig.5、5の杯は7と対かもしれない。4から、C区、B区53号土壙、E区、E区、C区。9は杯托と同様の釉がかかる小壺で、残部に文様は見られない。10~21はいずれも灰色がかったやや砂っぽい土に、まっ白の化粧土をかけ、透明釉を施している。一見はうろう質を感じさせる白い焼き物である。10~16、21には見込に胡麻より少し大きいほどの目跡が4個あり、又高台の付根に4あるいは6個所、焼成以前に鉢子ではさんだような胎壁に達する傷が見られる。19は内は乳白色、外は柿色の釉がかけ分けてある。口禿。19には18、21には20の蓋がぴったりの大きさである。10から表採、B区34号土壙、D区、B区下層、D区下層、D区下層、A区下層、D区下層、D区、D区下層、D区、E区91号土壙。他に11と同形1個、12~14の形10数個があり、なお他の器形になると思われる碗・皿が數種ある。遺構出土のもので見る共伴遺物は11~12世紀前半のものであり、中国では北宋期に生産されたものと考えられる。杯托は山西省太原小井峪の11世紀中葉の墓（考古63年5期）より出土したものによく似ている。小さな目跡がある腰折の皿は、山西省霍県に報告があるが、この窯は主として元代に古定器を模した窯で、目跡の数も大多数は5個である。山西省介休窯は、北宋末に始まり、小さな目跡をもつが、トチンの支釘は3個である。又報告では両窯ともまっ白の胎土を用いているとあるので、この両窯を生產窯と考えることはできない。しかしいずれこの辺の窯で生産されたものであろう。

Fig.19~22 11~12世紀の白磁の中に、胎土が灰白色、粉っぽい感じで粗く、時に化粧を施し、釉は薄く、黄みのあるものが多い。多くは冰裂があり、釉尻にオレンジ色の渦が出やすいなど、似通った風合いを持つグループがある。このような見かけの特長を直ちに原料=産地の特長とみる

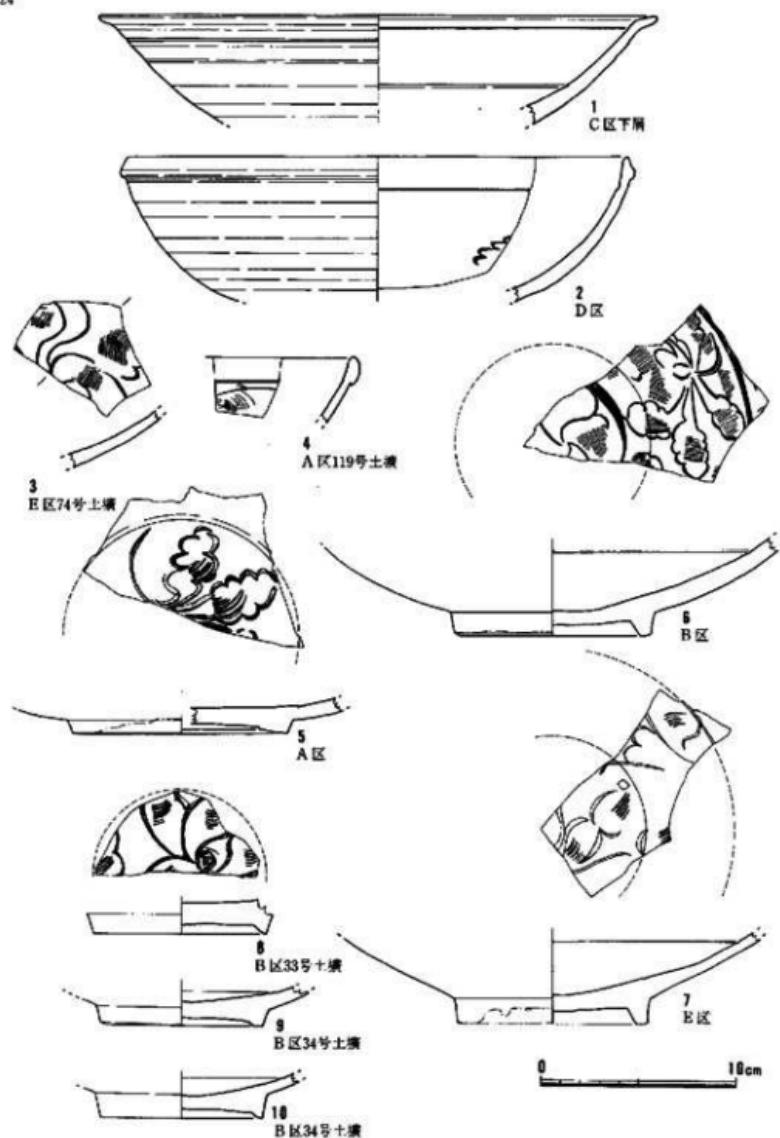


Fig. 19 出土遺物 広南風の白磁 (1)

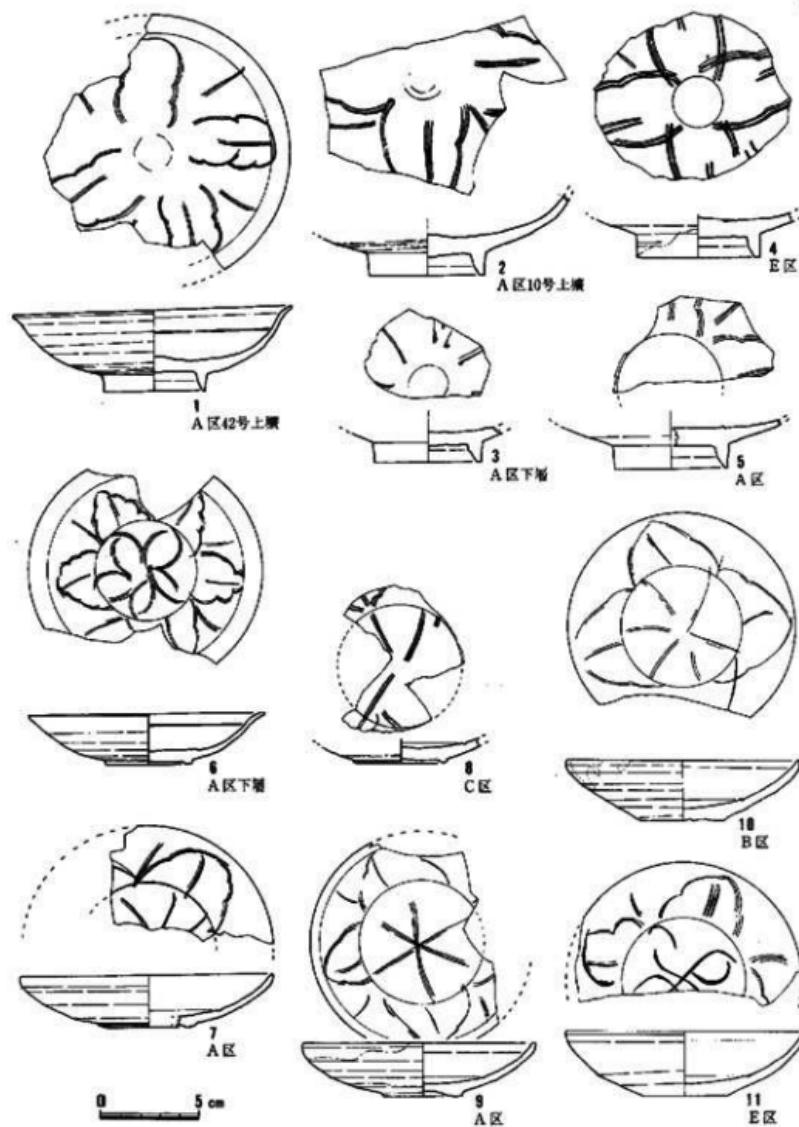


Fig. 20 出土遺物 広南風の白磁 (2)

那多遺跡群第6次調査

26

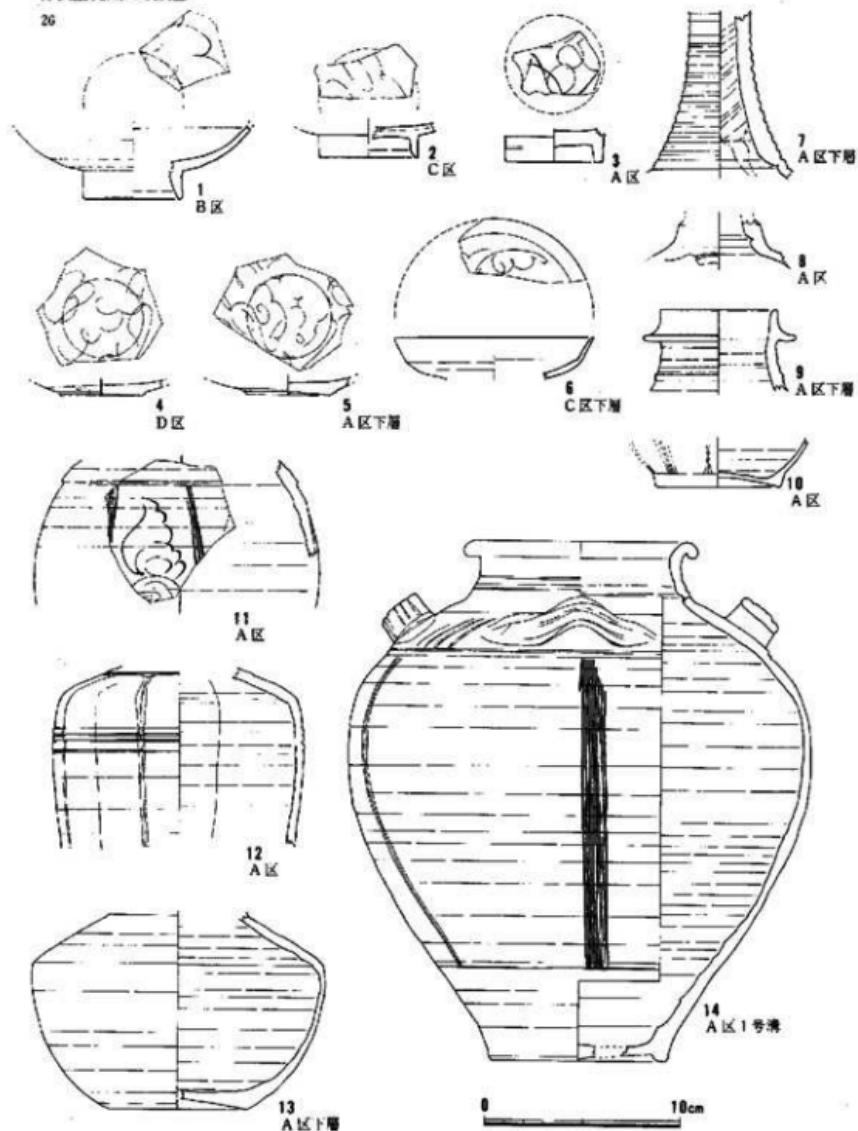


Fig. 21 出土遺物 広南窯の白磁 (3)

3. 貿易陶磁器について

27

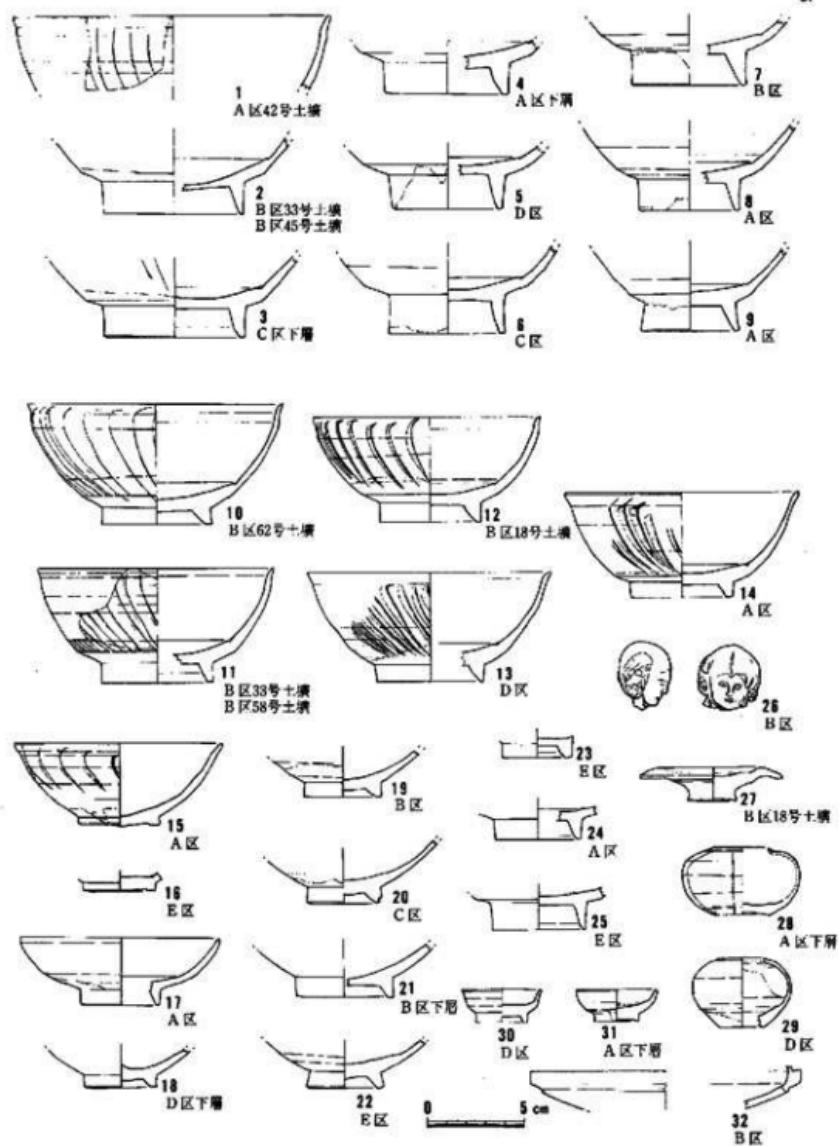


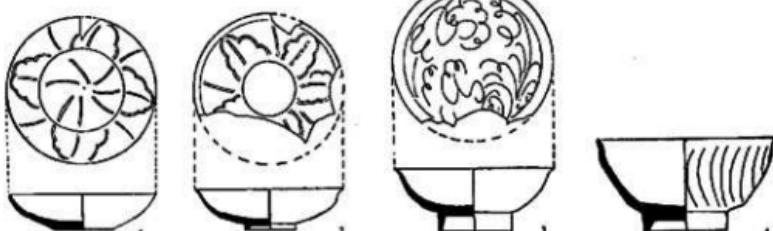
Fig. 22 出土遺物 広南風の白磁 (4)

ことはできないが、それでも原料や技術を含めた一般的な焼成の条件を示すものとして、地域的な特長として捉えることは許されよう。このグループは、84年の福岡市埋蔵文化財調査報告書105集で試みた分類で、白磁碗O-I, II, III類、皿O-1, II, III類としたものである。本遺跡ではこの種の白磁が、かつてないほど多種多様、しかも大量に出土したので、まとめて紹介する。

Fig.19 (PL. 8) 大碗である。1は黄ばんだ灰白色の粗い胎に、かすかに茶を帯びた透明釉が薄くかかる。細かい氷裂がある。これはかつて福岡城址より出土したもの（福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集、Fig.16の12~16、1983）と同類で、口縁のつばが細くなった形と考えられる。口縁は1のように折れて外反するものが3例、2、4のような玉縁が7例ある。2以下は、1とは異なる釉調で、青白磁ともいいくべき、青みがかった透明釉がかかる。施釉は高台まで、疊付及び外底は露胎、釉下に白化粧のあるものもある。6では見込み釉が厚く窪り、表面は青白くオパール状になっている。劃花文は片切り彫というよりは丸のみで彫ったようで、あまり流麗ではない。小片だが、Fig.21でみるような線彫曲線文のものもある。広州西村窯出土の青白磁刻花大碗に同様な器形を見ることができ、西村窯では多く早期の作品と考えられている。この種の碗の時代を考える上で参考となろう。各出土地点は図に記入した。図示したものの他に19個がある。Fig.20 (PL. 8) は蕪葉文の皿を、Fig.21 (PL. 8) の1~6は線彫曲線文の皿を集めた。Fig.22、1~9は高足の碗、10~14は碗、15~25は小碗や杯の類である。これらと同様の器形と文様を備えた器物は、下図にも示すように広東省の潮州、惠州、陽江など、沿海地区の北宋窯址で数多く報告されている。報告者自身も潮州市博物館を訪れた際、潮州筆架山窯址出土品の中にその一部があることを確認しており、一応広東地方の白磁と考えておきたいと思う。Fig.21 (PL. 9) の7以下、Fig.22 (PL. 9) の26以下も、胎土と釉の質から同じグループのものと考えて括した。7は潮州古窯址で採集された鳳頭壺の頸部を思わせ、12も同じ窯址からそっくりの水注が採集されている。

我国ではFig.21の高台つき皿と同類のものが、太宰府史跡第74次調査、SD205から、又Fig.22の1~9と同類のものが同じくSD215Aから出土している。Fig.21の4~6と同類の皿は京都でも発見され、報告者はいずれの場合も11世紀後半の年代を考えている。

潮州北宋窯址出土物
(潮州筆架山宋代窯址
発掘報告 1961より)



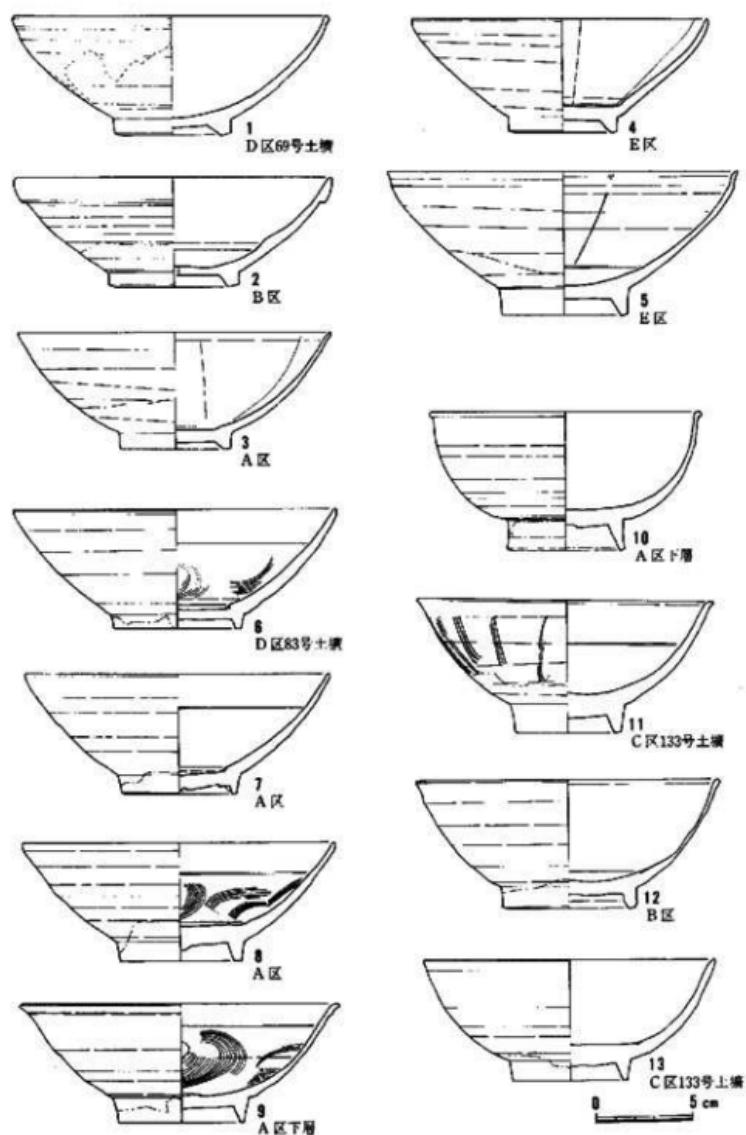


Fig. 23 出土遺物 白磁 (1)

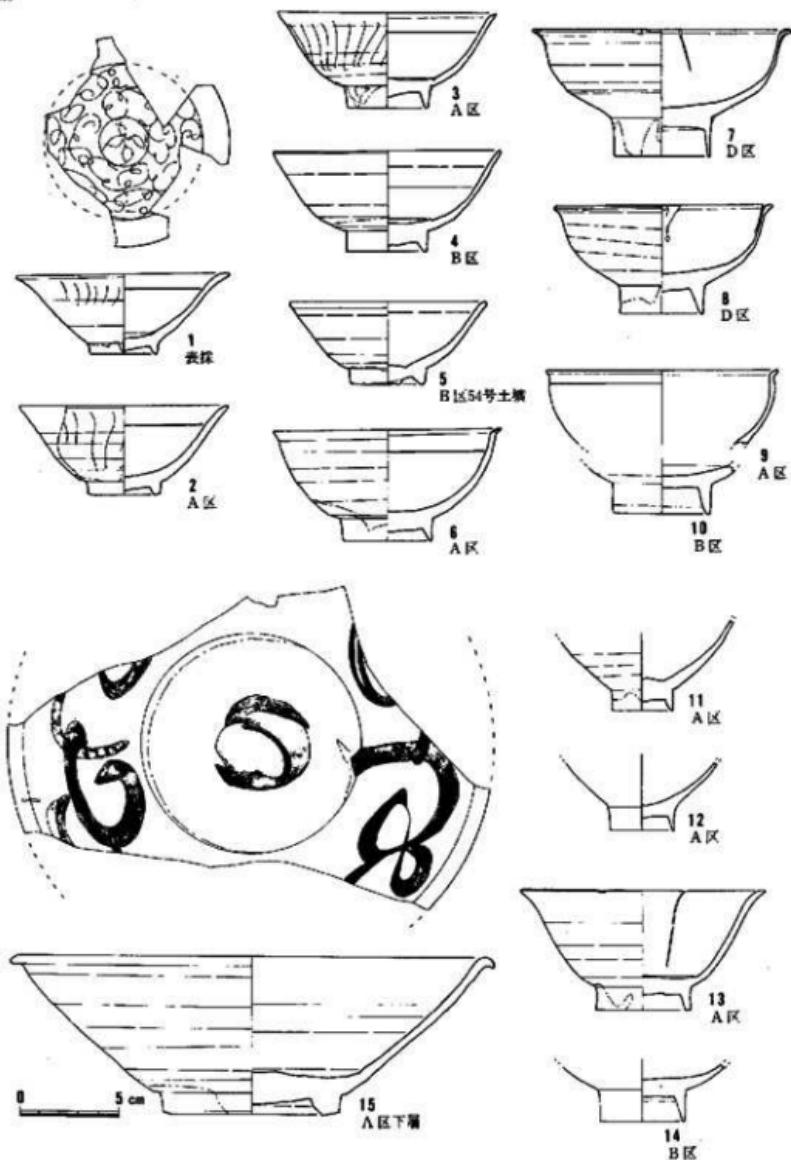


Fig. 24 出土遺物 白磁 (2)

Fig.23～26では、これまでに例がなかった形や、良好な標本が得られず、十分な形で分類ができるない白磁を中心に紹介したい。白磁碗のII類や皿のII、III類は、これでおおむね出そろったものと思われる。

Fig.23 (PL.10) 1～5は白磁碗II類である。高台は外側は垂直に、内側で斜めに削る共通の特長を備えている。胎土はガラス化しにくい成分なのか、いずれも粉っぽい感じが残り、灰白色、黄白色である。化粧土がかけられることも少なくない。釉色は概して不安定であるが、1、2、4では、黄ばんだ灰白色が主であり、3は黄釉と呼びたいほど黄褐色が強い。5では大体両者の中間が多い。それぞれの口縁は、定まった特長の内底と対応するので、分別は比較的容易である。又、3、4、5には、器内を白堆線で5分するものと、無文のものとがある。数量的には、遺構外出土のものを数えて例とすれば、次の様である。1 (600)、2 (65)、3 (51)、4 (52)、5 (29)。いずれも破片数である。6～8は、見込が平らで広く、体はほぼ直線的に斜行して、そのまま終わるもので、高台はあまり高くない。6は体内に太めの櫛で曲線文を描くが、7は無文。8は6の見込で、輪形に釉を削る例である。太宰府条坊遺跡の例では、6は11世紀後半～12世紀前半の地層から出土している。これは器形としては白磁碗IXと変わらないので、IX類の原形としてとらえることができるかも知れない。6や8の形には、白い良質のものが多いように見受けられる。なお、IX類は今回の調査でも下面遺構からの出土はめったに見られず、やや遅れて輸入される形と思われる。9、見込に径2cmほどの鏡を残し、囲りを削りこんでいる。体壁には太めの櫛で曲線文が描かれ、体壁は丸みをもって立ち上がり、口唇はふくらんでいる。これも太宰府条坊遺跡で11世紀後半～12世紀前半の層から出土することが報告されている。10、全形のわかるのは1例のみだが、高台に特長があるので検出しやすいものである。即ち釉は高台をくるんで裏側にまでまわっているが、高台の付根から半分ほどの高さまで、釉を削りとっている。非常に腰が深く、半球状の碗である。高台数個がある。11～13はV類に属するものと思われる。このようにほとんど外反のみられない例がかなりある。

Fig.24 (PL.10) 今回の調査では、青磁や黒釉でも小碗が多く多かったが、白磁、青白磁でも小ぶりの碗が多く、一つの特長といえる。1～10は白磁。1はもっとも上質で、胎土は白く、釉も透明で光沢がある。底は小さく、体は大きく開いて外反する。器内には細い線彫の曲線文が描かれ、器外にも軽く菊弁が描かれる。10数個体が数えられた。2、質は1より劣り、釉も不透明のものが多い。器内は口縁下の沈線を除き無文で、器外では、線彫の縱線文のあるものと、無文のものとに分けられる。60個ほどの個体がある。3、4は白磁碗V類の小形品である。碗から、この小碗まで、種々の大きさのものがあり、その区分はなし難い。5は、見込中心が小さくふくらみ、口唇は細く玉縁に造っている。灰色の強いものが多く、白磁としては質の劣るものである。30個前後がある。7、8、この二つは同類で、大小50個ほどが、この両者の範囲

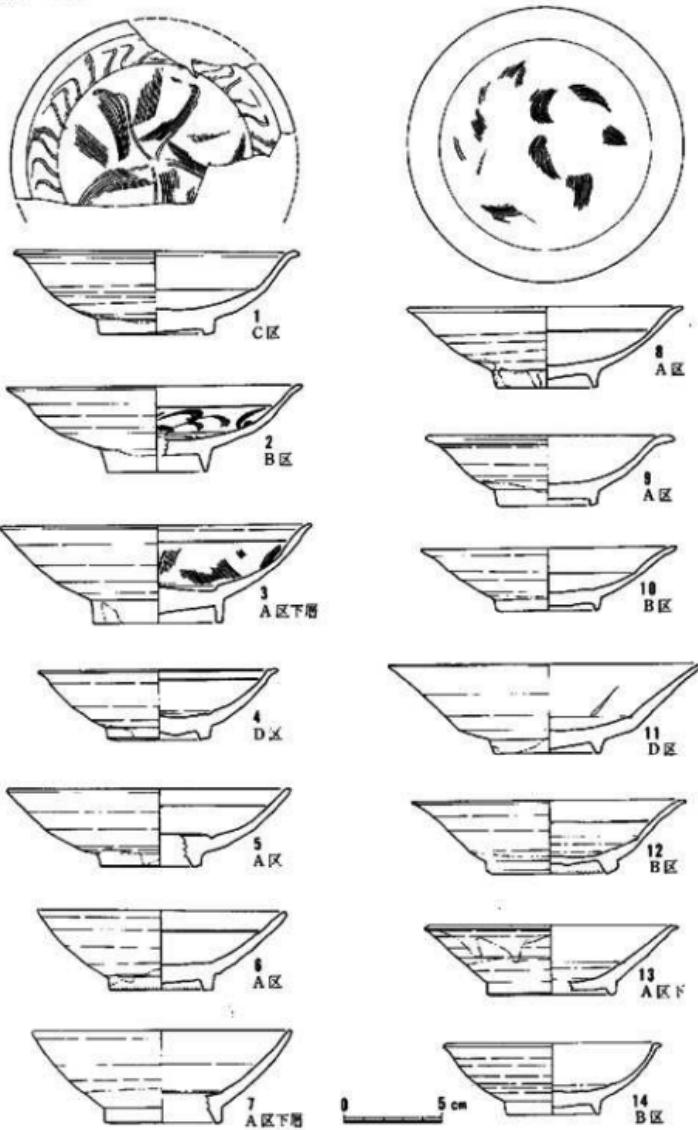


Fig. 25 出土遺物 白磁 (3)

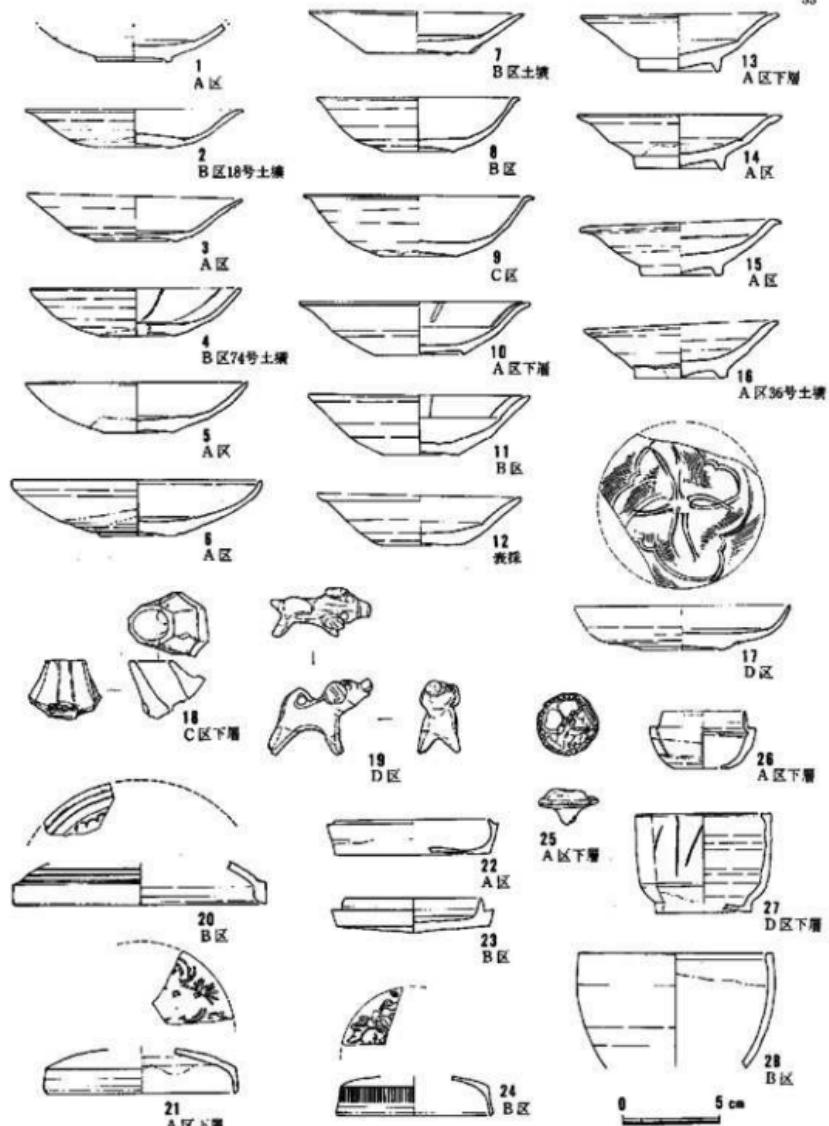


Fig. 26 出土遺物 白磁(4), その他

内に見出せる。又、口唇の刻み込みの有無や、器内の白堆線の有無など、多少の変化を認めることができる。11~14、数は多くないが、青白磁の小碗である。11は5と同様に見込にボッチを造るものである。体はあまり開かずに終わるものと見える。3例ある。12は内底が円く造られており、割花文がある。文様の有無は不明だが、同様の底部が他に3例ある。13は施釉は高台の中ほどまでだが、14では疊付をくるんで高台裏まで施釉し、外底のみを露胎にしている。15は白磁碗VI-4類に属するもので、鉄絵のある大碗である。残りが良好なのでここに紹介した。これと同じ型のものが、かつて大野城跡の経塚から発見され、東京国立博物館に所蔵されているが、1114年銘の経筒と共に伴している。器形が似ている点や、鉄絵のある点などから、これも広州西村窯の大碗との関連で考えられるものである。

Fig.25 (PL.10) ここに集めたものは浅碗、もしくは高台付皿ともいべきもので、命名は迷うが、とにかく器種も数量も多かったのでまとめてみた。最も多いのは8、9で有文、無文を合わせて150個は下らない。これは先年の分類で0-II類としたものである。同類のものが太宰府觀世音寺第2経塚から出土している。この経塚には年紀はないが、第1経塚には1116年の銘があり、12世紀前半には輸入されていたことが、明らかなものである。次に多かったのは1の類で、10個前後あった。これにも口縁下と見込周りの沈線を残して無文のものが見られた。4は5~6個だが、いずれも胎が白く、青白磁風の釉が目立った。11、12はやや凹んだ広い見込から体が外反しながら聞くもので、やはり5~6個がある。釉は青みのある灰白色のものが多い。11は器壁を白堆線で分けており、12は無文で、見込で輪形に釉を削りとっている。後者の例が多い。その他の器形は、碗に共通の口縁や文様、底造りを有するものが多く、口縁から底部まで描わない場合には、碗と分別し難いものである。

Fig.26 (PL.10) 1~17は白磁皿の中で、目についたものを拾いあげた。1はごく小さな高台をもつ皿で、白磁平底皿0-I類である。Fig.20-21の蕉葉文や線彫曲線文の皿にも、このような高台が付けられることがあるが、無文のものは一般的に白くよく磁化した胎に、空色がかった氷裂のない釉がかかる。今回の調査ではことさら平底II、III類が多かった。II類とIII類は、見込と外底の広さに対する、体の立ち上がりの幅、(互いに反比例の関係にある)で分けたのだが、その両極では形も明らかに異なり、又釉調にも差異があるにもかかわらず、中間の特長をもつものがたくさんあって、区分に困った。ただII類は口縁部に外反、直行、内弯をはじめ、体部の白堆線など変化が多いが、III類の方は画一的である。2~8はII類にみられる変化である。これら白磁平底皿II、III類は、白磁碗II類に胎土、釉とも似ており、互いに近い関係にあるものと見られる。9は、II類に属する8と同じ器形の青白磁皿。10~12は大変深めで新しい形のような印象を受けたが、IV-1類に納まるものであろう。13~16も高台付皿II類であるが、当遺跡ではこれまで主流だった末端肥大の口縁部のものより、15、16のように先細りのものが目立った。

この差に年代上の意味があるのかどうか、今後注意していきたい。17は平底皿〇-I類で、オリーブがかったクリーム色を呈している。遼元炎にかけば青白磁になるべきものと思われる。

18~28は、いわば一品物の珍品である。18は湖南省長沙窯の黄釉褐彩壺の注口。下に貼付文の端部が見えている。8角形の短かい注口である。当遺跡ではFig.15の1、越州窯青磁皿をしのいで、最も古い中国陶磁といえる。19は白磁の犬の玩具。景德鎮産とのことである。20は線刻文の、21は型文様の合子の蓋である。いずれも大きい平型の合子。両者とも胎は灰白色でオリーブがかった透明釉がかかり、水裂がある。22も20に似た胎土、釉の合子の身である。23も合子の身だが、不透明な灰白色の釉が厚く器外全面にかかっている。24は褐釉の合子の蓋。25は型造りの灰白磁の小壺蓋で、甲は5弁の花型に造られ、周囲を連珠文で囲んでいる。空気抜きの小孔が一つうがってあり、故意か偶然か、褐釉が一滴したたったように着いている。

26、合子身。黄ばんだ白い胎土に、薄いクリーム色の釉がかかっている。小型ながら69号土壙出土、Fig.8の13と同質のものである。このような器形の合子は、広南で報告例が多く、福建省でも南安の窯址で発見されている。27はページュ色の細かい土に緑釉をかけた炉で、器内は露胎、釉はすっかり銀化している。土は陶器A群III類、おそらくは泉州磁灶窯のものと考えているグループによく似ている。底は回転糸切底。28、器種不明。灰白色の胎に帶オリーブ透明釉がかかる。器外と器内上部のみ施釉してある。

4 まとめ

当遺跡の調査は厳しい時間的制約があり、緻密な調査を行なうことが不可能であった。こうした状況の中で、最低限、下層の調査だけでも、しっかりとというのが調査の目標となった。結果は予想以上で、これまで中国陶磁輸入の歴史の中で、謎の空白時代とされてきた11世紀の一角を埋める資料が、数多く発見されたのである。報告した図版からも見てとれることはだが、これら多くの多くが、中国で北宋の窯とされる諸窯址発見の器形とよく似た特徴を備えており、これまでの我国の出土例からも11世紀後半、遅くとも12世紀前半迄には廃棄されたものと考えられる。

出土した遺物の中には、E区111号土壙で見られるような一部古墳時代を含む平安時代の土師器、須恵器も多かったが、通常福岡や博多周辺の遺跡でそれらと共に伴する晚唐、五代の輸入陶磁は、ほとんどといっていいほど見られなかった。その代り、北宋後期のみならず中期にまでさかのぼると思われる遺物が豊富で、狭い博多の中でも、その点で際立っている。

11世紀後半から12世紀前半は、いわゆる江南の白磁を中心に、越州窯系青磁、高麗青磁、それに陶器が少しずつ、というのが、我国での一般的な出土状態であるが、当遺跡ではこれに加えて広南風の白磁や、華北の白釉陶器、黒花白磁も少なからず出土した。これらの陶磁の輸入

時期が、これまでの白磁類と完全に重なるものかどうかは、今のところ明らかではない。ただ、広南風の白磁は、これまでの太宰府や京都の例では、11世紀後半と早めの時期に見られる、ということは、五代末、北宋初に一時途絶えていた日中の交流が再開し、日本における陶磁器の需要が確認されてくると、それに応じた生産体制が江南を中心に整うまでの間、既成の各地の製品が集められたと想像される。宋代に於ける各地の物資の集散は活躍で、北方の陶磁が大運河を通じて明州に到るのも、広南のそれが海ぞいに明州に運ばれるのも特に障害となるものはなかったはずである。今後とも時代を詳しくつめていくよう留意していきたい。

次に注目したいのは、北宋代は確実と思われる陶磁器と共に伴して、少なからぬ天目碗が出土したことである。天目碗、すなわち黒い釉のかかった小ぶりの茶碗は、宋代に盛んだった抹茶法と深く関わるものである。我国の出土資料でも大体13世紀以降の出土が多く、これまで宋西による日本への抹茶法の伝来と合致する線でとらえられてきた。僅かに京都で、12世紀後半の層からの出土が報告されたことがあるが、今回の調査ではこれを更に大きく上まわり。場合によつては11世紀後半にまでさかのぼると思われる。個体数も20個前後あり、孤立した例とみることはできない。器形は、器壁が直線的に斜行してそのままに終わるか、もししくは少し外反するものであった。天目碗は、北宋蔡襄の茶錄(治平元年、1064年刻石)にも「茶の色は白であるから、黒い蓋が合う。建安で造られるものは、紺みがかかった黒色で兔の毫のような紋があり、身はやや厚手で火にあぶると熱が長持ちして冷めにくく、最適である。よそのものは薄手であつたり、紫がかたりして、みなこれに及ばない。青白の蓋などは、闘茶をする人たちは勿論用いない。」(『中国の茶書』 東洋文庫 布目潮風、中村喬編訳 1985年版)とあるように、中国ではすでに11世紀後半には、支配階級の評価を受け、名声を博していた。そのようにもてはやされたものが、他の同時代の文化と共に我国にも伝来することは、むしろ当然であろう。ただ、すでに中国でも抹茶法と強く結びつけて認識されていた茶碗が、博多でどのように受け容れられたかは、興味ある問題であろう。出土した天目碗の中に2点、「供」の墨書きもつもの(右図)があり、あるいは仏前に供える御供茶用の器ではなかつたかと想像される。

紙数の関係で、今回ふれることができなかつたが、いわゆる龍泉窯系、同安窯系の青磁や陶器についても、新しい知見が得られた。機会を見て報告していきたいと考えている。

(文中白磁類II類の細分はFig.23の1~5をそのまま使用している。)



D区下層



E区

博多第六次調査の記録

1. 手前からE、D、C区遺構全景



2. 同じくA、B、C区遺構全景





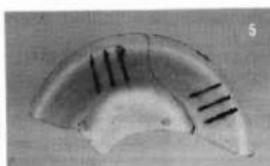
↑ 9号土壤遗物



→
3、
21号土壤

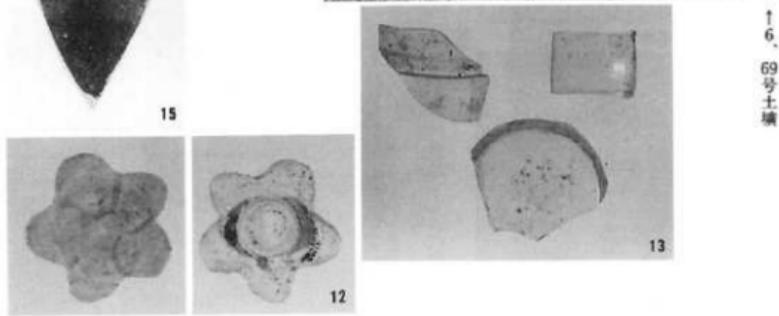
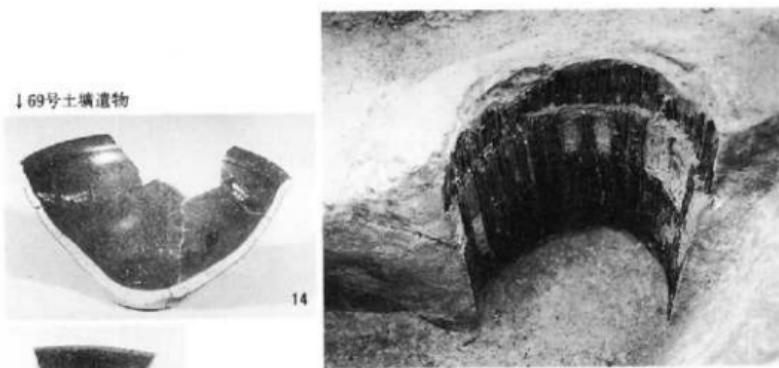
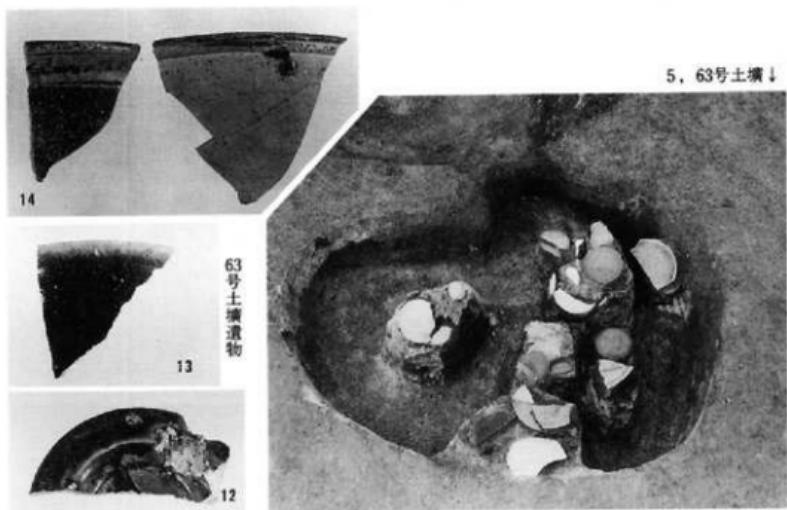


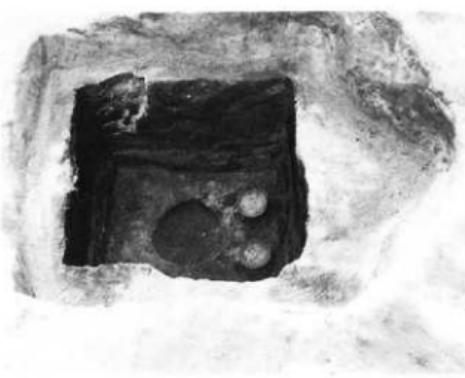
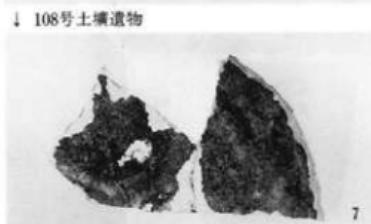
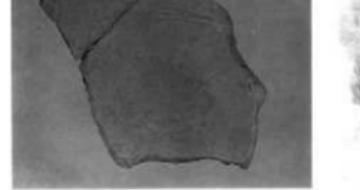
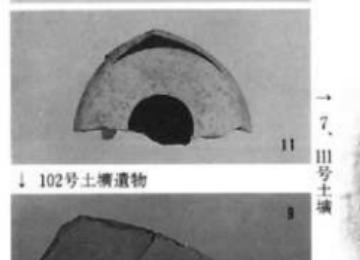
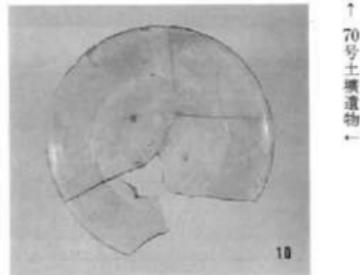
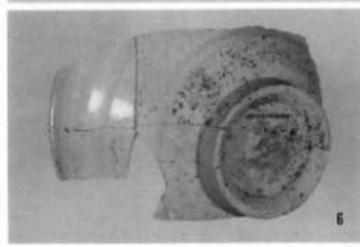
↑ 21号土壤遗物



↓ 86号土壤遗物







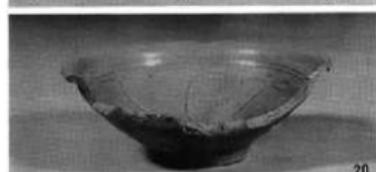
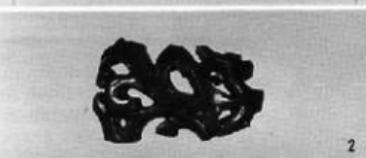
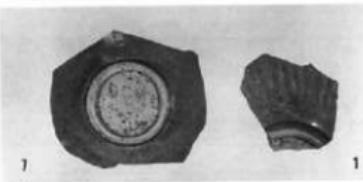
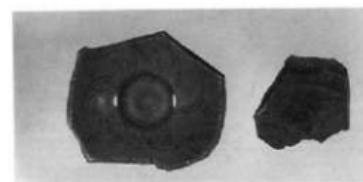


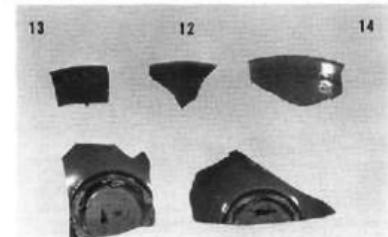
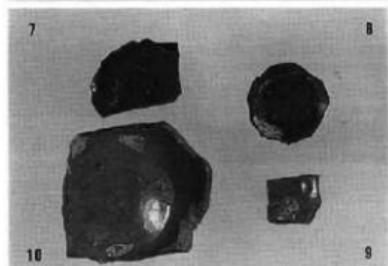
Fig.
15
の
遺
物



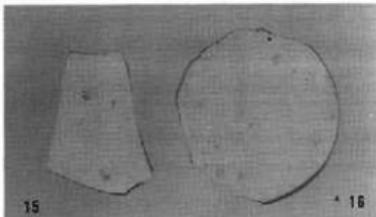
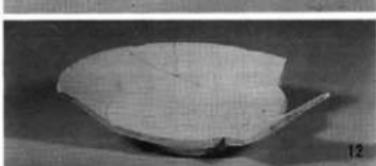
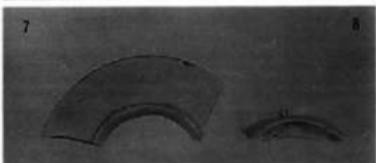
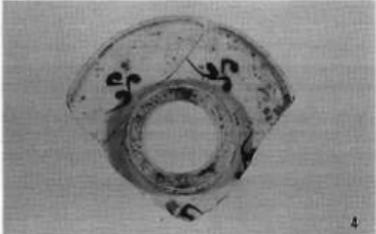
↓ Fig. 16 の遺物



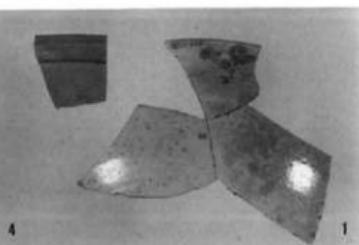
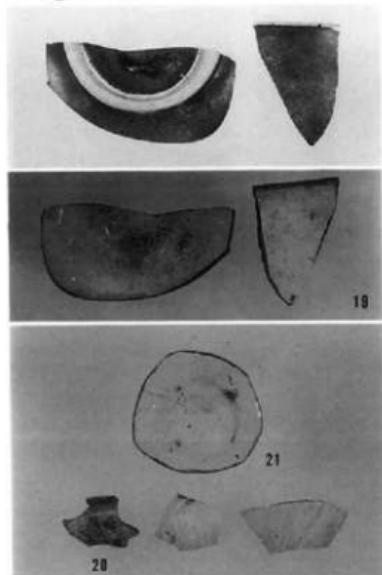
↓ Fig. 17 の遺物



↓ Fig. 18 の遺物 高麗青磁、定窯・磁州窯系陶磁



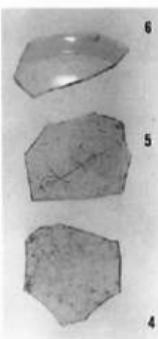
↓ Fig. 18 の遺物



← ↑ Fig. 19 の遺物



↓ Fig. 21 の遺物

↑ Fig.
20 の
遺物

↓ Fig. 21 の遺物

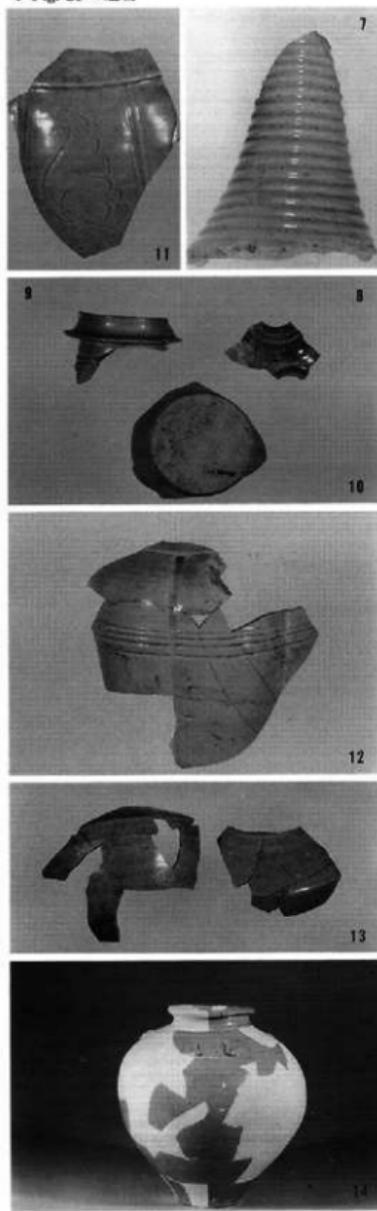
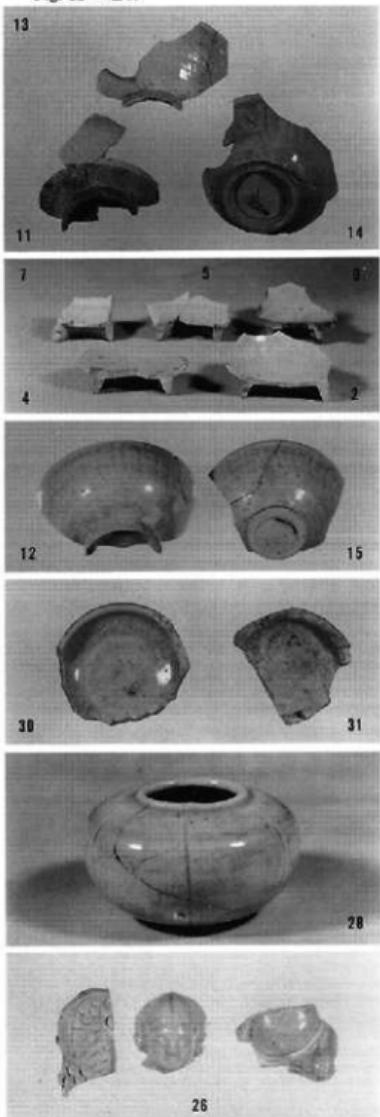


Fig. 22 の遺物

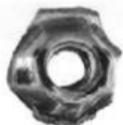
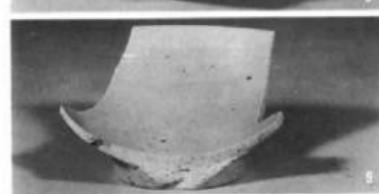
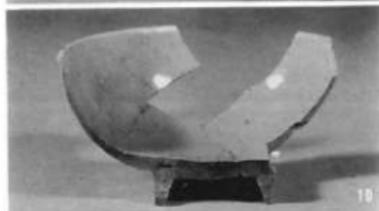
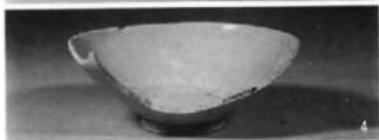


広南風の白磁

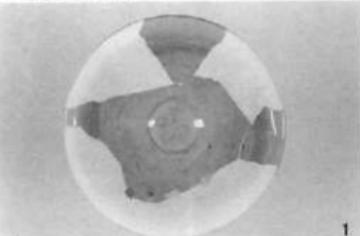
PL. 10

白磁、その他の陶磁

↓ Fig. 23 の遺物



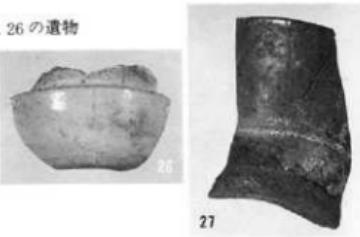
↓ Fig. 24 の遺物



↓ Fig. 25 の遺物



Fig. 26 の遺物



博 多
福岡市埋蔵文化財調査報告書
第126集

1986(昭和61)年3月31日

発行 冷泉町155番地内遺跡調査会
福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎木頭6丁目6番41号

福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告V
博 多
— 高速鉄道関係調査(2) —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集

1986
福岡市教育委員会

福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告V

博 多

— 高速鉄道関係調査(2) —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集

1986

福岡市教育委員会

序

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け、昭和51年以來路線内遺跡の調査と出土遺物の整理を行って参りました。発掘調査は完了しましたが、出土遺物の整理作業は現在も継続しています。

本書は昭和53年に実施した地下鉄1号線関係の博多遺跡群の調査について報告するものです。

旧博多部は中世における大陸文化流入の門戸として日本史上特異な発達をとげ、貿易陶磁を初めとする多量かつ多様な出土遺物がそれを物語っています。

この報告書が埋蔵文化財への認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸甚に思います。

発掘調査から資料整理に至るまで、交通局をはじめ、指導委員の先生方など多くの人々の御協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本報告書は、福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における埋蔵文化財発掘調査の報告書であり、「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告V」とする。なお、今回のC・D区については博多遺跡群内における高速鉄道関係調査の第2集にあたる。
2. 九州大学医学部教授 水井昌文先生には、出土人骨に関する玉稿を寄せて頂き、付編Iとして収録した。心より感謝申し上げる次第である。また、博多遺跡群の歴史的な性格を把握する上で重要な参考資料となる遺物が出土した、博多第6次調査についても略報として付編IIに収録している。
3. 本文の遺物実測図中に示したグラフは、土師皿類の計測表であり、比較的まとまった出土状態をもつ遺構について主に掲げた。実線が糸切底、破線がヘラ切底を示す。縦軸が器高を示し、横軸が底径・口径を半径で示している。
4. 本文中で用いている貿易陶磁分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多(1) 福岡市文化財調査報告書第105集 別冊1984年)に掲っている。
5. C・D区の発掘調査は折尾学、山崎龍雄、浜石哲也、池崎謙二が担当し、教育委員会文化課諸氏の協力があった。
6. 本文の執筆は、付編Iを除き折尾、池崎、森本朝子、林田憲三が分担して行った。
7. 遺構の実測は、山崎、浜石、池崎、常松幹雄、高倉浩一、菅野都が行った。
8. 遺物の実測は、森本、小畑弘己、浜石、池崎、林田、常松、撫養久美子が行い、遺構・遺物のトレースは、池崎、小畑、撫養、植田令子が行った。
9. 写真撮影は現場関係を、折尾、山崎、浜石、池崎、白石公高、宮島成昭が、遺物写真は全て白石が担当した。
10. 遺物、図面の整理には以下の方々によるところが大である。
木村厚子、溝口美津代、里村寿子、山田由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、植崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聰子、秋山順子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、西原年枝、古谷宏子
11. 題字は故筑紫豊先生の揮毫による。
12. 本書の編集は、折尾、浜石、山崎と協議の上、白石の協力を得て、森本、池崎が行った。

本文目次

I.	高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要	1
第1章	調査に至る経緯	3
第2章	調査の組織	4
第3章	路線内遺跡の調査概要	6
II.	博多遺跡群 一地下鉄路線内の調査(2)	9
第1章	遺跡の自然環境と歴史的環境	11
1.	遺跡の立地と自然環境	11
2.	遺跡の歴史的環境と調査研究	14
第2章	店屋町工区・C・D区の調査	18
1.	調査の経過	18
2.	調査の概要	22
1)	遺構と遺構出土の遺物	22
2)	C・D区遺構外出土の遺物	122
3)	甕棺墓	126
第3章	結語	129
A・B区〔補遺〕		131
付編 I.	紙園町遺跡D-I区出土人骨群	
九州大学医学部解剖学教室 永井昌文		
付編 II.	博多第6次調査略報	

挿図目次

Fig. 1	高速鉄道路線内遺跡地図 (1/75,000).....	2
Fig. 2	藤崎甕棺墓群の調査.....	6
Fig. 3	藤崎遺跡第6号方知周溝墓 (藤崎ターミナル).....	6
Fig. 4	貝輪を着装した甕棺埋葬人骨 (西新町遺跡).....	7
Fig. 5	70年ぶりに姿を現した福岡城堀石垣.....	7
Fig. 6	「袖の湊」跡と考えられていた興服町交差点の調査.....	7
Fig. 7	宮崎宮周辺遺跡 (馬出西工区) の調査	8
Fig. 8	博多遺跡群周辺航空写真.....	10
Fig. 9	博多古図福岡築城前の地形.....	折込み
Fig. 10	博多遺跡群付近土層ポーリング図.....	12
Fig. 11	博多遺跡群地形図.....	折込み
Fig. 12	博多港沖引揚げの天目碗 (1/3).....	16
Fig. 13	東長寺付近古絵図 (筑前名所図絵)	18
Fig. 14	博多遺跡群地下鉄1号線関係調査区全体図 (1/400)	折込み
Fig. 15	C・D区グリット設定図 (1/200)	19
Fig. 16	C・D区土層断面図.....	折込み
Fig. 17	猛暑中の調査 C区.....	21
Fig. 18	C・D区遺構全体図 (上部検出遺構)	折込み
Fig. 19	C・D区遺構全体図 (下部検出遺構)	折込み
Fig. 20	97・98・100・102・111号土壙	23
Fig. 21	101号土壙と101号土壙出土遺物 (1)	24
Fig. 22	101号土壙出土遺物 (2)	25
Fig. 23	103・104号土壙と103号土壙出土遺物	26
Fig. 24	104号土壙出土遺物	27
Fig. 25	105号土壙と出土遺物	29
Fig. 26	109・113号土壙と109・113号土壙出土遺物	30
Fig. 27	116・117号土壙と116号土壙出土遺物	32
Fig. 28	118号土壙と118号土壙出土遺物	33
Fig. 29	120・124・125号土壙	35

Fig. 30	122号土壙出土遺物	36
Fig. 31	124号土壙出土遺物	37
Fig. 32	125号土壙出土遺物（1）	38
Fig. 33	125号土壙出土遺物（2）	39
Fig. 34	126・131・132号土壙出土遺物	40
Fig. 35	131・132・134号土壙	41
Fig. 36	134号土壙出土遺物（1）	42
Fig. 37	134号土壙出土遺物（2）	43
Fig. 38	135・136・138号土壙	45
Fig. 39	141号土壙と141号土壙出土遺物	46
Fig. 40	145・146・147号土壙	48
Fig. 41	145・146・147号土壙出土遺物	49
Fig. 42	153・154号土壙（井戸）と152・153・154号土壙出土遺物	51
Fig. 43	158号土壙と158号土壙出土遺物	52
Fig. 44	160号土壙と160号土壙出土遺物	54
Fig. 45	160号土壙出土遺物（1）	55
Fig. 46	160号土壙出土遺物（2）	56
Fig. 47	161・164号土壙	57
Fig. 48	161号土壙出土遺物（1）	58
Fig. 49	161号土壙出土遺物（2）	59
Fig. 50	164号土壙出土遺物	61
Fig. 51	168号土壙	62
Fig. 52	168号土壙出土遺物	63
Fig. 53	169号土壙	64
Fig. 54	169号土壙出土遺物（1）	65
Fig. 55	169号土壙出土遺物（2）	66
Fig. 56	170・171号土壙	67
Fig. 57	171号土壙出土遺物（1）	68
Fig. 58	171号土壙出土遺物（2）	69
Fig. 59	171号土壙出土遺物（3）	70
Fig. 60	172・173・174号土壙	71
Fig. 61	175号土壙（火葬遺構）	72

Fig. 62	175号土壙出土遺物	73
Fig. 63	火葬頭骨集積遺構	74
Fig. 64	176号土壙と176号土壙出土遺物	75
Fig. 65	177号土壙	76
Fig. 66	177号土壙出土遺物（1）	77
Fig. 67	177号土壙出土遺物（2）	78
Fig. 68	177号土壙出土遺物（3）	79
Fig. 69	179号土壙出土遺物	80
Fig. 70	180・181号土壙と181号土壙出土遺物	81
Fig. 71	182・185・187・188号土壙	82
Fig. 72	182・183号土壙出土遺物	83
Fig. 73	185・187・193号土壙出土遺物	84
Fig. 74	195号土壙出土遺物（1）	87
Fig. 75	195号土壙出土遺物（2）	88
Fig. 76	196号土壙と196号土壙出土遺物（1）	89
Fig. 77	196号土壙出土遺物（2）	90
Fig. 78	197号土壙と197号土壙出土遺物	92
Fig. 79	197・198号土壙出土遺物	93
Fig. 80	202・204・205・209・214号土壙	95
Fig. 81	200・201・202・204・209・210・211・214号土壙出土遺物	96
Fig. 82	211・212・218・222・227号土壙	98
Fig. 83	217・218・222・224号土壙出土遺物	99
Fig. 84	228・231号土壙	102
Fig. 85	225・227・228・234・235号土壙出土遺物	103
Fig. 86	236号土壙（井戸）と236・237号土壙出土遺物	104
Fig. 87	239号土壙出土遺物	106
Fig. 88	240・243号土壙出土遺物	107
Fig. 89	246号土壙出土遺物	108
Fig. 90	248号土壙出土遺物	110
Fig. 91	250・252・254・255・256号土壙出土遺物	111
Fig. 92	257・260・267号土壙	112
Fig. 93	257・259号土壙出土遺物	113

Fig. 94	260・262号土塘出土遺物	115
Fig. 95	276・278号土塘出土遺物	117
Fig. 96	294号土塘出土遺物.....	119
Fig. 97	近世石組遺構	120
Fig. 98	7号・8号溝土層断面	121
Fig. 99	遺構外出土遺物（1）	123
Fig. 100	遺構外出土遺物（2）	124
Fig. 101	遺構外出土遺物（3）	125
Fig. 102	14・15・16・17号甕棺墓	126
Fig. 103	甕棺実測図	127
Fig. 104	A区 21号土塘・30号土塘出土遺物	131

写真図版目次

- PL. 1 博多眺望 博多駅上空より
- PL. 2 (1) C・D区遺構（正面博多駅） (2) C区作業風景
- PL. 3 (1) C区作業風景 (2) C区作業風景
- PL. 4 (1) C-III区土層断面（北から） (2) C-III区土層断面（東から）
- PL. 5 (1) C区全景（東から） (2) C区下部検出遺構全景（北西から）
- PL. 6 (1) C-I区上部検出遺構全景（北西から） (2) C-III区上部検出遺構全景（北西から）
- PL. 7 (1) C-I区下部検出遺構全景（北西から） (2) C-III区下部検出遺構全景（北西から）
- PL. 8 (1) D-I・II区上部検出遺構全景（東から） (2) D-I区下部検出遺構全景（南東から）
- PL. 9 (1) D-II・c～e区下部検出遺構全景（南東から） (2) D-III区下部検出遺構全景（南東から）
- PL. 10 (1) 97号土壤集石（南から） (2) 100号土壤集石（北から）
- PL. 11 (1) 102号土壤集石（西から） (2) 103号土壤（西から）
- PL. 12 (1) 104号土壤（東から） (2) 105号土壤（西から）
- PL. 13 (1) 116号土壤（西から） (2) 117号土壤（西から）
- PL. 14 (1) 118号土壤（南西から） (2) 118号土壤遺物出土状況
- PL. 15 (1) 120号土壤（北東から） (2) 122号土壤（北西から）
- PL. 16 (1) 124号土壤上部土師皿集積（南面から）
(2) 124号土壤 下部集石（南から）
- PL. 17 (1) 132号土壤（北東から） (2) 134号土壤・15号甕棺墓（北から）
- PL. 18 (1) 138号土壤（北東から） (2) 141号土壤（東から）
- PL. 19 (1) 147号土壤（南西から） (2) 158号土壤（北東から）
(3) 160号土壤（北から）
- PL. 20 (1) 161号土壤（南東から） (2) 161号土壤 遺物除去後（南東から）
- PL. 21 (1) 164号土壤集石（北東から） (2) 164号土壤 遺物出土状況
- PL. 22 (1) 167号土壤（南から） (2) 168号土壤（南から）
(3) 168号土壤 動物骨出土状況（北から）

- PL. 23 (1) 169号土壤（北から） (2) 149号・173号土壤（東から）
- PL. 24 (1) 175号土壤集石（南東から） (2) 175号・177号土壤集石（南東から）
- PL. 25 (1) 175号土壤 石積土層断面図（南から）
(2) 175号土壤 石積土層断面（東から） (3) 175号土壤 石積銅錢出土状況
- PL. 26 (1) 175号土壤 作業風景 (2) 火葬頭骨集積遺構 作業風景
- PL. 27 (1) 火葬頭骨集積遺構（南から） (2) 火葬頭骨集積遺構（部分 北から）
- PL. 28 (1) 火葬頭骨集積遺構 頭骨出土状況(部分) (2) 菊池市議会の見学
(3) 九州大学医学部永井教授の観察
- PL. 29 (1) 172号土壤（東から） (2) 177号土壤（北東から）
- PL. 30 (1) 180号・181号土壤（北から） (2) 180号土壤 錐出土状況
- PL. 31 (1) 194号土壤（南西から） (2) 195号・196号土壤（南から）
- PL. 32 (1) 205号土壤（西から） (2) 211号土壤（南から） (3) 212号土壤（南から）
(4) 214号土壤（南面から）
- PL. 33 (1) 225号土壤 動物骨（馬）出土状況 (2) 236号土壤（井戸 北から）
(3) 251号土壤 動物骨（イルカ）出土状況 (4) 287号・289号土壤（北西より）
- PL. 34 (1) 近世石組遺構（南東から） (2) 近世石組遺構（天井石除去後、南東から）
(3) 16号甕棺墓（北から） (4) 17号甕棺墓（北から）
- PL. 35 (1) 7号溝 検出状況（北から） (2) 7号溝 遺物取り上げ後（北から）
- PL. 36 104号, 116号, 118号, 122号土壤出土遺物
- PL. 37 122号, 126号, 132号, 134号土壤出土遺物
- PL. 38 145号, 153号, 154号, 158号, 159号, 160号, 161号土壤出土遺物
- PL. 39 161号, 169号土壤出土遺物
- PL. 40 169号, 171号土壤出土遺物
- PL. 41 175号, 176号, 177号土壤出土遺物
- PL. 42 177号, 179号, 181号, 187号, 193号, 195号土壤出土遺物
- PL. 43 195号, 196号, 197号, 199号土壤出土遺物
- PL. 44 208号, 209号, 211号, 214号, 217号, 222号, 225号, 231号土壤出土遺物
- PL. 45 235号, 237号, 239号, 240号, 241号土壤出土遺物
- PL. 46 243号, 246号, 250号, 252号, 255号, 256号, 257号, 259号, 260号土壤出土遺物
- PL. 47 260号, 262号, 264号, 267号, 269号, 270号, 276号, 278号, 290号, 294号土壤出土遺物

PL	48	遺構外出土遺物(1)
PL	49	遺構外出土遺物(2)
PL	50	遺構外出土遺物(3)

表 目 次

Table. 1	地下鉄路線内遺跡調査一覧表
Table. 2	博多遺跡群調査一覧表

I. 高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要



Fig. 1 高速鉄道路線内遺跡地図 (1/75,000) 原図 国土地理院 5万分の1地形図「福岡」

第1章 調査に至る経過

昭和58（1983）年3月22日の福岡市高速鉄道1号線の開通に続き、路線は中州川端から2号線として東へ伸び、昭和61（1986）年1月31日には箱崎九大前駅までの営業運転が開始されるに至った。

昭和51（1976）年8月に路線内遺跡の調査を開始して以来9年余の歳月が流れた。福岡市の海岸線は、古来人々の海の彼方に対する想いをつのらせ、実際その想いを現実のものにして来た。古くは、邪馬台国論争の象徴的存在である「漢委奴国王」の金印、西都「大宰府」の迎賓館であった「大宰府鴻臚館」、そして中世に港町であった「博多・袖ノ湊」等は大多数の市民に親しまれる歴史事象である。このような意味において、地下鉄が海岸線に沿い走り抜けることは文化財サイドにとっては恐怖でもあり、又千載一遇の好機でもあった。高速鉄道建設局、文化財担当の教育委員会の双方がそれぞれの立場を主張し協議を重ねること数十回、実際発掘調査にとりかかるまで2年有余の月日が流れ、安堵の境地に至ったのは昭和51（1976）年6月であった。そして同年8月発掘調査はゆっくりではあるが確実な足どりで始動したのである。昭和58（1983）年12月には地下鉄2号線関係の調査が終わり、昭和59（1984）年4月の紙園駅P2出入口の調査をもって想定した路線内遺跡の調査は完了した。調査の工程はTable 1に示すとおりであり、調査開始までの道のりは次のとおりである。

昭和49、50（1974・75）年 調査について協議。昭和51（1976）年5月、地下鉄工事中に福岡城石垣発見。同年6月、路線内文化財調査について協議成立。同年8月、西新町遺跡の調査開始。

Table 1 地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名	所 在 地	時 代	性 格	調査期間	調査面積	備 考
曲 崎 遺 跡	西区鶴崎西区役所前	弥生時代	共 司 墓 地	昭和52年4月 ～53年6月	4,925m ²	
（防 署 工 区）	西区防畠前	弥生時代 ～古墳時代	生 活 痕 痕	昭和52年12月 ～同53年4月	920m ²	鶴崎と西新町にに入る
西 新 町 遺 跡	西区修学院高校前	?	共 司 墓 地・出土	昭和51年8月 ～53年4月	6,290m ²	
福岡城内堀・石垣	中央区天神・大手門・平和町・赤坂	江戸時代	堀 石 壁	昭和51年12月 ～53年9月	14,900m ²	
福岡城東北新町石垣	中央区天神（旧鹿児原）	?	武家の町と博多町丸 街と分けた石垣	昭和53年3月 ～53年6月	500m ²	
博 多 町 工 区	博多区・土居町・魚町・通町 (併電車通り)	縄文 ～玉町時代	中 里 の 通 司	昭和53年11月 ～54年5月	200m ²	
宝 藏 町 工 区	博多区御供所町東長寺前	?	中央の博多の街	昭和52年12月 ～55年12月	1,832m ²	
祇 地 町 工 区	博多区馬場町	?	?	昭和52年2月 ～54年12月	4,500m ²	
博 多 脱 衣 工 区	博多区博多駅前	縄文 ～玉町時代	?	昭和54年12月 ～55年5月	4,500m ²	
博 多 駅 遺 跡	博多区博多駅前	弥生 ～古墳時代	包 裹 地	昭和55年12月 ～56年3月	約4,000m ²	河南のハンテン裏
若 鶴 宮 回 地 遺 跡	東区若鶴宮幸道・馬出	縄文 ～玉町時代	基 施 宮 門 前	昭和57年4月 ～58年12月	約5,000m ²	
				計	47,534m ²	

第2章 組織の構成

調査指導委員

考古学	鏡山 猛（前九州歴史資料館長・故人）	森 貞次郎（九州産業大学教授）
	杉原 荘介（前明治大学教授・故人）	乙益 重隆（国学院大学教授）
岡崎 敬（九州大学教授）		賀川 光夫（別府大学教授）
横山 浩一（九州大学教授）		大塚 初重（明治大学教授）
藤田 等（静岡大学教授）		白木原和美（熊本大学教授）
田中 琢（奈良国立埋蔵文化財センター長）		
西谷 正（九州大学助教授）		三島 格（前福岡市立歴史資料館長）
	藤井 功（前九州歴史資料館副館長・故人）	
日本史	筑紫 豊（前福岡県文化財保護専門委員・故人）	
	三宅安太郎（前福岡県文化財保護専門委員・故人）	
	田村 順澄（九州歴史資料館長）	
	川添 昭二（九州大学教授）	
人類学	永井 昌文（九州大学教授）	
岩石学	種子田定勝（前九州大学教授）	
水工土木学	山内 豊聰（九州大学教授）	
地質学	浦田 英夫（九州大学教授）	
建築学	土田 充義（九州大学助教授）	
歴史地理学	日野 尚志（佐賀大学助教授）	

福岡市交通局一調査委託

交通事業管理者	西津 茂美	
理事	岩佐 夕生	松原 弘和
総務部長	松本 健	総務課長 溝川 常博 経理課長 行友 雅浩
工事部長	川原 隆幸	工事課長 川口 広恭
技術部長	設計課長 角 能裕	
	計画課長 徳田 昭實	計画第1係長 斎藤 類敏 中村 俊喜

教育委員会—調査主体

教育長 佐藤善郎

文化部長 河野 清一

埋蔵文化財課長 柳田 純孝

埋蔵文化財第1係長 折尾 学

事務担当 松延好文・岸田隆生

調査担当 折尾 学・塙屋勝利・浜石哲也・山崎龍雄・池崎譲二・小畠弘巳

調査協力 山崎純男・井沢洋一・力武卓治・飛高憲雄・下村 智・大庭康時

調査協力団体

蘿崎遺跡 佐藤工業（株）福岡支店 取締役支店長 梅木正二

西新町遺跡 青木建設（株）福岡支店 取締役支店長 前田三男

戸田建設（株）九州支店 支店長 栗飯原延麗

福岡城石垣 清水建設（株）九州支店 取締役支店長 森井哲也

鴻池組（株）福岡支店 五十嵐章

日本国土開発（株）九州支店 支店長 伊藤幸郎

大成建設（株）福岡支店 取締役支店長 里見泰男

梅林建設（株）福岡支店 取締役支店長 平岡義季

薬院新川石垣 間組（株）福岡支店 常務取締役支店長 西村重信

呉服町遺跡 大日本土木（株）九州支店 取締役支店長 越山萬作

祇園町遺跡 熊谷組（株）福岡支店 常務取締役支店長 勝元 元

三井建設（株）福岡支店 取締役支店長 龍岡一巳

博多駅前周辺 竹中土木（株）九州支店 支店長 長野和郎

博多駅東周辺 日産建設（株）福岡支店 支店長 今津孝二

首崎宮周辺 西松建設（株）九州支店 支店長 甲斐栄一

地崎工業（株）福岡支店 支店長 大和田国彦

大成・梅林共同企業体代表者 大成建設（株）九州支店長 横内利治

その他の協力者

交通局関係 末藤洋・原一夫・本多修一・野田義一・平山幸生・永松正典・津高正高

大石秀雄・石橋秀敏・岡部隆浩・米澤福德・田中和敏・表友広・静純一

吉田豊治・桜木正明

教育委員会関係 古村澄一・戸田成一・清水義彦・井上剛紀・甲能貞行・三宅安吉

西津茂美・中田宏・生田征生・岡島洋一・古暮国生

第3章 路線内遺跡調査の概要

昭和51（1976）年8月に開始された地下鉄1号線、2号線関係の発掘調査は、昭和59年4月をもって完了し、整理と報告書も進行しこの報告書で5冊目となる。報告書の作成は昭和62年度をもって完了する予定であるが、ここで振り返って各遺跡の調査の成果について概観してみたい。

藤崎遺跡 藤崎遺跡の発見は明治45年（1912）年にまで遡る。三角縁二神龍虎鏡・素環頭大刀が箱式石棺から出土して学史上藤崎古墳として登場する。以後大正6（1917）年に方格溝文鏡が出土するなど遺物の発見が相次いだ。本格的な藤崎遺跡の調査は地下鉄関係の調査が初めてであった。藤崎交差点を中心には、弥生時代前期～中期の甕棺墓100基、石棺墓4基が発見された（Fig. 2）。この調査を機会に周辺のビル建設やバスターミナル建設とともに発掘調査も行われ、調査次数も11次になる。バスターミナルの調査では、10基の方形周溝墓が検出され、うち6号周溝墓（Fig. 3）は一辺が22mの大きなもので組合せ木棺の埋葬主体部からは、三角縁二神二車馬鏡1面、素環頭大刀などの副葬品が検出された。周辺の調査で出土した甕棺を併せて総数約200基にも及ぶ。夜白式土器の甕棺も発見され、中世土壙墓も検出されている。このことから藤崎遺跡の初源は縄文時代最終末に求められ、以後弥生～古墳時代を経て、中世に到るまでの墓地を形成している。これらの成果は以下の報告書に詳述されている。「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 藤崎遺跡」



Fig. 2 藤崎遺跡甕棺墓群の調査



Fig. 3 藤崎遺跡第6号方形周溝墓（藤崎ターミナル）



Fig. 4 貝輪を着装した斎棺埋葬人骨

(西新町遺跡) 住居址から出土したまとまった土器群は、その保存

状態の良好なことも助けて、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器編年上に大いに資するものである。福岡県教育委員会によって修築館高校地内の発掘調査も行なわれている。以下の報告書が刊行されている。『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 西新町遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告第79集

1982 「西新町遺跡」 福岡県

埋蔵文化財調査報告第72集

1985

福岡城壇石垣 福岡城内堀は

明治43（1910）年福博軌道電

車敷設のため埋立てられ、貢

線として福岡市内交通の大動

脈の役割を果たしてきた。70

年後地下鉄工事によって再び

石垣は掘り出されることにな

った（Fig. 5）。石垣線は1km



Fig. 5 70年ぶりに姿を現した福岡城壇石垣

福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981 「藤崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集

1982 「藤崎遺跡III・IV」 福岡市埋蔵文化財調査

報告第137・138集 1986

西新町遺跡 戦前、修築館高校付近より弥生時代斎棺墓等が発見され、弥生時代終末の「西新町式土器」の様式遺跡として知られていた。地下鉄関係の発掘調査では弥生時代中期中葉から後期初頭までの、斎棺墓30基と弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居址57軒などが検出されている。本遺跡の斎棺墓には、貝輪着装人骨のはいった斎棺（Fig. 4）や、銅剣切先のみ出土する例も見られた。これらの斎棺墓は博多湾をめぐる砂丘上の弥生時代墓群として藤崎遺跡、姪浜新町遺跡、博多遺跡群などと共に立地をなし、内陸部における斎棺墓群のあり方との比較をする上で重要な資料である。また竪穴

にも及び、入隅も3ヶ所で確認され、数回の石垣線変更も見られた。平和台球場入口から赤坂門付近にかけては、大宰府鴻臚館に由来する膨大な量の瓦や越州窯青磁などが石垣裏込めから出土し、福岡城のみにとどまらず鴻臚館の実相を知る上でも重要な知見があった。以後これまで福岡城に関する発掘調査には、薬院

新川石垣、赤城一丁目石垣、県庁跡地の旧敷馬門、新市庁舎建設地の肥前堀、祈念橋移設地、御鷹屋敷跡などが行なわれた。以下の報告がある。「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書III 福岡城址」福岡市埋蔵文化財調査報告第101集 1983 「御鷹屋敷」福岡市埋蔵文化財調査報告第59集 1980

博多呉服町遺跡 呉服町交差点は中山平次郎博士が提唱して以来「袖の渓」跡として定説化していた。発掘調査の結果では交差点内は11世紀後半代には既に陸地化し、溝、建物址さえ確認された(Fig. 6)。しかし蓮池、土居町付近は低湿地であることがわかった。「袖の渓」の位置は東西の両湿地に求めるべきであり、近來の周辺の調査でも、この低湿地が14世紀以降徐々に埋立てられていく様子が把握されている。昭和61年度に報告書刊行予定である。



Fig. 6 「袖の渓」跡と考えられていた呉服町交差点の調査

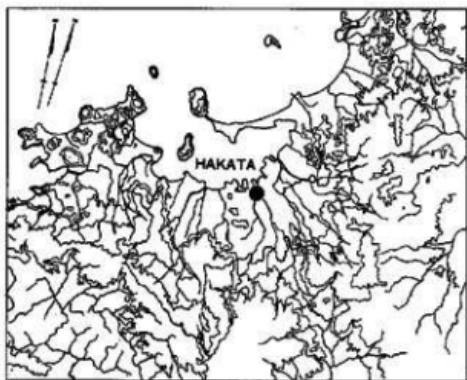


Fig. 7 喬崎宮周辺遺跡（馬出西工区）の調査

菅崎・馬出遺跡 明代の兵法書「武備志」に「大唐街」の存在が記されている菅崎宮周辺では初めての調査であった。遺跡の西端部の調査であり「大唐街」の存在を裏付けた遺構・遺物は検出されていないが、15世紀代の町屋遺構が良好な状態で検出された。元寇防壁推定線では、該当遺構は見られなかった。昭和62年度報告書刊行予定である。

II. 博多遺跡群

— 地下鉄路線内の調査(2) —



遺跡略号 HKT
遺跡調査番号 7725



Fig. 8 博多遺跡群周辺航空写真

第1章 遺跡の自然環境と歴史的環境

1. 遺跡の立地と自然環境

まず初めに、本書で一般的に用いている「博多」について、その地域を明確に規定しておく必要があろう。「博多」の認識のされた方には、それぞれの時代の実態に即して、①博多湾をとりまく地域という広義的理解と、②大宰府鴻臚館を控えた現福岡城近辺という古代における認識と、③黒田入城時以来の城下町「福岡」に対する商業都市「博多」（中世における「博多」が、基礎になっている）と、更には、④現在の福岡市行政区における「博多区」など様々なものがある。本書で通例用いる「博多」は、③の中・近世における「博多」であり、福岡市教育委員会が、文化財保護の立場からその範囲を推定したところの「博多遺跡群」(Fig. 9)を表わすものと理解していただきたい。

福岡市は、西南部を背振山（1055m）を主峰とする背振山地によって佐賀県と区画され、東部を三郡山地の支塊、立山山塊によって、東南部を同じく四王寺山塊によって区画されており、北面を博多湾を経て玄海灘に面している。福岡市域の大半は、これら東部および南部の上部白亜

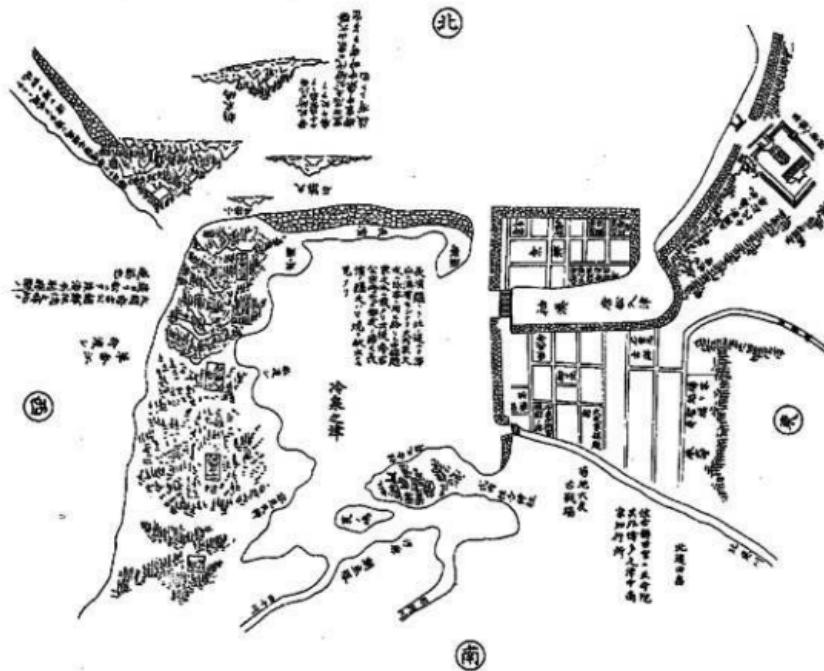


Fig. 9 博多古図 福岡築城前の地図「黒田如水伝」より

紀の花崗岩などからなる山地を除いて、頁岩、砂岩などからなる古第三期層によって基盤が構成されている。この古第三期層中には、姪浜炭田、宇美炭田などに見られるように、石炭層も発達している。また、この基盤には、北西方向へ延びる大きな断層が多く見られ、地点によりその浅深の差は極端である。市街地は、これらの山地の北側に形成された福岡平野や早良平野などの沖積平野や、それぞれの山塊から断層に沿って海側に延びる低支丘、およびその周辺の沖積層から成る低丘陵などに営まれている。

海岸部に目を転じてみよう。博多湾は、北辺に志賀島に繋がる海の中道、西に糸島半島があり、更に湾頭には玄界島、能古島があって、玄海灘の荒波を遮るこれら自然の防波堤によって抱かれた波静かな良港である。博多湾岸には、湾内を左転する海流と瑞梅寺川、室見川、堀川、多々良川など花崗岩山地に源を発する諸河川の砂の搬出とによって、砂丘の発達が著しい。この砂丘は、既に弥生時代には形成されており、今宿横浜遺跡、姪浜新町遺跡、藤崎遺跡、西新町遺跡などの発掘墓地をはじめとする遺跡が残されている。また、沿岸には昆沙門山、愛宕山、荒戸(津)山など島嶼状の独立丘陵があって、これらの丘陵は湾に向かって右方向に延び、砂嘴として発達した砂丘と接し、陸繫島を形成している。これらの砂嘴、および陸繫島の背面

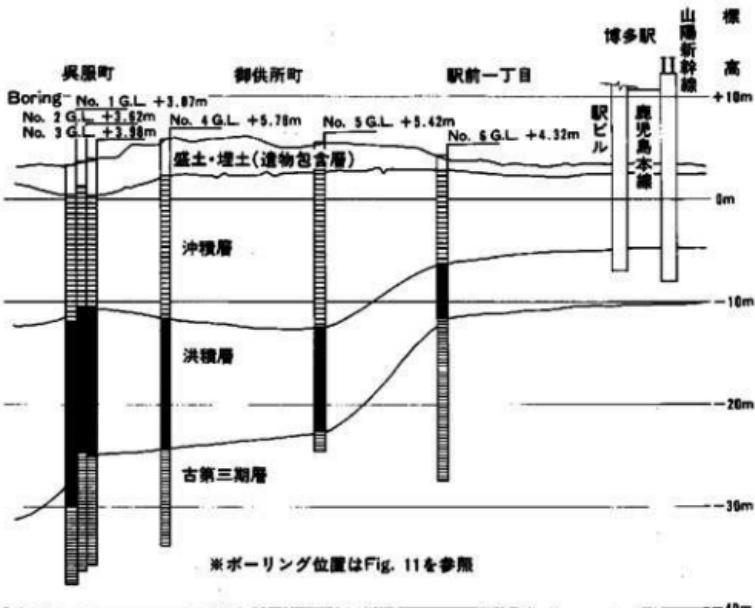
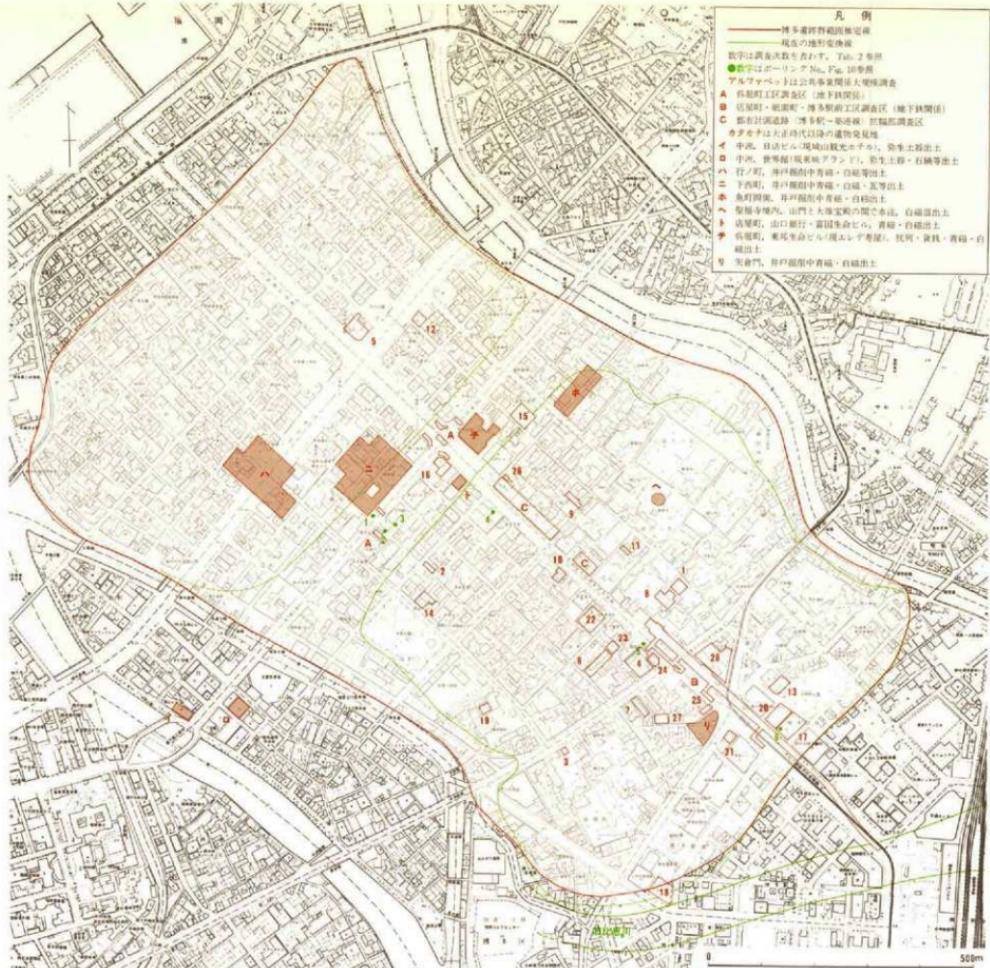


Fig. 10 博多遺跡群付近土層ボーリング図



には、入江もしくはラグーン状の低湿地を形成している。Fig. 9は住吉神社に奉納された絵馬の模写である(註1)。この絵図は江戸時代に以前の地形を想像して描かれたもので、各方面的データと細かな部分で異なる部分も多く、全面的に信頼できるものではないが、陸繩島、砂嘴と入江の存在が看取できる。柳田純孝の中世博多湾の地形復元(註2)によると、これらの入海は、港として古代、中世にかけて貿易の重要な拠点となっていたのは明らかで、今津湾と誓願寺、荒津と大宰府鶴臚館、冷泉津・袖の湊と博多、筥崎の湊と筥崎宮および顯孝寺などの関係がその好例として挙げられよう。

博多遺跡群は、これら古砂丘のうち、那珂川の右岸に形成された「博多浜(櫛田浜・袖の浜)」「沖(息)の浜」と通称される二つの砂丘上に立地している。この地域は、江戸時代においては筑前国那珂郡に属し、現在は福岡市博多区の北端に位置しており、福岡市都心部の一角を占めている。博多は、Fig. 9のように西を那珂川および中洲とともに形成するその支流博多川によって区画され、東を江戸時代初頭に開削されたと伝えられる石堂川によって画されている。永祿6(1563)年以前に描かれたと伝えられる「聖福寺古絵図」(註3)によると、承天寺から聖福寺の裏手に堀割が存在しており、石堂川の開削もこの堀割を大改修したものであろう。また、その東には松原が描かれており、博多の砂丘も本来は千代松原、稚崎松原と続く一連の砂丘であったものと思われる。南は、石堂川開削以前は那珂川に合流し遺跡南側を流れていた旧比恵川およびその氾濫原によって画される。北側の中世海岸線については、現在のところ資料不足で明確な判断はできないため、江戸時代宝曆頃の古地図による海岸線を仮にあてている。

博多の地質に関しても、先述した福岡市域内の例と同様である。Fig. 10は地下鉄工事関係のボーリング調査結果をもとに、博多について再編したものである。古第三紀層の岩盤に従って洪積層がそれを覆い、その上に砂、礫、砂質シルトなどからなる沖積層が堆積している。この沖積層の最上面は砂からなる。ボーリングNo.1~3は現典服町交差点付近に位置し、ここで地山砂層の落ち込みが明確に観察される。この落ち込みによって先に述べたように、「沖の浜」「博多浜」の二つの砂丘に区別される。このうち「博多浜」部は甕棺墓の出土から弥生時代以前に形成された古砂丘であるが、「沖の浜」部は地山砂層から碇石が発見され、より新しい砂丘であることが知られる。また、最上部の盛土、埋土層は遺物包含層と考えても差支えなく、その厚さは遺跡群内で厚く、それよりはずれる駅前一丁目付近では薄いことがわかる。

註1. 金子堅太郎「黒田如水傳」 文獻出版 より

註2. 柳田純孝「中世の博多湾の地形と貿易港」 Museum Kyushu 10号

註3. 銀山猛「中世町割と条坊遺跡(上・下)」 史論105・6号、109号 1971, 72年などに紹介
されている。

2. 遺跡の歴史的環境と調査研究

北部九州一帯は、大陸と一衣帶水を隔てるのみという位置的優位性から、稻作文化をはじめとする大陸先進文化を受け入れる窓口として、日本史上特異な立場を保持していた。中でも、福岡平野を中心とする博多湾沿岸は、宣化元(536)年に那の津の官家がそのほとりに設置されることによって、以後の発展の基本的な方向が決定づけられることになった。すなわち、「大宰博多津」として、大宰府の外港に位置づけられ、古代日本における对外交渉の極めて重要な公的港湾となつたのである。持統天皇2(688)年には、筑紫館(後の大宰府鴻臚館の前身)が、外国使節接待のための迎賓館として、既に設けられ、大宰府の職掌のうち蕃客・帰化・蕃通を司る大宰府鴻臚館の名も、承和9(842)年には史料に見える。鴻臚館の位置は、中山平次郎博士によって、現福岡城址内に比定されて以来、定説となった。寛平6(894)年の遣唐使の廃止を以て、鴻臚館の性格が、対公人から対私人(商客)応接機関と変化してゆき、ここが唐宋商人の交易の場となつた。大宰府や鴻臚館址を中心に各地で出土している越州窯青磁をはじめとする初期貿易陶磁は、そのほとんどがこうした中国商人によってもたらされたものである。律令制の衰退とともに、各地に多くの荘園が発生した。時は11世紀の後半、貿易奢侈品の需要が高まる院政期にあたり、鴻臚館における管理貿易から、不輸不入の特権を持つ荘園に宋商人が目を向け始めたのは当然のことであった。

本書で扱う博多遺跡群はまさにこの頃萌芽を見るが、博多も大宰府天満宮の神宮寺である安樂寺の領有する荘園であった。鴻臚館とは目と鼻の先にある博多に商船を引き込んで貿易が行なわれるようになったのである。これら権門と結びついた宋商が博多に多数居留したことは、聖福寺を創建した崇西の申し状に「宋人百堂」が、また『武備志』日本考に「大唐街」の語が見えてことからも充分に推量される。博多の発掘調査の結果からも、11世紀後半から12世紀前半代にかけての遺物が特に多く、当時の繁栄ぶりの一端を窺うことができる。のちに仁平元(1151)年の大宰府官人による笞崎、博多の大追捕によって、その繁栄は一時影をおとすものの、保元3(1158)年平清盛が、大宰大式となり、再び隆盛を迎えることになる。中山平次郎博士の説によると、それは日宋貿易に積極的であった清盛によって、貿易港としての「袖の湊」が築かれたからである。また「袖の湊」は後の大輪田泊築港の基本になったといふ。

鎌倉時代になると鎮西探題が博多に置かれ、名実ともに九州支配の中心が大宰府から博多へと移る。それとともに、博多には多くの社寺が建立され、对外貿易もこれらを拠点に行なわれるようになる。文永11(1274)年、弘安4(1281)年には、二度にわたる蒙古の襲来もあり、博多も戦場となつたが、これも一重に博多の政治的経済的重要性によるものである。

鎌倉時代末から南北朝期になると、博多も他地域以上に争乱の渦に巻き込まれたが、室町幕府が成立すると九州探題が設置される。しかし、室町幕府の支配力は弱く、博多は九州探題を

はじめ小武氏、大内氏、大友氏らによって争奪戦の対象となっていました。以後、断続的ながら戦国時代の末まで争乱は打ち続き、ついに、天正14(1586)年の島津氏の焼打ちによって博多の町はことごとく灰燼に帰した。天正15(1587)、九州平定をとげた豊臣秀吉により博多の再興がなされ、再び都市としての機能を取り戻したもの、徳川幕府の領国政策で、外交の窓口は長崎へと移り、往時の貿易都市としての繁栄を再び見ることはなかったのである。

以上、博多をめぐる歴史を簡単に紹介したが、对外貿易の拠点としての博多の優位性はそれ自体を戦国大名の争奪の対象とせしめ、後の博多研究の重要な史料の多くを焼失するという皮肉な結果をも生み出した。但し、幸いなことに、博多の地中には今なお多くの遺構・遺物が残されており、博多研究への考古学的方面からのアプローチを可能としているのである。

博多における本格的な発掘調査の歴史は、わずかに10年足らずのことであるが、地下鉄、都市計画道路関係を除いてもすでに29次に及んでいる(Tab.2)。しかし、それ以前に遺物の発見やそれらに対する先駆者先生方の考古学的な研究もある。今、それらを考古学的分野に限って簡単に振り返ってみよう。

博多の遺物発見の歴史は、聖福寺境内を中心に江戸時代にさかのぼる。

1. 元禄11(1698)年 聖福寺子院瑞應庵の墓地で壺が出土し、中に金器、花銀、金花銀、金銭、銀鏡、団金、金で作った鶴鷺鳥魚などあり、これらを改鑄して二百三十四両を得る。
(文獻1・2・7・8)
2. 宝永(1704~1710)年間 聖福寺子院虚白院の地より朱椀五十具が出土。毎具四個からなり、二つの壺に入っていた。いずれも散逸して現存しない。
(文獻7・8)
3. 享保元(1716)年 瑞應庵の墓地石塔修補中、多量の金銀器が入った壺を発見。元禄11年と同様の遺物で、金二貫八百七十匁、銀五貫三百二十匁一分を得て、修葺の資となした。出土した法馬の一つには、「徑郭徳潤 行宣政院福建分院 振調官副使側失監」裏面に、「客商謝福 花銀肆拾捌両重 辨駿銀匠彭楨」と刻字されていた。現存しない。
(文獻1・2・7・8)
4. 享保8(1758)年 瑞應庵の墓地が盗掘され、遺留した銀器一個の中に、白銀九貫六百六十匁、銀製珍器量四百貫、法馬七十三個が出土。法馬の大なる物は五百匁もあり、正面に客商謝福 辨駿銀匠彭楨 華銀五拾兩重 裏面に「金花銀」などの刻字が残されていた。
(文獻1・2・8)
5. 宝暦8(1758)年 天得庵の竹林開墾の際、南京窯の瓷器大小27個が出土。現存しない。
(文獻1・2・7・8)
6. 明治40(1907)年 上奥堂町の佐藤半次郎氏宅の井戸掘削中、地下約16尺より碇石が出土。櫛田神社に奉納されている。
(文獻5・12)
7. 大正(1912~1925)年間 魚町、西町下、行ノ町、矢倉門など博多各地で、井戸掘削時に青磁、白磁、瓦などが出土。天神近辺でも西鉄電車駅、平岡氏宅から青磁、白磁が出土。これらは中山平次郎博士の確認である。また、中洲玉屋デパート西側で、弥生式土器、婧壺などとともに石鍋、塩壺が出土。
(文獻3)
(文獻11)

8. 大正4(1915)年 中山平次郎博士が福岡城内で奈良時代古瓦の大量散布地を発見し、大宰府鴻臚館址であるとの確証を得る。
(文獻3)
9. 昭和7(1932)年頃 博多港沖塗溝中、碇石とともに「張綱」銘墨書きのある天目碗(Fig.12)や中国鏡多数が発見される。九州大学藏。
(文獻4・5・10)
10. 昭和24(1949)年 福岡城内の平和台野球場造成のため、鴻臚館址と思われる地点を破壊。この前後、高野孤庵、大場憲郎氏らによって古瓦、陶磁器が多数採集され、のちに、越州窯青磁が含まれていることを小山富士夫氏が確認、福岡市立歴史資料館、出土光美術館、九州歴史資料館蔵。
(文獻9・13)
11. 昭和27(1952)年 呉服町交差点の東邦生命ビル(旧大丸百貨店、現エレデ寿屋)の建設工事中、陶磁器、蛸壺、弥生式土器片、銅錢(五銖銭を含む)など多量の遺物が出土。後に周辺の山口銀行福岡支店、富国生命ビル等の建設工事でも同様の発見があった。
(文獻5)
12. 昭和20年代(1945~1955)聖福寺境内の山門と大宝殿との間の工事中に地下2m付近で、水注一個と皿一枚をそれぞれ発見。九州大学藏。
(文獻6)
13. 昭和33年(1958)年 今津勝福寺面の砂丘より、約二百体の埋葬人骨が発見された。百九点の陶器や鐵鍋、鐵鎌などが二宮八郎氏によって採集された。人骨は体部と頭部が別々に埋葬され、異様な埋葬形態であることが注目された。九州歴史資料館蔵。
(文獻10)
14. 昭和48(1973)年 天神フタタビル建設工事中地下5mから碇石が出土。福岡市埋蔵文化財センター蔵。
15. 発見年代は未確認であるが、筥崎宮境内より白磁碗の完形品一点が出土し、宝物館に所蔵。

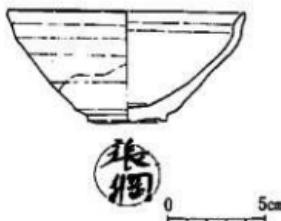


Fig. 12 博多港沖引揚の天目碗

博多遺物発見史関係文献目録

- (1) 貝原益軒「筑前国統風土記」
- (2) 津田元顯・元貫「石城志」明治2(1765)年・大正10(1921)年刊
- (3) 中山平次郎「古代の博多」昭和59(1984)年 九州大学出版会
- (4) 山本博「博多湾出土遺物と元寇役への新資料」「都久志三号」昭和(1937)年
- (5) 川上市太郎「蒙古草船碇石」(「元寇史蹟(地の卷)」福岡県史蹟名勝天然記念調査報告書第14輯)所収 昭和16(1941)年
- (6) 奥村武「博多袖の湊遺跡出土文化財について」「うわさ25-9~12、所収、昭和34(1959)年・「博多袖の湊跡発掘文化財目録」昭和28(1953)年報告、福岡県教育庁蔵書。
- (7) 小島文鼎「聖福寺史」昭和39(1964)年三宅安太郎訂、聖福寺文庫刊行会

- (8) 岡崎敬「福岡市（博多）聖福寺発見の遺物について」『九州文化史研究』
 (1968) 年 所収
- (9) 高野孤庵「平和台の考古史料」（プリント）昭和47（1972）年
- (10) 亀井明徳「博多の中国陶磁地図（上）・（中）・（下）」日本美術工芸447～449 昭和50～1
 (1975～6) 年
- (11) 咲山恭三「博多中州ものがたり -前編-」昭和54（1979）年
- (12) 松岡史「碇石の研究」「松浦党研究」昭和56年（1981）所収、松浦党研究連合会
- (13) 池崎謙二・森本朝子「福岡市立歴史資料館収蔵の高野コレクション」弓場知紀「出光美術館の高野コレクション」『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書III福岡城址—内堀外壁石積の調査』所収、昭和58年（1983）福岡市教育委員会

地下鉄、都市計画道路等の大規模開発を除いた調査地点は以下のようである。

Table. 2 博多遺跡群調査地点一覧表

次	調査期間	所在地（博多区）	対象面積 (測定面積) m ²	調査原因	備考（調査報告書）
1	78. 11～ 79. 1	柳原所町・東長寺境内	(360)	納骨堂建設	本調査
2	79. 4	店屋町99	(約100)	ビル建設 (古木選別ビル)	立会、土層開削成
3	79. 11	祇園町・萬行寺境内	(240)	納骨堂建設	本調査
4	79. 12～ 80. 3	冷泉町7-1	1,982.9 (1,190)	ビル建設 (松浦党コレクション)	本調査（「博多I」1981） (「博多II」1982)
5	79. 12	下呂駅町346	1,177.6	ビル建設 (古木選別ビル)	試掘調査、地表下4.5mから碇石出土
6	80. 3～4	冷泉町155等地	1,035.14 (640)	ビル建設 (古木選別)	本調査
7	80. 6～8	紙町130	(210)	ビル建設 (サムヤマンション)	本調査
8	80. 8～10	柳原所町・東長寺境内	(600)	本堂建設	本調査
9	80. 9	下呂駅町75	197.78	ビル建設 (リコーカンビル)	試掘調査
10	80. 12	冷泉町474-9	353.4 (54)	ビル建設 (古木選別ビル)	本調査（「博多I」1981）
11	80. 12	柳原所町3-30	244.06	ビル建設	試掘調査
12	81. 6	中央駅町152, 153	463.59	ビル建設 (古木選別)	試掘調査
13	81. 7	駅前1丁目121～127	1,639.443	ビル建設 (古木選別ビル)	トレンチ調査
14	81. 8	店屋町246～248	810.8	ビル建設 (古木選別ビル)	本調査
15	81. 8	七呂駅町569	2,275.02	駐車場建設	試掘調査
16	81. 9	店屋町246～248	775.11	ビル建設 (古木選別)	本調査
17	81. 11	駅前1丁目98	810.8	ビル建設 (第一生命ビル)	本調査（「博多II」1985）
18	82. 1	駅前2丁目8～14		ビル建設	試掘調査
19	83. 4	鶴田神社境内	(約380)	社務所建設	本調査
20	83. 4	駅前1丁目99	1,400	ビル建設 (古木選別)	本調査
21	83. 5	駅前1丁目18 1	220	ビル建設 (古木選別)	本調査
22	83. 9	冷泉町189等地	1,566 (3800)	ビル建設 (古木選別—サンマシンション)	本調査
23	84. 2	龍宮寺境内	(約300)	本堂建設	本調査
24	84. 4～5	冷泉町1-1	370	ビル建設	本調査
25	84. 5～6	祇園町1-1	339.8	ビル建設 (中村屋ビル)	本調査（「博多V」1985）
26	85. 5～6	上呂駅町34-1	135	ビル建設 (古木選別)	本調査（「博多VI」1986）
27	85. 5～6	紙町1-11	678.46	ビル建設 (古木選別)	本調査
28	85. 5～9	柳原所町70-2	2,343.68	ビル建設 (西鉄ビル)	本調査
29	85. 7～9	網町22他	2,201.83	ビル建設 (氣仙沼市内設立)	本調査

第2章 店屋町工区C、D区の調査

1. 調査の経過

昭和51（1976）年夏、地下鉄工事とともに路線内の埋蔵文化財の発掘調査が開始された。これに先立つて福岡市教育委員会では、それまでの先覚諸氏の研究成果や、遺物採集地点などの基礎的な資料をもとに、路線内にあたると思われる遺跡を想定した。1号線内で想定された遺跡は、西から藤崎遺跡、西新町遺跡、福岡城址（掘石垣）、博多祇園町遺跡、2号線では、博多袖の湊遺跡、箱崎元寇防塁、箱崎宮周辺遺跡であった（Fig. 1）。祇園町遺跡については、第1章で述べたように過去に多くの遺物発見の記録が残されていたが、本格的な発掘調査はそれまで全く行われておらず、その実体については、全く不明であったといって過言ではない。過去の遺物発見の記録を裏付けるために、同年12月に祇園町遺跡の路線予定地内の試掘を行い、中国陶磁をはじめ多くの遺物と遺構が確認され、平安時代後期～室町時代を中心とする遺跡であることが再確認された。以後周辺の調査の進展とともに遺跡の拡がりは旧博多部のほぼ全面にあるものと考えられるようになった。このことから従来の「祇園町遺跡」との呼称は必ずしも適当とはいえないくなり、現在福岡市教育委員会では、祇園町遺跡を含む旧博多部を「博多遺跡群」と呼んで、各種開発行為のチェックを行っているところである。

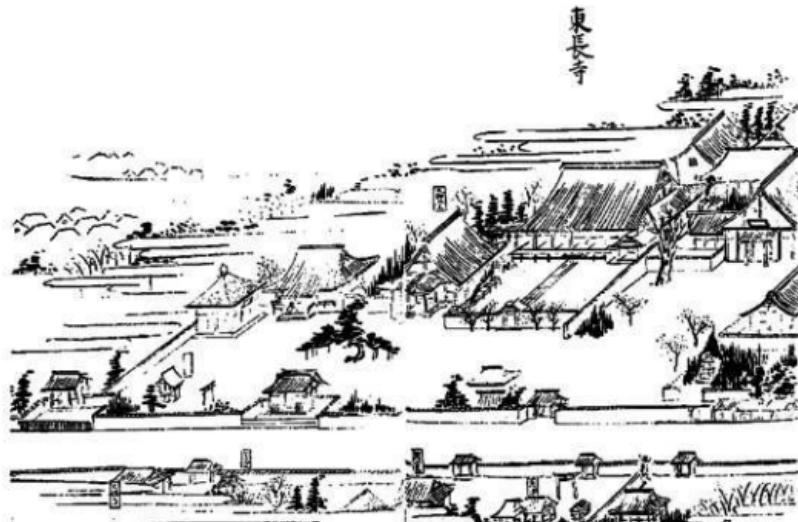
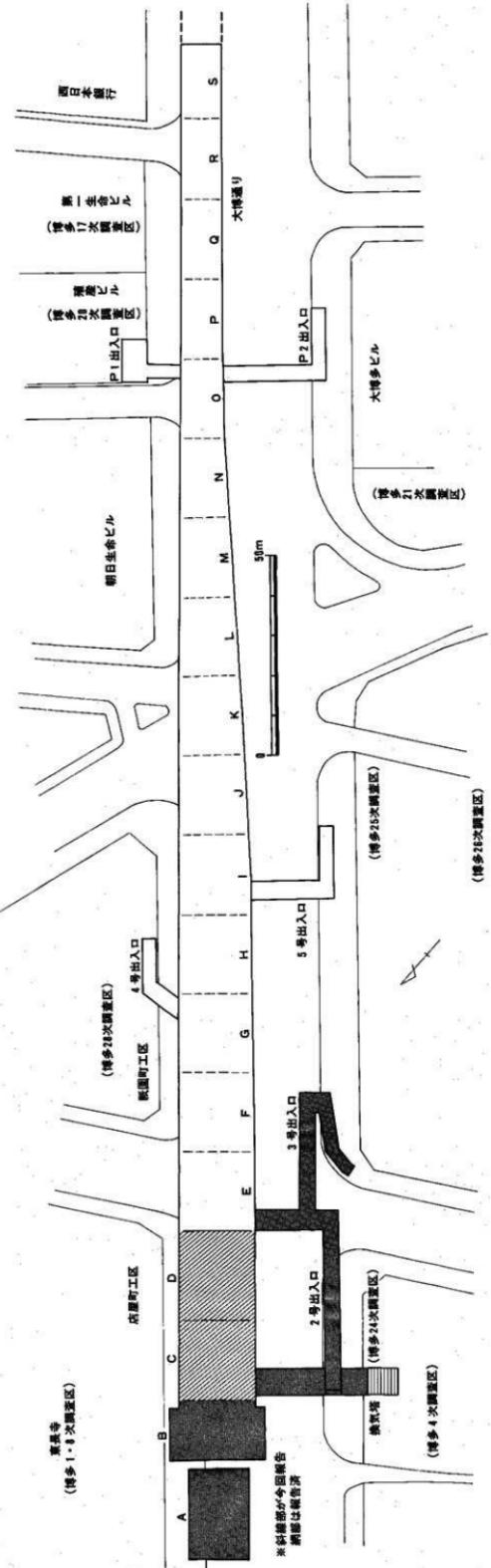


Fig. 13 東長寺付近古絵図『筑前名所図会 卷の二』奥村玉蘭 文政4（1821）年

Fig. 14 博多港駅地下鉄1号線関係街区(古賀町・祇園町工区)全体図(1/1,000)



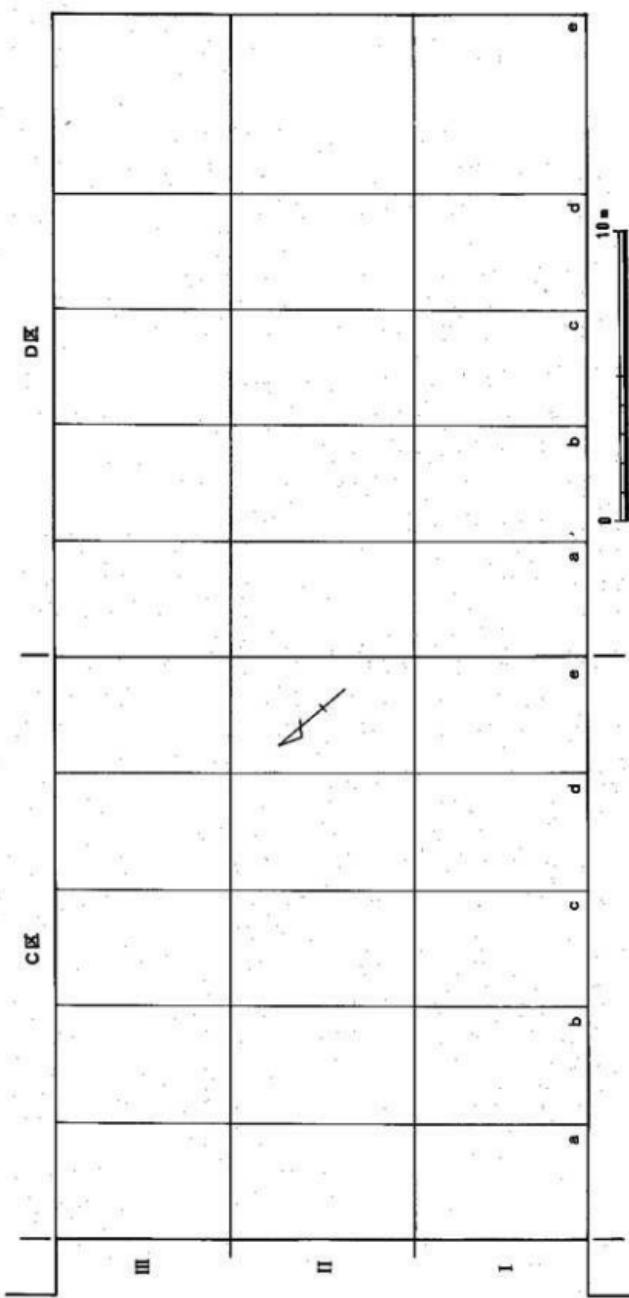


Fig. 15 C・D区グリッド設定図(1/200)

博多遺跡群内における1号線関係の調査区は、地下鉄工事区の店屋町工区、祇園町工区にわたり、幅員10~24m、長さ384mにも及ぶ。調査区は便宜上20mを原則として区分し、海側から順にそれぞれA~Sの符号をつけた(Fig.14)。中洲川端駅から祇園町駅までの工区は、大きなカーブを描きビルの下を通過することになるため、工区の大半をシールド工法によっている。よって本工区の要調査部分は、遺構面に影響を及ぼす薬液注入部(A区)、豊坑部(B区)、オープンカット工法による駅舎部(C・D区)であった。祇園町工区は全面オープンカット工法によるため、全面が調査対象となった。

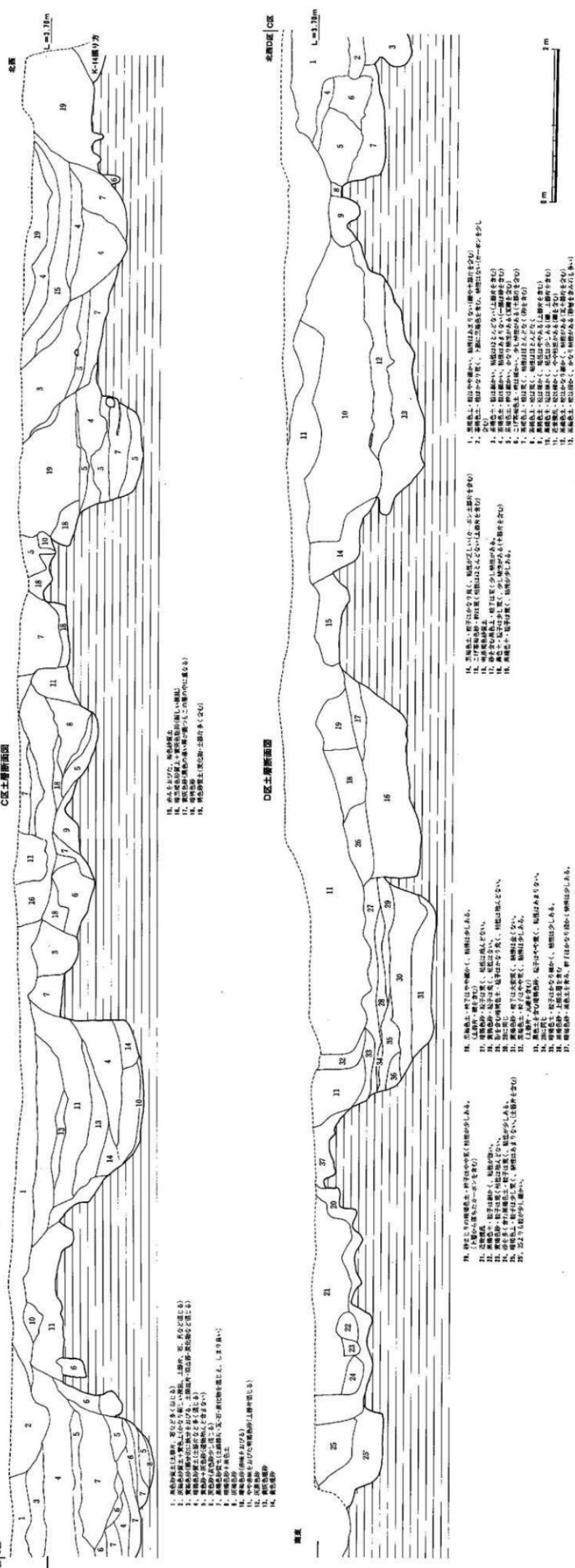
試掘調査の結果を受け福岡市教育委員会と福岡市高速鉄道建設局(現交通局)は協議を重ね、本調査は昭和52(1977)年12月7日より開始することになった。また事前調査として中間杭打込みの埋設物確認と併行して坪掘調査(同年11月1~11日)、下水管移設の夜間立会(同年11月19日~12月5日)等を行い、土層、遺構、遺物などの基礎的なデーター収集につとめることとした。その結果、地表1.2~1.5m程度は近・現代の建物基礎等による搅乱であり、その下に1.2~3mの厚さで遺物包含層のあることがわかった。また各坪掘の地山白砂層のレベルにかなりのバラつきがあり、濃密な遺構分布が考えられ、更に甕棺破片の出土から、下面に弥生時代甕棺墓の存在も推察された。

発掘調査は薬液注入部(A区)から開始、豊坑部(B区)、駅舎部(C・D区)と進めた。A・B区の調査結果については既に、「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多・福岡市埋蔵文化財調査報告第105号集 1984」で報告を行った。本報告ではC・D区について述べる。

調査地点は東長寺の旧境内にあたり、Fig.13に見られる古絵図のはば中央部右半分に相当する。五輪塔や十塚に囲まれた建物が描かれている部分である。東長寺は大同元(806)年、弘法大師によって創建されたと伝えられる真言密教の名刹で、現在もなお別格本山として著名である。同寺には木造千手観音立像が所蔵されており、重要文化財には指定されている。また境内には、黒田藩二代藩主黒田忠之、三代藩主黒田光之の墓も喩まれている。東長寺は創建当時、博多旧行ノ町に所在していたと伝えられており、現地に移転したのは江戸時代初期黒田忠之が菩提寺とした時であり、16世紀以前の遺構、遺物については直接東長寺には結びつかない。

C・D区の調査はB区の終了後、昭和53(1978)年7月当初から継続して行い、同年11月2日に終了した。調査対象面積は長さ42m、幅18.3mの768.6m²であった。C区は長さ20mに、D区は工区の里程の関係上長さ22mに区分し、それぞれを二列の中間杭によってI~IIIに分け、更に4mを原則にa~eに細分した。D区のeについては6mとした(Fig.15)。このうち、D-I-d-e区の一部については、歩道確保の必要から一部調査は不可能で、また調査可能な部分についても覆鋼筋の間をぬって行うという悪条件になった。調査区域と工事区域が隣接し、調査終了とともに機械掘削が迫ってくるという状態で、調査期間を少しでも短縮するために最終

Fig. 16 C, D区土層断面図



遺構面の測量はステレオカメラによる航空写真測量によった。市街地内での調査であり、通行人の多い幹線道路に面していることから、工事関係者とともに安全管理についても格別の配慮をした。また、試掘調査や中間杭布掘の立会調査などの知見をもとに、地表下1.2m~1.5mの近・現代建物基礎等を含む擾乱層部分は機械力を以って除去し、以下を人力で精査した。



Fig. 17 猛暑の中の調査 C区

C・D区の土層断面図はFig.16に示すとおりであるが、長期にわたって営まれた遺跡であるため遺構の切合いが多く、また遺構の覆土も識別が難しかった。折りしもB・C区調査の頃、福岡市は記録的な水飢饉に見舞われ、猛暑も手伝って、上部の粘質のある土壌は固く縮まり、地山白色砂層まで掘り上げた遺構はすぐに乾燥して崩壊してしまうという、気候条件にも恵まれない調査であった。

D区で出土した人骨集積遺構は9月初めの新聞紙上を賑わせた。「打首にされた菊池一族の骨」として報道され、市民をはじめ、菊池市議会、菊池神社関係者も多く現場に見えた。

猛暑の中、排気ガスの中で現操作業に参加していただいた方々、発掘調査に御協力をいただいた熊谷組（株）の諸氏に感謝したい。

（調査補助員） 常松幹雄、白石公高、宮島成昭、信行千尋、高倉浩一、菅野都子、夏原啓子

（調査参加者） 永田恭子、河辺チサエ、大庭ミツ子、黒木順子、安部国恵、安部サエ子、

高宮久子、青木郁夫、柴田喜瑞、海津静江、真鍋秀子、真鍋政江、清水文代

緒方チヨエ、柴田スマ子、高宮ノブエ、海津和子、杉村文子、能美須賀子、

西原年枝、藤タケ、高田ヒサノ、塩手真吾、鳴田誠二

2. 調査の概要

地下鉄店屋町工区C・D区の調査では、前回報告したA・B区の調査と同様の内容を得ている。最下層（地下白色砂層）中に弥生時代中期の甕棺墓が営まれ、明確な遺構は検出されていないが古墳時代から平安時代半ばまでの遺物が後世の遺構中に混在して出土している。遺構、遺物はその大半が平安時代末から戦国時代まで、特に鎌倉時代までのもので、博多の港湾都市としての隆盛を誇った時代を色濃く反映している。この時期の遺構には土壙、清、柱穴、集石遺構、火葬墓（場）、井戸などがある。遺構の切り合いが多いために、柱穴については相互の関連性は把握しえず建物配置等はほとんど知ることができない。C・D区の遺跡の性格もA・B区と同様で鎌倉時代末期頃を中心として使用され、それ以前は一部墓が営まれる例はあるものの、「宋人百堂」など中国商人居留地の可能性も含めて、大旨市街地（集落）であったものと考えられる。以下出土した遺構、遺物について説明するが、紙面の制約上その全てについて述べることは困難であり、良好な遺存状態を示す遺構を中心となることを断っておきたい。なお、遺構のはほとんどは土壙の名称を用いているが、その性格については文中で説明したい。遺物実測図中のグラフは土師皿類の計測値であり、まとまった出土状態を示す遺構について掲げている。実線が糸切り底、破線はヘラ切り底を示し、縦軸が器高、横軸が底径および口径を半径で表す。文中で用いる貿易陶磁の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」高速鉄道関係文化財調査報告IV 1984 別冊に依っている。

1) 遺構と遺構出土の遺物

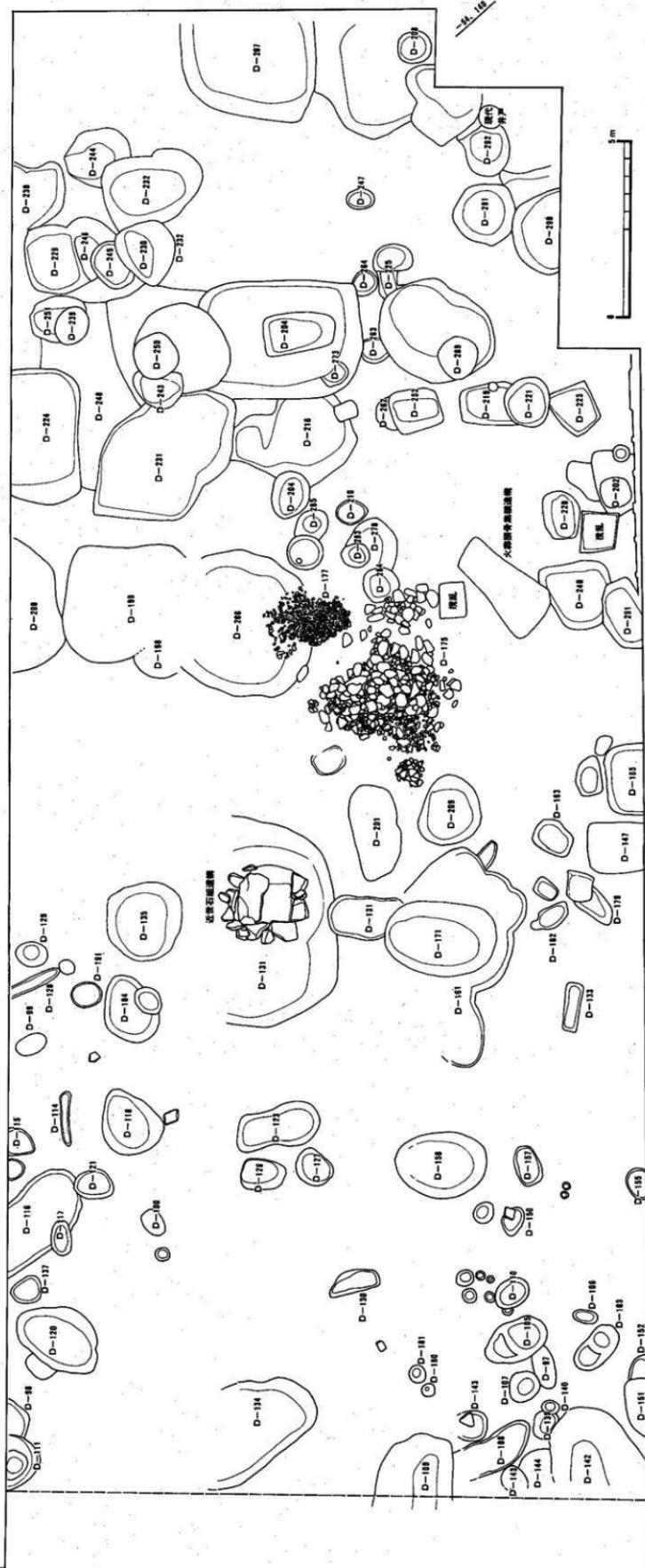
97号土壙 (Fig.20 PL.10-1) C-I-a区上部検出遺構である。長軸1.2m、短軸0.6mの長円形の掘り方に人頭大から拳大の礫と瓦破片を集めしたものである。中に国産大型陶器の破片と三巴文の軒丸瓦が見られた。時期は中世末から近世初頭が考えられるが、建物の基礎として用いられたものか、火葬墓か不明。石は焼けている。

98号土壙 (Fig.20) C-III-d区上部検出遺構である。土留壁に切られ全体形は不明であるがほぼ長軸1.2m、短軸0.6m程度の規模をもつと思われる。111号土壙を切っている。出土遺物には鶴釉皿耳壺の頸部破片と糸切り土師皿5点などがある。ほぼ13世紀頃と考えられるが、性格については明確でない。

99号土壙 (Fig.18) C-III-d上部検出遺構である。長軸0.9m、短軸0.6mの長円形をなす。浅い皿状の落ち込みで遺物は全く見られない。時期、性格ともに不明。

100号土壙 (Fig.20 PL.10-2) C-III-d上部検出遺構である。土壙掘り方はわずかな窪みが見られるのみで明確でなく、0.6m×0.4mの範囲で床面よりやや浮いた状態に拳大の礫

Fig. 18 C. D区遺構全圖 上部出土遺物 (上)



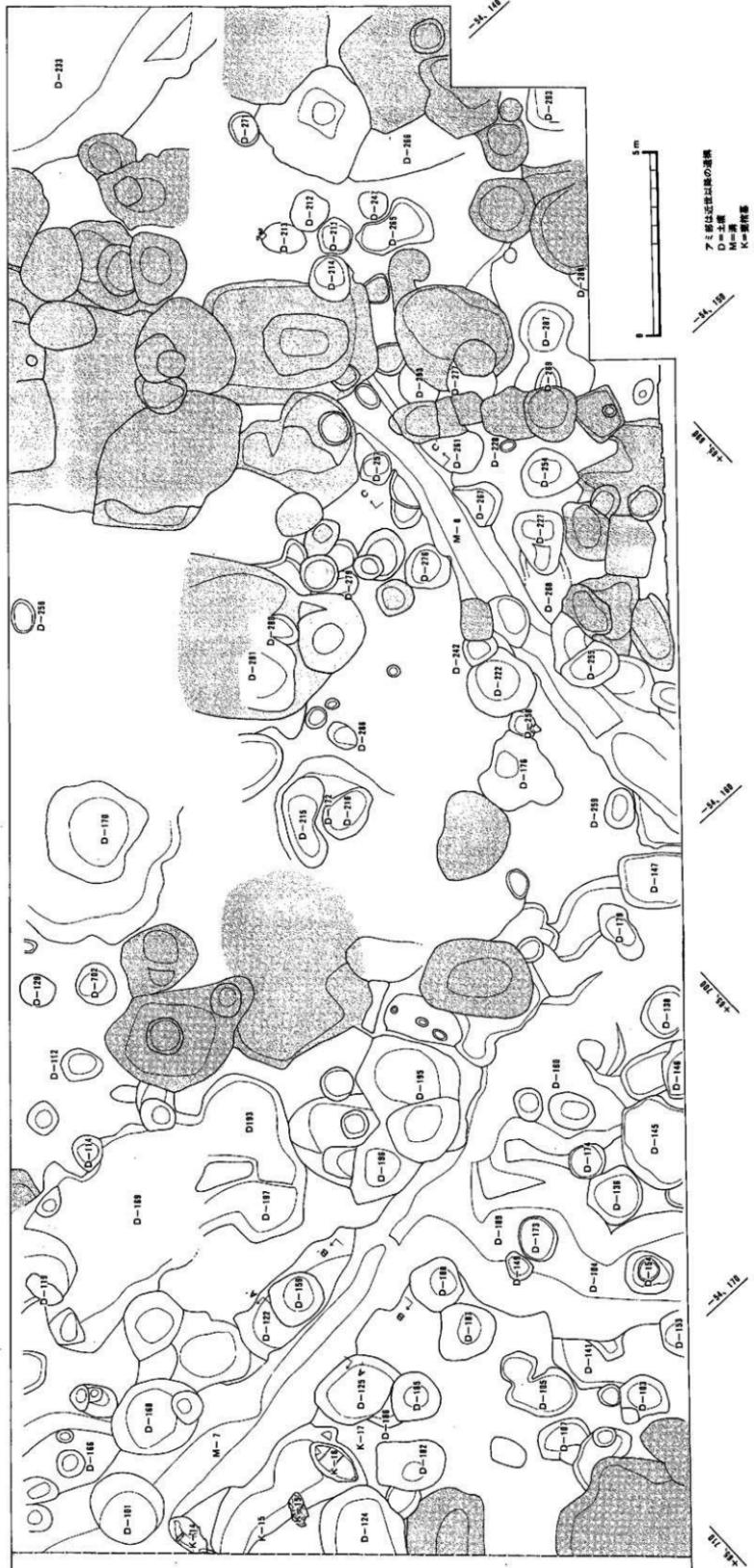


Fig. 19 C, D区遺傳子圖 下部檢出遺傳 (%)

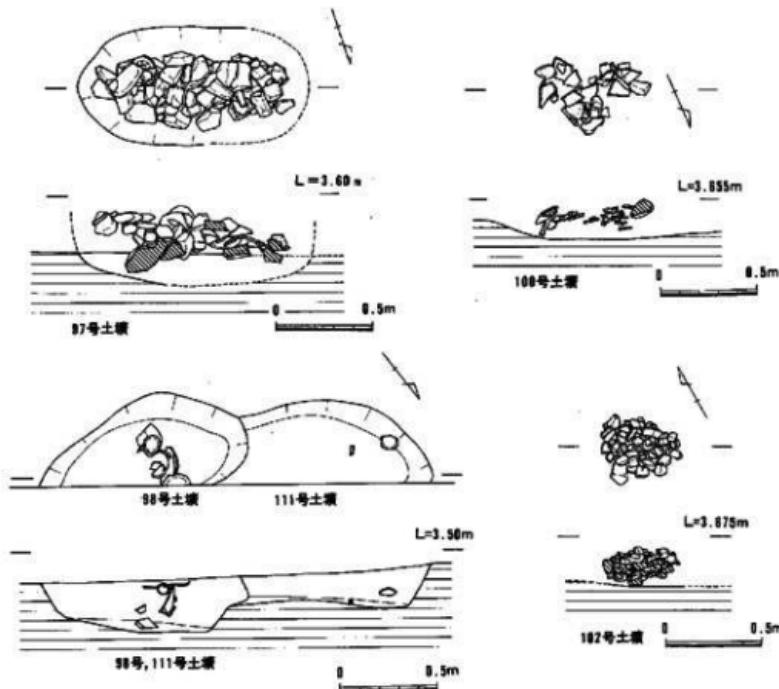


Fig. 20 97号, 98号, 100号, 102号, 111号土壤

と縄目叩き痕をもつ瓦破片、須恵器片、白磁碗、皿、陶器大型容器破片が集積された状態で出土している。礎には焼け割れたものがある。極端な混じりのある遺物を集めていることから、近世頃の建物の基礎として用いられた可能性もある。

101号土壤 (Fig.21・22) C-III-a区で検出された。平面形は直径2.5m程度の不整円形をなし、深さ0.75mで壁はだらかに傾斜し、断面形は深い皿状を呈する。168号土壤を切り、7号溝に接するが、溝との前後関係は不明である。この遺構からは幾分まとまった遺物が出土している。土師皿類（1）はいずれも糸切り底であるが、細片が多く計測可能なものはグラフに示したとおりで、皿では半径3.5cm、器高1.5cm弱、杯では半径5cm弱、器高2.5cmに比較的まとまっている。この遺構では青磁が少なく白磁類が多い。また白磁もFig.21に示すように一部を欠

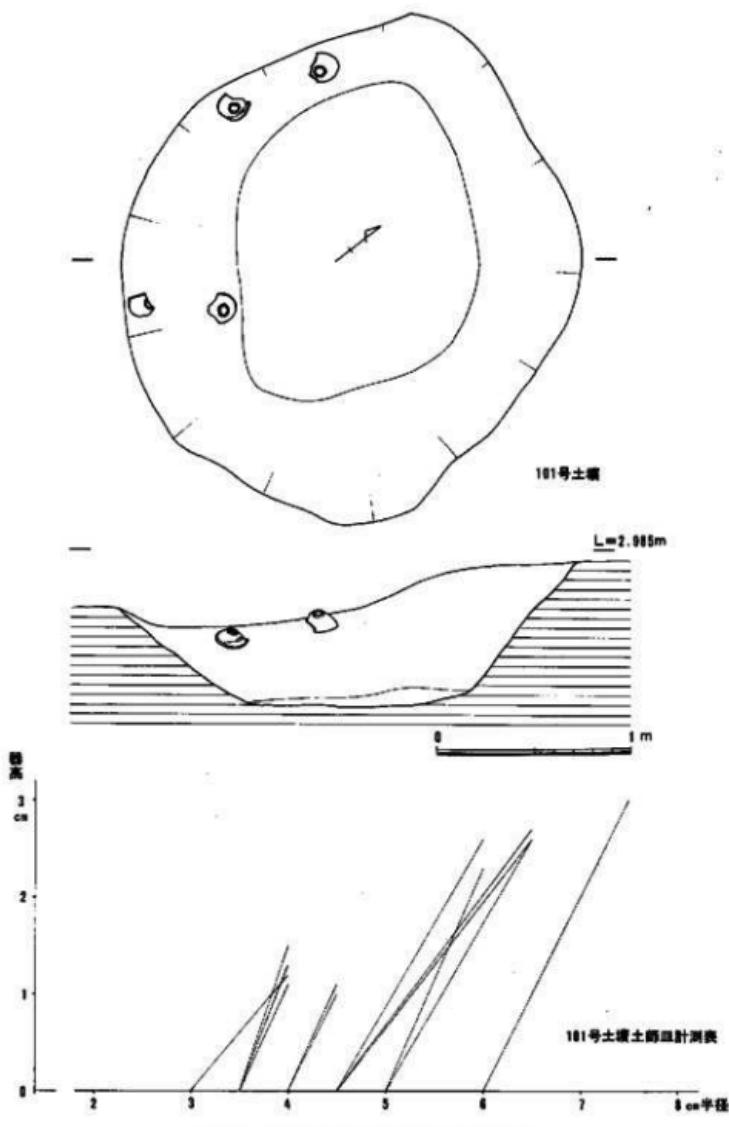


Fig. 21 101号土壙と101号土壙出土遺物(1)

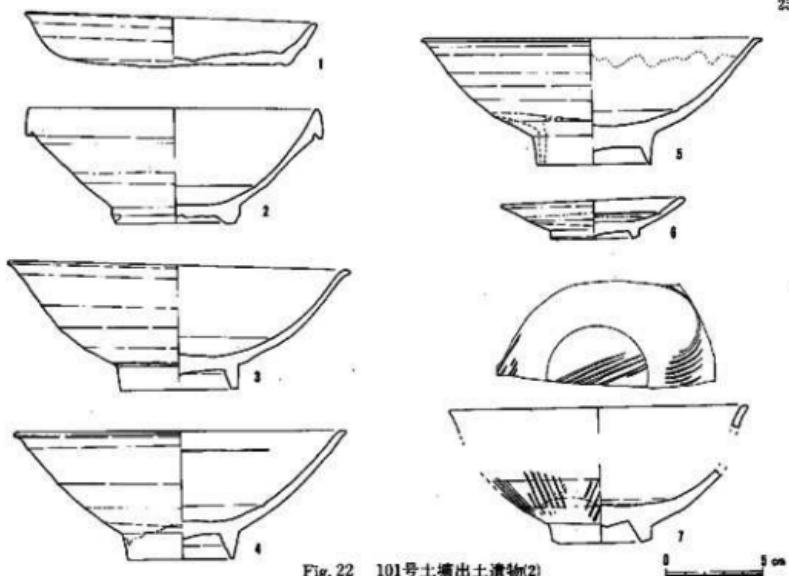


Fig. 22 101号土壙出土遺物(2)

5cm

くだけの破片が出土している。2は三角玉縁をもつ白磁碗。3～5は高台が細くて高く、口縁端を水平に外反させるものである。6は体部上半から口縁をやや肥厚させ見込みの釉を輪状に焼きとり、重ね焼きをしたものである。7は青磁碗で体部外面には粗い櫛描きが下方から放射状に施され、体部内面および見込みにも櫛描き文が施されている。体部は丸味を持ち、口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸味をもつ。高台は台形でどっしりした造りをもち、通例のいわゆる「珠光青磁」とは趣きが異なる。やや古いタイプのものである。

この遺構出土の遺物にはそれ程大きな混入もなく、ほぼ12世紀半ばにおさまるものであろう。性格については廐棄物処理用土壙であろう。

102号土壙 (Fig.20 PL.11-1) C-I-III-d区上部検出遺構である。長軸0.4m、短軸0.3mの範囲に小砾がぎっしり集積されている。砾は拳大以下のものばかりで、自然砾も見られるが火熱により割れた砾が多い。掘り方については全く不明である。また、遺物も含まれていないので時期の判断もできない。性格も不明といわざるを得ないが、97号、100号土壙など類似する遺構も見られることから、火葬墓、建物基礎等の可能性が考えられよう。

103号土壙 (Fig.23 PL.11-2) C-I-b区で検出された。長軸1.45m、短軸0.85mで平面面形は長円形をなし一端にテラスをもつ二段掘りの掘方をなす。最深部で0.85mを計る。覆土は下半が黒褐色土で、上半が黑色粘質土であり一部黄灰色砂がレンズ状にはいる。多くの

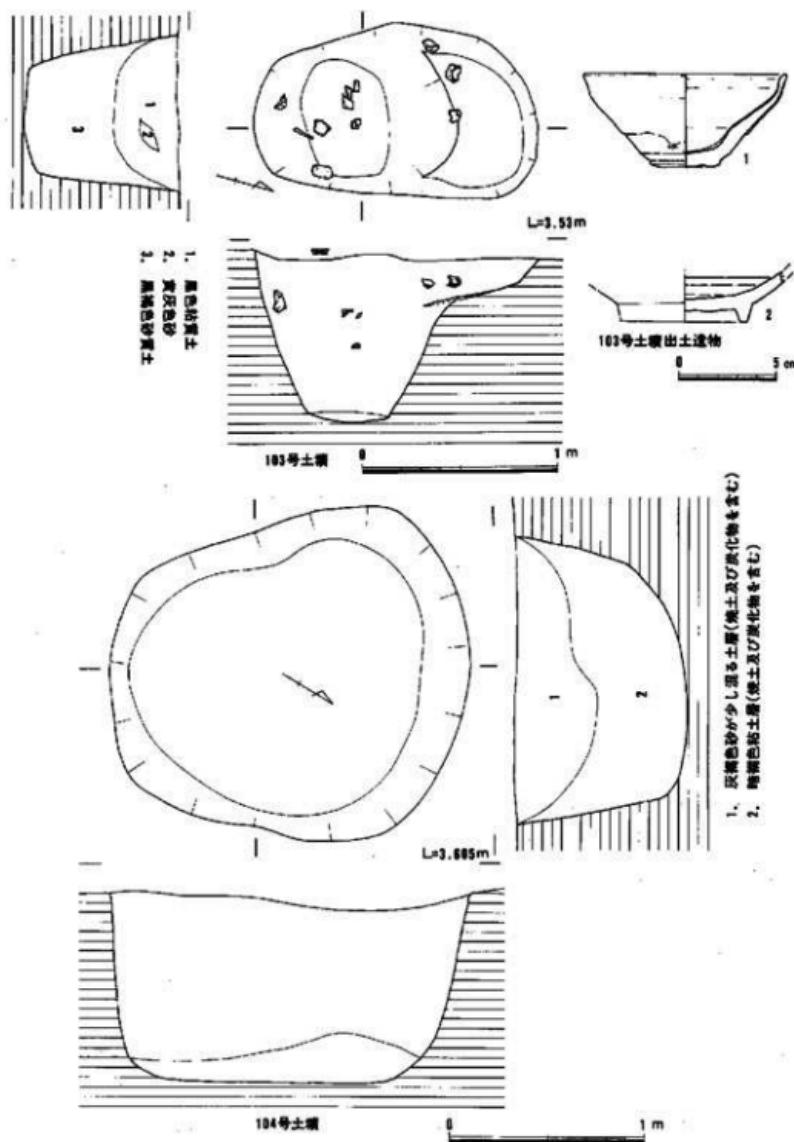


Fig. 23 103号, 104号土壙と103号土壙出土遺物

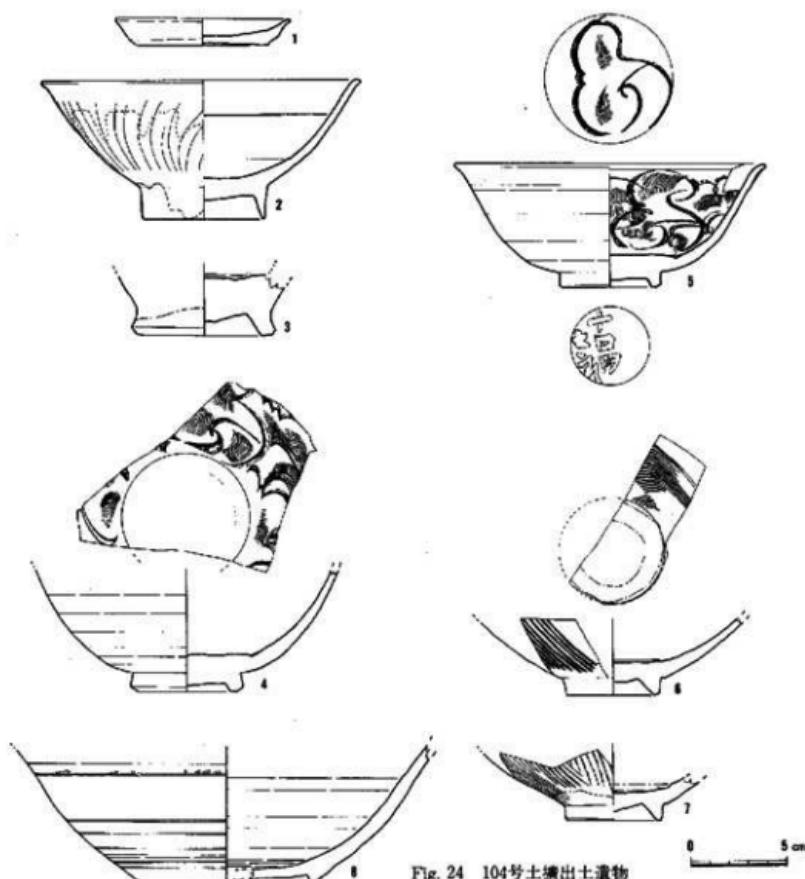


Fig. 24 104号土壌出土遺物

遺物が出土しているが多くは上半に集中する。土師皿類は小破片が300余点見られるが、計測可能なものは少なく、杯で口径は12~13cm、底径9~9.5cm、器高2.1~2.3cmのもの3点、皿では口径9cm、底径6.5~7cm、器高0.9cmのもの2点が計測した。いずれも糸切り底である。図示した遺物は、1が黒釉天目碗である。削り出した低い高台を作り、高台内の削りは浅い。見込みと体部下半には黒色釉が厚く溜っているが口縁端部は薄く、茶色を呈している。2は白磁碗で、逆台形の高台を作り出し、見込みの釉を輪状に掻き取っている。線描きの幅広い蓮弁をもつ龍泉窯青磁も見られることから、時期的には14世紀半ば頃であろう。性格は廃棄物処理用の

土壌であろうか。

104号土壙 (Fig.23・24 PL.12・36) C-I-b区上部検出遺構である。長軸1.85m、短軸1.7mの不整円形をなす。壁はほぼ直に近く、床面近くで丸味をもち、深さ0.95mを計る。覆土は大きく2層に分れるが、上下ともに焼土及び炭化物を含んでおり、遺物も全体的に混在する。熱破碎を受けた角礫や、焼土塊、木炭を大量に含んでいることから、火災等の焼け跡整理用の土壙かもしれない。141号土壙を切る。土師皿類は小破片が殆どであるが、1は口径9cm、底径6.8cm、器高1.4cmの皿である。2は白磁碗で、高台は細く高い。口縁端を水平に外に引き出す。体部外面に線描きの縦線文を施す。3は白磁四耳壺または水注の底部である。底作りは分厚いが、高台は下方に開き、疊付には砂目が残る。4、5は内面体部へラおよび櫛様施文具で水波文を描く龍泉麻青磁碗である。4は見込は無文で火熱を受けている。5は見込に花文が描かれ、外底面の露部には「十口内 七郎(カ)」の墨書が見られる。6、7は体部外面に放射状の櫛描文を施すもので、いずれも内底面の釉を輪状に搔きとり重ね焼きの痕跡を残す。茶味の強い釉が体部下間にまで施され、体部は直線的に外に開く。8は陶器鉢で基筒底をなし、体部外面中位に重ね焼きの白い耐火土が付着している。薄い釉がかかるが、体部外面上半は黄オリーブの発色を、以外は灰色がかった発色をしている。遺物は混在するが、12世紀半ばから後半の遺構であろう。

105号土壙 (Fig.25 PL.12-2) C-I-b区上部検出遺構である。長軸1.7m、短軸1.1mの不整長円形をなし、北壁は緩やかで北壁は急な傾斜をなす。深さ0.65mを計る。覆土のうち上部の黒色粘質土中に礫、土師皿等が集中して出土している。土師皿類は糸切底で、底径6~7cm、口径8~9cm、器高1cm強と、底径7~8cm、口径10~12cm、器高2.4cmのタイプが多い。計測不可の小破片は300点を越し、これらの中には時代的な混在もある。磁器、陶器も含むがいずれも小破片である。13世紀末から14世紀前半の遺構で、廃棄物処理土壙であろう。

106号土壙 C-I-b区上部検出遺構である。141号土壙を切る。長軸0.7m、短軸0.36mの長円形をなし浅い皿状の掘方をもつ。遺物量は少なく、糸切土師皿破片37点と須恵器3点、陶器3点など小破片が出土した程度である。14世紀以降の廃棄物処理用土壙であろう。

107号土壙 C-I-a区上部検出遺構である。97号土壙石組下で検出されそれより古い。長軸0.95m、短軸0.87mのはば正円形をなし、窪み状の浅い土壙である。遺物は少なく、土師皿類小破片と陶器片少量が出土したにすぎない。性格は不明である。

108号土壙 C-I-a区上部検出遺構である。北端を109号土壙に切られる。B区との区域に接しその掘方、規模は明確でなく長軸2m前後、幅1m全前後である。浅い窪み状である。遺物も少量で土師皿小片38点、白磁碗9点、皿1点、陶器7点、天目碗1点などいずれも小破片ばかりである。時期は14世紀以降で性格は不明である。

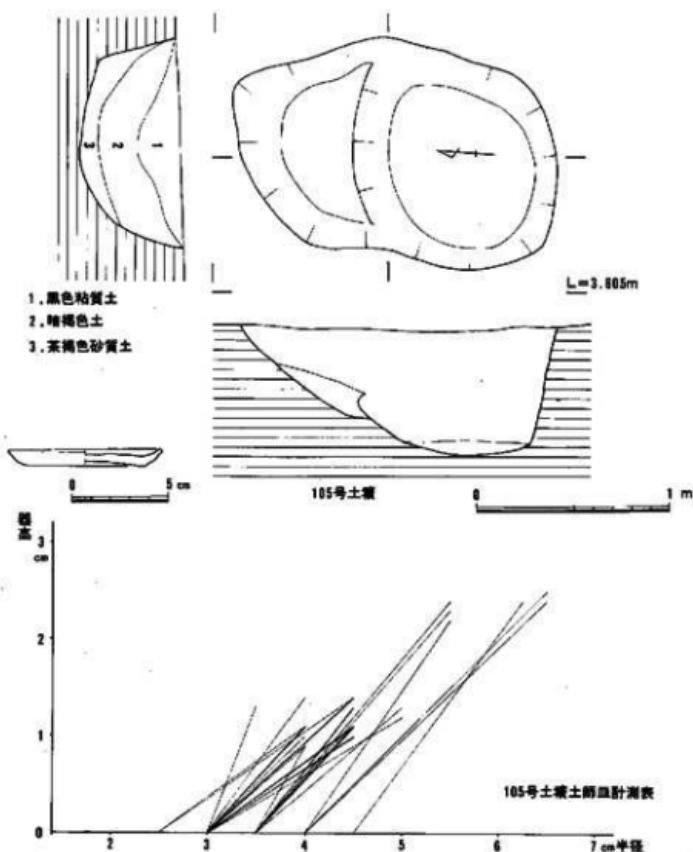


Fig. 25 105号土壌と105号土壌出土遺物

105号土壌 (Fig. 26) C-II-a区上部検出遺構である。108号土壌とB区で検出された16世紀末～17世紀初頭の6号溝を切る。B区との区境に接するため掘方全体は明確でないが、ほぼ1辺2m前後の不整方形をなすものと思われる。遺構は近世初頭頃に掘り込まれたものであるが、中世の遺構と地山甕棺墓まで掘り込んでいるもので、小児甕棺破片7点をはじめ、白磁30点、青磁19点、陶器31点小破片も含め土師皿211点など多量の遺物が、近世染付や瓦片とともに混在して出土している。図示した遺物は、1が見込に描き文をもつ青磁皿、2が見込の輪を円形に掻き取る白磁碗である。17世紀代の廐棄物処理用の土壌である。

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

30

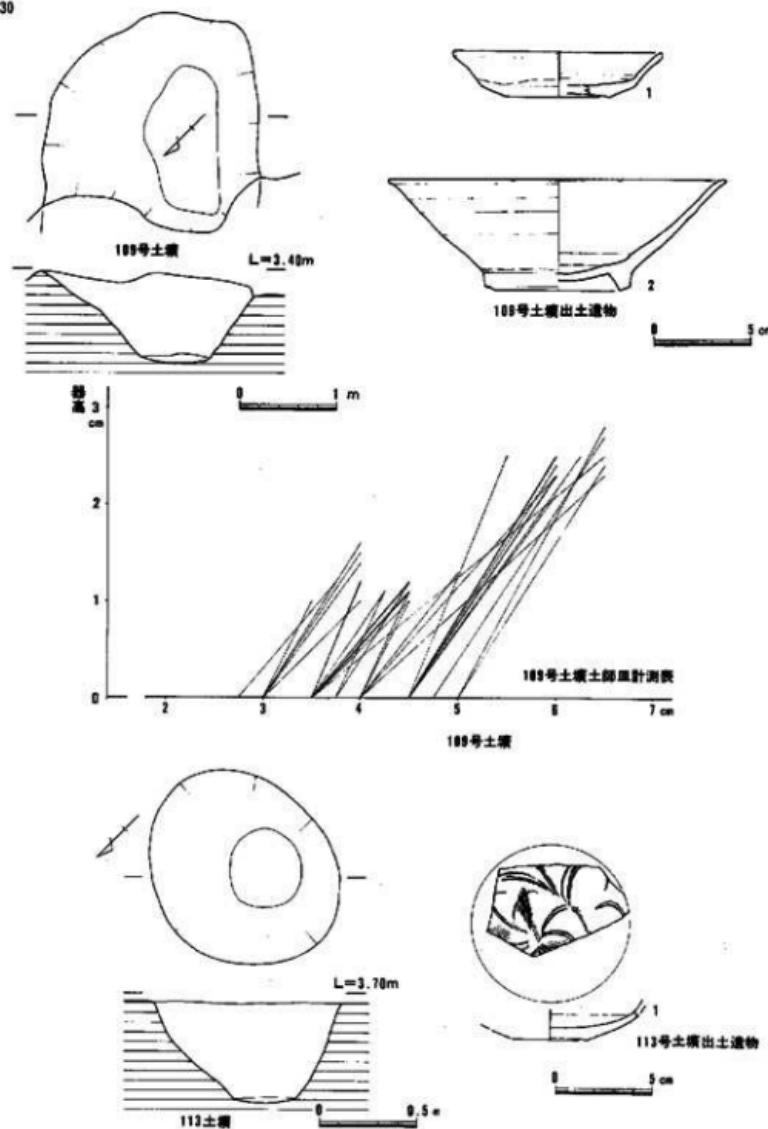


Fig. 26 109号, 113号土壤と109号, 113号七塙出土遺物

110号土壌 C-I-b区上部検出遺構である。104号土壙を切る。長軸1.05m、短軸0.8mの長円を呈す。深さ0.2m程の浅い掘方で上は既に削られている、遺物は少なく、近世土器質容器片や瓦片とともに、少量の陶器、須恵器が混じる。江戸時代の廃棄物処理用土壙である。

111号土壙 (Fig.20) C-III-a区上部検出遺構である。98号土壙に切られる。また大半が土留壁柱に切られ全体形は不明である。深さ0.24mを計る。黒褐色の弱粘質土の覆土中に少量の遺物が含まれている。遺物はいずれも小破片で、文字は不明であるが墨書のある白磁、口ハゲ白磁皿、青磁碗3点、陶器9点などがある。また床面直上に馬齒1点も見られた。

112号土壙 C-III-d区上部検出遺構である。191号土壙直上に當まれる。0.9×0.7m程の長円形の掘方をもつ。上部は削られ、浅い皿状を呈す。覆土は褐色土を少量含む黑色土で遺物は出土していない。時期、性格ともに不明である。

113号土壙 (Fig.26) C-III-d区で検出された。1.1×0.9m程の卵形の平面形をなす。深さは0.5mを計り、北壁が緩やかで南壁が急な傾斜をもつ、覆土は粘質を帯びた淡黒褐色土で遺物量は少ない。土器皿小破片12点、白磁碗破片3点、須恵器破片2点、陶器破片1点、青磁皿1点などである。1は内底にヘラと櫛による割花文をもつ龍泉窯青磁皿である。年代、性格ともに明確でない。

114号土壙 C-III-c区上部検出遺構である。169号土壙の上面に當まれ、1.5×0.9m程の規模をもつ。深さ10cm足らずの浅い皿状の窪みで遺物も少なく、時期、性格ともに明確でない。

115号土壙 C-III-c区上部検出遺構である。169号土壙の上面に當まれている。土留壁柱により切られており、全体は不明である。深さも20cmで浅い。出土遺物も土器皿類破片20余点と白磁、青磁碗各1点、近世瓦片4点と少ない。近世の廃棄物処理用土壙である。

116号土壙 (Fig.27 PI.13-1, 36) C-III-b・c区上部検出遺構である。169号土壙上に當まれ、117号土壙に切られる、一端を土留壁柱で切られ全体形は不明であるが、幅1.5m、長さ2.5m以上の大きな掘方である。現在深さ0.3mを計り浅い。埋土は上半が黒褐色粘質砂質土、下半が黒茶褐色砂質土であり、遺物は砾とともに上半に多くまとまっている、出土遺物は多く、図示した遺物は1、2が白磁碗でいずれも見込みを輪状に搔きとるが、口縁端部の作りに明確な違いがあり、それぞれVI-1類、IX類に属する。3は外表面部に放射状の櫛描を、内面体部にヘラと櫛描の文様を施す同安窯系青磁である。4は黒釉天目碗の底部破片で、削り出して高台を作り高台内の抉りは浅い。5は陶器皿で口縁部が丸く肥厚し、外底部をアーチ状に捏ませている。6は褐釉陶器四耳壺で、陶器C群に属する、体部上半から内側に直に伸び頭部を作る。口縁端は外に肥厚し、頭部と胴部との境に沈線をめぐらす。また胴部上半に波状の沈線を描いている。この他白磁碗48点、皿12点、青磁碗3点、皿1点、陶器42点、土器皿類が主なもので、土器皿はいずれも糸切りで、杯には口径15~16cm、器高2.5cm前後のものが目立ち、

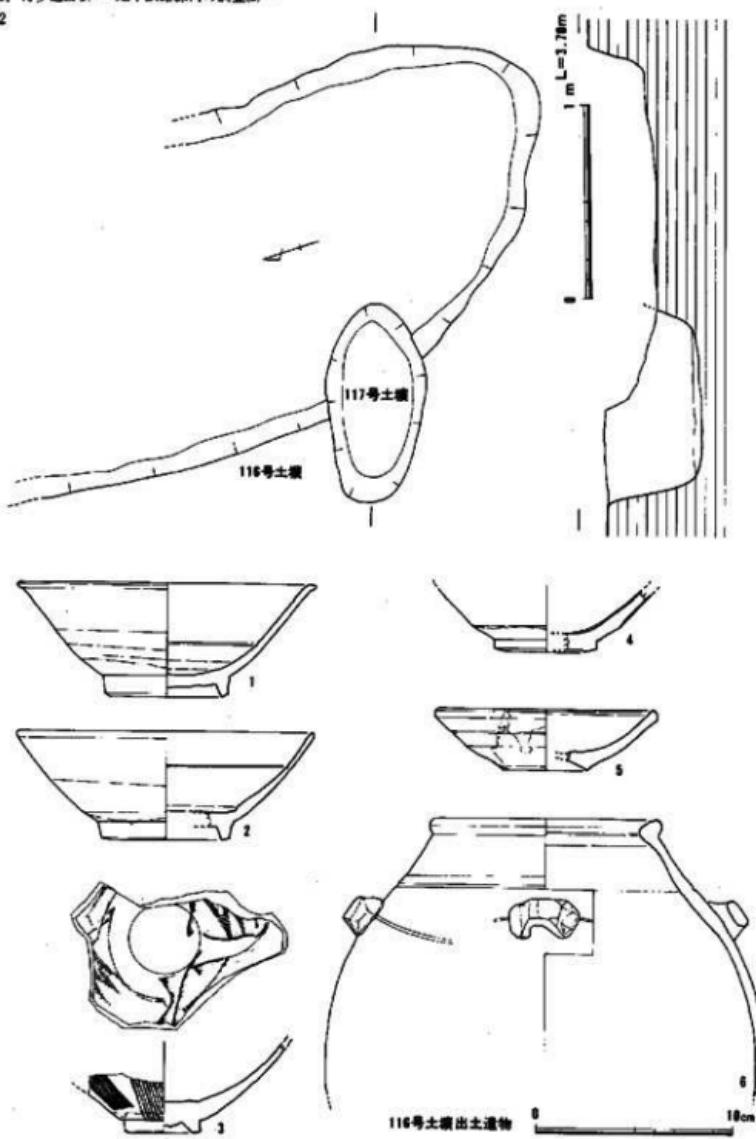


Fig. 27 116号, 117号土壙と116号土壙出土遺物

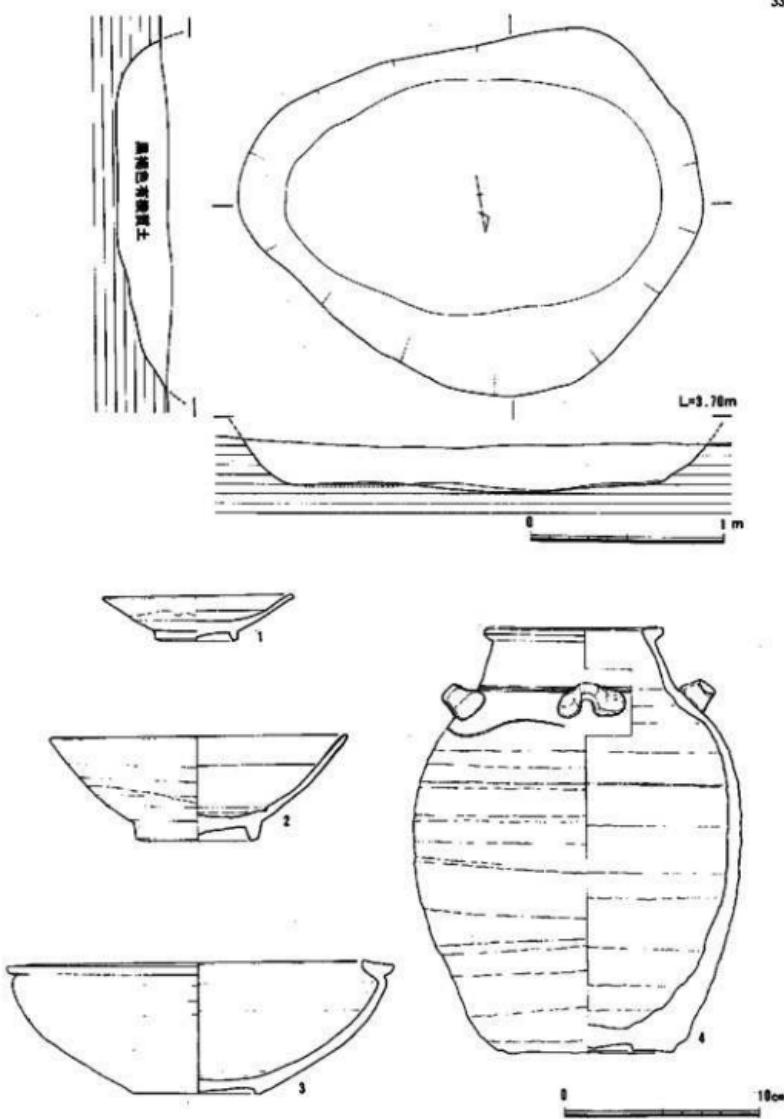


Fig. 28 118号土壙と118号土壙出土遺物

小皿は口径 9 cm、器高 1 cm 強のものが多い。この他、青白磁碗 2 点、皿 1 点、高麗青磁輪高台碗 1 点などの破片も出土している。12世紀後半代の廃棄物処理用土壙であろう。

117号土壙 (Fig.27 PL.13-1・2) C-III-b 区上部検出遺構である。116号土壙を切る。長軸 1.0m、短軸 0.5m の長円形をなす。深さ 0.53m を計る。拳大の礫の混じて遺物が出ているが量は多くない。白磁碗 3 点、陶器 2 点、須恵器 1 点、瓦 7 点などである。土師皿は小破片まで含めても 23 点で、計測可能なものは小皿で口径 7.6~9.6cm、器高 1 cm 強 3 点でまとまりがない。廃棄物処理用土壙でおそらく 13 世紀に営まれたものであろう。

118号土壙 (Fig.28 PL.14-1・2, 36) C-III-c 区上部検出遺構である。169号土壙上に営まれる。長軸 2.4m、短軸 1.85m、深さ 0.25m の土壙で、平面形不整円形を呈し断面は浅い皿状をなす。覆土は黒褐色の炭化物を含む有機質砂質土で、礫や遺物が散在する。遺物は白磁碗 20 点、皿 3 点、陶器 15 点、奈良時代土師器 5 点、須恵器 3 点などがある。青磁は龍泉窯割花文碗が 1 点、高麗青磁破片 1 点で少なくいずれも小破片である。土師皿類も小破片まで含めて 48 点と少なく、計測可能なものは杯が口径 15~16cm、器高 2.3~2.8cm の大形品 3 点、小皿は口径 8~9 cm、器高 1 cm が 2 点でいずれも糸切りである。図示した遺物は、1 が高台付白磁皿 II 類であるが通例の見込輪状掻き取りと違い全面施釉されている。重ね焼きの最上部に置かれたものであろう。2 は白磁碗 IX 類で見込を輪状に掻き取る。3 は陶器 B 群平鉢で口縁部で内溝し端部を外に折り曲げ縛を作る。口縁内側に目跡が残る。4 は陶器 B 群四耳壺で縛縛が施されている。全体的に焼けひずみ、体部下半には火膨れがみられるなど無雑作な作りである。12 世紀後半代の廃棄物処理用土壙である。

119号土壙 C-III-b 区の 116、117 号土壙の下で検出された。1.1×0.5m 程の長円形の掘方で深さ 0.2 cm を計る。覆土は茶褐色砂質土であるが遺物は含まれない。12 世紀半ば以前の遺構であるが性格は不明である。

120号土壙 (Fig.29 PL.15-1) C-III-b 区上部検出遺構である。方形鏡、刀子などが出土した 164 号土壙を切る。長軸 2.45m、短軸 1.7m の長円形をなし、深さ 0.3m を計る。断面形は浅い皿状をなす。覆土は暗灰褐色土で、焼土、炭化物等を多く含む。出土遺物のうち土師皿類は小破片まで含め 132 点を数えるが計測可能なものは 1 点で、口径 8 cm、器高 1 cm の糸切り小皿である。白磁 27 点、青磁 7 点、陶器 16 点もある。銅鏡 1 枚も出土しているが鏡がひどく判読不能である。口ハゲ白磁皿が含まれており、14 世紀以降の廃棄物処理用土壙であろう。

121号土壙 C-III-c 区上部検出遺構である。169号土壙上に営まれる。長軸 1.1m、短軸 0.9 m の長円形の掘方であるが浅く、出土遺物はいずれも小破片で土師皿 10 点、白磁碗 1 点、青磁碗 1 点、陶器 3 点にすぎない。時期性格ともに不明である。

122号土壙 (Fig.30 PL.15-2, 36・37) C-II-b 区上部検出遺構である。7 号溝上

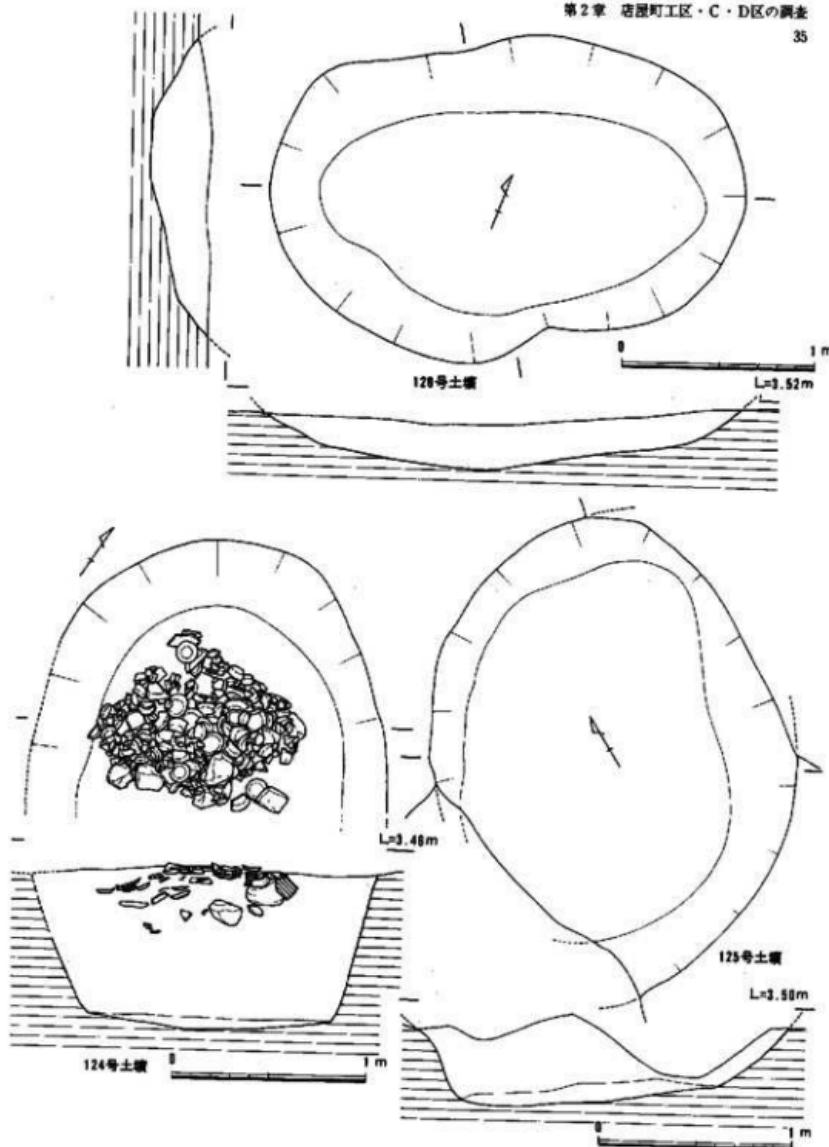
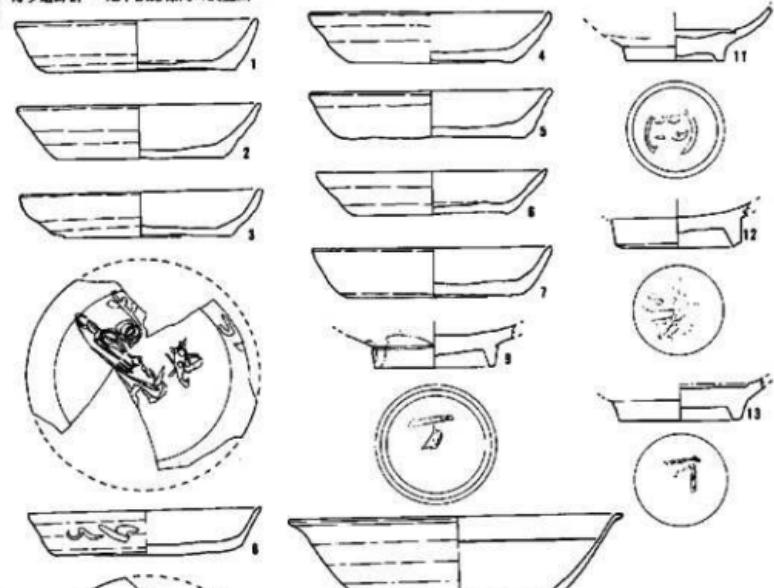


Fig. 29 120号, 124号, 125号土壤

II. 博多遺跡群 - 地下鉄路線内の調査(2)-

36



器高
5 cm

4

3

2

1

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

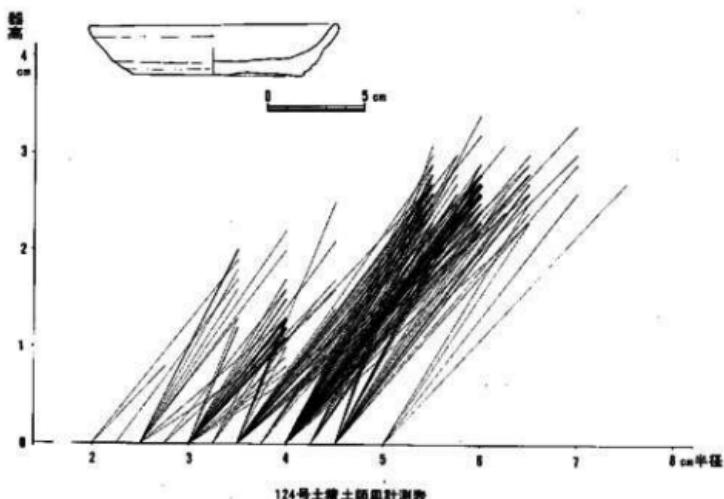


Fig. 31 124号土壇出土遺物

面の遺構である。中間杭によって切られ、全体形は不明である。掘方自体も明確でなく、7号溝埋没時の埴みである可能性も強い。出土遺物は多く全てを紹介することは出来ない。図示した遺物は1~8が土師器杯でいずれも口径12cm前後、器高2.2cm前後のもので糸切底をなす。8は内外底と体部内外に墨書きを残したものである。体部内外のものについては仮名と思われるが、内外底のものは絵か文字か判明しない。土師皿計測表では杯で口径12cm、器高2.5cmと小皿で口径8cm、器高1cm強にピークがあり、また口径7.5cm、器高1.5cm前後の小皿も見られる。いずれも糸切底である。これは14世紀前半代の土師皿の傾向に一致しており、A・B区で検出された1~2号溝上面土師皿の計測値とも一致する。9~13は白磁碗で、10の白磁碗VI-1類以外の外底面に墨書きがある。9は「丁」、11は判読不能、12は「五十口」または「五十内」、13は「万」(丁綱の一部が緑色した可能性もある。)である。

123号土壇 C-II-c 区上部検出遺構である。196、197号土壇の上面に営まれているい。2.3×1mの不整長方形をなす。掘方は明確でない。遺物も多くない。時期、性格ともに明確にしがたい。

124号土壇 (Fig.29・31 Pl.16-1・2) C-II-a 区で検出された。一部B区にかかり全体形は明確でないが、長軸1.4m以上、短軸1.7mの長円形をなすものと思われる。深さは0.8mを計り壁は急斜面をなす。覆土は褐色砂質であるが、一部炭化物、小石、土師皿細片、粘土質白色土粒が混じる。この覆土直上の1.15m×0.9mの範囲に土師皿がぎっしり詰まっている。

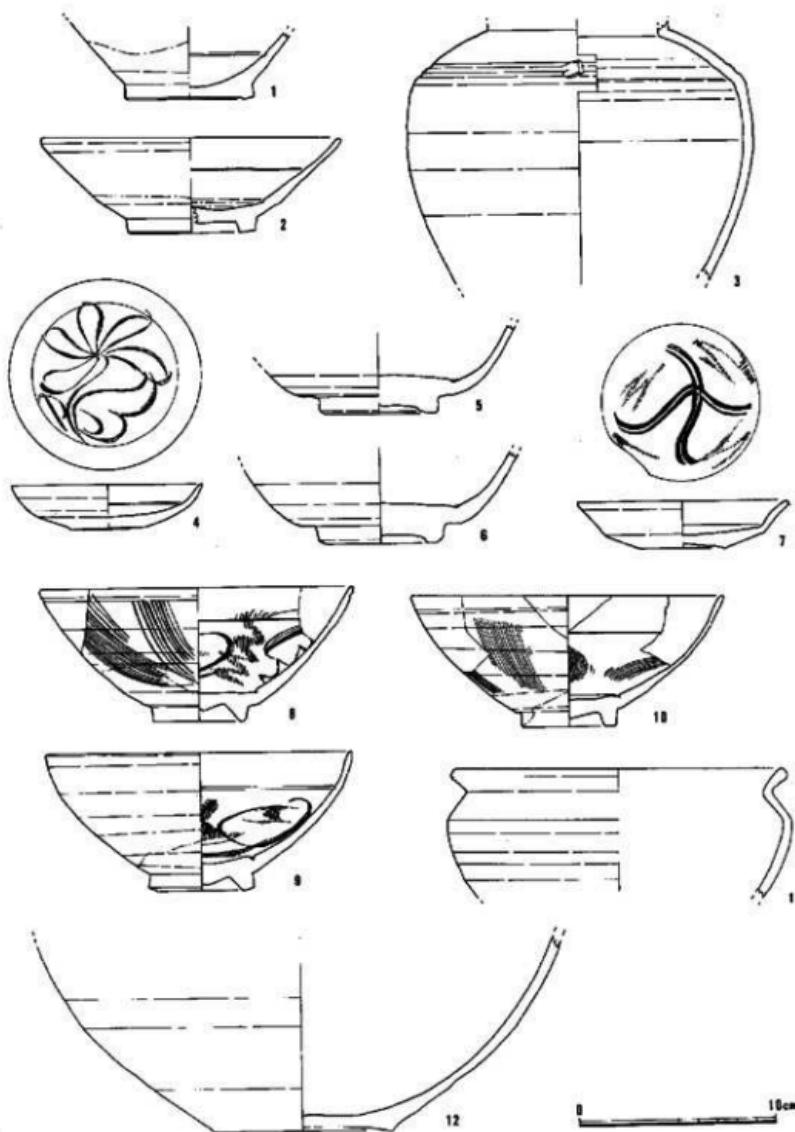


Fig. 32 125号土壤出土遺物

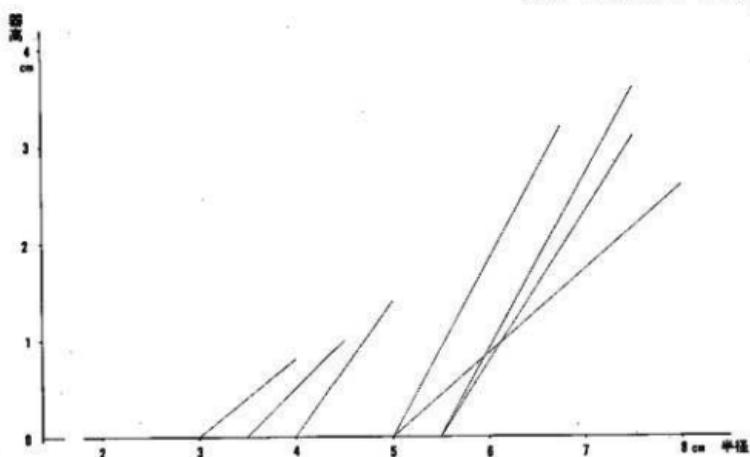


Fig. 33 125号土壌出土遺物(2)

た。その直下に径20cm程の礫が10数個置かれていた。土師皿は完形品も多く一時に置かれたものである。土師皿は計測可能なものだけで、210点にのぼり計測値はグラフに示すとおりである。この傾向は先に述べた122号土壌と同じであり、14世紀前半代の特徴を示す。土師皿以外の遺物はそれ程多くなく、白磁18点、青磁6点、陶器15点、天目碗1点などがあり、国産遺物では、斐棺破片6点、古墳時代土師器12点、石錘1点などがあった。土師皿集積下に礫が置かれていた以外目立った下部構造も見られず、遺構自体の性格は不明といわざるを得ない。

125号土壌 (Fig.29・32・33) C-II-b区で検出された。7号溝に接し、186号土壌を切る。長軸2.5m、短軸1.5mの長円形をなす。深さ0.45mで断面深皿状をなす。覆土は黒茶褐色砂質土である。土師皿の量は多くなく計測可能なものはグラフに示すとおり。杯で口径14cm、器高3cmに、小皿で口径9cm前後、器高1cm前後にまとまりがある。図示した遺物は1、2が白磁碗、3が同四耳壺で、4が白磁皿、5、6が龍泉窯青磁碗、7が同安窯系青磁皿、8～10が同碗である。11は陶器準A群の耳付壺の口縁部破片、12は陶器C群鉢の底部である。13世紀代の廐棄物処理用土壌であろう。

126号土壌 (Fig.34 PL.37) C-II-c区上部検出遺構である。197号土壌に営まれている。1.3m×0.6mの不整長方形であるが掘方は明確でない。出土遺物は図示したものが、1、2は龍泉窯青磁皿、3が青白磁小壺である。3は体部上半に唐草文、下半に草花文の浮文をもち、型作りである。土師皿も少なく計測可能なものはない。時期性格ともに明確でない。

127号土壌 C-II-c区上部検出遺構である。浅い窪みで明確な遺構ではなく、出土遺物も全くない。

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

40

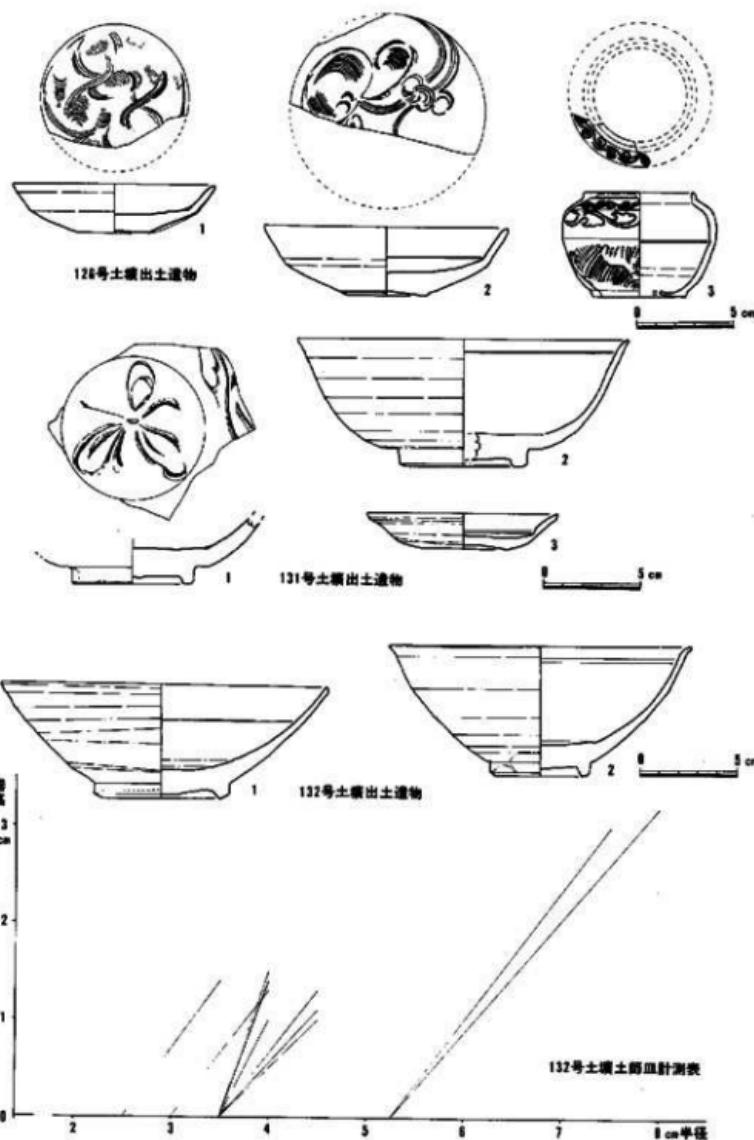


Fig. 34 126号, 131号, 132号土壌出土遺物

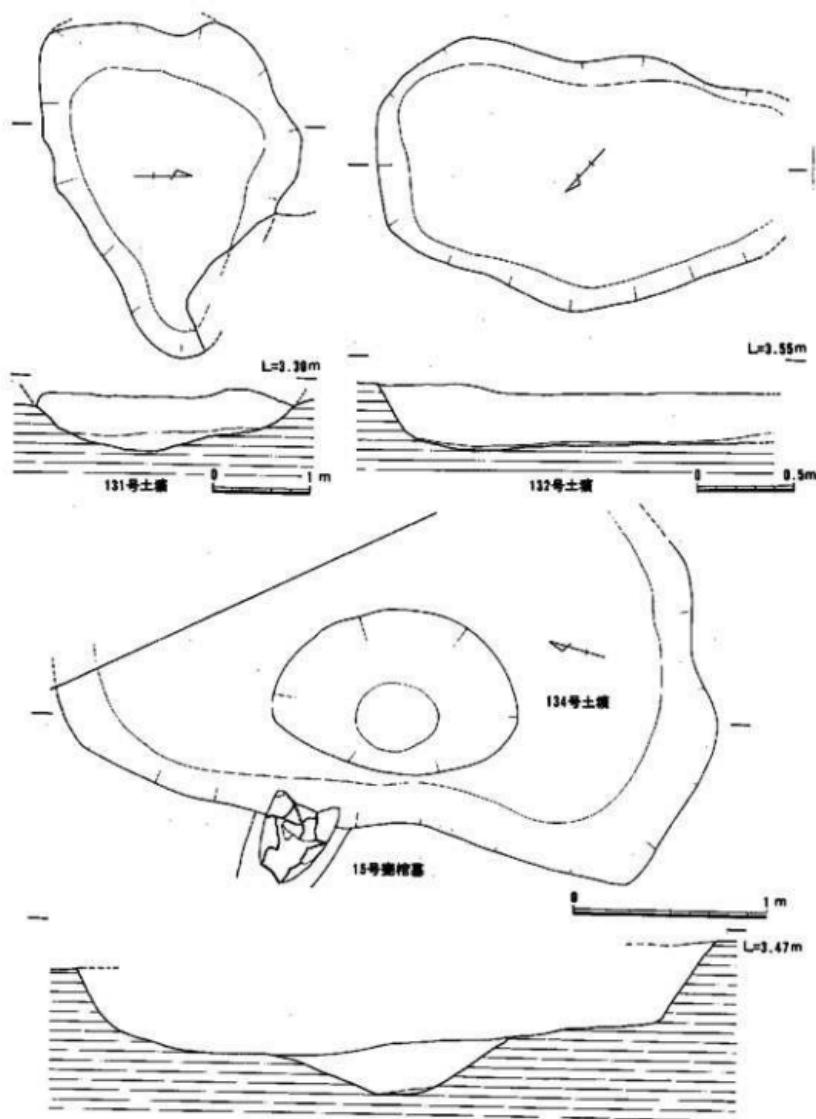


Fig. 35 131号, 132号, 134号土壌

128号土壙 C-III-d 区検出遺構である。北端を土留壁柱で切られ全体形は不明である。遺物は出土しておらず時期不明であるが、102号土壙の下にある。溝の可能性もある。

129号土壙 C-III-d 区検出遺構である。径0.9mの円形をなす。深さ0.42mを計る。遺物は含まれておらず、時期、性格ともに不明である。

130号土壙 C-II-b 区上部検出遺構である。浅い窪みで遺構とは考えにくい。遺物は出土していない。

131号土壙 (Fig.34・35) C-II-d 区検出遺構である。長軸3.4m、短軸2.5mの不整形をなお大きな掘方で、一部近代井戸に切られる。近世の廃棄物処理土壙と思われ中世遺物が多く混入する。1、2は龍泉窯青磁碗、3は同安窯系青磁皿である。

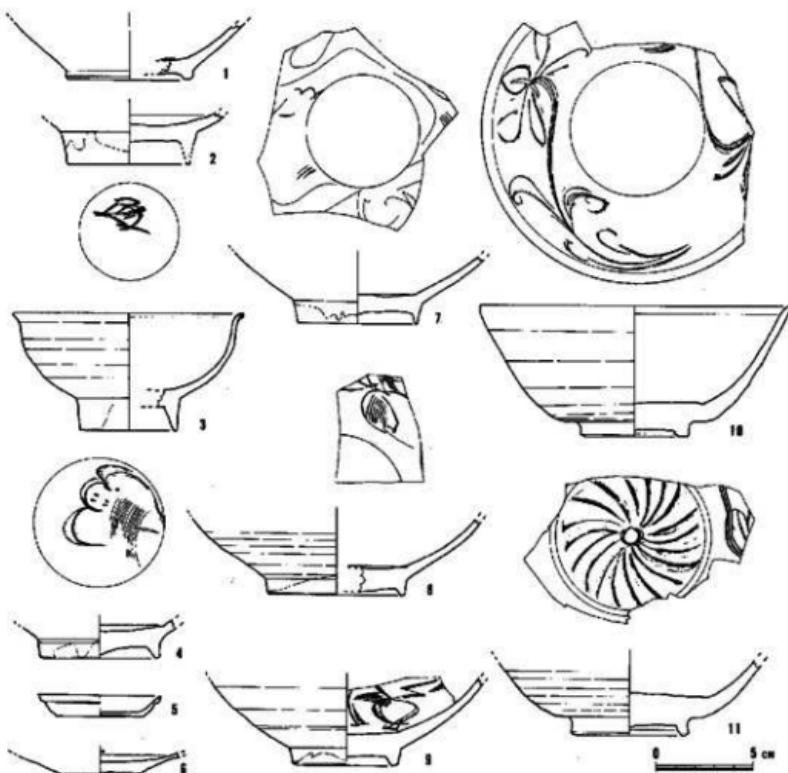


Fig. 36 136号土壙出土遺物(1)

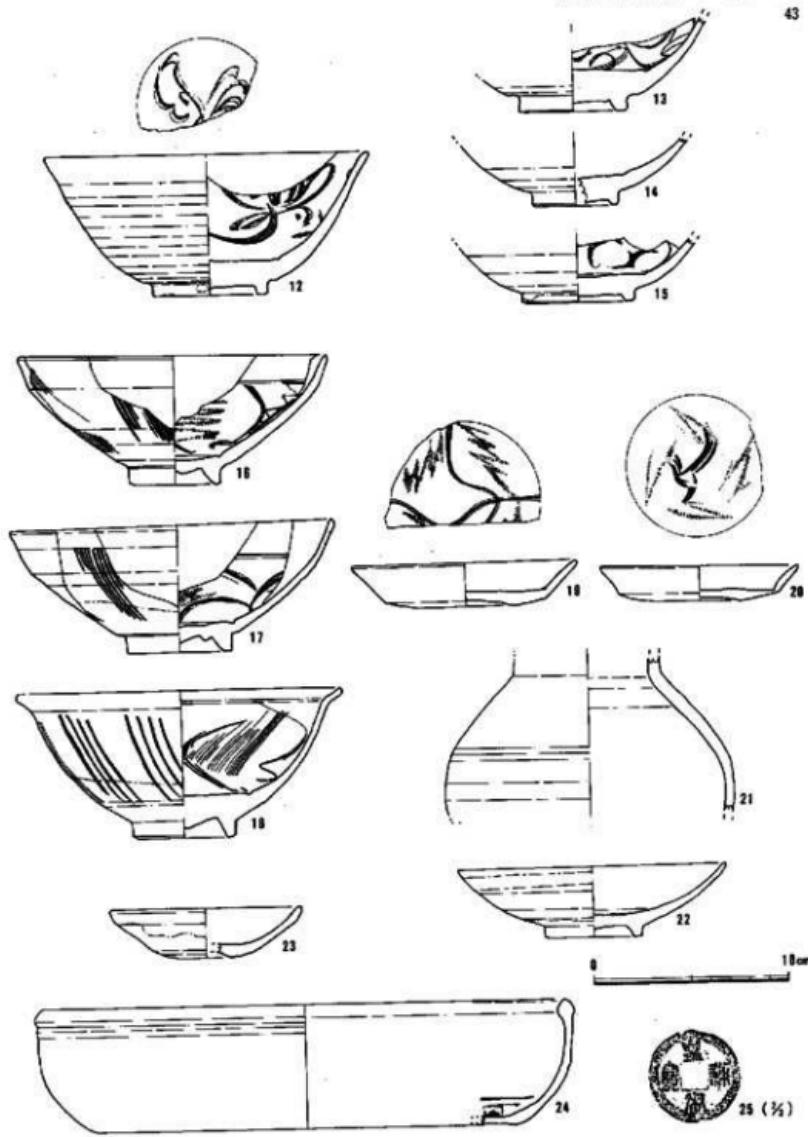


Fig. 37 134号土塹出土遺物(2)

132号土壙 (Fig.34・35 PL.17-1, 37) C-II-e区上部検出遺構である。171(194)号土壙を切る。端部を中間杭布掘り攪乱で切られている。長軸2m強、短軸1.3mの平形面長方形の掘方を持つ。深さ0.35mを計る。覆土は黒褐色砂質土で焼骨片や木炭を多量に含む。遺物は数個の人頭大の罐とともに廃棄された状況を示す。量的には多くなく、白磁碗12点、皿1点、龍泉窯青磁碗2点、同安窯系青磁碗5点、陶器7点や國产品として須恵器片6点、中世瓦片6点などがある。土師皿類は小破片まで含めて120点程あるが、計測可能なものは、図示したとおり、杯では口径15~16cm、器高3cmの大型品が目立ち、小皿では口径8~9cm、器高1cm強に集中する。図示した遺物は1が白磁碗IX類、2も白磁碗であるが、龍泉青磁風の底作りをなし、体部がやや丸味を持ち、口縁端を外に引き出す珍しいタイプである。このほか、砂岩礫に線刻の装飾を施したものもある。12世紀後半から13世紀代にかけての廃棄物処理土壙である。

133号土壙 C-I-d区上部検出遺構である。14世紀前半に廃絶された7号溝上に作られている。1.4×0.45mの長方形をなすが、掘方自体はそれ程明確でない。出土遺物も少量で土師皿小破片4点、白磁碗4点、口ハゲを含む皿2点、青磁碗2点などがある。14世紀半ば以降の廃棄物処理土壙であろうか。

134号土壙 (Fig.35~37 PL.17-2, 37) C-II-a区検出遺構である。15号甕棺墓下室の大半を壊している。長軸3.5m、短軸1.5mの大きな土壙で、平面形は長円形をなす。長軸端は傾斜が緩く、短軸壁の傾斜が急である。出土遺物は多量で図示した遺物について述べる。1は越州窯青磁碗で輪状高台をもつ。外底内と疊付は施釉されない。見込に数個の目跡が輪状に残る。2、3、4、7、8は白磁碗で、2の外底内には花押と思われる墨書きが残されてる。3は高い高台をもち、丸味をもつ体部で、中位で直に立ち上がり口縁を外にひねり出す。O-III類に属す。8は内面体部に櫛描き文をもつ。5、6は青白磁の蓋と皿である。5は内面のみ青白釉が施される。9~15は龍泉窯青磁碗である。いずれも外面体部は無文で、14を除き内面体部および見込にヘラ描きと櫛描きの割花文を施す。16、17は外面体部に櫛描き文を施し、内面体部にヘラおよび櫛描文をもつ同安窯系青磁碗である。体部内面に一条の沈線を巡らす。18は分厚い底作りで、口縁部を外に屈折させ、外面体部に4本組の粗い沈線を放射状に刻み、体部内面に櫛描文を施している。粗雑な作りで胎も粗い。19、20は同安窯系青磁皿で見込に櫛描雷光文を施す。21は施釉陶器壺22は同じく皿で、見込の釉を輪状に搔きとする。唐津系の近世初期陶器である。23は陶器皿、24は口縁端を丸く肥厚させる黄釉鐵絵盤である。土師皿は小片まで含めて200点近くあるが、計測可能なものは少なく20点しかない。法量にかなりバラつきがある。このほか甕棺破片が21点、須恵器、瓦器碗類、瓦などの小破片がそれぞれ4点、10点、47点出土している。近世初期の遺物が混じるが量的には微かで混入の可能性が強い。時期は大半の遺物から13世紀代と思われ、廃棄物処理用土壙である。

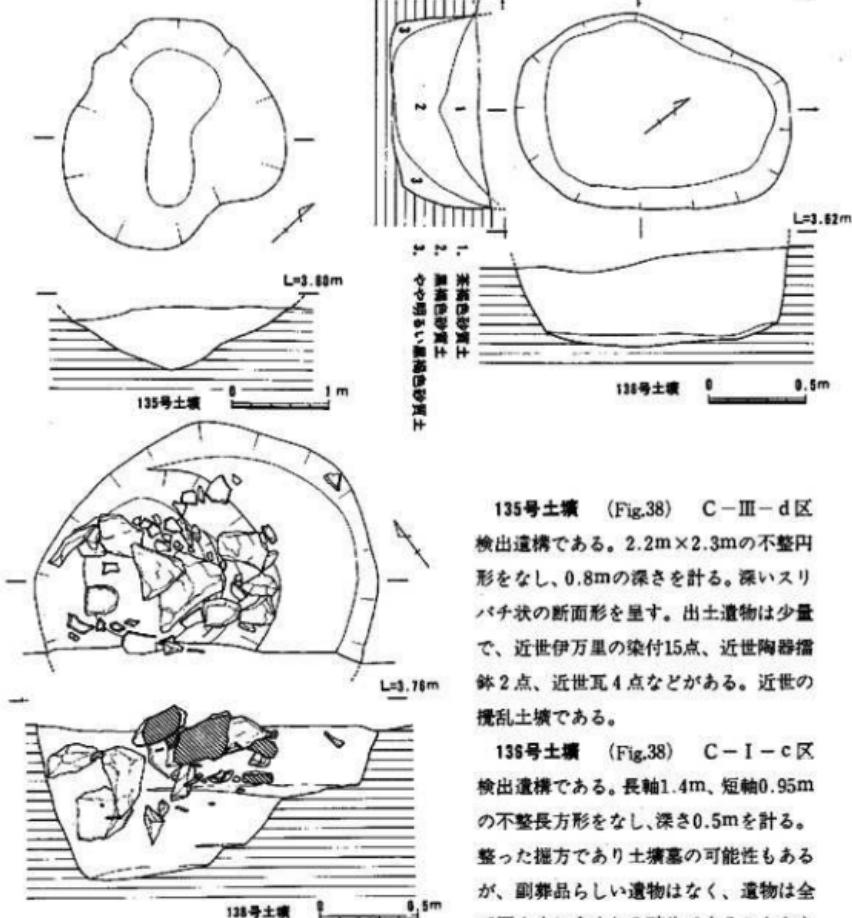


Fig. 38 135号, 136号, 138号土壤

は破片 2 点で時期は明確にしがたいが、おそらく 15世紀代に営まれたものと考える。

137号土壤 C-III-b 区検出遺構である。土留壁柱に切られ全体形は不明。小さな掘方である。遺物は破片が少量で、時期、性格ともに明確でない。

138号土壤 (Fig.38 PL.18-1) C-I-d 区検出遺構で、一部を土留壁柱に切られるが、径 1.75m のほぼ円形をなすもので深さ 0.8m を計り、二段のテラスをもつ。覆土中には大き

135号土壤 (Fig.38) C-III-d 区
検出遺構である。2.2m×2.3mの不整円形をなし、0.8mの深さを計る。深いスリバチ状の断面形を呈す。出土遺物は少量で、近世伊万里の染付 15点、近世陶器擂鉢 2 点、近世瓦 4 点などがある。近世の搅乱土壌である。

136号土壤 (Fig.38) C-I-c 区
検出遺構である。長軸 1.4m、短軸 0.95m の不整長方形をなし、深さ 0.5m を計る。整った掘方であり土壙墓の可能性もあるが、副葬品らしい遺物はなく、遺物は全て覆土中に含まれる破片であることから廃棄物処理土壌とも考えられる。土師皿

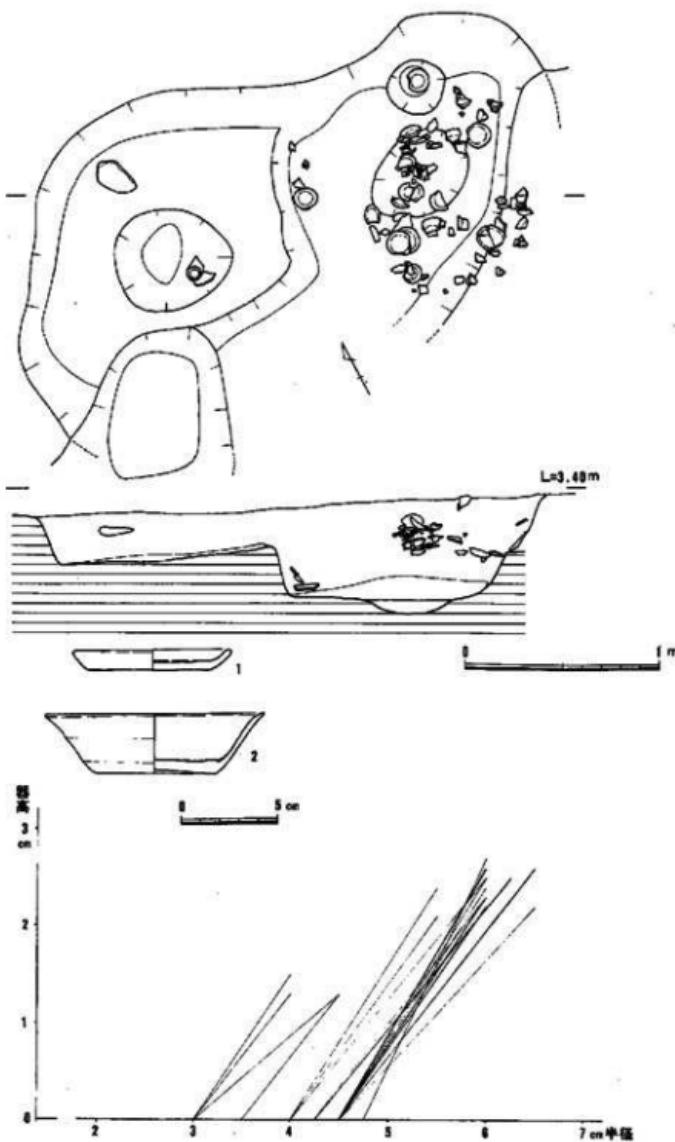


Fig. 39 141号土壤と141号土壠出土遺物

な角礫十数個があり、下から鉄滓等の遺物が出土している。明確な円形掘方を持つことから、廃絶された井戸を廃棄物処理用に充てたものであろうか。土師皿の出土が少なく正確な時期は示しれないが、おそらく12世紀代の所産であろう。

139号土壙 C-I-a区 検出遺構である。140号土壙に切られる。0.9×0.7mのほぼ円形をなし、深さ0.3mを計る。多くの14世紀前半代の土師皿を廃棄するいわゆる土器溜めである。

140号土壙 C-I-a区 上部検出遺構で、139号土壙を切る。径0.5mのピット状の遺構で、遺物は全く認められない。

141号土壙 (Fig.39 PL.18-2) C-I-b区 検出されているが、幾つかの遺構が切り合っており、全体形は不明である。広いテラス部分があり、遺物は一段低い掘方からまとまって出土している。土師皿は糸切りで完形品が多く、計測表に示すとおり、杯は口径12cm、器高2.5cm前後に集中し、小皿は口径8cm前後、器高1cm強である。図示した遺物は、1が土師小皿、2が口ハゲの平底皿である。14世紀前半代の所産であるが、性格は明確でない。

142号土壙 C-I-a区 上部検出遺構である。151号土壙を切る。B区との調査区境にあたり全体形は不明であるが、長軸約4m、短軸約2.5mの大きな掘方である。多量の角礫とともに近世陶磁が出土している。唐津、伊万里などの破片とともに近世瓦、青白磁合子、白磁壺、中國產陶器が混在する。鉄釘、骨片等も混り、近世の廃棄物処理土壙である。

143号土壙 C-I-a区 検出遺構である。茶褐色砂のわずかな窪みに、古墳時代土師器壊片のみが少量出土している。遺存状態が不良で明確でないが、古墳時代の土壙の可能性が強い。

144号土壙 C-I-a区 検出遺構で、143号土壙に接しており、同様に茶褐色砂の浅い落ち込みである。142号土壙に切られ、全体形は不明である。143号土壙と同じく古墳時代の遺構の可能性もあるが、出土遺物がなく明確でない。

145号土壙 (Fig.40-41 PL.38) C-I-c区 検出遺構で、146号土壙に接するが切合関係は明確でない。土留壁柱で一部を切られるが、全体形は径約2.3mの円形をなすものと思われる。深さは現存部分での0.9mを計る。井筒等の内部構造は遺存していないが、粗砂層まで掘り込む大きな掘方であることから、井戸掘方であろうと思われる。土師皿は糸切りで、口径12~13cmと8~9cmに集中する。図示した遺物は1が龍泉窯青磁碗、2が体部下半に段状のくびれを持ち、基筒底をなす陶器壺である。壊片も多数混入しており、おそらく壊片墓を掘り抜いて作ったのである。13世紀後半代と思われる。

146号土壙 (Fig.40-41) C-I-d区 検出遺構である。一部を土留壁柱に切られ全体形は不明である。一段のテラスを持つ掘方で、145号土壙と同じく井戸掘方であろう。土師皿の出土量は少ない。図示した遺物は1が白磁碗VI類、2が同VI類で疊付と見込に目跡を残す。3は同安窯系青磁碗、4は口縁を直立させたのち外に聞く青磁であり例を見ない器形である。5

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

48

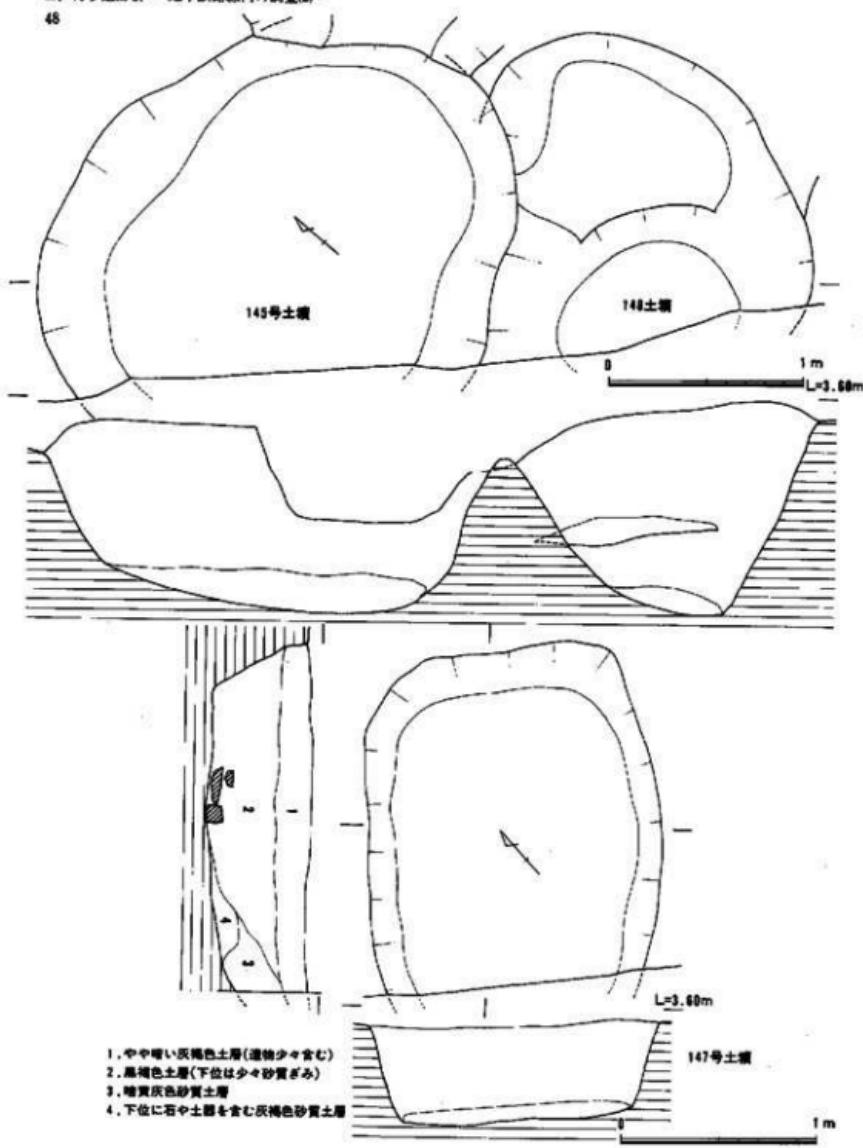


Fig. 40 145号, 146号, 147号土壠

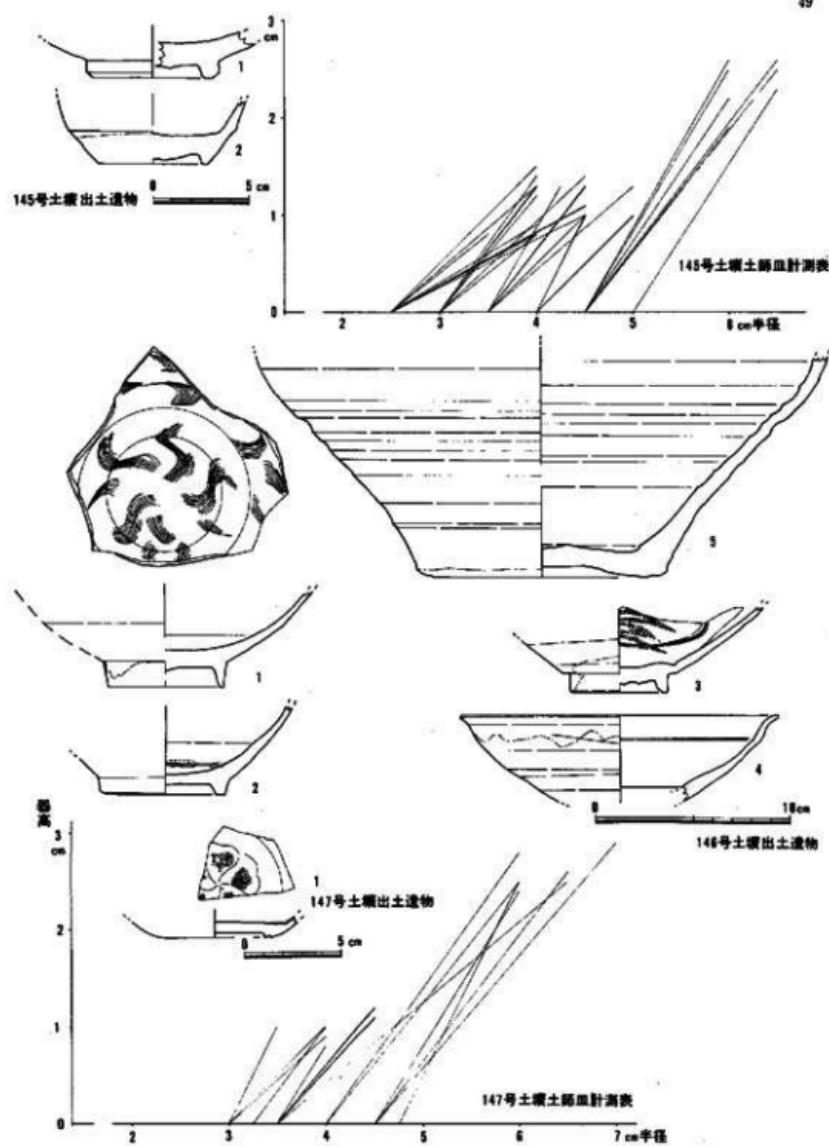


Fig. 41 145号, 146号, 147号土壤出土遺物

は無釉陶器壺で準A群に属する。13世紀代の遺構であろう。

147号土壙 (Fig.40・41、PL.19-1) C-I-e区検出され一端を土留壁柱で切られ全体の規模は不明であるが、長軸が1.7m以上、幅が1.5mの長方形の掘方をもつものと思われる。深さは0.5mを計る。覆土のうち下位に堆積する暗褐色土層を中心に多量の礫を置く。遺物は多量である。図示した遺物は青磁皿で基底をなし、見込に線描きと櫛描きによる花文を施す。外底を除いて砧青磁風に釉が厚くかかる。土師皿類はまとまっており13世紀後半代を示す。明確な掘方で鉄釘5本も出土していることから木棺墓の可能性もあるが、覆土中に多量の陶磁破片を多く含むことから廃棄物処理土壙の可能性もある。いずれかは判じ難い。

148号土壙 C-I-a区上部検出遺構である。暗茶褐色土の落ち込みで掘り方は明確でない。遺物も微量で、時期、性格ともに不明である。

149号土壙 C-I-b区上部検出遺構である。173号土壙より新しい。0.6×0.5mほどの円形で、深さ0.6mを計る。出土遺物は少なく、中国産陶器破片1点だけである。時期、性格ともに不明である。

150号土壙 C-I-b区上部検出遺構である。0.8×0.6mほどの円形の掘り方で、深さ0.3mの深皿形の断面をなす。上位に一边30cmの角礫を置いている。円形土壙墓か礎石かいずれとも判じ難い。遺物はなく時期不明である。

151号土壙 C-I-a区上部検出遺構で、142号土壙を切る。一部土留壁柱で切られている。小礫がぎっしり詰まっている。遺物は微量である。近代建物基礎であろう。

152号土壙 (Fig.42) C-I-b区上部検出遺構である。151号土壙に大半を切られ、全体形は不明である。土師皿類がまとまって出土しており、杯は口径12~13cm、器高2.3cm前後、小皿は口径8~9cm、器高1.2cmに集中する。図示した遺物は、1が須恵器杯蓋、2が土師小皿、3が白磁碗VI-1類である。4は中国製陶器A群のIII類に属するもので、口縁部の内側に蓋の受けを作り出している。黒褐釉を施す。行平または鉢形をなすものと思われる。土師皿以外の遺物は少なく、いわゆる土器溜めの様相を示す。13世紀後半代に位置付けられよう。

153号土壙 (Fig.42 PL.38) C-I-b区検出遺構。154号土壙を切る。一端を土留壁柱に切られ全体形は不明であるが、一辺が1.2m程度の方形又は長方形をなすものと思われる。深さ0.3mで浅い。図示した遺物は、1が土師小皿で糸切底、2が口ハゲのある白磁碗である。外底部と体部下半は施釉されず、高台はややすんぐりで外に開く。土師皿類は破片まで含めて24点出土しているが、計測可能なものは杯6点、小皿6点で、それぞれ口径12~13cmと8~9cm、器高2.2~2.5cmと1.1~1.3cmに集中する。いずれも糸切底である。このほか龍泉窯青磁蓮弁碗も見られた。これらのことからこの遺構は13世紀後半代から14世紀前半代に位置づけられよう。廃棄物処理用土壙であろうか。

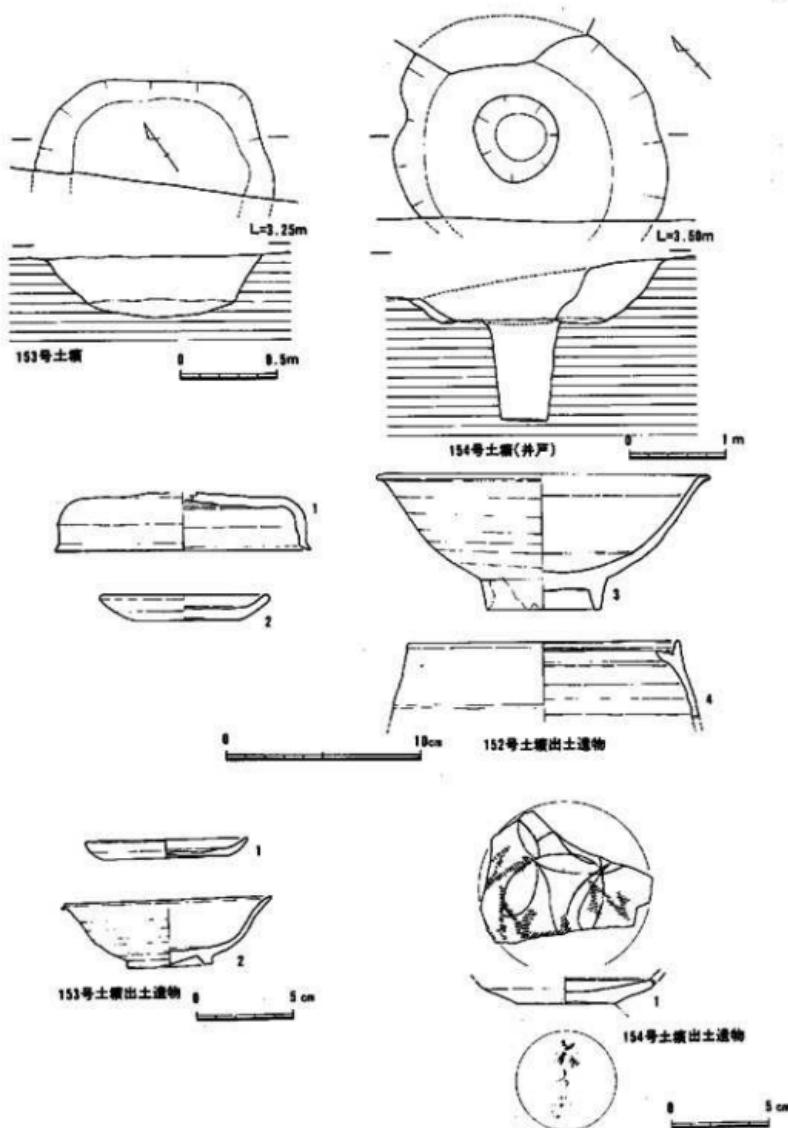


Fig. 42 153号, 154号土壙(井戸)と152号, 153号, 154号土壙出土遺物

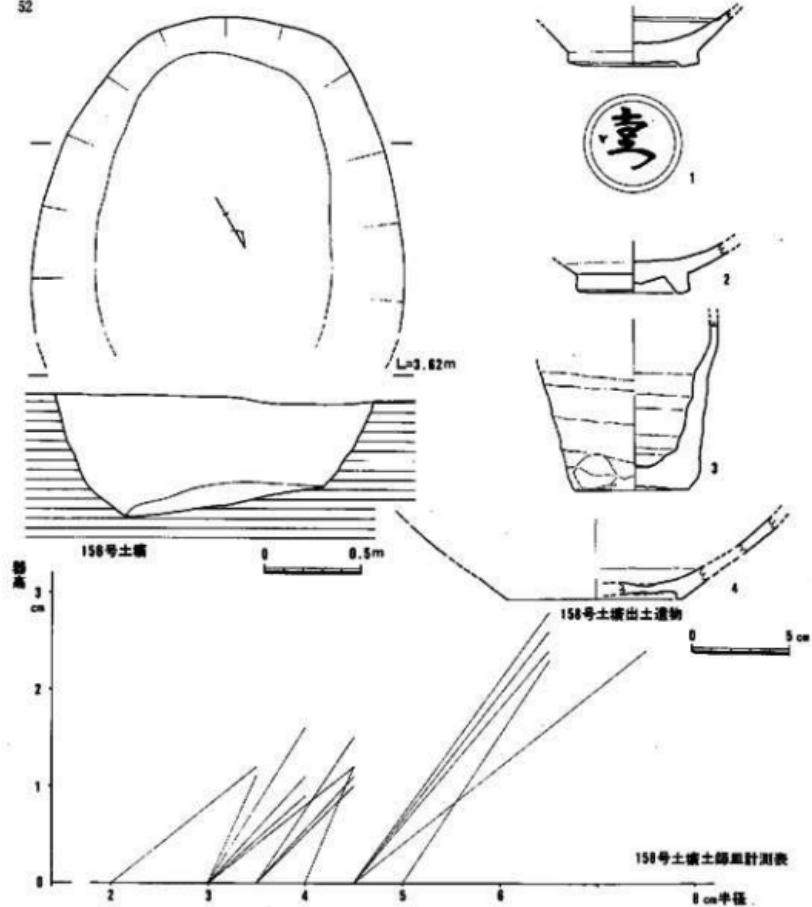


Fig. 43 158号土壙と158号土壙出土遺物

154号土壙 (Fig.42 PL.38) C-I-b区検出遺構である。104号土壙等に切られ、また一部が土留壁柱に切られている。井戸であり径2.8m程の円形の掘方をもち、中央部に径0.7mの井筒部分を1mの深さまで掘り込む。本来は木桶組の水溜めであったと思われるが、木質等の遺存はなかった。図示した遺物は同安窯系青磁皿で、見込にヘラ描花文と櫛描雷光文をもつ。外底面露胎部には「そろき(カ)」と仮名書き墨書が残る。これと同一の文字はこれまで数例出土している。時期的には13世紀後半位に位置付けられようか。

155号土壙 C-I-c 区上部検出遺構で、154号土壙掘方を切る。土留壁柱で半分程が切られ全体形は不明である。径0.9m程のはば円形をなすものと思われる。浅い皿状の落込みで、遺物の出土量は少ない。白磁碗1点、青磁皿1点、陶器4点、瓦器碗2点などの破片がある。土師皿も少量でまとまりがない。時期、性格ともに不明。

156号土壙 C-I-c 区上部検出遺構である。径20cm程度の小ピットで、柱穴と考えられるが、周辺に関連のあるピットが見られないため、詳細は不明である。土師皿小破片1点が出土しているにすぎない。時期不明。

157号土壙 C-I-c 区上部検出遺構である。173号土壙掘方上の遺構で、長軸1.15m、短軸0.7mの不整長円形をなす。出土遺物は少量で、白磁碗1点、甕棺破片1点、須恵器2点などが見られるにすぎない。土師皿は含まれていない。時期、性格ともに不明である。

158号土壙 (Fig.43 PL.19-2, 38) C-I-II-c 区上部検出遺構である。一部中間杭の擾乱を受けている。173号土壙を切る。7号溝廃絶後に作られたものである。長軸1.7m以上、短軸1.9mのおそらく胴の張った長方形をなすものと思われる。深さ0.6mを計る。出土遺物のうち図示したものは、1が玉縁口縁をもつ白磁碗IV類の底部破片で、高台内露胎部に墨書が残される。「十一口内」または単独の文字であろうか。2は白磁碗II類と思われる底部破片である。3は陶器B群に属する瓶の底部破片である。粗雑な作りでゆがみが大きく、巻上げ底が明瞭に残る。4は陶器B群に属する平鉢底部である。土師皿は計測表に示したとおり、口径8cmに満たない小皿も多く、杯では13cmに集中する。銅錢1点もあるが判読できない。出土遺物には破片が多く混じりも多い。14世紀半ばから後半にかけての、廃棄物処理土壙であろう。

159号土壙 (PL.38) C-III-b 区検出遺構である。7号溝廃絶後に作られた井戸掘方である。径1.5mのはば円形掘方をなし、深さ0.8mを計る。地山粗砂まで掘り込まれており甕棺墓を掘り抜いたものと思われ、小児甕棺の破片20点が出土している。また井戸崩壊後、廃棄物処理用に用いられ、上部からは、瓦片多数が出土している。1点は三巴文軒丸瓦である。16世紀代に位置づけられよう。

160号土壙 (Fig.44~46 PL.19-3, 38) C-I-c-d 区検出遺構である。145・146号土壙に一部切られている。長軸2.4m以上、短軸1.85mの不整長円形をなす。深さ0.7mを計る。横断面は擂鉢状をなし、覆土はレンズ状に堆積している。遺物は砾などとともに雜然と出土しており、廃棄物処理用土壙であることは明らかである。図示した遺物は、1が瓦質の鉢または擂鉢、2~7は白磁碗で、2がIV類、3は口縁端をわずかに外反させる。4はVI類、5は細い高台で見込を輪状に搔きとる。6は薄い底作りで、外底面露胎部に花押様の墨書が残る。7は内面体部に櫛描文を施す。8、9は白磁皿で、それぞれ高台付皿II類、平底皿III類である。10は白磁四耳壺である。11~13は外面体部に櫛描文をもつ同安窯系青磁碗で、12の外底面露胎部

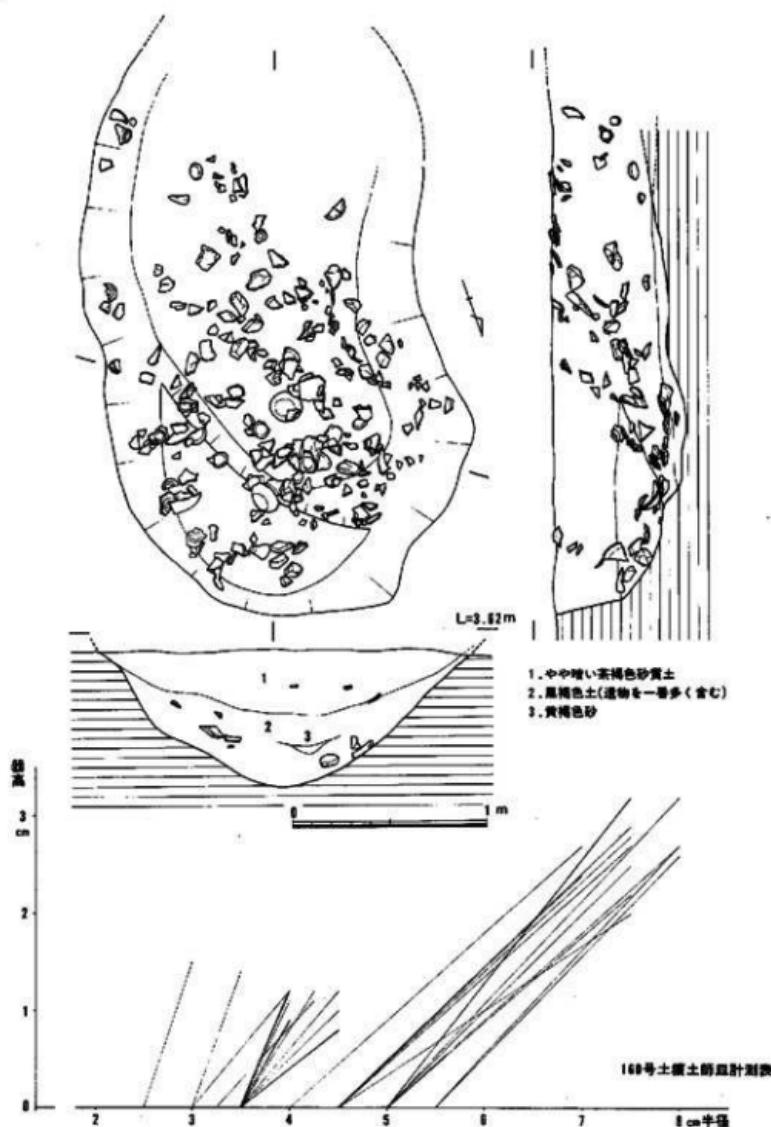


Fig. 44 160号土壤と160号土壤出土遺物

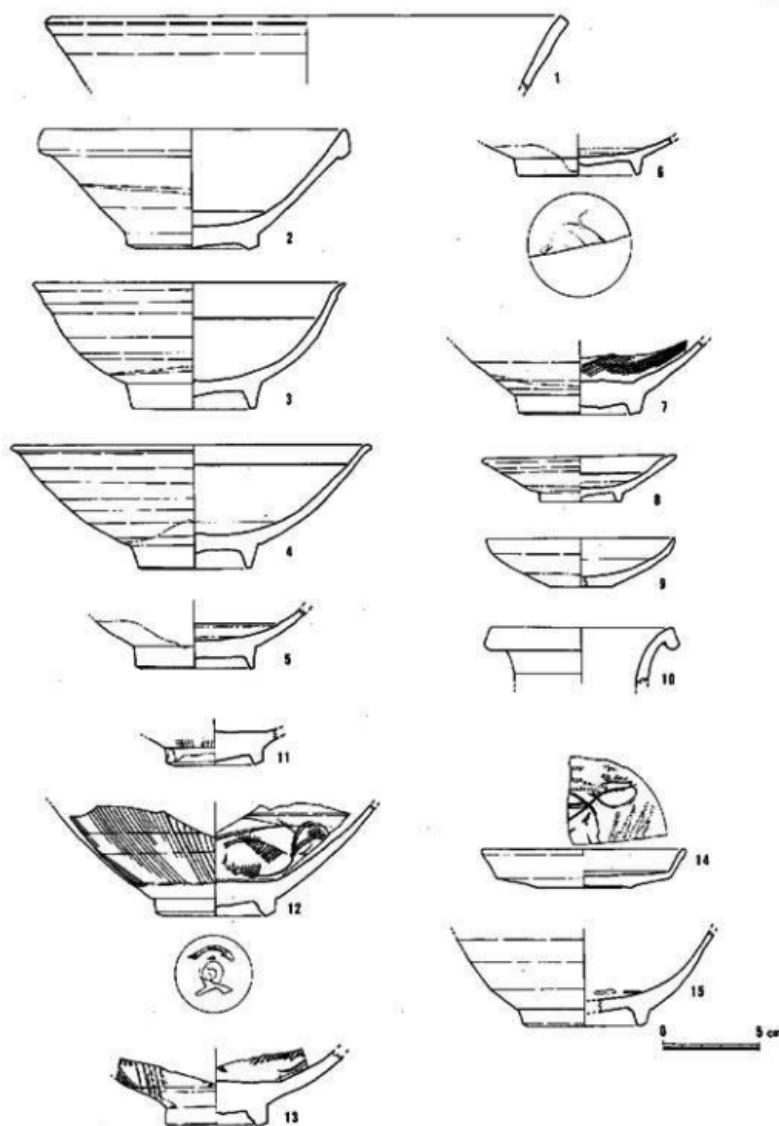


Fig. 45 160号土壤出土遺物(1)

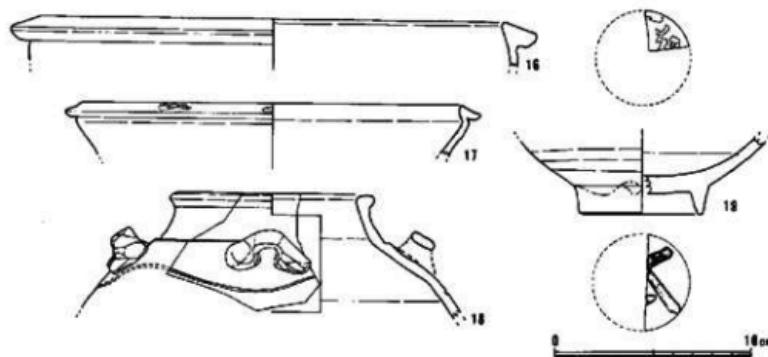


Fig. 46 160号土壇出土遺物(2)

には墨書が残されているが判読できない。見込の釉は輪状に搔きとられている。14は同安窯系青磁皿である。15は見込に目跡を残し、疊付に砂目が付着している青磁碗である。16、17は中国產陶器B群に属する褐釉平鉢で、16は口縁上面の釉を削り、17には目跡が残っている。18は同じくC群の黒褐釉四耳壺であり、耳の直下に波状沈線を描く。19は白磁碗で外底露胎部に墨書を残す。半欠のため明確ではないが「太」かと推察される。土師皿類は、杯の口径は15cmに集中し大型化しており、小皿は8~9cmに集中する。いずれも糸切底である。12世紀後半から13世紀初頭に位置付けられよう。この他多くの遺物があるが主なものを挙げると、陶器大型容器類、青白磁鉢、高麗青磁、奈良時代の焼塙壺などが目をひく。

161号土壇 (Fig.47~49 PL.20, 21, 38, 39) C-I-d区上部検出遺構であるり、171号土壇の上に作られている。長軸6.1m、短軸2.1m以上の広い範囲に遺物が集中している。掘り方は不整形であり、一端を中間杭布掘時に削られている。幾つかの遺構が切り合っている可能性もあるが、いずれにせよ廐棄物処理用の土壇であることには疑いない。上層部においては土師皿類が多数散在しており、中位には部分的ではあるが焼骨片を含む炭化物層が挟在する。下位には3ヶ所に小土壇が見られるが、焼けていない骨片が少量残っていた。出土遺物のうち図示したものは次のようである。1~3は土師小皿でいずれも糸切底をなし、口径8.4cm前後、器高1cm強の法量をもつ。4、5は土師杯で糸切り、口径15~15.7cm、器高2.5cm程の大型品である。6~9は青白磁で、6は天井部に双鳳凰文の浮文をもつ合子蓋、7は合子身、8は蓮池双魚文の浮文をもつ平皿、9は厚い底作りの碗である。10は高台付白磁皿で見込の釉を輪状に搔きとる。12~18は龍泉窯青磁碗である。12は外面体部下半は露胎で、真正の龍泉窯製品ではなく福建省近辺のものか。14は見込の花弁内に「金玉満堂」の文字が、15は同じく方形区画の中

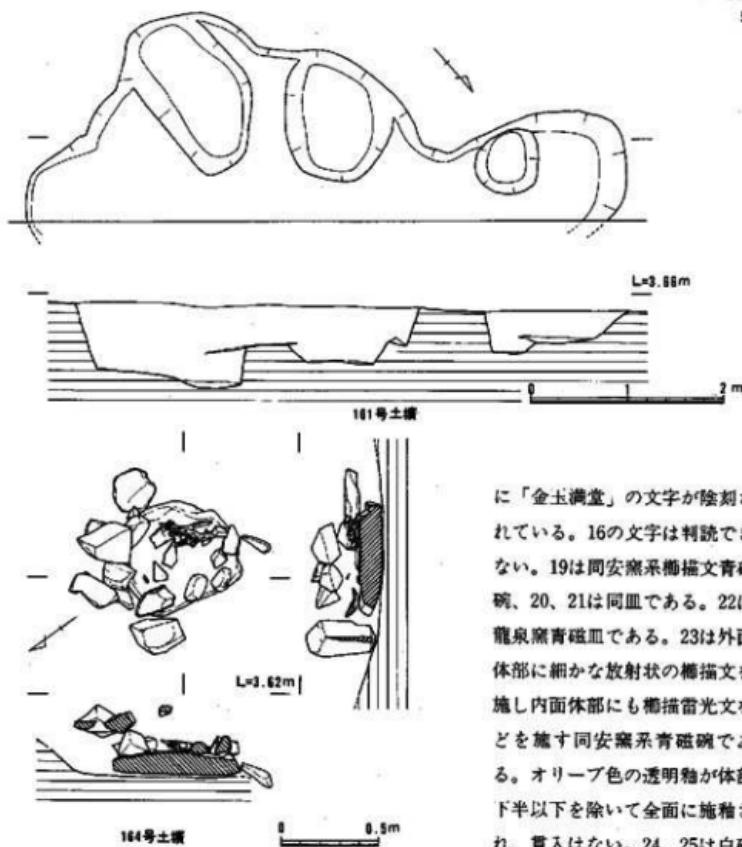


Fig. 47 161号、164号土壇

に「金玉満堂」の文字が陰刻されている。16の文字は判読できない。19は同安窯系櫛描文青磁碗、20、21は同皿である。22は龍泉窯青磁皿である。23は外表面部に細かな放射状の櫛描文を施し内面体部にも櫛描雷光文などを施す同安窯系青磁碗である。オリーブ色の透明釉が体部下半以下を除いて全面に施されている。24、25は白磁碗で、25は見込の釉を輪状に搔きとっている。26は褐釉陶器皿

で口縁部が肥厚する。27はB群に属する平鉢または鉢の底部破片で、基筒底をなしている。28幅広の鉢を巡らす黄釉鐵絵盤である。口縁平坦面の釉は拭きとっている。この他、図示していない遺物も多く、目立つものを挙げると、陶器C群に属するガラス溶解の堆積、砾石、石球、滑石製石鍋、奈良時代焼塩壺、カマドなどがある。出土土師皿類は計測表に示すとおり、いずれも糸底で、小皿では口径8~10cmのものがあり、特に9cmに集中する。杯は口径12cmから15cmまでみられるが、量的には12~13cmが多い。幾つかの廐棄物処理用土壇の集合している可能性があるが仮にそうであっても營まれた時期は13世紀後半から14世紀前半代であろう。

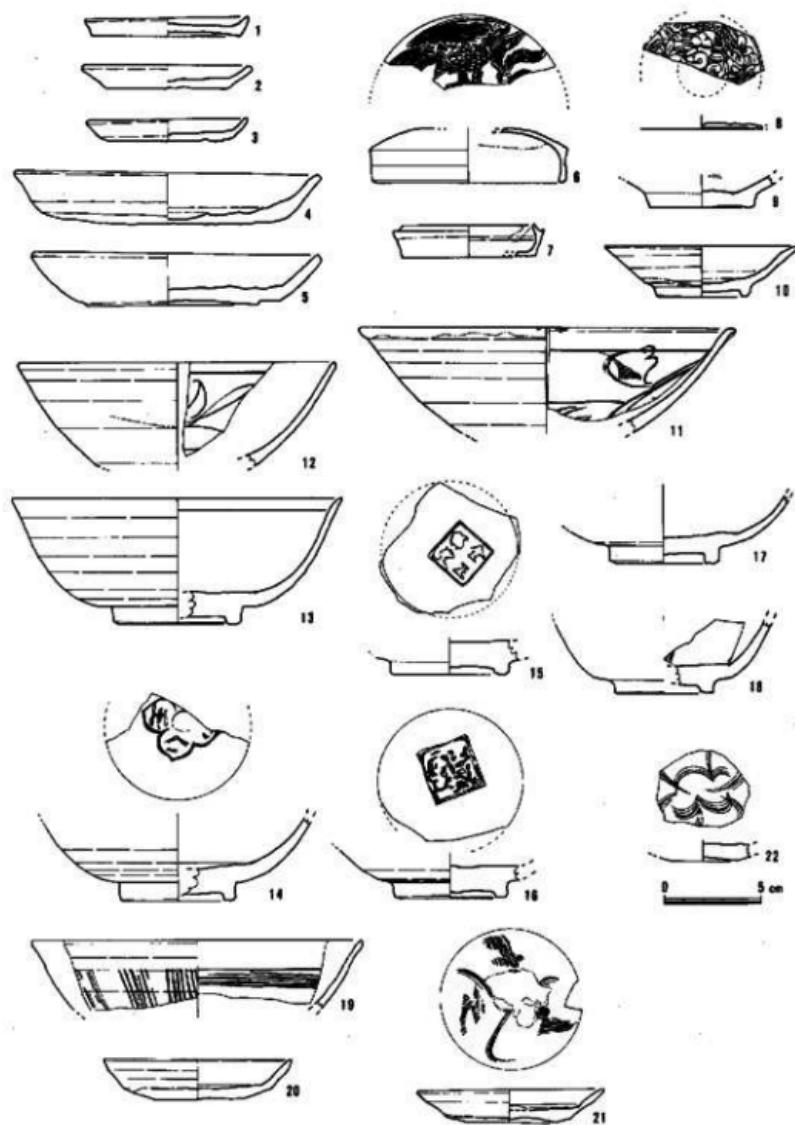


Fig. 48 161号土壙出土遺物(1)

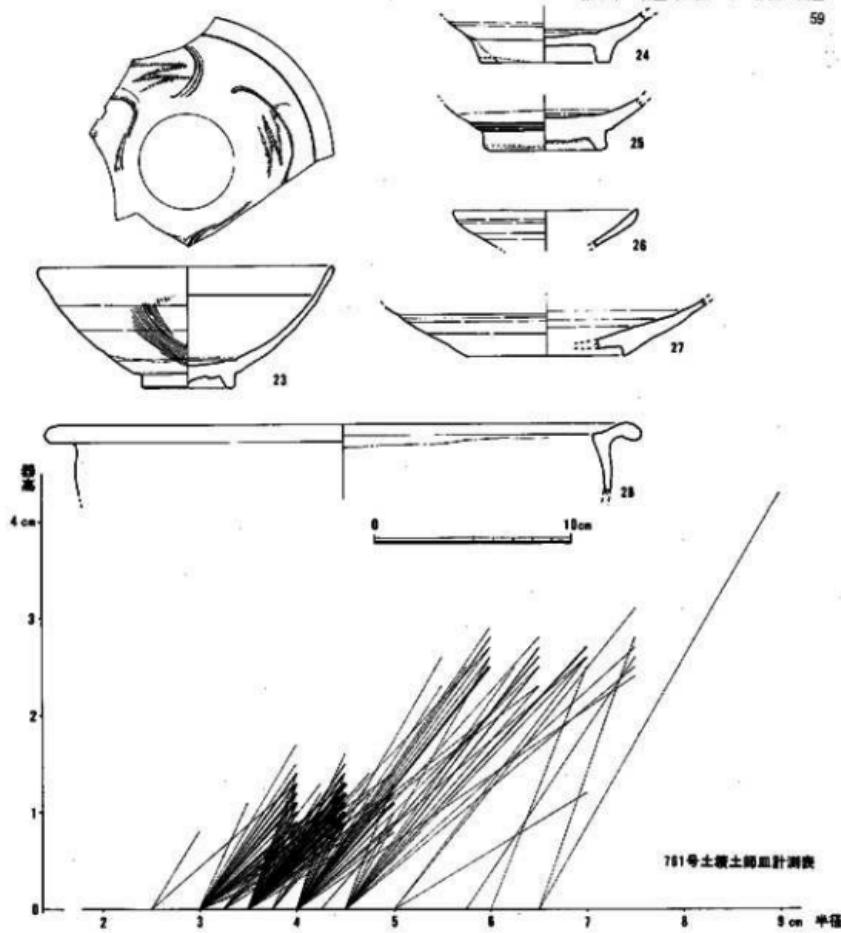


Fig. 49 161号土壤出土遺物(2)

162号土壤 C-I-e区上部検出遺構である。長軸0.98m、短軸0.68mの不整長円形をなし、深さ0.5mを計る。覆土は黒褐色で、礫とともに遺物がやや浮いた状態で出土しており、廃棄物処理用土壤である。出土遺物の量は多くないが、白磁碗底部破片に墨書の見られるもの1点があったが判読できない。この他、少量の瓦、陶器破片などがある。また馬齒1点も出土している。土師皿類の量も少ないが、口径15cmの大型杯の完形品1点があった。時期は明確にしがたい。

163号土壙 C-I-e区上部検出遺構である。長軸1.15m、短軸0.75mの不整長円形をなす。浅い掘方である。出土遺物は少なく、土師皿小破片7点、白磁碗17点、青磁碗、青白磁合子各1点、陶器3点、土師質土器4点などで、いずれも小破片である。遺構の性格は明確でないが、おそらく近世の廃棄物処理用土壙であろう。

164号土壙 (Fig.47・50 PL.21, 39) C-III-a区で検出された。120号土壙によって切られている。本来は径1m以上の掘方があったものと推定されるが、調査時には明確にしえず辛うじて掘方床面の浅い窪みが確認できるのみである。この掘方床面直上に0.6m×0.55m、厚さ11cmの偏平な大石を置き、周辺および上面に人頭大、幼児頭大の礫を配している。大石の直上には3本の鉄製刀子と1面の方形青銅鏡が置かれ、鏽で付着した状態で遺存していた。この鏡の部分には扇形に広がった薄い板状の木質痕跡があった。扇子または柿経であると思われる。このほか宝珠形の青銅製品が大石直上に置かれ、また鏽がひどく文字の判読はできないが、銅鏡2枚が周辺をめぐる礫の直下から出土している。また陶器B群に属する平鉢2類の大きな破片も大石直上にあり、この遺構に埋納された遺物と考えられる。図示した遺物は次のようにある。1は一辺7.6cmの方形の銅鏡である。鏡背は無文で小さなカマボコ状の縁をもつ。小さな鉢が中心に造っているが、対角線方向に孔は穿たれてる。2は宝珠形をなす銅製品である。鋳型を組合せて製作されており、接合部に突出部分が見られる。鏽が覆っているが一部に赤褐色の異物が付着している。基部は一部欠損している。蓋のつまみである。銅製絹筒のものかもしれない。3~5は鉄製刀子である。全体に鏽がひどい。いずれも身の両側に木質が残っている。この木質は先に述べた扇状の木質とは別のもので、鞘に収められていたものであろう。3は現存長21.8cm、幅2.4cmを計り、平造りである。4は平造りで、背闊と刃闊が認められる。先端と基端は欠損する。現存長22.85cmで、最大幅2.9cmを計り、身長は15.0cmである。茎部断面は長方形を呈す。5は平造りで欠損部分は少ない。刃闊はわずかに認められる。刃闊から茎部にいたる部分は断面長方形を呈している。長さ25.5cm、幅2.5cmで、身長は20.5cmを計る。この遺構は120号土壙の掘方によって、上半の一部を欠失している (PL.15-1) が、その構造から見て墓とは考えにくい。近年の発掘調査で、瓦絆破片や陶製絹筒破片なども少量であるが博多遺跡群内で出土しており、2の青銅製品を銅製絹筒破片の蓋のつまみであると考え、かつ当地が寺域内であったとすれば絹筒の可能性も否定できない。ともあれ土師皿も小破片少量で時期決定に決め手を欠き、一部後世の攪乱を受けて遺構としては完全でないが、銅鏡、鉄製刀子、銅鏡を埋納し、また柿経かと思われる木質痕跡も残っていることから、少なくとも仏教儀礼にともなう一種の祭祀遺構であると述べるに不都合はないだろう。

165号土壙 D-I-a区上部検出遺構である。8号溝廃絶後掘り込まれた土壙である。土留壁柱によって大半を切られており全体形は不明である。遺物は殆ど出土しておらず時期は不明

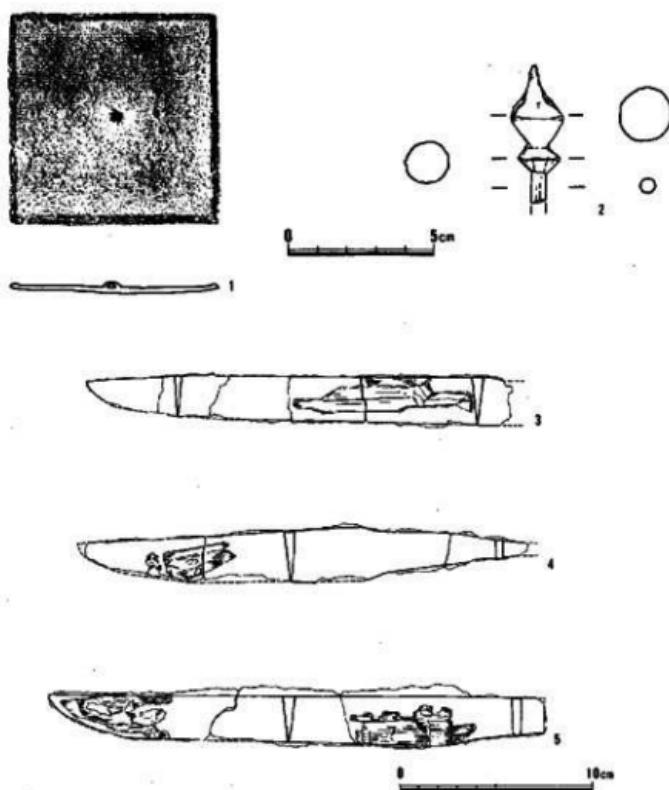


Fig. 50 164号土壌出土遺物

であるが、少なくとも14世紀後半以降に掘り込まれたものである。性格は不明。

165号土壌 C-III-a 区検出遺構である。101号土壌に切られ、120号、164号土壌の下に広がる黒茶褐色砂質土の大きな落ち込みであり、明確な掘方はもない。遺物は微量で、白磁片6点、青磁片2点、陶器片7点などがあり、土師皿は殆ど見られない。遺構の性格は不明である。12世紀代の遺構であろうか。

167号土壌 (PL.22, 39) 101号土壌の下部掘方である。

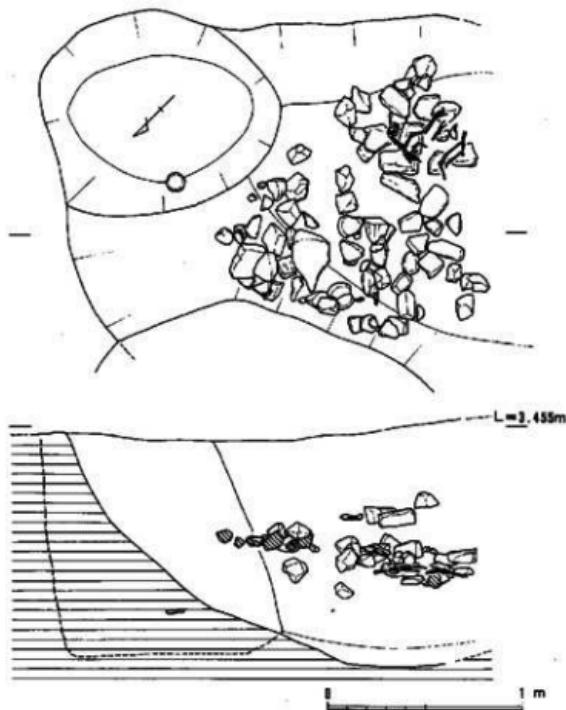


Fig. 51 168号土壙

168号土壙 (Fig. 51・52 PL.22-2・3) C-III-b区検出遺構である。101(167)号土壙によって一部を切られる。長軸3.1m、短軸2.4mの大きな掘方を持ち、深さ1.2mを計る。掘方覆土中位に径20~10mの角礫がほぼ水平に堆積し、瓦、土師皿、陶磁器類がともに出土している。この礫の間にはさまれるように横臥した状態で動物骨が出土している。礫に押しつぶされた状態であり遺存状態は良好とはいえないが、四肢骨、頭蓋骨は明瞭に残っている。四肢が長く、犬歯があり、おそらく犬かと思われる。他の遺物の出土状況から考えて、動物遺骸の埋葬が主たる目的でなく、廃棄物処理用土壙に遺骸を葬ったものであろう。出土遺物のうち図示したものは、1が龍泉窯青磁小碗、2が内面に折枝蓮弁文の割花文を施す龍泉窯青磁小碗、3は見込に「金玉満堂」のスタンプを施す龍泉窯青磁碗である。4は外面部に放射状櫛描文をもち内面体部に、ヘラ描文と櫛描雷光文をもつ同安窯系青磁碗である。5は白磁平底皿である。

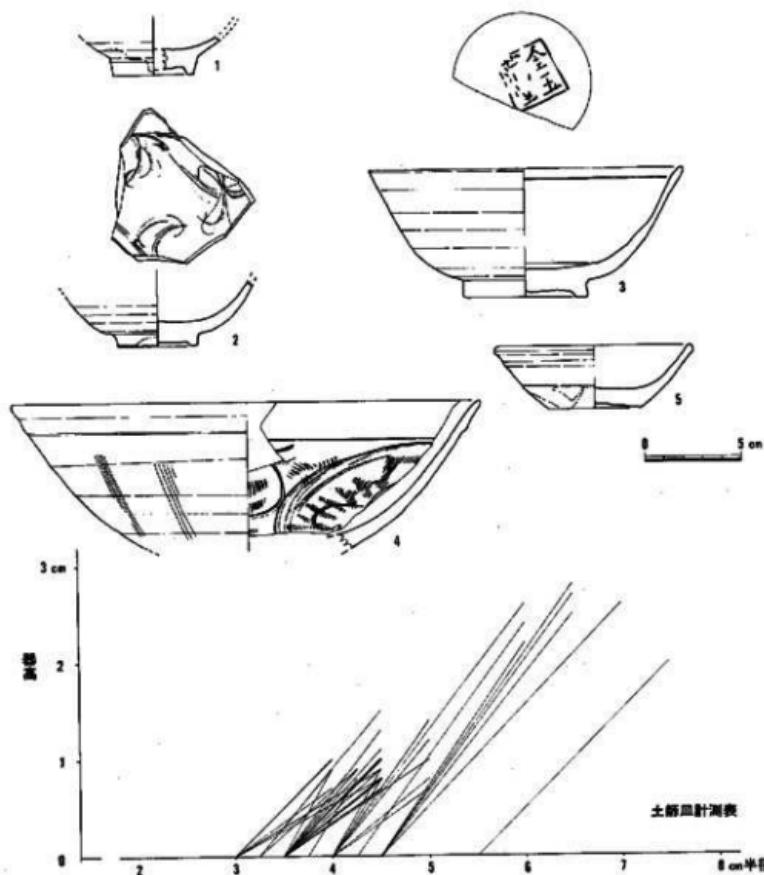


Fig. 52 168号土壤出土遺物

通例口ハゲになる器形であるが、これは外底が露胎で口ハゲを有しない。また内面底と体部との段が明瞭ではない。土師皿類は多くみられ、いずれも糸切底である。計測表に示すように小皿は口径8~9cm、器高1cm前後に、杯は口径12~13cm、器高2.5cm前後に集中する。その他の遺物で目立つものは白磁香炉片や同壺破片があり、陶器では準A群に属する褐釉四耳大壺8点や壺壠破片などがある。国産品では滑石製石鍋、瓦などがある。時期は13世紀後半代と考えられる。

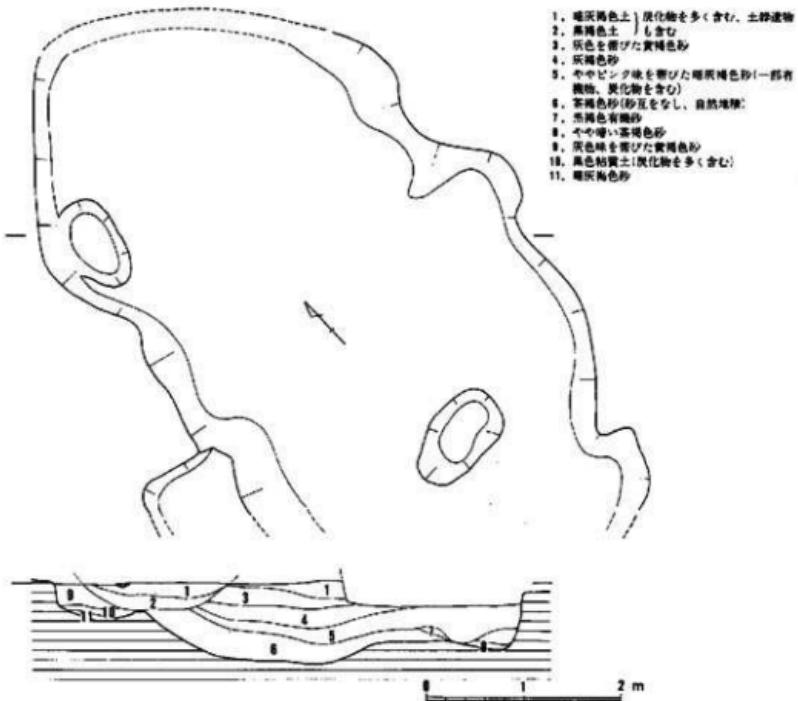


Fig. 53 169号土壙

169号土壙 (Fig.53~55 PL.23-1, 39, 40) C-III-b-c 区検出遺構である。116号、118号土壙などの遺構が上から振り込まれている。南北両端を土壁柱、中間枕布掘で切られており正確な形狀、規模は述べられないが、長軸約7cm、幅4.2cmの広い皿状の土壙である。深さは最深部で0.9mを計る。遺物は散漫に分布するが量が多い。図示した遺物を簡単に説明する。1、2はそれぞれ土師小皿、杯でいずれも糸切底である。3~8は白磁碗で、3が玉縁をもつIV類、4が高い高台をもち口縁を外反させるV類、5~7が見込み輪状に搔きとり、口縁端を直に収めるIX類、8が半球形の体部で外反する口縁をもつ小ぶりの碗であり、O-I類に属す。9~13は白磁皿で、9が高台付のII類、10~12は平皿のIII類、13が口唇を斜め下に外反させる平底IV-2類である。14は白磁小皿の蓋で口縁端以上に施釉されている。15も同じく白磁蓋である。16は青磁碗であるが、底作りは龍泉窯青磁碗そのものであり、内外面の施文については同安窯系青磁に共通する折衷タイプで、同安窯系青磁の初原的な形態を示すものであろう。17

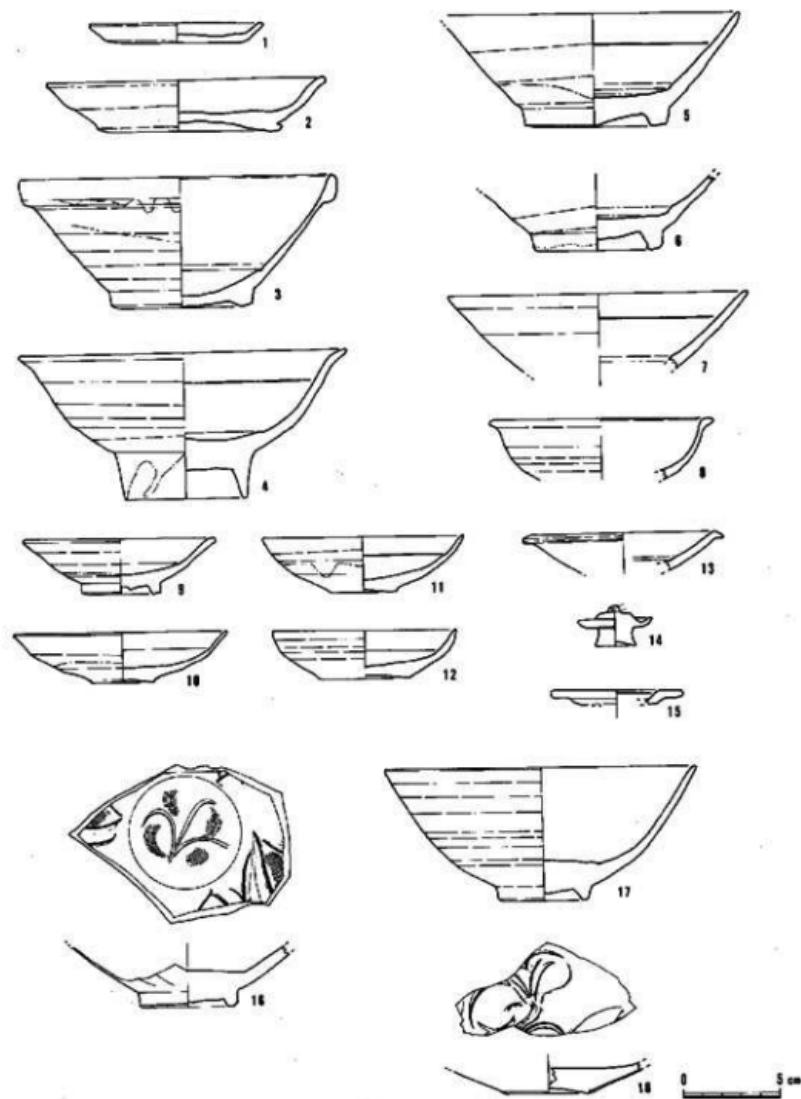


Fig. 54 169号土壤出土遺物(1)

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

66

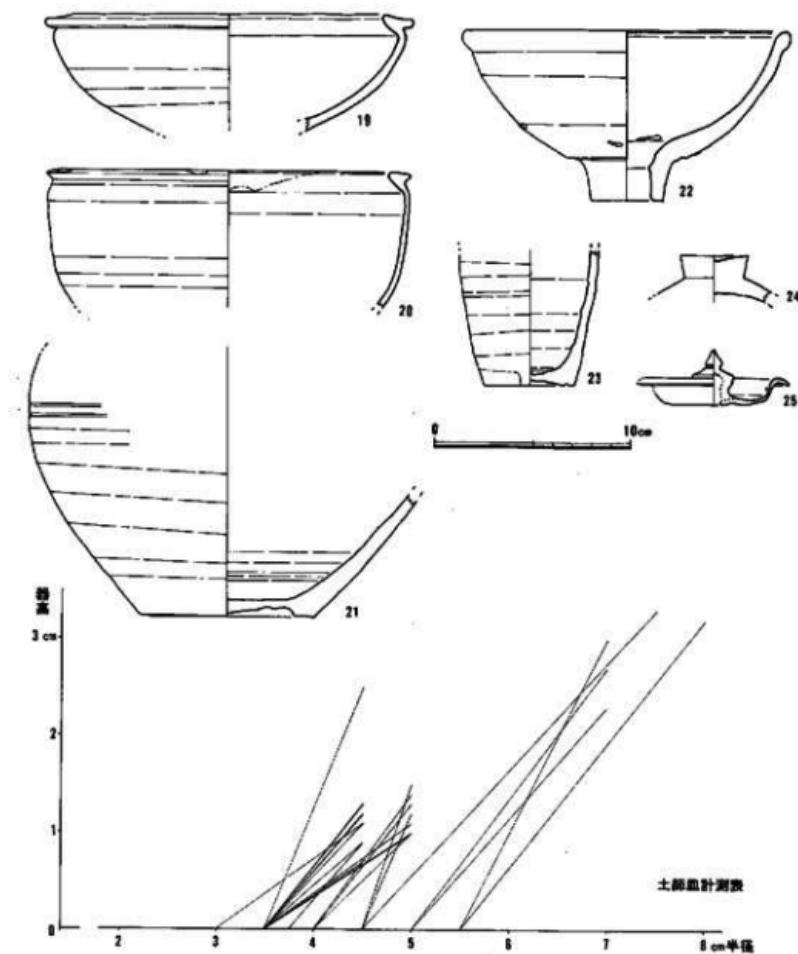


Fig.55 169号土壤出土遺物(2)

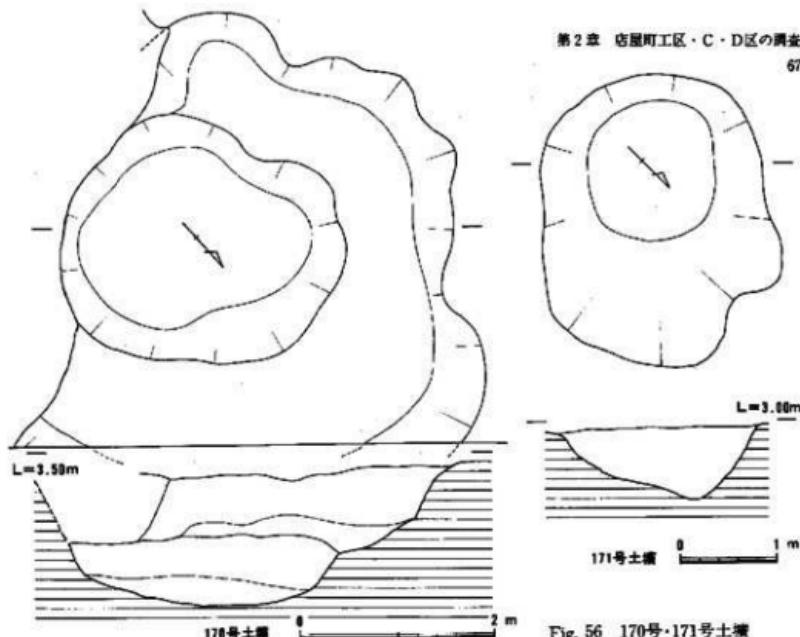


Fig. 56 170号・171号土壌

は龍泉窯青磁碗で無文、18は龍泉窯青磁皿である。19は陶器B群に属する平鉢で、20は同深鉢である。21も陶器B群の四耳壺である。22は漏斗の形態をした陶器で口縁端を外に丸く肥厚させるもので、内面底と外面体部下半に砂目跡が残る。C群に属す。23はB群短頸壺、24はC群の陶器蓋で外面にのみ施釉される。25は準A群に属する薄手の蓋で宝珠形のつまみをもつ。茶綠釉が口唇以上に施される。これら図示したもの以外に繩目、格子目叩きの瓦も37点、焼塙壺、甕などの奈良時代の土師器など古いものも出土している。図示した陶磁器類も全体に古い様相をもつ。土師皿類は計測表に示すとおり全て系切底で、小皿は口径9~10cm、杯で口径14~15cmに集中する。これらのことからほぼ12世紀半ばの廃棄物処理土壌であろう。

170号土壌 (Fig.56) C-III-e区からD-III-a区にかけて検出された土壌である。北側の一部を土留壁柱で切られ、南側については土壌掘方が不明瞭になっている。二段の掘方となつておらず、上部掘方は5m程の径になるものと思われる。内部掘方は長軸2.9m、短軸2.4mの不整長円形をなす。上部掘方天端から最深部までの比高は1.3mを計る。内部掘方は粗砂層にまで達しており、井筒等の痕跡は確認できないものの、土壌の形態から井戸の掘方であったと考えられる。出土遺物は少ないが、奈良時代の土師器カマドや甕、須恵器片などが目立つ。おそらく奈良時代の遺構を掘り抜いたものであろう。陶磁類の中で最も新しいものは龍泉窯青磁III類の杯であり、14世紀代に掘り込まれたものであろう。

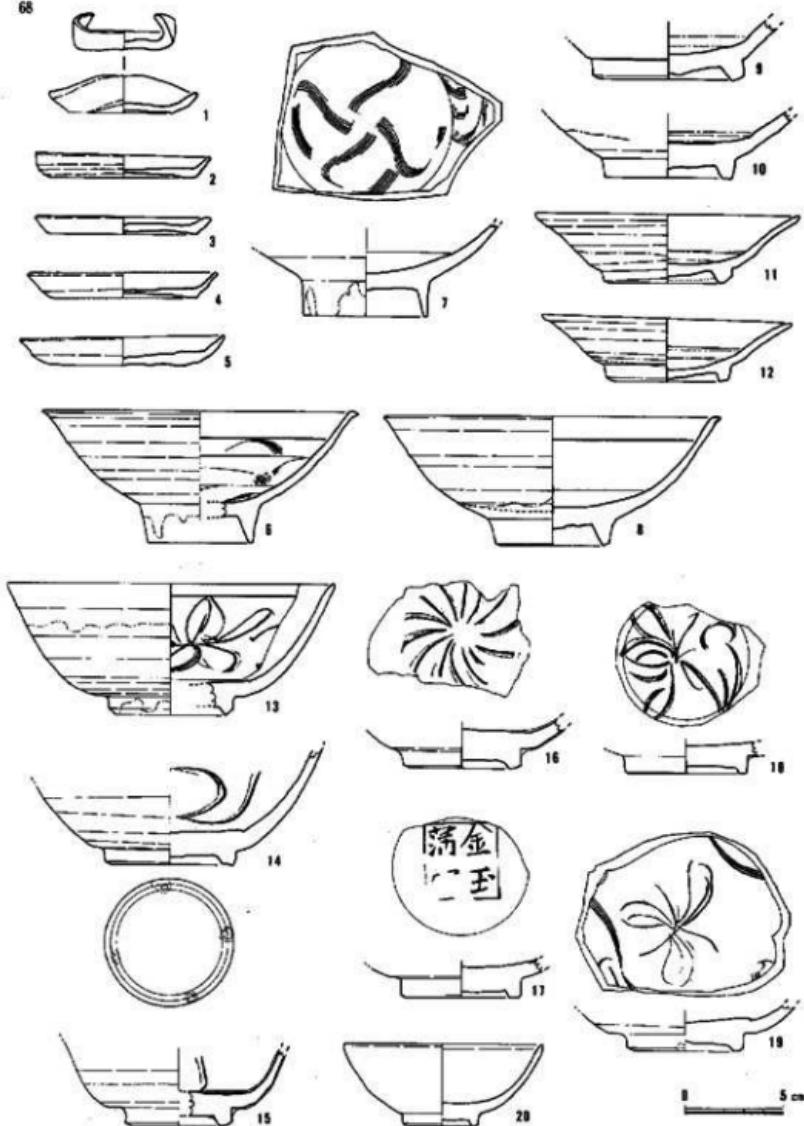


Fig. 57 171号土壤出土遺物(1)

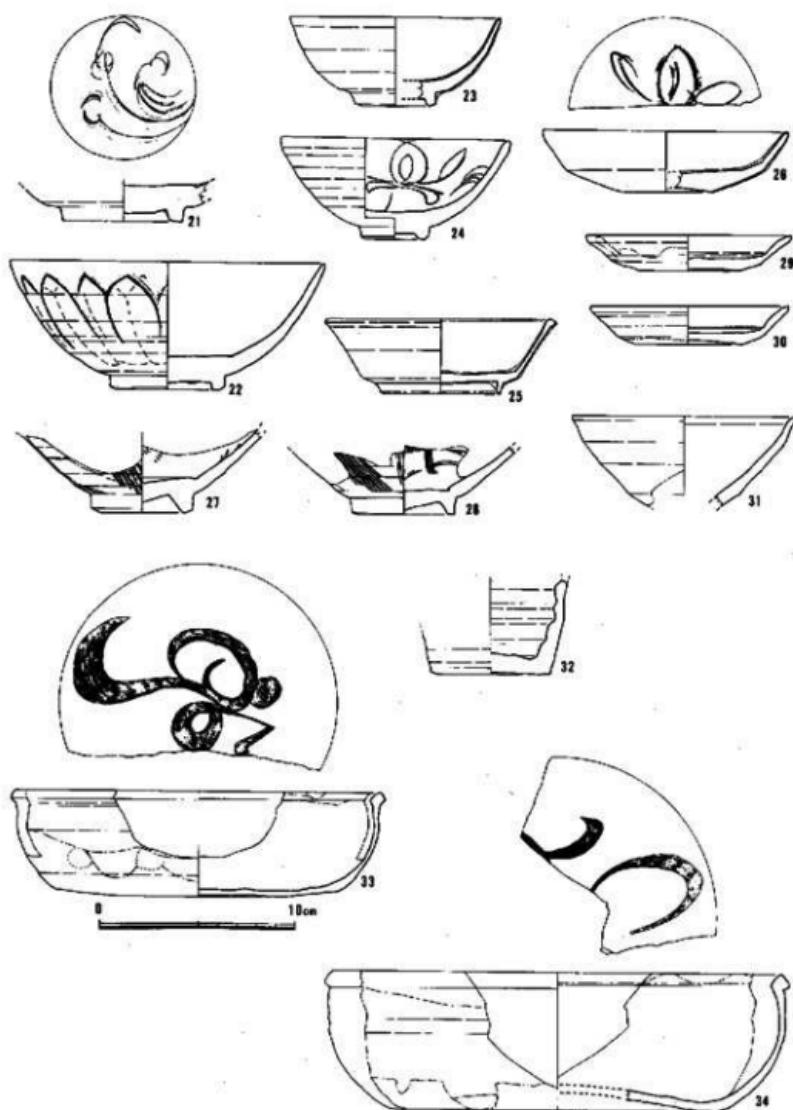


Fig. 58 171号土壤出土遺物(2)

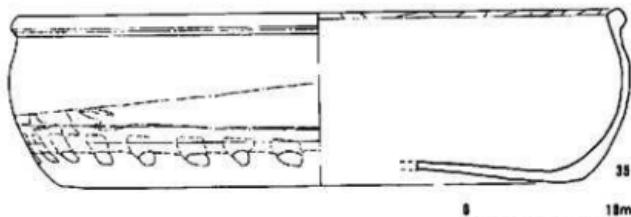


Fig. 59 171号土壙出土遺物(3)

171号土壙 (Fig.56~59 PL.40) C-I・II-d区で検出された。長軸3m、短軸1.4mの不整長円形をなす掘方で深さ0.75mを計る。近世初期の廐棄物処理用土壙であるが近世初期の唐津、伊万里、高取系の陶磁器とともに、多量の中世陶磁が出土している。おそらく13世紀後半から14世紀前半代の廐棄物処理土壙を再び掘り込んだものであろう。ここでは近世の遺物を除いて、図示した遺物について簡単に説明する。1~5は糸切り底の土師小皿である。1は両側をつまんだいわゆる耳皿である。6~12は白磁である。6~8は高い高台をもち口縁端を水平に外に出す碗VI-1類で、6、7は内面に描文をもつ。9、10は見込の釉を輪状に搔きとる碗IX類。11、12は見込の釉を輪状に搔きとる高台付皿II類である。13~26は龍泉窯青磁である。13、14、16、18、19、20は内面にヘラ描割花文をもつ碗I類で、14の蓋付には4ヶ所目跡が残されている。17は見込に「金玉滿堂」のスタンプをもつ碗I類である。15、20、23、24は小碗で、15は腰折れで口縁を輪花にし内面体部にヘラ描きで花弁を作る。24は内面に蓮華折枝文をヘラ描きしている。22は外表面に複弁の鍋蓮弁文をもつ碗である。25は腰折れの杯で厚い釉がかかる。III類に属す。26は見込にヘラ描き蓮華文を施す平皿である。27、28は内外面に描文をもつ同安窯系青磁碗で、いずれも体外半輪である。29、30も同じく同安窯系青磁皿である。31は黒釉天目碗で底部を失する。口縁直下の窪みは強くない。32は陶器A群に属する小口瓶で、きめ細くねっとりした胎である。器内壁には粗いろくろ目が段をなしている。33~35は黄釉鉄絵盤で、陶器A群に属し、泉州磁灶窯とされる。33、34は小型品で口径はそれぞれ19.2cmであるが、35は大型品で口径42cmを計る。33、34は内面底に鉄釉でのびやかな文様を施すが、35は二次焼成を受け明確でない。いずれも口縁端を肥厚させるタイプのもので口縁部の釉を拭きとり、口縁と外表面下半に重ね焼の痕跡を残す。このほか備前鑄鉢、朝鮮唐津徳利、瓦質七輪などがある。土師皿も多数みられるが後世の擾乱を受けているためここではふれない。

172号土壙 (Fig.60) D-II-a区検出遺構である。長軸1.0m、短軸0.7mの不整長方形で、現存深さは0.15mを計る。土壙墓である。成人骨が横臥屈葬の形で遺存しているが、風化が著しく、頭骨と大脛骨が明瞭に残るのみで、脊椎骨が痕跡程度に残っている。明らかな副葬品は

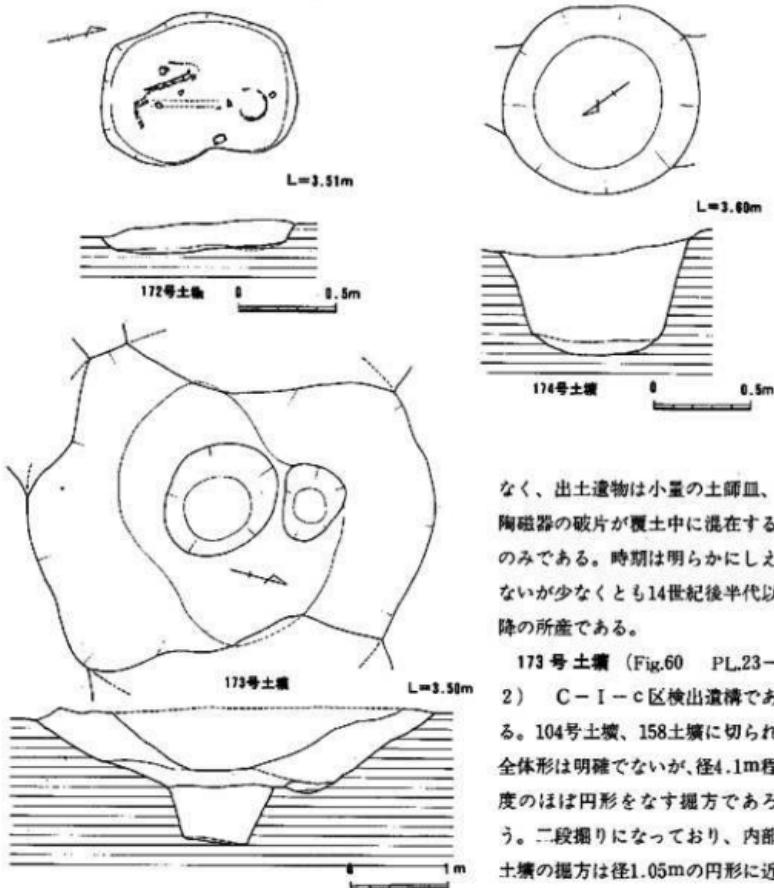


Fig. 60 172号, 173号, 174号土壙

1.4mを計る。掘方最下面是粗砂層であり、木桶等の内部構造物は見られないが、井戸掘方である。出土遺物は少量であり時期は明確でないが切合いからすると12世紀頃と考えられる。甕棺破片11点が出土している。

174号土壙 (Fig.60) C-I-c区検出遺構である。径1.0mのほぼ正円形をなし、深さ0.65mを計る。出土遺物が殆どなく時期は明確でないが160号土壙に切られており、12世紀代の遺構かと思われる。性格は不明である。

なく、出土遺物は小量の土師皿、陶磁器の破片が覆土中に混在するのみである。時期は明らかにしえないが少なくとも14世紀後半代以降の所産である。

173号土壙 (Fig.60 PL.23-2) C-I-c区検出遺構である。104号土壙、158号土壙に切られ全体形は明確でないが、径4.1m程度のほぼ円形をなす掘方であろう。二段掘りになっており、内部土壙の掘方は径1.05mの円形に近く、上部掘方天端からの比高差は

175号土壙 (Fig. 61・62 PL.24~26・41) D-II-a・b区検出遺構である。浅い皿状の土壙で一部中間杭布掘りで切られており土壙線は明確でない。径4m以上のはば円形をなすものと思われる。火葬施設であって床面の砂は赤く焼け、その上に木炭を多量に含む層があり火葬人骨が層をなしている。最上部には一辺50cmを越す大石から拳大の礫がぎっしり置かれている。この火葬人骨は多量であることも含め、頭蓋骨が含まれていないことは、次に述べる火葬頭骨集積遺構との関連で重要である。この火葬施設は墓地整理等に伴う遺骨処理ではなく、脂肪



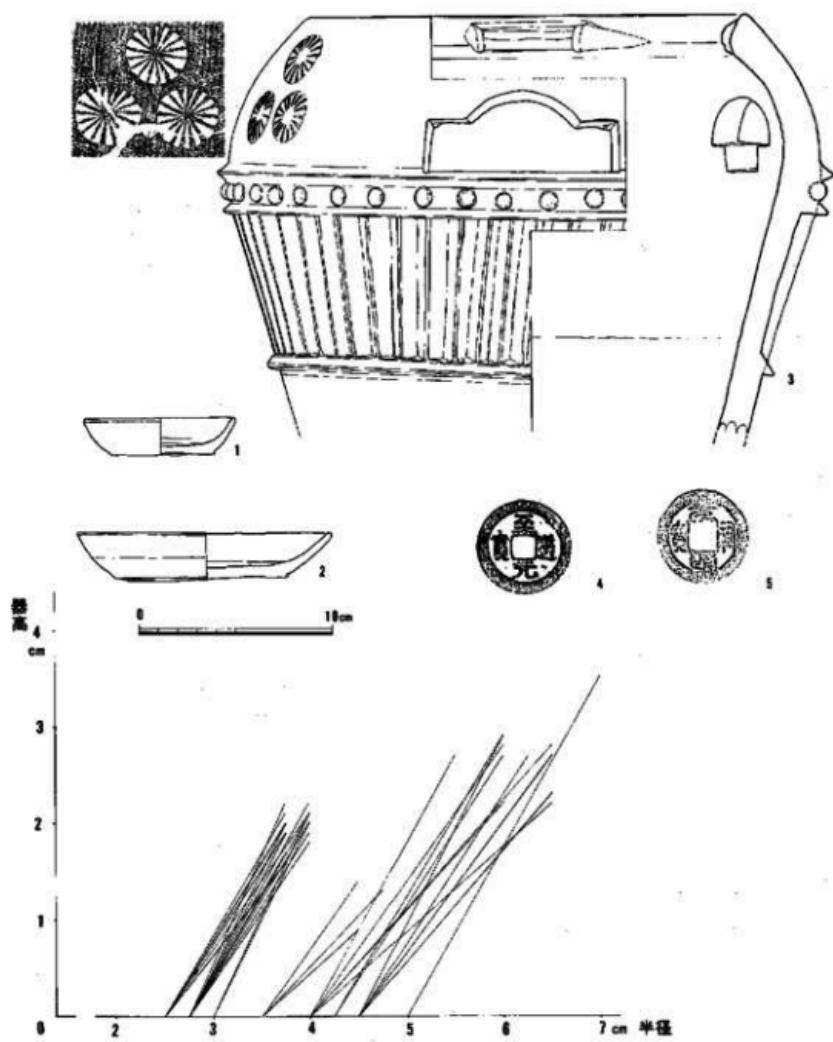


Fig. 62 175号土壌出土遺物

が炭化しタール状になって砂を固めていることから、肉付きの状態で火葬したことは明らかである。頭蓋骨が含まれないことは首のない遺骸であったことを示す。出土遺物は多いが、大半は火葬後の覆土中に含まれるもので、火葬時の層から出土したものは土師皿類と鉄釘等である。図示した遺物は、1、2がそれぞれ土師小皿と杯、3が豪奢な作りをした土師質の火葬（または七輪）で、表面は火熱で焼けタール状付着物がかなりの部分を被っていた。4は「至元通寶」

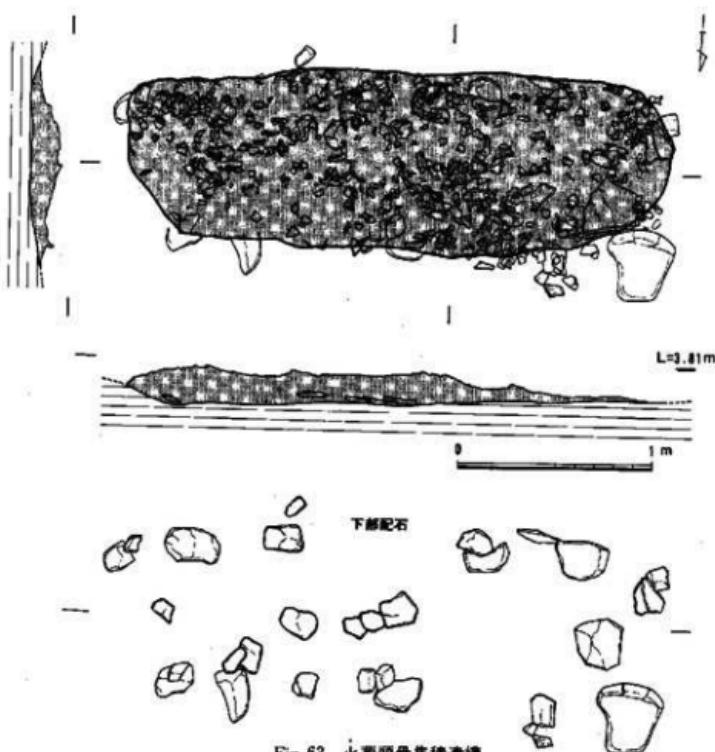


Fig. 63 火葬頭骨集積遺構

で覆土礫上から出土。5は「元符通寶」で焼骨層からの出土である。焼骨層の土師皿類は計測表に示すように、小皿で口径7.5~8cm、器高2cmに集中し、杯で口径12~13cm、器高2.5cm後に集中し、14世紀前半代に火葬が行なわれたことを語っている。

火葬頭骨集積遺構 (Fig.63 PL.27・28) D-I-b区上部検出遺構である。掘方はもたないが、長軸2.8m、幅1mのほぼ長方形の範囲に火葬頭骨のみを集積する遺構である。14世紀前半代に廃絶された8号溝の上面に當まれており、長軸方向は溝に一致することから、溝廃絶直後の浅い窪みを意識していることが明らかで、年代も14世紀前半代と考えていい。20cm前後の扁平な石を敷き、その上で火葬を行っているので、火葬頭骨と木炭、灰が厚さ15cmにぎっり堆積している。この火葬頭骨の詳細は、付編Iで言及することになっており多くはふれないが、頭蓋骨に頸椎骨が付隨した状態であること、その数が110体にも及ぶこと、175号土壤に隣接

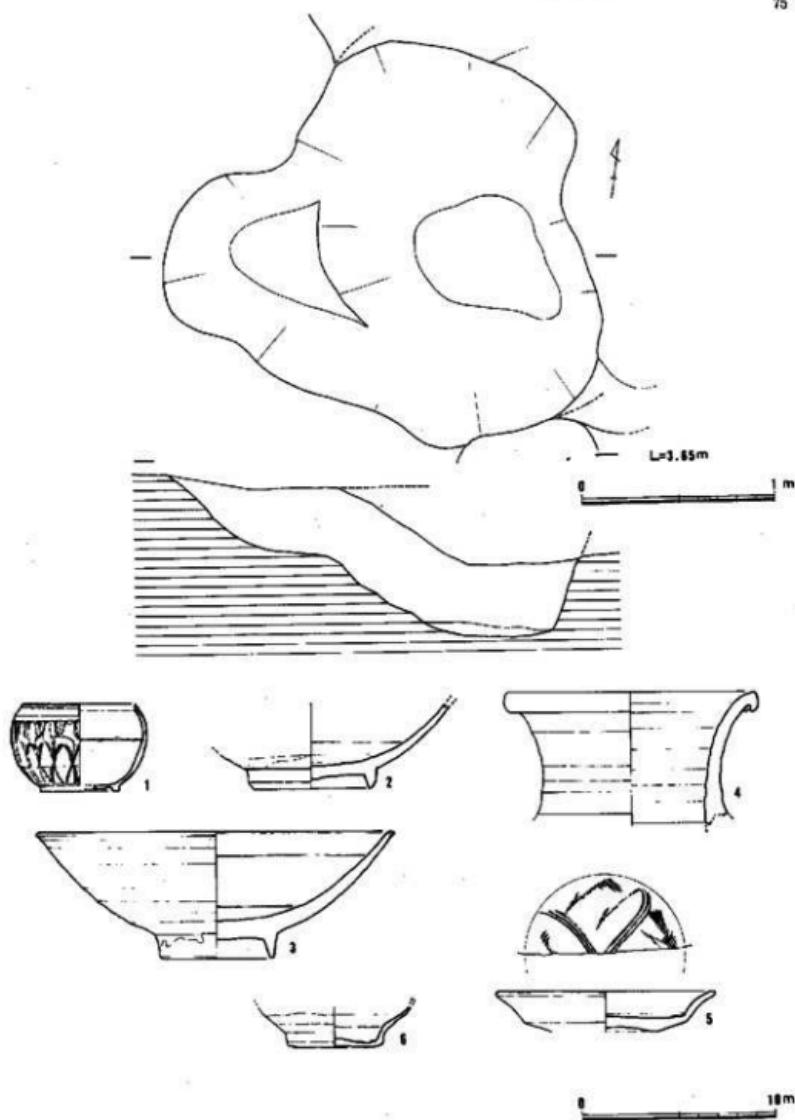


Fig. 64 176号土壤と176号土壤出土遺物

し年代的にも一致することなどから、斬首になった胴体部分を175号土壇で、首級のみをこの遺構で火葬したものである。この遺構からの出土遺物は小量の鉄釘が出土しているのみである。

175号土壇とこの火葬頭骨集積遺構については第3章と付録Iでふれる。

176号土壇 (Fig.64 PL.41) D-I-a区検出遺構である。一部175号土壇によって切られている。径2m程の不整円形で小さなテラスをもつ。深さ0.8mを計る。内部施設は遺存していないが井戸掘方と思われる。図示した遺物は、1が青白磁小壺、2が見込の種を輪状に搔きとる白磁碗、3がVI-1類白磁碗、4が白磁水注頭部、5が同安窯系青磁皿、6が陶器A群III類の小壺である。土師杯は口径15~16cmに集中し、12世紀後半代の遺構であろう。

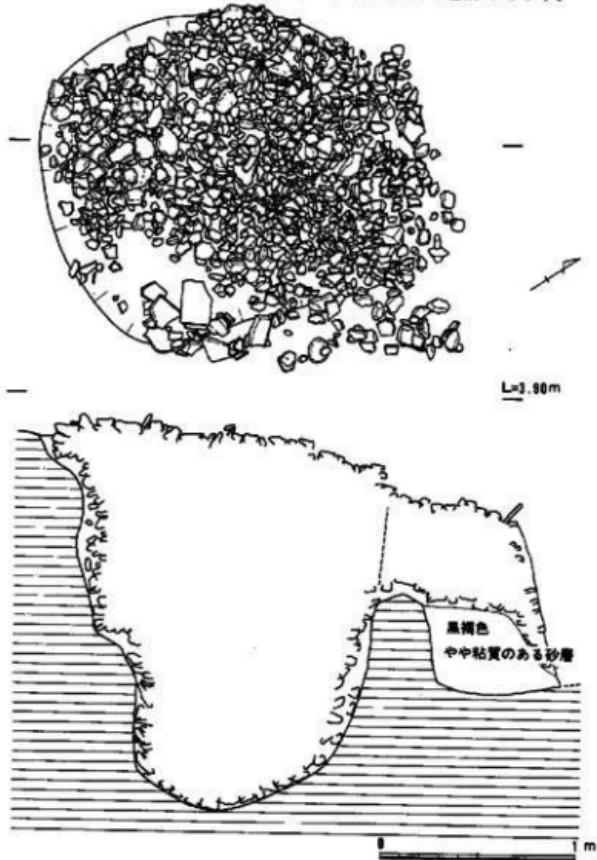


Fig. 65 176号土壇

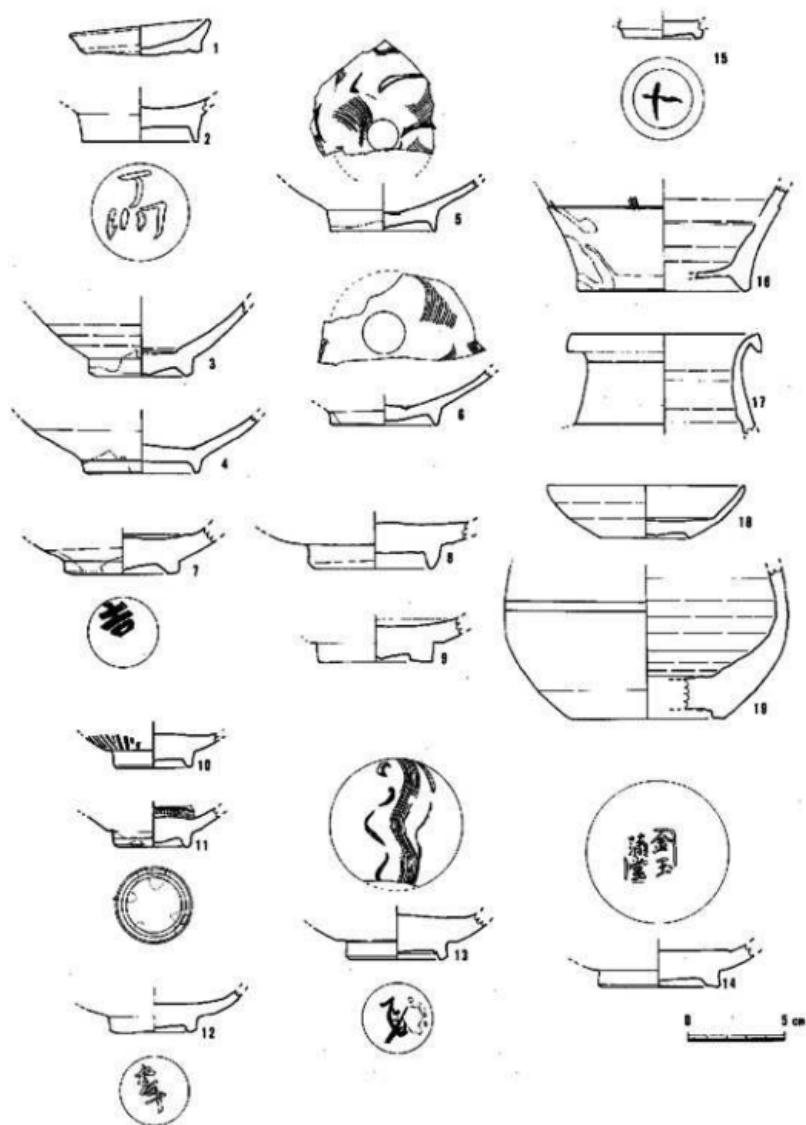


Fig. 66 177号土壤出上遺物(1)

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

78

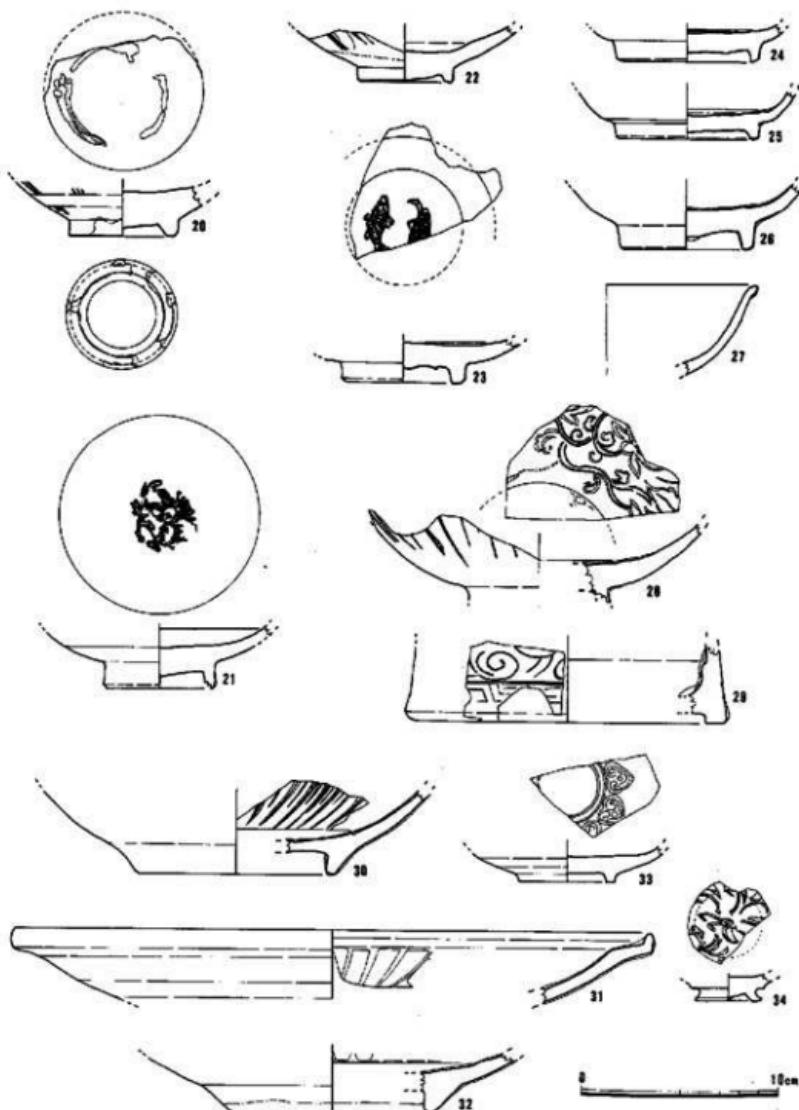


Fig. 67 177号土壇出土遺物(2)

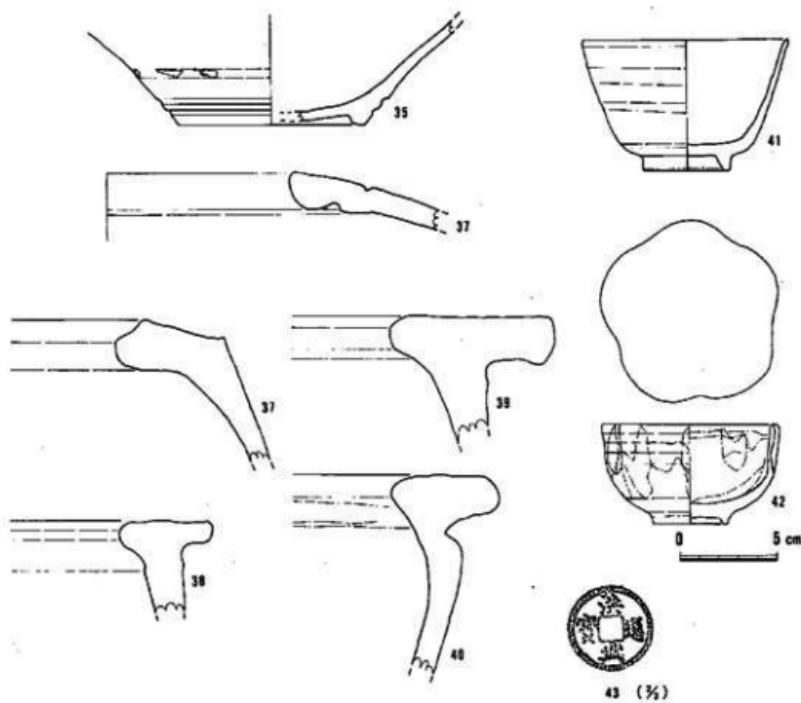


Fig. 68 177号土壌出土遺物(3)

177号土壌 (Fig. 65~68 PL. 29-1, 41, 42) D-II-b区検出遺構である。径1.75mのほぼ円形の掘方をもち、深さ1.95mを計る。この土壌に砾、瓦、陶磁などの破片をぎっしり詰め込むものである。260号土壌とほぼ同時に掘り込まれたもので、砾等が流込んでいる。近世初期の遺構であるが、中世以前の遺物も大量に含まれており、図示した遺物について簡単に説明する。1は土師小皿、2は「丁綱」銘の墨書をもつ白磁碗、3は白磁碗で内面に櫛描文をもつ。4も白磁碗、5、6は見込に小さな茶溜を作り、内面に櫛描文を施す白磁碗である。7は外底に「吉」の墨書をもつ白磁碗、8は見込が露胎になる龍泉窯青磁碗、9は白磁碗で外面露胎、10~12は龍泉窯青磁小碗で、10は外面に線描蓮弁をもち、12は外底に「六年(カ)」の墨書を持つ。13は龍泉窯青磁碗で外底に墨書が残るが判読できない。14は見込に「金玉滿堂」のスタンプをもつ龍泉窯青磁碗。15は外底に「十」の墨書をもつ高台付白磁皿、16は白磁皿で外底露胎、17は青白磁皿、18は基筒底の白磁皿、19は青白磁皿で高台脇まで施釉される。20は青磁碗で、

疊付と見込に重ね焼の痕跡が残る。21は見込に花文のスタンプをもつ青磁碗、22は外面体部に繪描文をもつ青磁碗、23は見込に双魚文をスタンプする青磁碗である。24~26は青磁碗で、24は外底高台内無釉で、25、26は見込と外底が無釉である。27は口縁端を外反させ丸く取める青磁碗である。28は外面に線描き蓮弁文を、内面に印花文をもち粘手風の釉が厚くかかる青磁碗である。29は高麗青磁梅瓶の底部破片で、青灰色半透明釉がかかる。線描きの雷文、飛雲文を施す。30~32は青磁碗で、暗オーラー色の釉が厚くかかっている。33は李朝の粉青沙器で白色土の象嵌がある。34は安南の陶器で内面には鉄絵があり、高台疊付縁までクリームがかかった透明釉が施される。疊付は露胎で外底には鉄漿が塗られている。35は陶器鉢であるが国産品か。36~40は中国産陶器の大型容器である。41、42は近世唐津焼の碗である。43は「洪武通寶」である。

178号土壙 D-I-e 区検出遺構である。径0.7mの円形をなし、深さ0.3mの浅い掘方である。遺物は出土していない。時期、性格ともに不明である。

179号土壙 (Fig.69 PL.42) C-I-a 区検出遺構である。7号溝に切られる。本来の規模は不明であるが現存長は、長軸1.7m、幅0.7mの不整長円形をなしている。深さ0.8mを計る。出土遺物は量的に少ない。白磁には碗でII類、V類、VI類が各1点、その他2点があり、青磁では龍泉窯I類の碗2点と同安窯系青磁碗II類1点がある。この他陶器類では、A群の口縁が外反する黄釉鉄絵盤2点、C群の甕1点、準A群の四耳壺破片数点があったが、いずれも破片である。青白磁碗1点、白磁托1点もある。国産陶器類では、古墳時代土師器5点、瓦器碗類3点、土師質土器3点などがある。土師皿類も少なく、小破片まで含めて16点の出土である。図示した遺物は、1が土師小皿で糸切底をなし、口径8.7cm、器高1.2cmを計る。2は土師杯で糸切底をなし、口径16.0cm、器高3.6cmの大型品である。これらの土師皿は、ほぼ12世紀半ば頃に位置づけられよう。3は白磁鉄絵の托である。牙白色の胎土で薄く白化粧がなされているようである。鋤部の上面に鉄釉で六弁花文を五箇所に配している。口縁端から鋤部口縁直下まで透明釉が薄くかけられ、細かな氷裂がある。胎は非常に薄手である。仿定窯系のもので、山西

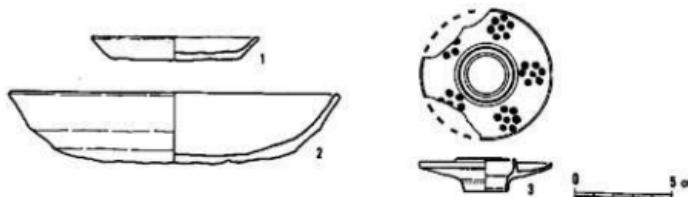


Fig. 69 179号土壙出土遺物

省霍県産とされる。この托と対になるかと思われる杯も見られるが、小片であり、判断できない。12世紀前半から半ばにかけての遺構であるが、性格は明確にできない。

180号土壙(Fig.70 PL.30, 42) C-II-a区上部検出遺構である。181号土壙に隣接する。長軸0.45m、短軸0.38m、深さ0.42mの柱穴様の掘り方を持ち、その上面に長さ45cm、幅30cm、厚さ12cmの偏平な石を配している遺構である。土壙の掘方は、本来大石の直下からあったものと思われるが、確認は出来ない。この掘方の黒褐色砂質土の覆土中から、銅鏡1面が、鏡面を下にして傾いた状態で出土している。この鏡は、径8.65cmを計り、一部縁を欠失するが、ほぼ原形を留めている。全体に鏡に覆われているものの、鏡背の文様は比較的良好に残されている。中央部には小さな鉢があり、孔が穿たれている。草花の間を二羽の鳥が飛ぶ文様が鋤出されており、縁は小さな三角形の断面を呈している。この他に出土遺物は土師杯破片2点のみであるが覆土中に混入したものであろう。この遺構の性格については、掘方の規模から墓とは考えにくく、また、火葬骨や骨壺もなく火葬墓でもない。建物礎石および柱穴とも考えられない。鏡も完形品であることから、何らかの宗教的目的をもった鏡の埋納遺構であろう。およそ13世紀代に位置づけられよう。

181号土壙(Fig.70 PL.30) C-II-a区上部検出遺構である。180号土壙に隣接する。185号土壙に一部切られているが、径0.57mのはば円形の掘方を持っている。180号土壙と同じような形態をもっており、掘方上面に長軸0.24m、幅0.2m、厚さ7cmの扁石な石を配している。掘方確認面からの深さは0.15m程度で浅いが、本来は大石直下からあったものと思われる。出土遺物は全くなく、その年代を決めかねるが、その形態の類似することから、180号土壙とは同時期に営まれたものであり、その性格についても180号同様に宗教的な目的をもつ、何らかの埋納遺構であろうと思われる。

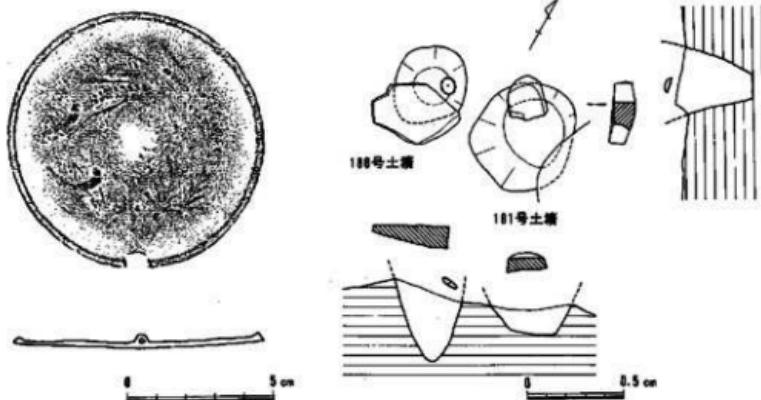


Fig. 70 180号、181号土壙と181号土壙出土遺物

II. 博多遺跡群 一地下鉄路線内の調査(2)一

82

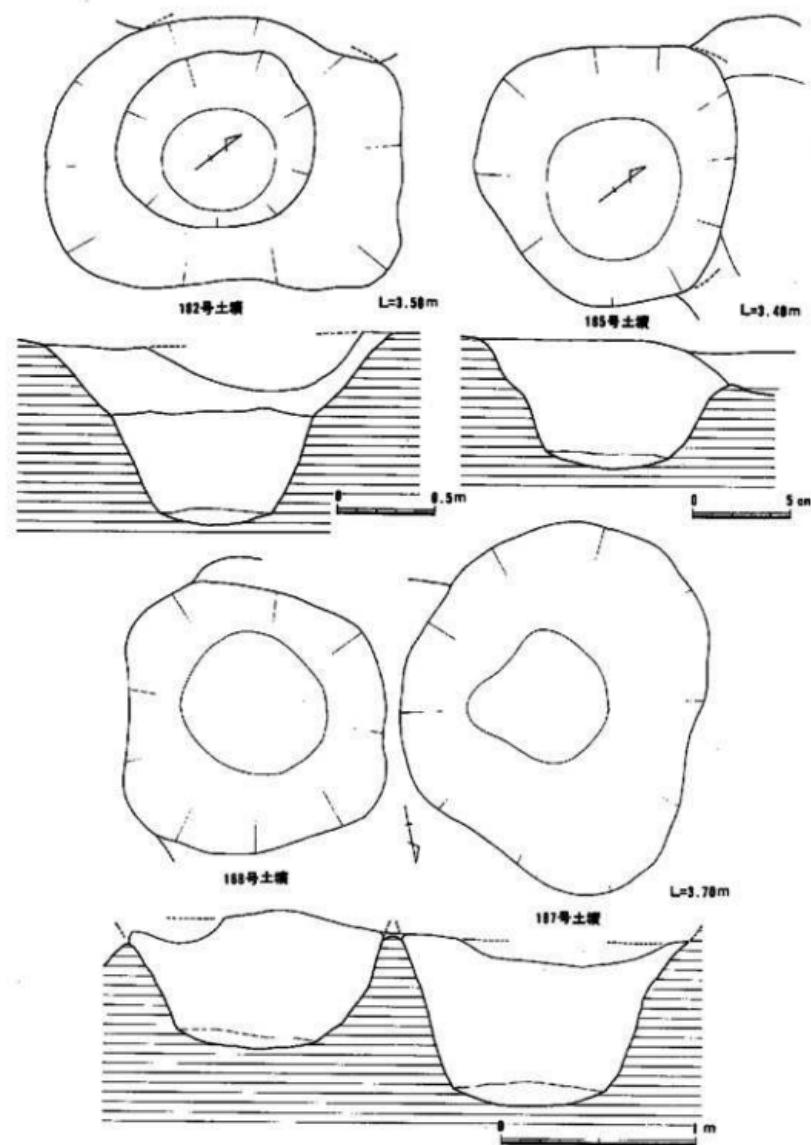


Fig. 71 182号, 185号, 187号, 188号土壙

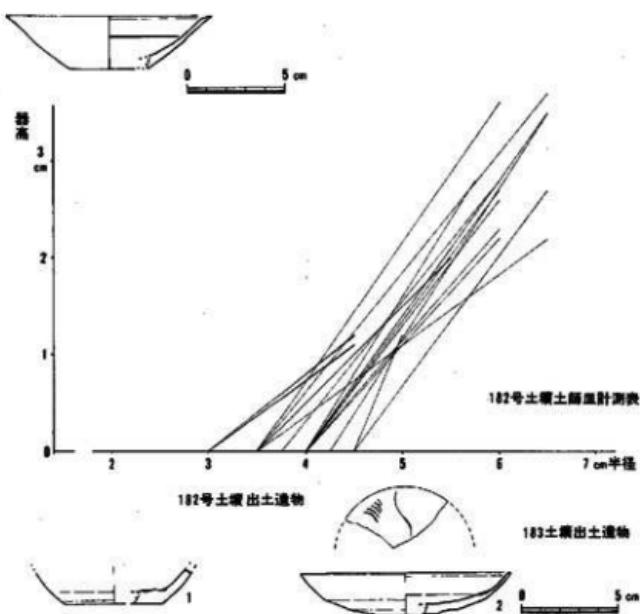


Fig. 72 182号, 183号土壙出土遺物

182号土壙 (Fig.71・72) C-II-a区検出遺構である。長軸1.8m、短軸1.4mのほぼ長方形の上部掘方と、径1.1mのほぼ正円形をなす下部掘方とからなる二重構造になっており、木桶などの内部構造の痕跡は残っていないが、おそらく井戸掘方であると思われる。深さ0.9mを計る。出土遺物は土師皿類が多く、いずれも系切底である。計測表に示すとおり、小皿は口径9~10cm、器高1.2cm前後である。杯は口径11~13cmで、器高2~3.5cmである。バラつきがあり時期は混在するものと思われる。図示した遺物は白磁平皿で、外底のみ施釉されない。14世紀代の遺構であろうか。

183号土壙 (Fig.72) C-III-a区上部検出遺構である。184号土壙を切っている。長軸0.8m、短軸0.6mの長円形の掘方をもつ。掘方は浅い。近世の廐棄物処理用土壙で、近世瓦破片を中心に古墳時代土師器破片から中世までの陶磁器が混在する。図示した遺物は、1が白磁平底皿で通例口ハゲをもつ器形であるが、これは外底を露胎となすものである。2は白磁平底皿でO-II類に属する古いタイプのもので、見込に備描文を施す。

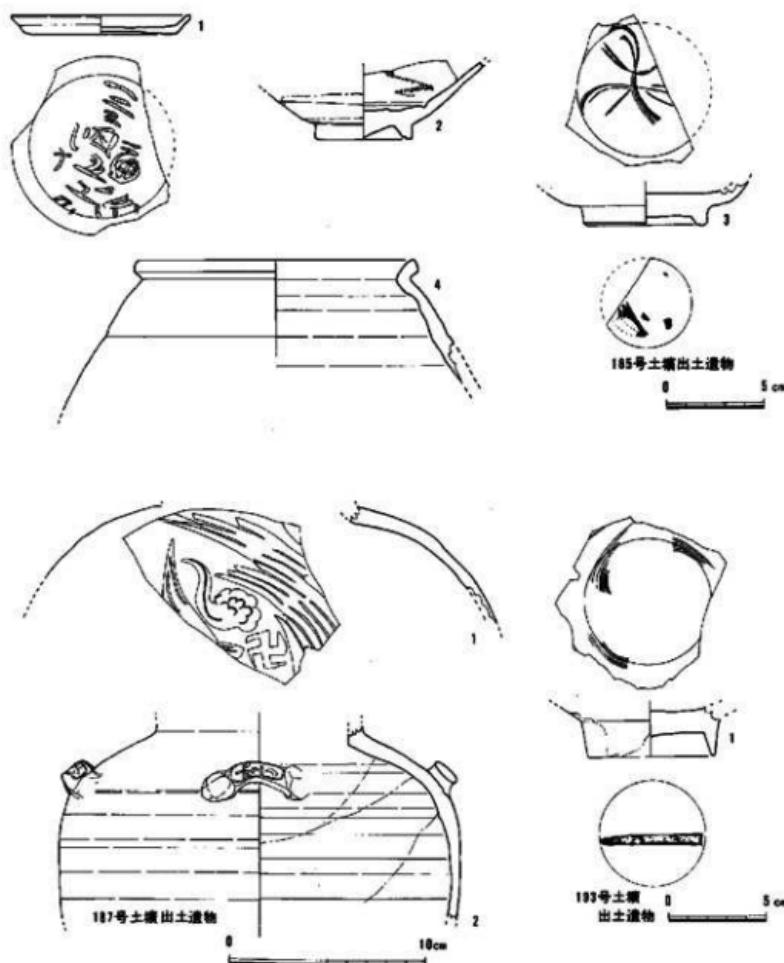


Fig. 73 185号, 187号, 193号土壌出土遺物

184号土壌 C-III-a 区上部検出遺構である。183号土壌に切られる。径1.7m程のほぼ円形をなすと思われる掘方をもつ。近世瓦破片を多く含み、183号土壌より以前に掘り込まれた近世廃棄物処理用土壌である。甕棺破片、古墳時代土師器破片から、中世陶磁片が混在する。

185号土壙 (Fig.71・73 PL.42) C-II-b区検出遺構である。186号土壙と181号土壙を切る。径1.31mの不整円形をなす掘方で現在天端からの深さ0.65mを計る。粗砂層まで掘り込んでおり、木桶などの下部構造物の痕跡は残されていないが、おそらく井戸掘方だろうと思われる。出土遺物のうち図示したものについて若干の説明を加えておく。1は土師小皿である。口径9.0cm、底径7.8cm、器高1.0cmを計り、糸切底をなす。この土師小皿の外底には、「一二三四五六□□九十」の文字と判読できない文字が墨書きされている。古代より、禍を軽じ、生産を高めさせるための呪文の一つに「一二三四五六七八九十 布留辺由良由良」が伝えられており、この土師小皿も呪符として使用されたものであろう。右辺の判読不能の文字も「布留辺由良由良」の一部かもしれない。2は同安窯系青磁碗で体部外面は無文で、内面体部に描绘雷光文をもっている。高台の造りは粗雑で、外面体部下半以下は露胎である。II類に属す。3は見込に片切彫りの蓮華文を施す龍泉窯青磁碗である。外底部は露胎でハマ痕が残り、墨書きが見られるが墨色が進み判読はできない。4はB群に属する陶器で、四耳壺かと思われる壺口縁部である。ガラス質の淡オリーブ色の釉がかかる。土師皿類はいずれも糸切底で、杯は口径12cm、小皿は1の墨書き土師小皿を除いて口径8cmに集中する。このほか口ハゲの白磁平皿破片などもあり、遺構の営まれた年代はほぼ14世紀前半代に求められよう。

186号土壙 C-II-b区検出遺構である。遺構の大半は185号、125号土壙に切られその形状、規模とともに明瞭ではない。出土遺物も少量で、土師皿類小破片15点のほか、龍泉窯青磁碗3点、同安窯系青磁碗6点、同III 2点などがある。12世紀末から13世紀代の遺構であろうが、性格は不明である。

187号土壙 (Fig.71・73 PL.42) C-II-b区検出遺構である。長軸1.9m、短軸1.5mの不整長円形をなし、深さ0.84mを計る。粗砂層まで掘り抜かれており、木桶などの内部構造物の痕跡は認められないが、おそらく井戸掘方であろう。出土遺物は少量であるが極めて興味深い遺物が含まれている。1は梅瓶の肩部破片である。二次焼成を受け表面はカセている。搔落し技法によると思われる施文がなされており、「卍」と馬鹿の糞の端部かと推定される。内面は露胎で、胎は茶色を呈し堅く焼けている。文様は美しいひすい色を呈している。2は白磁四耳壺の肩部破片で、外面には青緑部をおびた半透明釉が厚くかかり、内面には釉が一部二重に薄くかかっている。耳に「李」の陽刻のスタンプが模位に押されている。土師皿類も少量で小破片7点にすぎず、時期は明確にしがたいが、おそらく12世紀後半から13世紀代にかけてのものであろう。

188号土壙 (Fig.71) C-II-b区検出遺構である。一辺1.3mの隅丸方形の形状をなす掘方をもつ。深さ0.7mを計る。これも内部構造の痕跡はないが、粗砂層まで掘り込まれており、井戸掘方であろうと思われる。出土遺物は極端に少なく、古墳時代の土師器甕破片1点と、土師

小皿の微細な破片1点が出土したのみである。覆土中の遺物が少ないと、他の遺構を切っていないことを示し、時期こそ明確にしえないが、周辺遺構の中でも古い段階の遺構であると考えられる。

188号土壙 173号土壙と同一遺構であり欠番とする。

190号土壙 135号土壙と同一遺構であり欠番とする。

191号土壙 C-III-d区検出遺構である。長軸約1.3m、短軸1.2m程の不整円形の掘方であり、深さ0.15mと浅い皿状の断面をなす。112号土壙に切られている。出土遺物は少なく、古墳時代土師器甕破片1点、須恵器破片3点とともに近世瓦破片14点があり、近世の廐棄物処理用土壙である。

192号土壙 C-III-d区検出遺構である。径0.6mのほぼ円形をなし、深さ0.3mを計るピット状の掘方をもつ。遺物は全く認められない。覆土は明茶褐色砂である。時期および性格は明確にしえない。古い時期のものであろう。

193号土壙 (Fig.73) C-II・III-c、d区で検出された。明確な掘り方はもたない。深さ10cm程の浅い窪みで、明茶褐色砂が覆土となる。図示した遺物は、外底露胎部に「一」の墨書をもつ白磁碗で、IV類に属するものである。それ以外の遺物は微量で、わずかに土師小皿小破片が1点みられるにすぎない。時期、性格ともに不明であるが、自然地層の窪みの可能性もある。

194号土壙 171号土壙と同一遺構であり欠番とする。

195号土壙 (Fig.74・75 PL.31-2・42・43) C-II-d区検出遺構である。196号土壙を切っている。長軸3.7m、短軸2.6m程度の不整円形をなし、深さ0.45m程の浅い擂鉢状の断面形をなす。出土遺物は多い。図示した遺物を若干説明する。1は口縁口ハゲの青白磁平皿である。2は青白磁壺形合子の壺で、上面に花文の浮文が型押しされている。3~9は白磁碗である。3はIV類、4はVI-1類で見込の釉を輪状に搔きとる。5、6はII-2類に属し、口縁は肥厚せず、内面体部に白色堆線が施されている。7、8はIX類で見込の釉を輪状に搔きとる。9は未分類の白磁碗である。内面に描画文が施され、外底露胎部に「尾(カ)」の墨書が残る。10~16は白磁皿である。10、11は高台付皿のII類で、見込の釉を輪状に搔きとる。12、13は平皿のIV類で、12は内面体部に白色堆線をもち、13は口縁を輪花にする。13の外底には墨書が残されるが、文字不明。14、15は平皿VI類で、14は見込に片切彫りの蓮華文を施す。16は平皿0-1類であるが、低い高台様の底をなし、見込に線描文を施す。17は白磁壺の蓋で、青白磁様のわずかに青味のある透明釉がかかる。18~23は龍泉窯青磁である。18は0類碗で古いタイプである。19~21はI類碗、22は外面体部に線描き連弁をもつII-2類碗、23は鶴連弁をもつIII類の小鉢である。24は同安窯系青磁皿、25は内面体部に線描文をもち、外面体文下半は露胎の青磁碗である。26、27は青磁皿で、26は外底に珪砂の目跡を残し、27は基筒底をなす。28~35

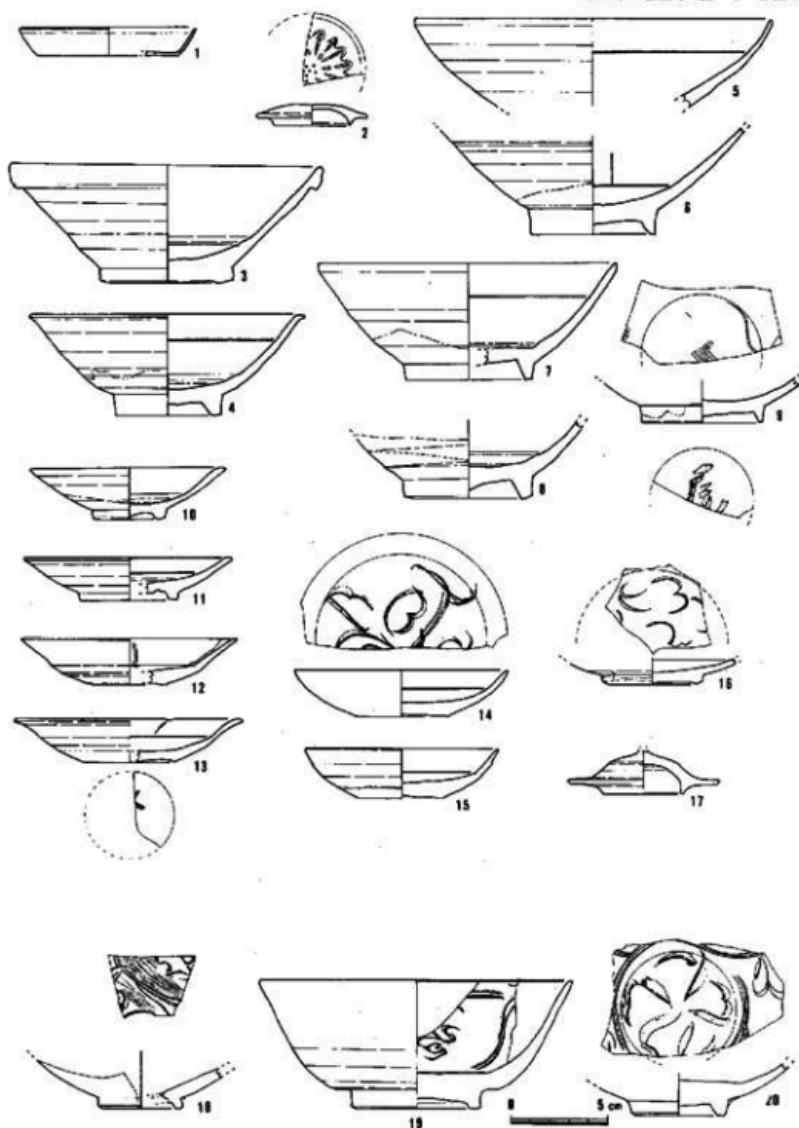
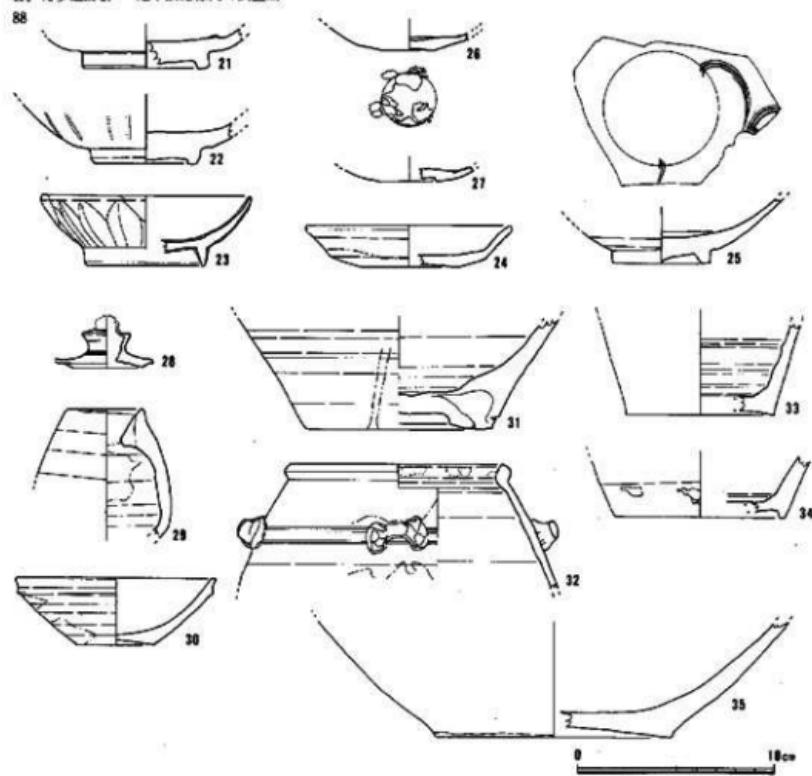


Fig. 74 195号土壇出土遺物(1)

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

88



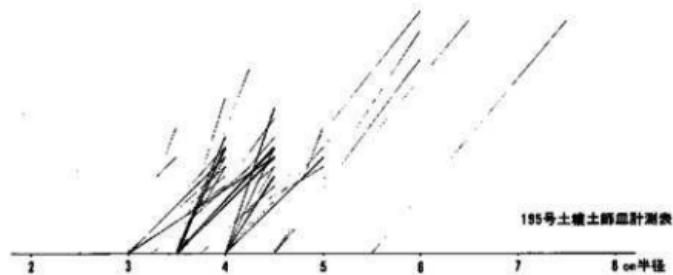
器高

3
cm

2

1

0



195号土壤出土遺物

Fig. 75 195号土壤出土遺物(2)

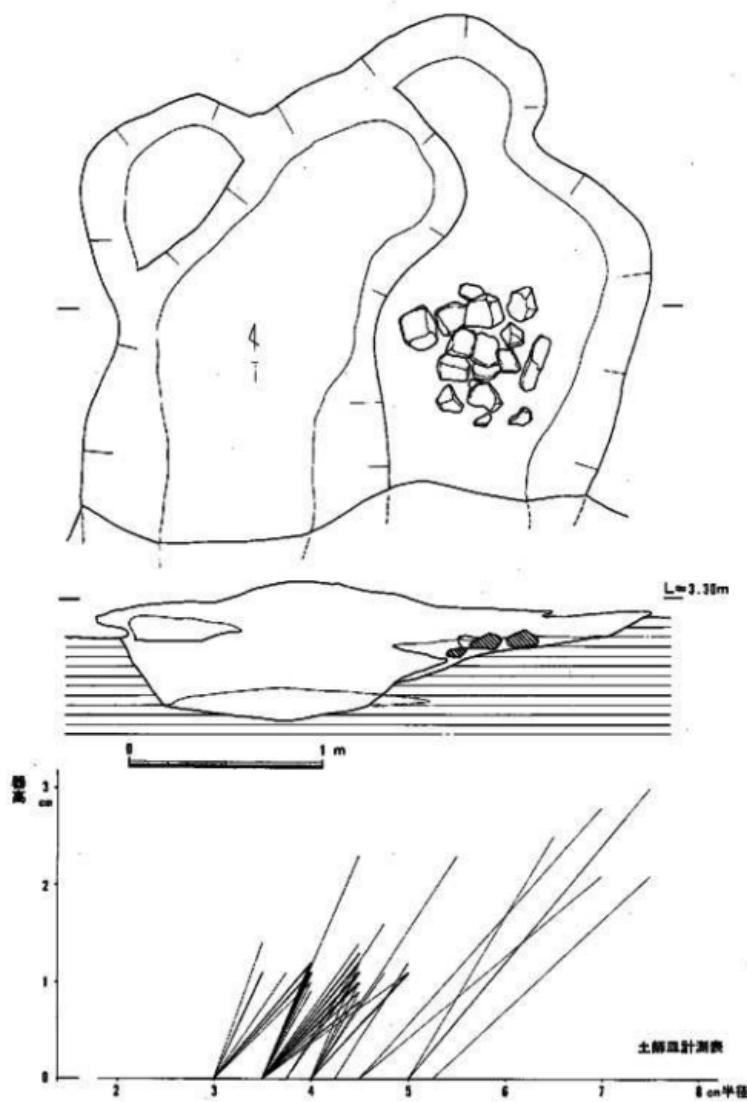


Fig. 76 196号土壌と196号土壤出土遺物

II. 博多遺跡群 - 地下鉄路線内の調査(2) -

90

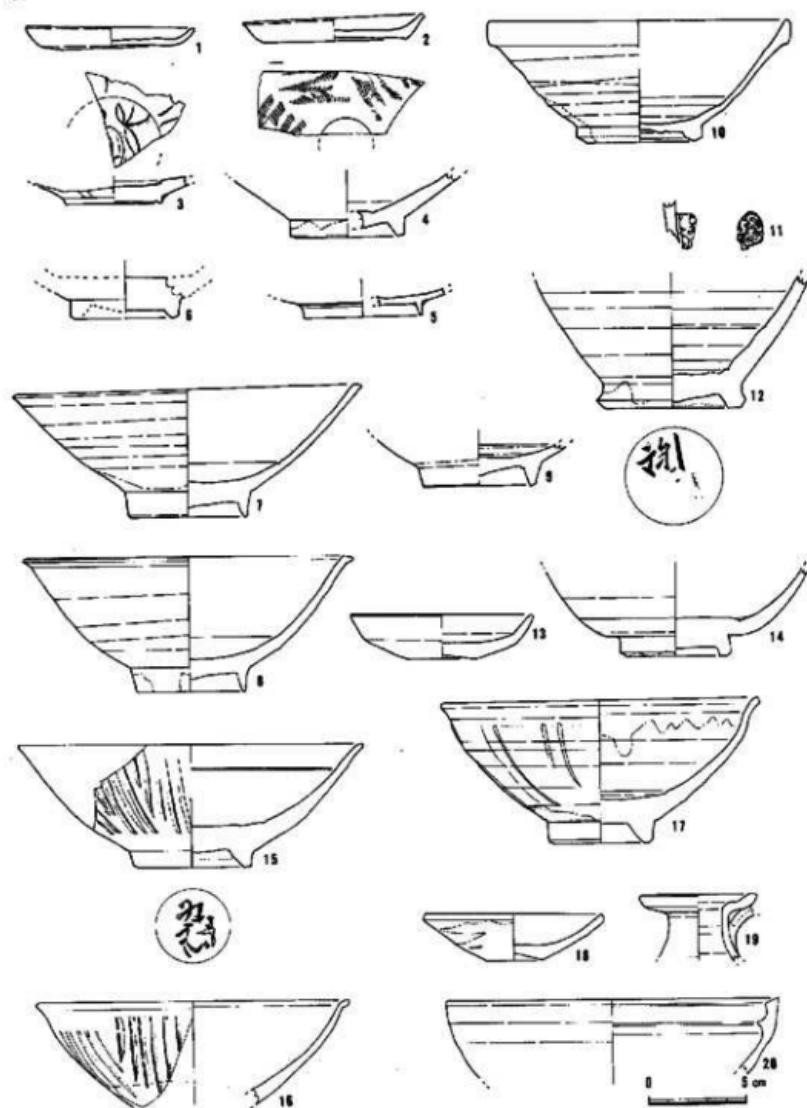


Fig. 77 196号土塚出土遺物(2)

は陶器である。28は準A群蓋、29はB群の壺で器形は明確でない。ひさご形をなすものか。30は皿で口縁直下の肥厚部に浅い窪みをつける。31、32はB群の四耳壺である。33はB群の長瓶か。34もB群の壺であろう。外面に目跡が残る。35はC群の捏鉢である。土師皿類も多く、計測表に示すとおりである。口径のバラつきが大きく時期差のあるものが混在しているものと思われる。器高の高い小皿も見られることから14世紀代に當まれた遺構であろう。多量の瓦破片もあり、これらの廃棄物処理用土壙である。

195号土壙 (Fig.76・77 PL.31-2, 43) C-II-a 区検出遺構で195号土壙に切られる。正確な規模は不明であるが、径2.5m以上の不整円形をなすものであろう。一段の掘方を持ちテラス部分には幼児頭大の礫を堆積している。出土遺物は甕棺破片から奈良時代土師器片、中世陶磁まで多量である。図示した遺物は、1、2が土師小皿でいずれも糸切底、それぞれ口径8.6cm、9.3cmを計る。3は青白磁皿と思われる。内面に片切形の花文を、外面上に同じく蓮弁文を施す。外底を除いて全面に施釉される。4は青白磁または白磁の碗で見込に小さな茶溜をもち、体部に櫛描雷光文をもつ。5は薄い胎をもつ青白磁で皿であろう。7~10は白磁碗で、7、8がVI-1類、9がIX類、10がIV類である。11は白磁水注の耳で印花文の装飾がつく。12は白磁水注または四耳壺の底部で、外底高台内に墨書が残される、一部褪色しており明確でないが、おそらく「綱司」であろう。13は龍泉窯青磁平皿で、見込に文様があるが、釉が厚く明確でない。14は龍泉窯青磁碗のI類で、無文である。高台内露胎内に径3cm程のハマの痕跡が残されている。15~17は青磁碗で外面体部に櫛描きの粗い放射状沈線文を刻んでいる。15は見込の釉を輪状に搔きとり、外底疊付以内は露胎で高台部には砂が付着する。露胎部に墨書が残されているが、判読できない。16は口縁端をわずかに外反させる。17も口縁部を外反させるもので、外面体部の削りが粗い。18は陶器平皿で外面体部下半は露胎で、口縁端は釉を削り重ね焼きをする。体部中位に目跡が3ヶ所残る。19は陶器C群に属し、盤口をもつ。把手がついており、二耳を菱形とする水注であろうか。黒褐色釉がかかる。20は陶器C群捏鉢である。石英粒を多く含み胎は粗い。土師皿類は計測表に示すとおりでいずれも糸切りである。杯には口径17cm近い大型品と12~13cmのものとが混じり、小皿は8~9cmが多い。このほか多量の礫と瓦を含んでいる。12世紀後半から13世紀代にかけての廃棄物処理用土壙であろう。

197号土壙 (Fig.78・79 PL.43) C-II-c 区検出遺構である。123号、126号土壙に切られている。径は1.9m程度の不整円形をなし、深さ0.83mを計る。出土遺物は多く、多量の礫、瓦破片に混じっている。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗で、内面に片切形と櫛描きによって水波文を施している。2は外面体部に櫛描部を施す青磁碗で、外面下半は露胎である。3は見込に片切形の蓮弁文を持つ白磁皿で、釉が部分的に厚く溜っている。4は高台付白磁皿で、見込の釉を輪状に搔きとる。5~7は白磁碗で、それぞれ5はIX類、6はIV類、7はVI類に属す。8は陶器A群の黄釉

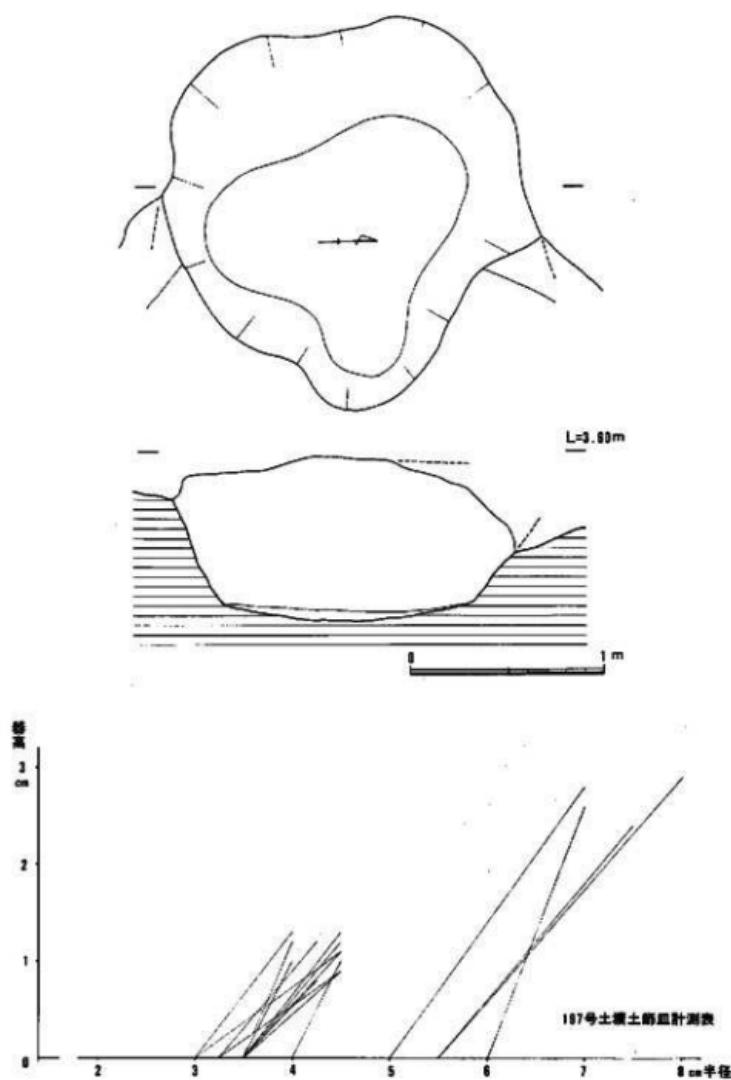


Fig. 78 197号土壤と197号土壤出土遺物

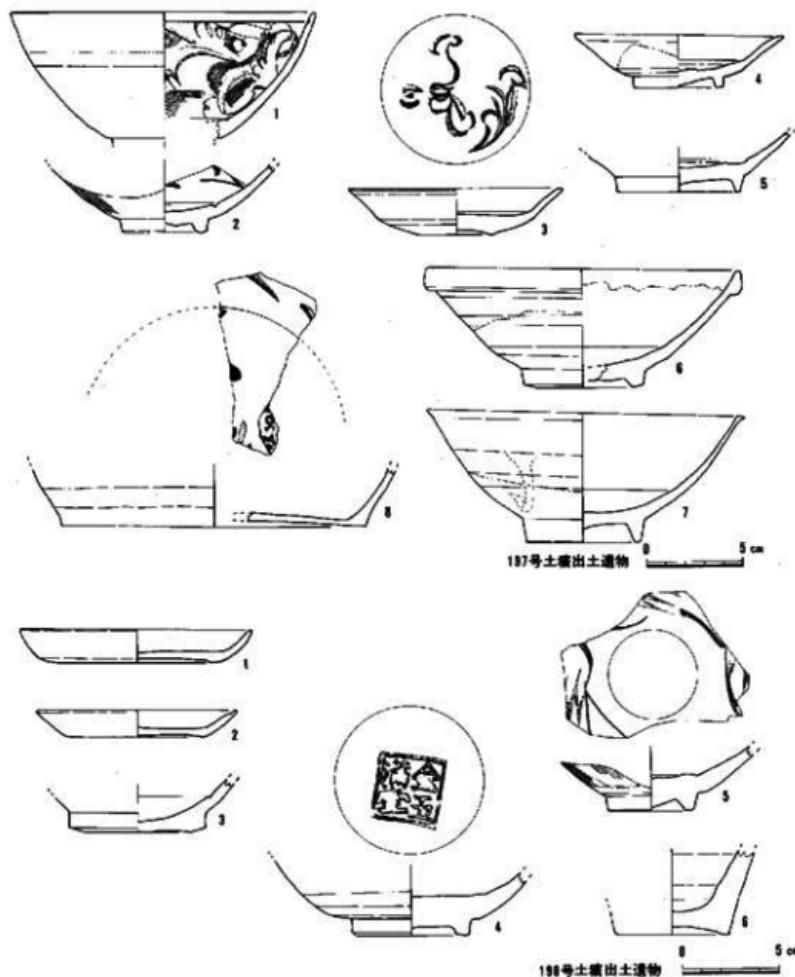


Fig. 79 197号, 198号土壌出土遺物

鉄絵盤で、内面体部と見込に鉄彩花文をもつ。土師皿類はいずれも糸切底で、小皿は口径8~9cm、器高1cm前後に、杯は口径14~16cm、器高2.4~2.9cmにある。このほか甕棺破片や古墳、奈良時代の土師器、須恵器などの破片も混在している。13世紀前半代の廃棄物処理用土壌であろう。

198号土壌 D-III-a区上部検出遺構である。199号土壌と切り合うが、前後関係は不明である。掘り方は明確でない。近世初期の廃棄物処理用土壌であり、甕、瓦破片や唐津、伊万里系の陶磁器とともに、中世以前の遺物も混在するが、量はそれ程多くない。

199号土壌 (Fig.79 PL.43) D-III-b区上部検出遺構である。198号土壌、260号土壌とも接するが切り合い関係は明確でない。しかしながら、いずれも17世紀初頭頃の廃棄物処理用土壌であり、ほぼ同時期に掘り込まれたものであろう。甕、瓦破片等が多量にあり、唐津、伊万里系の陶磁に混じって中世以前の陶磁も多数出土する。図示した遺物は次のとおりである。1は土師器杯で糸切底をなし、口径11.8cm、器高1.7cmを計る。2は口ハゲの青白磁皿で無文、外底の釉を拭っているが、薄く凹凸に残っている。3は白磁碗でIV類、4は見込に「金玉満堂」のスタンプを押す龍泉窯青磁碗である。5は内外面に櫛描文をもつ同安窯系青磁碗である。6は陶器B群に属する瓶または壺である。

200号土壌 (Fig.81) D-III-b区上部検出遺構である。遺構の大半は土留壁柱に切られており全体形は不明。近世初頭以降の廃棄物処理用土壌であり、伊万里、唐津系の陶磁が出土する。図示した遺物は、見込物を輪状に掻きとる高台付白磁皿である。

201号土壌 (Fig.81) C-II-e区上部検出遺構である。長軸2.7m、短軸1.3mの長円形をなす浅い掘方である。古墳、奈良時代の土師器、須恵器破片が混じる。図示した遺物は、1が白磁平皿のIII類、2が同じくIV類に属するもので、3は龍泉窯青磁碗である。I~6類に属する。2には墨書が見られるが判読できない。12世紀後半から13世紀にかけての廃棄物処理用土壌であろう。

202号土壌 (Fig.80・81) D-I-c区上部検出遺構である。下水管等によって切られ掘方は明確でないが、瓦破片を集積する土壌で、近世後期以降のものである。瓦以外の遺物は微量で図示した遺物は、糸切土師小皿で体部下半に穿孔が見られるものである。

203号土壌 D-II-d区上部検出遺構である。3.3m×2.5mの長円形の掘方で、深さ1.1mを計る。黒褐色粘質土中に多量の瓦と陶磁類が堆積している。いずれも近世後期以降、近代にかけてのもので、廃棄物処理用土壌である。

204号土壌 (Fig.80・81) D-II-d区上部検出遺構である。二段の掘方をもち、壁面、床面などには酸化鉄の薄い層ができている。近世の廃棄物処理用土壌であり、黒色粘質の覆土中多量の瓦と陶磁類を含む。図示した遺物は、1が土師小皿で糸切りの外底に「せち(カ)」の仮名文字が墨書きされる。2は見込に櫛描文をもつ青磁平皿、3は陶器B群に属する瓶である。

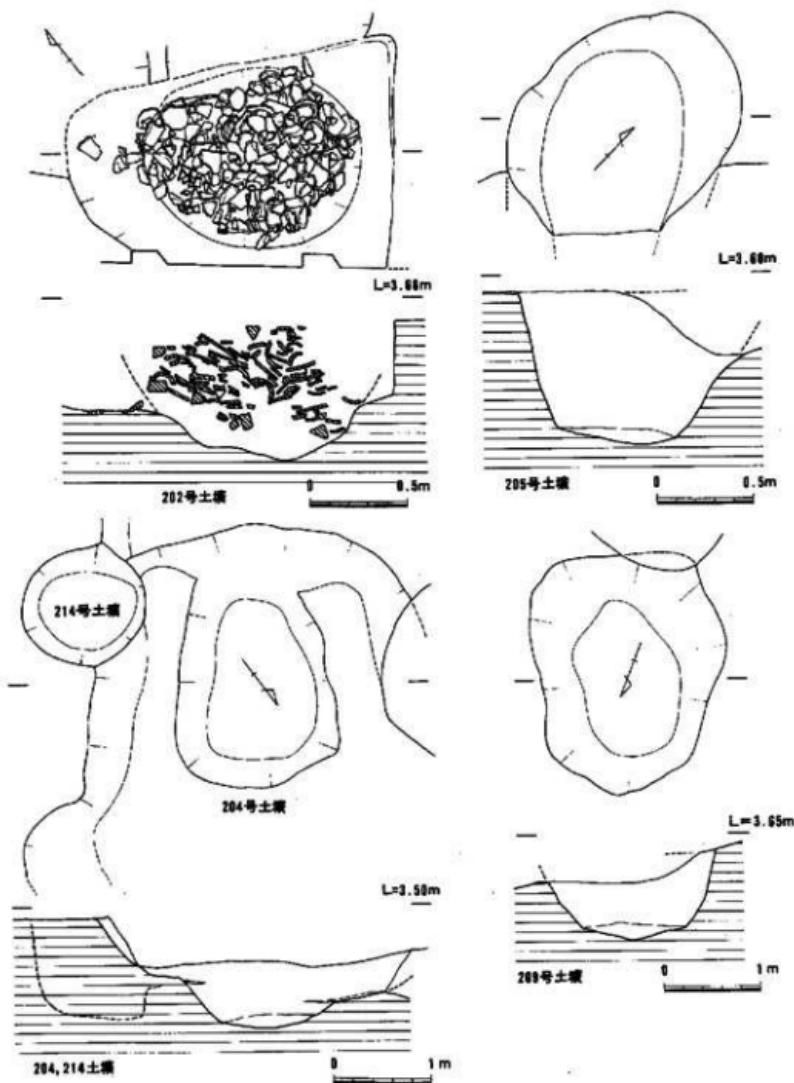


Fig. 80 202号, 204号, 205号, 209号, 214号土壤

II. 博多遺跡群 - 地下鉄路線内の調査(2)-

96

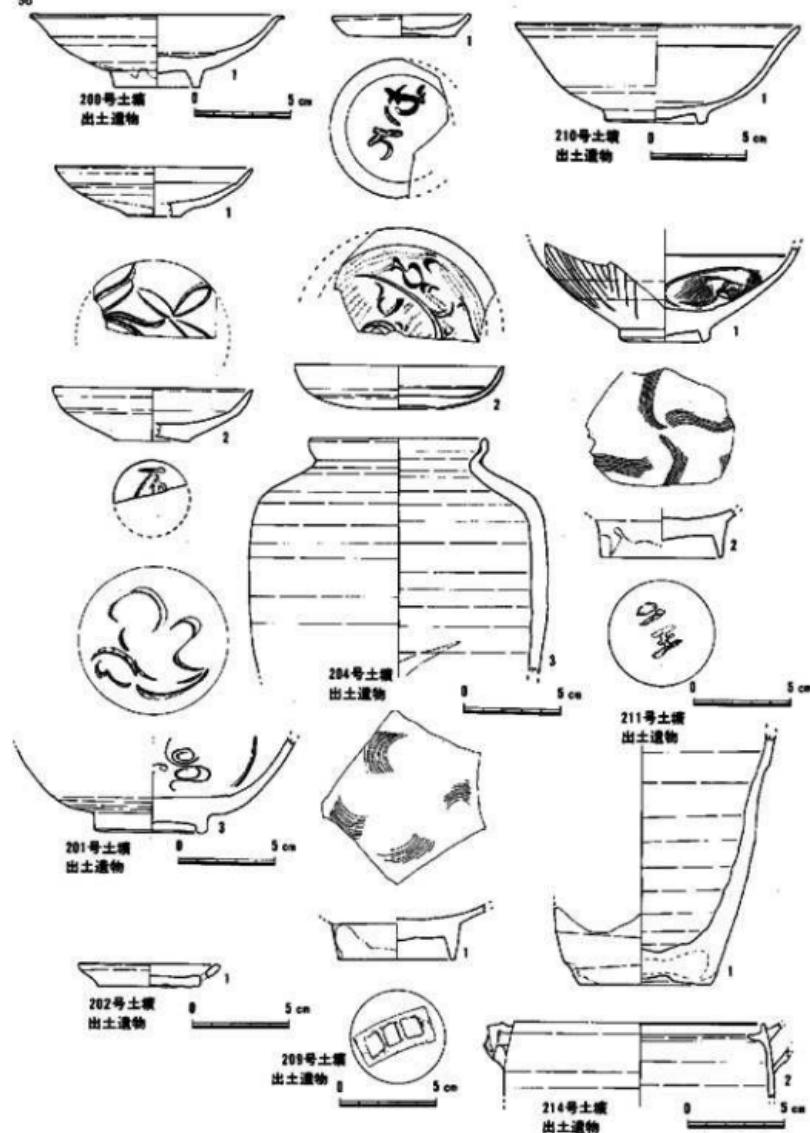


Fig. 81 200号, 201号, 202号, 204号, 209号, 210号, 211号, 214号土壙出土遺物

205号土壤 (Fig.80) D-II-c区上部検出遺構である。218号土壤を切る。長軸1.4m、短軸1m程度の長円形の掘り方を持ち、深さ0.75mを計る。粗い灰白色砂が覆土であり、多量の近世瓦、陶磁類が含まれる。土師質の土笛もあった。いずれも近世末から近代にかけてのもので、廃棄物処理土壌であろう。

206号土壤 D-II-e区上部検出遺構である。207号土壤と切り合うが、覆土は黒色粘質土で似ており前後関係は明確でない。またプランも明確でない。出土遺物は近世以降のもので瓦、伊万里、唐津系の陶磁破片、石臼などがある。近世の廃棄物処理用土壌である。

207号土壤 D-II-e区上部検出遺構である。206号土壤と接するが切り合い関係は不明である。いずれにせよ近世の廃棄物処理用土壌であり、ほぼ同時期のものであろう。出土遺物は、206号土壤と変わらない。

208号土壤 (PL.44) D-II-e区検出遺構である。206号土壤に切られており、掘り方の下半のみが残っている径0.9mのほぼ円形をなす浅い遺構である。底面に古伊万里の碗があり、それとともに内面に描文をもつVI類の白磁碗が出土している。近世初期の遺構であるが、性格は明確でない。

209号土壤 (Fig.80・81 PL.44) D-I-II-a区検出遺構である。長軸2.45m、短軸2.0m程の隅丸長方形の掘方をもち、深さ0.95mを計る。黒褐色砂が覆土である。床面近くからかなり腐蝕した骨が出土しているが、何のものか不明。出土遺物はやや多い。図示した遺物は白磁碗のVI類に属するもので、見込に描文をもち、外底には「目」または「四」の墨書きを残す。この外、青白磁碗、合子各1点、陶器A群の綠釉盤1点、龍泉窯青磁碗1点などが目立つ。土師皿類はいずれも糸切底で杯が12~13cmの口径をもち、小皿は8~9cmの口径をもつ。13世紀後半頃の廃棄物処理用土壌か。

210号土壤 (Fig.81) D-II-b区上部検出遺構である。径0.8m程のほぼ円形をなす土壌であり、掘方のほぼ底に近い部分のみ残っており浅い。覆土は粗砂で、近世瓦破片や伊万里、唐津系の陶磁が含まれる。軒丸瓦の瓦当文様は三巴文である。図示した遺物は、口ハゲの白磁碗である。高台疊付以内は露胎で、空色がかかった半透明釉が厚くかかっている。近世廃棄物処理用の土壌である。

211号土壤 (Fig.81・82 PL.32-2・44) D-II-d区検出遺構である。径0.92m程のほぼ円形をなし、深さは0.35mで浅い。覆土は黒色を帯びた粘質の砂である。出土遺物には焼塙壺をはじめとする奈良時代の土師器や、格子目叩のある瓦が少量見られるが小破片である。図示した遺物は、1が内外に同安窯系統の描文を施し、底造りなどの器形、施釉法に龍泉窯青磁の特徴を見せる碗である。2は白磁碗VI類に属するもので、外底露胎部に「二王」の墨書きがある。土師皿類は小片である。12世紀代の廃棄物処理用土壌か。

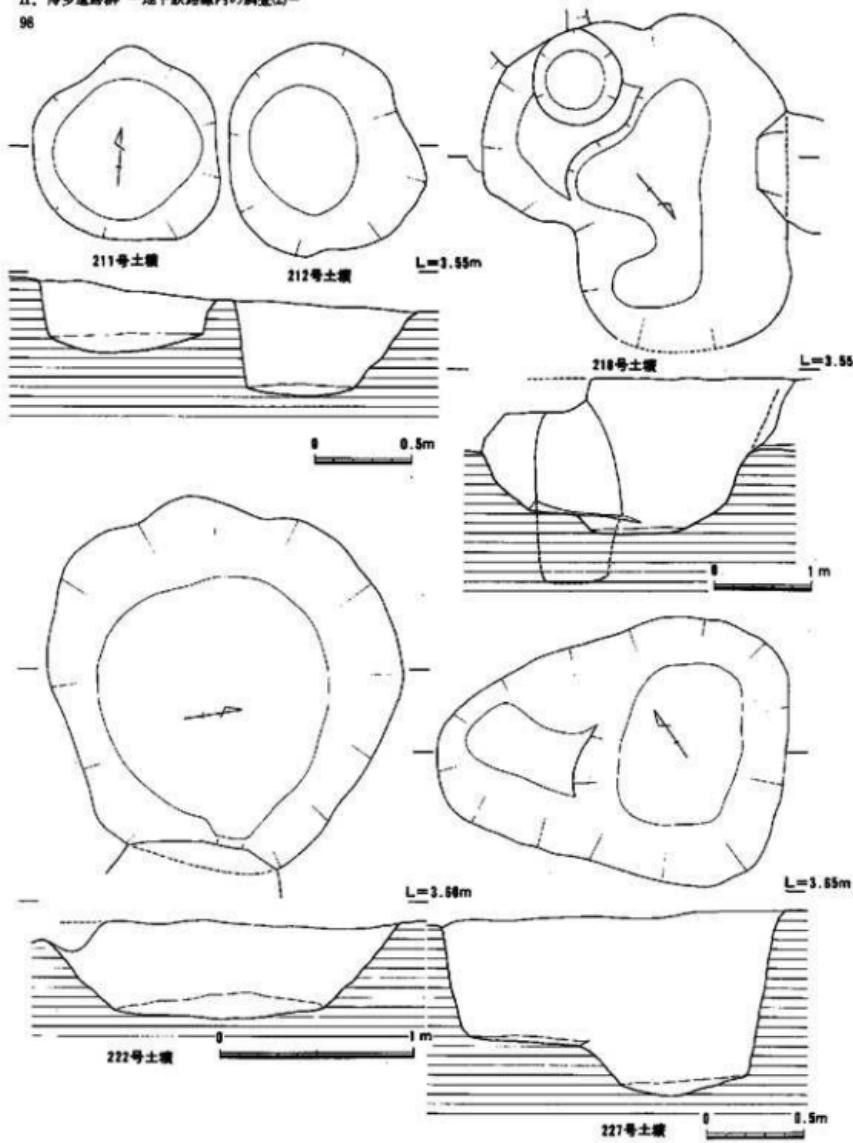


Fig. 82 211号, 212号, 218号, 222号, 227号土壠

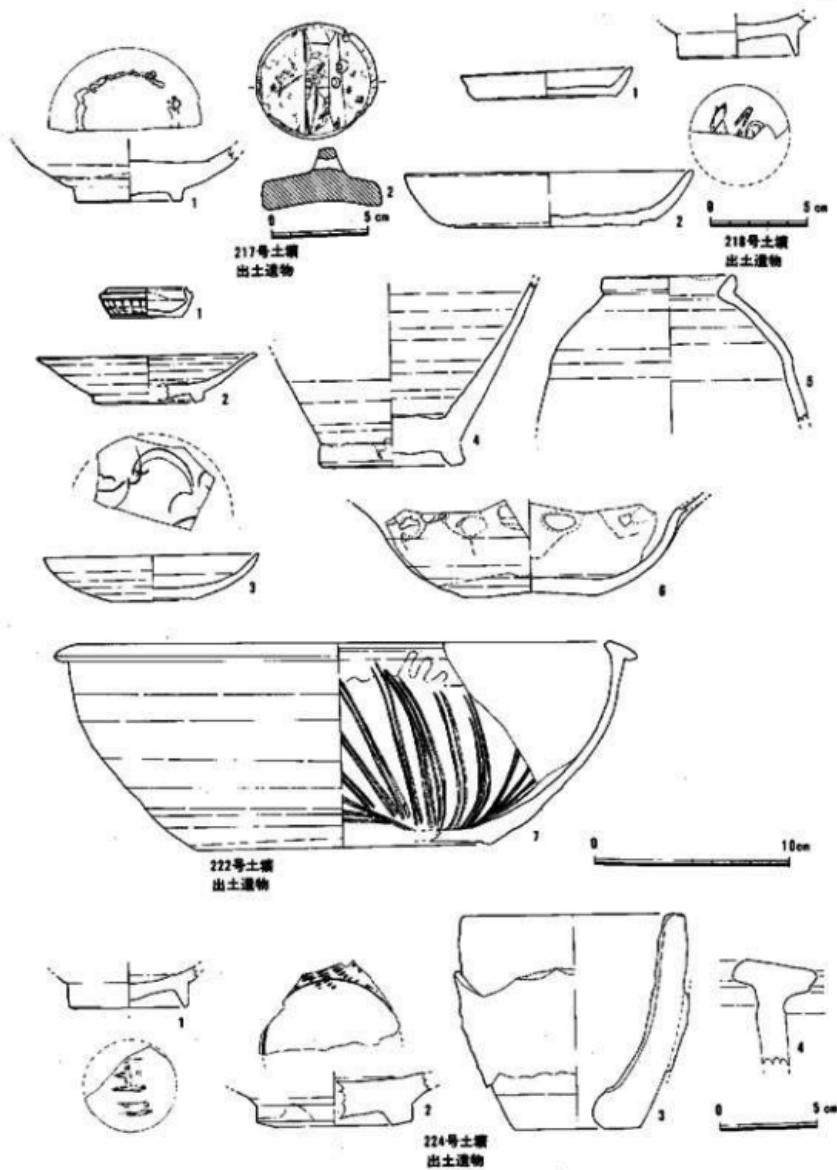


Fig. 83 217号, 218号, 222号, 224号土塙出土遺物

212号土壌 (Fig.82 PL.32-3) D-II-d区検出遺構で、径1m強の円形掘方である。深さ0.45mを計る。覆土は黒色粘質砂で、遺物量は少ない、少量の白磁細片が見られたのみである。時期、性格とともに明確でないが、211号土壌と同様の時期、性格をもつものであろうか。

213号土壌 D-II-d区検出遺構である。長軸1.2m、短軸0.8mの長円形をなす浅い礎み状の土壌で深さ0.1m程度である。灰褐色砂質土が覆土であり、少量の遺物が含まれる。中世以降の遺物は含まず、奈良時代かと思われる土師器甕の小破片が見られるのみである。奈良時代包含層の落ち込みか。

214号土壌 (Fig.80・81 PL.32-4・44) D-II-d区検出遺構である。204号土壌に切られるが、径1.25m程のほぼ円形をなすと思われる掘方で、深さ1.05mを計る。遺物はやや多い。図示した遺物は、1が陶器B群に属する四耳壺または壺で、2はA群の行平であり器壁は薄い。白磁は破片で39点見られるが、青磁は見られない。土師皿類では計測可能なものは1点で、口径15cmの糸切杯である。12世紀代の遺構と思われるが、井戸であろうか。

215号土壌 D-II-a区検出遺構で、172号土壌に切られる。掘方は明確でなく、不整形の土壌で、深さは0.55m程度である。黒褐色砂質土の覆土中に遺物は散漫に分布し、量は多くない。白磁碗6点、青磁碗6点、青白磁1点、陶器3点などがある。土師皿も少量で、いずれも糸切底である。杯は口径13cmと15cmが各2点、小皿は口径10cmが1点である。性格は不明であるが、12世紀半ばから後半頃の遺構であろうか。

216号土壌 172号土壌と同一遺構であり欠番とする。

217号土壌 (Fig.83 PL.44) D-II-c区上部検出遺構である。218号土壌を切る。一辺0.6mの方形で、深さ0.25mを計る。覆土は粘質をおびた黒褐色砂で、遺物は少ない。図示した遺物は、1は見込に目跡を残し、体外半袖の粗雑な青磁碗で、所謂「土龍泉」か。2は滑石製石鍋の鋸部破片を円形に再加工したもので、鋸にあたる部分には穿孔されている。この他、近世陶磁破片も出土しており、近世の搅乱土壌であろう。

218号土壌 (Fig.82・83) D-II-c区上部検出遺構である。近世井戸掘方と本体部である。遺物は多量であるが、近世の陶磁や瓦とともに、黒褐色砂の覆土から、奈良、平安時代初期の土師器、須恵器破片や中世陶磁が出土している。図示した遺物は、1が土師小皿で口径9.8cm、2が口径15cmの杯でいずれも糸切底である。3は外底に墨書きをもつ白磁碗であるが、判読できない。

219号土壌 D-I-c区検出遺構である。221号土壌に切られる。径1.5m程の不整円形をなし深さは0.6mを計る。黒色砂が覆土であり、近世陶磁を含む遺物がある。量は多くない。人骨かと思われるものも見られるが小片で明かでない。近世の廐棄物処理用土壌か。

220号土壌 D-I-c区検出遺構で、0.4×0.3mの長円形のピット状掘方をもつ。深さ0.3mで柱穴であろうか。遺物は須恵器甕小破片1点で、時期は不明である。

221号土壙 D-I-C区検出遺構である。219号土壙を切る。径1.5mのほぼ正円形の掘方で深さ0.85mを計る。近世瓦破片が大量に出土しており、瓦溜めの様相をもつ。近世または近代の廃棄物処理用土壙である。

222号土壙 (Fig.82・83 PL.44) D-I-a,b区検出遺構である。径1.8m前後のほぼ円形をなす掘方で、深さ0.5mを計る。覆土は黒色砂で上面は一部攪乱を受けている。図示した遺物は、1は青白磁合子の身で体部は菊弁の型作りである。他に底径4.5cm程の身がある。2は見込釉を輪状に搔き取る白磁高台付皿で、3は見込に細線で花文を描く白磁平底皿で、外底のみ無釉でハマ跡がある。4は白磁四耳壺または水注である。5～7は陶器で、5はB群の長瓶、6はC群の鉢で、内底に3ヶ所の重ね目があり、体部外面にも目跡が残り、目の部分は顯著にへこんでいる。褐色の光沢のある釉がかかること。7はB群の擂鉢で二本一単位の粗い筋が刻まれている。12世紀後半でこの遺構と思われるが性格は明確でない。廃棄物処理用土壙か。

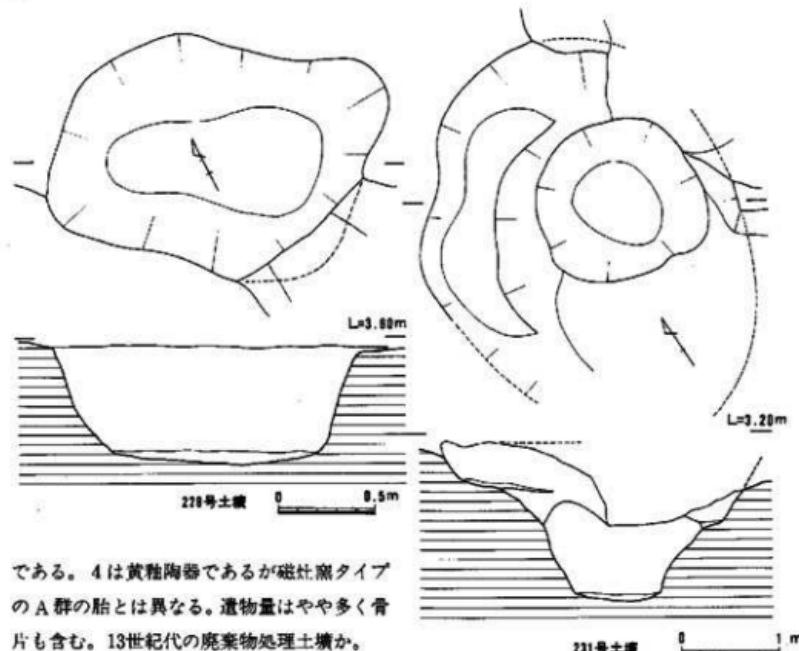
223号土壙 D-I-C区上部検出遺構である。一辺は1m強のほぼ方形をなす掘方で、深さ0.25mと浅い。近世の瓦、磁器に混じって奈良時代の土器がやまとまって出土しているが、いずれも小破片である。黒褐色砂の覆土中から馬齒1点が出土している。近世廃棄物処理用土壙で奈良時代包含層を掘り抜いているのであろう。

224号土壙 (Fig.83) D-III-c上部検出遺構である。十留壁柱に切られ全体形はわからぬが、一辺3.6m程のほぼ方形をなすものと思われる。深さ0.75mである。近世の廃棄物処理用土壙で瓦や唐津、伊万里系の陶磁が多く出土する。出土遺物のうち図示したものは、1が見込を輪状に搔きとる。白磁碗で外底に「王二」又は「二王」の墨書きがある。211号土壙出土遺物にも同様の墨書きがある。2は分厚い底部をもつ青磁碗で見込に櫛描文をもつ。3は長石粒を胎土に含む土器で、二次焼成により表面は灰色を呈し、剥落がはげしい。底に穿孔がある。轆等の一部であろう。4は内面に青海波の印目をもつ陶器大形容器である。

225号土壙 (Fig.85 PL.33-1, 44) D-II-d区検出遺構で、203号、226号土壙に切られている。遺構の形状は不明である。黒色粘質の覆土中に馬の頭蓋骨が残っていた。遺物は少量で、図示した遺物は片切形と櫛描による文様を内面にもつ白磁碗で、他に同安窯系青磁碗2点、同皿1点などの破片があるのみである。馬の埋葬遺構であろうか。12世紀後半頃であろうか。

226号土壙 D-II-d区検出遺構で、225号土壙を切る。径1m程の円形掘方で、深さ0.85mを計る。黒色砂の覆土より骨片と遺物少量が出土している。骨片は225号土壙の馬骨に由来するものか。ロハゲの白磁片もあり13世紀後半から14世紀にかけての頃か。性格は不明。

227号土壙 (Fig.83・85) D-I-b区検出遺構である。長軸1.78m、最大幅1.34mの不整長円形をなし、二段掘りをなす。深さ0.9mを計る。図示した遺物は、1が見込に片切形蓮草文をもつ青磁皿、2が龍泉窯青磁小碗。3が見込に「金玉滿堂」のスタンプを押す龍泉窯青磁碗



である。4は黄釉陶器であるが磁灶窯タイプのA群の胎とは異なる。遺物量はやや多く骨片も含む。13世紀代の廃棄物処理土壙か。

228号土壙 (Fig. 84・85) D-I-b区検出遺構である。243号土壙に一部を切られる。

長軸1.54m、幅1.12mの隅丸長方形をなす。深さ0.6mを計る。遺物は奈良時代のものから近世初頭までが混在する。図示した遺物は、1が陶質に近い青磁碗で全面に灰オリーブ色の釉を薄くかけている。見込と疊付に珪砂の目跡が残されている。2は白磁四耳壺または水注で高台脇まで淡オリーブ色釉がかけられている。3は須恵器の袋物があるが焼成が甘く黄褐色を呈す。凸帯で文様帯を区分し、間に印文を施す。所謂新羅式土器であろうか。口径14.5cm、16cmの土師器へラ切底杯もある。近世初頭の廃棄物処理用の土壙であろう。

229号土壙 D-III-d区検出遺構である。246号土壙を切る。長軸2m、短軸1.6mの長円形を示し、深さ1.05mを計る。近世以降の井戸掘方であろうか。伊万里、唐津系の陶磁器と多量の近世瓦が出土している。

230号土壙 D-III-d区検出遺構である。245号土壙を切る。長軸2m、短軸1.5mの長円形で、深さ0.95mを計る。出土遺物は少なく、伊万里、唐津系の陶磁11点が出土している。近世井戸の掘方である。

Fig. 84 228号, 231号土壙

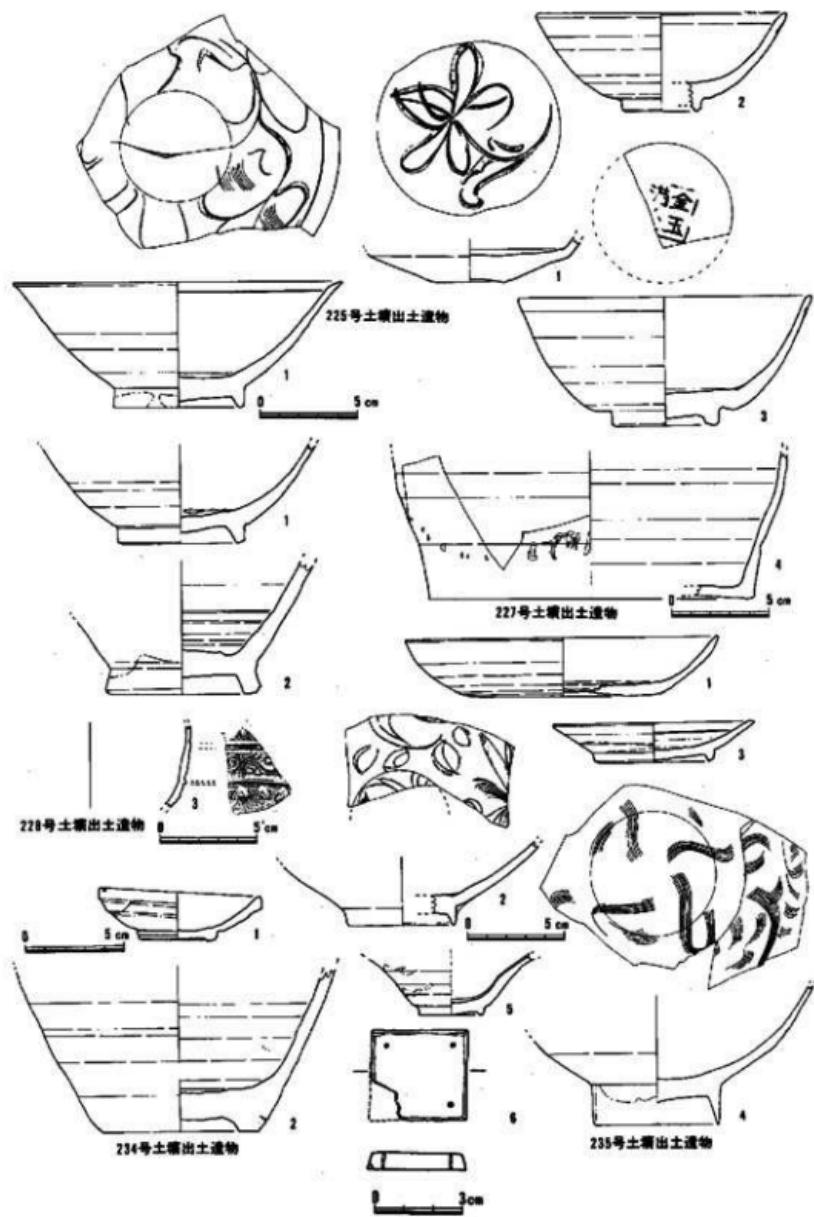


Fig. 85 225号, 227号, 228号, 234号, 235号土壙出土遺物

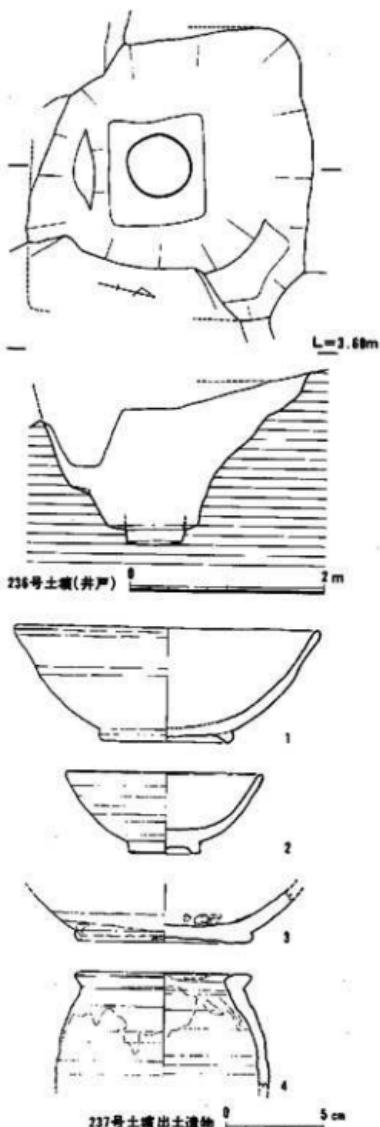
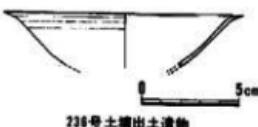


Fig. 86 236号土塙(井戸)と236号・237号土塙出土遺物



231号土塙 (Fig. 84 PL.44) D-III-C区検出遺構である。248号土塙を切る。内部構造は残されていないが近世井戸掘方である。掘方上面の規模は明確でない。本体部掘方は径1.6~1.7mのほぼ円形で掘方上面からの深さは1.6mを計る。出土遺物は近世の瓦、陶磁を中心とし、若干の土師皿等が出土している。写真図版の土師皿小皿は糸切底の外底部に墨書きを残すものであるが判読できない。

232号土塙 D-III-d区上部検出遺構である。掘方は明確ではないが、230号土塙とはほぼ同様の時期であろうと思われる。土師皿類小破片が見られるのみである。

233号土塙 D-III-e区で検出されており、大半は調査区外にはずれ、西側壁の立上りが確認されるだけである。次回報告予定のE区では、この遺構に続く南北方向の大溝が検出されており、この土塙も溝の一部である。

234号土塙 (Fig. 85) D-III-d区検出遺構である。土留壁柱に切られ形状は不明で、遺物も少量である。図示した遺物は、1が口縁を肥厚させる高台付白磁皿I-2類、2がB群の陶器

四耳壺である。土師皿類には口径15cmの杯1点と口径10cmの小皿2点があり、いずれも糸切底である12~13世紀代であるが性格は不明。

235号土壤 (Fig.85 PL.45) D-I-b区検出遺構である。火葬頭骨集積遺構の東下で、長軸1.4m、短軸1.1m程の長円形をなしている。8号溝によって切られている。壁の大半は残っておらず現存深さは0.3m程度である。遺物量は多くないが興味深い遺物が出土している。図示した遺物は次のようにある。1は糸切底の土師器杯で口径16.1cmの大型である。2は白磁又は青白磁の碗である。厚い青味を帯びた灰白釉が疊付をくるんで施され、内面に片切形と櫛描きの丁寧な文様が施されている。3は高台付白磁皿で見込釉を輪状に搔きとる。4は細く高い高台をもち、内面に細かな櫛描文を施す白磁碗で、VI-2類である。5は黒釉天目碗で口縁が朝顔状に開くタイプで、内面には光沢のある漆黒釉が厚くかかり、外面は薄く釉尻では鎌茶色を呈している。べっ口をなすものより古い形態である。6は石帶である。3.2cm×3.4cmで厚さは0.6cmである。一部を欠失する。四隅に裏面まで達する小さな留孔が各1箇穿たれている。表面は風化し白っぽい。蛇紋岩風の石質である。このほか土師器甕や須恵器杯身などが出土している。12世紀代の掘方で奈良時代包含層を掘り込んだものか。性格不明である。

236号土壤 (Fig.86 PL.33-2) D-II-e区検出遺構で、206号、207号、266号土壤などに切られている。一辺3m前後の方形の掘り方をもつ井戸で、水溜めは径0.65mの円形木桶組の構造をもつが痕跡を残すのみである。図示した遺物は青白磁碗で薄い胎で口縁を水平に外方に引き出す。土師皿類は糸切底であるがいずれも小片で計測できない。鏡蓮弁文をもつ龍泉窯青磁碗があり、13世紀後半代の井戸であろう。

237号土壤 (Fig.86 PL.45) D-III-d区検出遺構である。二段掘りをなす。上部掘方は長軸2.9m、短軸1.95mの長円形で、下部掘方は径0.8mの円形をなす。近世の井戸掘方である。瓦、伊万里、唐津系の陶磁に中世以前の遺物が混在する。図示した遺物は、1が研磨土器でテラコッタ色を呈す。2は龍泉窯青磁碗、3は越州窯系青磁体で内面にのみねずみ色をおびたオリーブ釉がかかり目跡が残る。4は陶器B群の短頸壺である。

238号土壤 D-III-d区検出遺構で、土留壁柱に切られ全体形不明である。近世の廃棄物処理用土壤であり、瓦、伊万里、唐津系陶磁が含まれるが量は少ない。

239号土壤 (Fig.87 PL.45) D-III-d区上部検出遺構である。1.1m×0.9mの長円形の土壤であるが、明治時代頃の陶磁や七輪などの瓦質土器と礫が多く出土し、中世以前の遺物がこれに混じる。近代の廃棄物処理用土壤である。図示した遺物は、1が越州窯系青磁鉢で内面と外面底部下半まで不透明の淡青磁色の釉がかかる。目跡が見込に多く残る。2は高台付白磁皿である。3~7は陶器で、3は準A群甕、4はB群壺、5はB群長瓶である。6は綠釉鉢で内底に割花文がある。7はA群四瓦壺で肩から釉下鉄彩が下に垂れる。

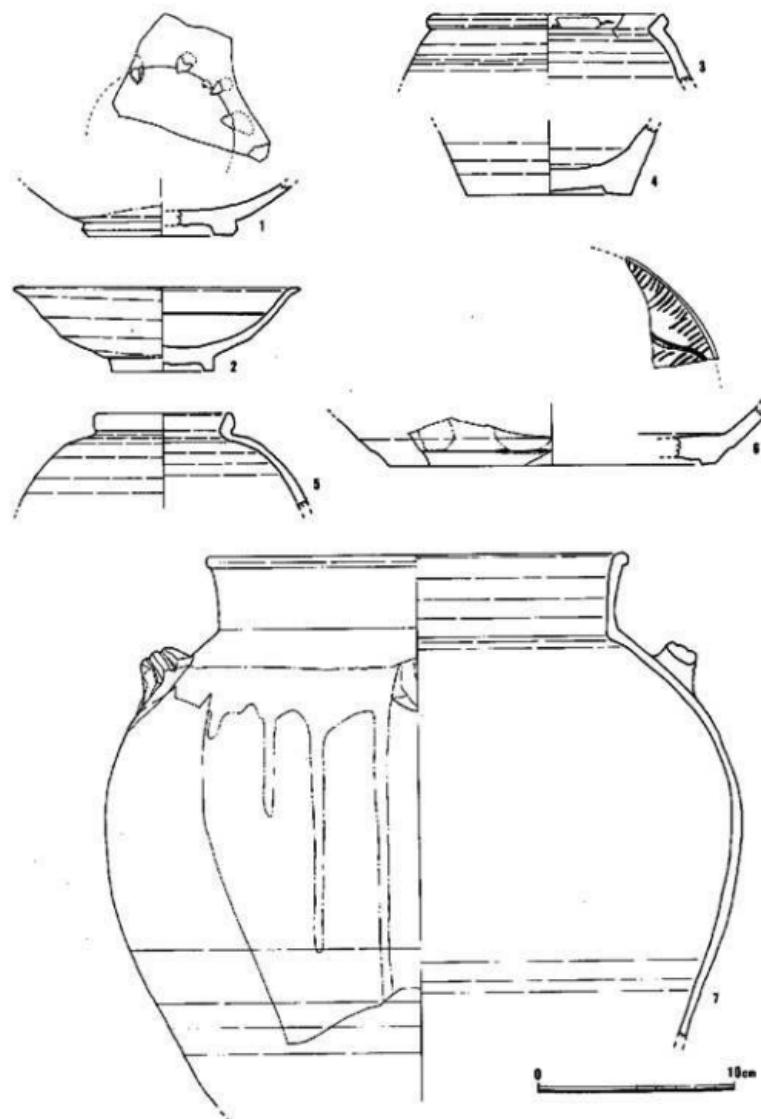


Fig. 87 239号土壙出土遺物

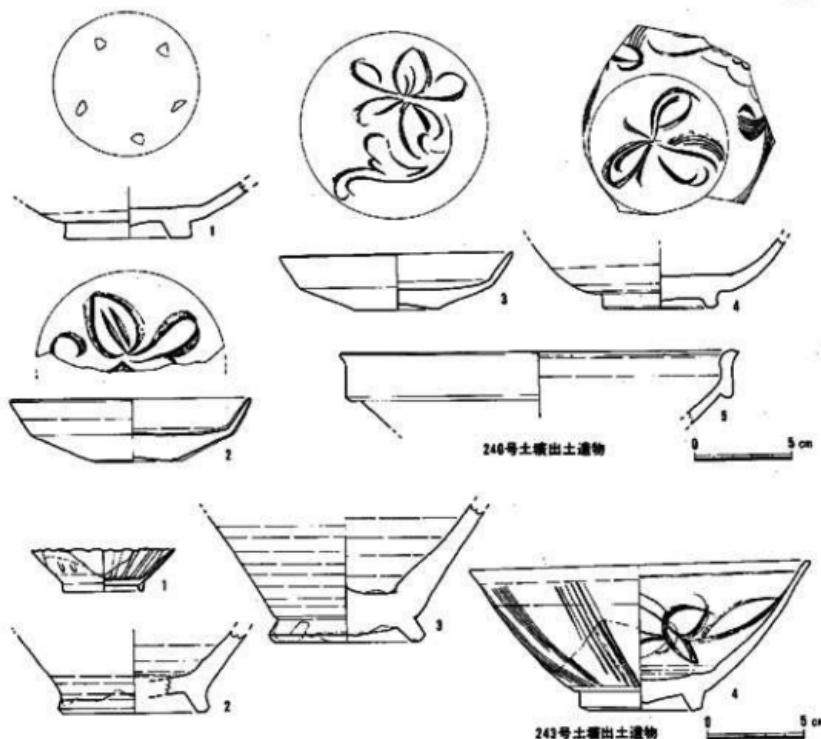


Fig. 88 240号, 243号土壌出土遺物

240号土壌 (Fig.88 PL.45) D-I-b区検出遺構である。255号土壌を切る。長軸は1.6m、短軸1.0mの長円形をなす掘方で、深0.95mを計る。出土遺物はやや多い。図示した遺物は次のようである。1は白磁碗でクリーム色のやわらかい胎で、クリーム色の釉を全面に施釉し、見込に胎土目が5箇所に残る。2、3は龍泉窯青磁平皿で、見込に片切彫蓮華文を描き、外底を除く全面に厚く施釉されている。4は龍泉窯青磁碗で内面に片切彫と櫛描きの割花文をもつ。外底には径3.5cm程のハマ痕が残る。5は陶器C群に属する描鉢で赤褐色の胎土で、直立する折返し口縁をもつ。茶色のうすい胎がかかり、広い間隔で筋目がはいる。土師皿類は小破片が少量みられるのみである。15~16世紀の廃棄物処理用土壌であろうか。

241号土壌 (PL.45) D-I-b区検出遺構である。長軸2.0m、幅1.1mの長円形で0.5mの深さである。近代の擾乱土壌である。写真を掲げたように龍泉窯青磁碗の優品が出土している。

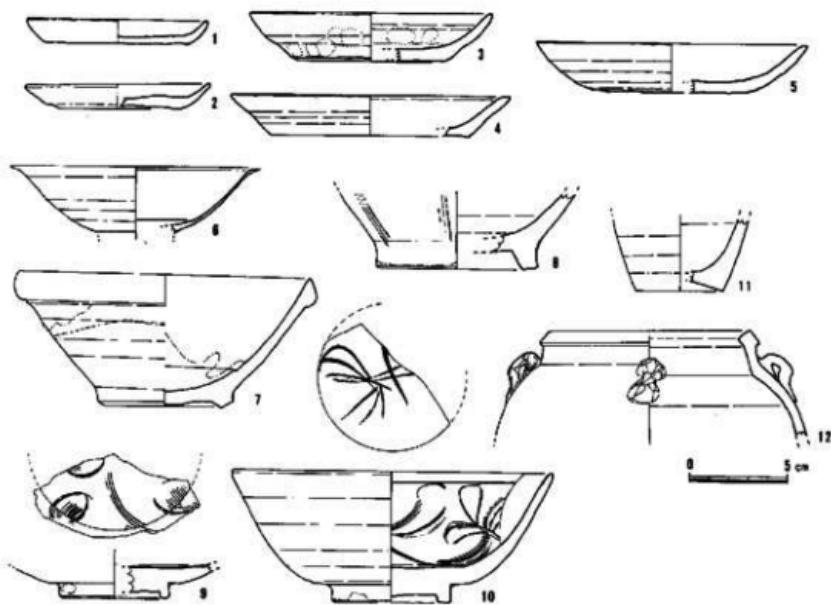


Fig. 89 246号土壌出土遺物

242号土壌 D-I-b区検出である。径0.8m程の円形掘方で、0.25m程の深さである。遺物はほとんど見られないが222号土壌に切られており12世紀代と思われる。黄褐色砂がつまる。柱穴かもしれない。

243号土壌 (Fig.88 PL.46) D-I-c区検出遺構である。228号土壌に切られているが、径0.8m程の円形掘方で0.2mの深さしかない。近世廃棄物処理土壌で、中世以前の遺物量は少ないが、次の4点が図手しえた。1は粗製の青白磁高台付皿である。内側型押しで菊弁形に作るが、外面は明瞭でない。高台は貼りつけている。2、3は白磁の四耳壺又は水注の底部片である。2は底作りが薄く、高台脇以下が露胎、3は厚い底作りで、器面の削りは粗いが青白磁風の光沢のある釉がかけられている。4は外面体部に粗い描文を、内面体部に片切形の割花文を持つ青磁碗である。茶味の強い釉がかけられているが見込は輪状に搔きとられている。

244号土壌 D-III-e区検出遺構で、237号土壌に切られるが、1.5×1.2m程の長円形掘方をもつ。深さ0.6mを計る。遺物は微量で、近世七郎質七輪のサナがあり、近世の遺構であるが、陶器、須恵器、白磁もわずかながら見られる。

245号土壤 D-III-d区検出遺構である。230号土壤に切られ、246号土壤を切る。掘方線は明確でないが、長軸1.6m、幅が1m前後の長円形をなしていたものと思われる。遺存している深さは0.55m程度である。廃棄物処理用土壤かと思われるが、時期については遺物が少ないものの切合い関係から、近世初頭以降と考えられる。

246号土壤 (Fig.89 PL.46) D-III-d区検出遺構で、229号、249号の近世遺構に切られしており、遺構の形状は明確でないが、長軸2.3mの長円形をなすものと思われ、深さは0.55m程度である。黒褐色砂質土が覆土である。周辺の土壤同様に、近世初頭の廃棄物処理用土壤である。遺物は多く、瓦や二重口縁をもつ土師質灯明皿、唐津陶器などとともに中世以前の陶磁器類も多く混在している。図示した遺物は次のようにある。1～5は土師皿類である。いずれも糸切底である。6は青白磁の高台付杯である。薄胎で青味の強い透明釉がかかり優品である。7はIV類の白磁碗、8は白磁四耳壺で外壁に三本1単位の浅い沈線を施し、青味をおびた半透明釉をかけている。9、10は龍泉窯青磁碗でいずれも内面に片切影と櫛描きの割花文を施している。11はB群の陶器類で灰色の釉がかかっている。12は無釉の陶器四耳壺である。C群に属するものと思われる。

247号土壤 D-II-d区検出遺構である。径0.8m程のほぼ円形をなす小さな掘方である。近世中～後期頃の廃棄物処理土壤で近世瓦、伊万里、唐津系の陶磁器とともに、繩目叩きのある瓦や白磁片が混在している。

248号土壤 (Fig.90 PL.46) D-III-C・D区検出遺構である。224号、231号の近世遺構によって切られているが、この遺構もそれらの土壤とそれ程の時期差はない。近世の廃棄物処理土壤である。瓦や近世陶磁類に混って、青磁、白磁が多く見られる。図示した遺物について若干説明する。1、2は土師器杯でいずれも糸切底で板状底が残る。1は口径14.5cm、器高3.1cm、2は口径15.8cm、器高2.9cmを計る。3は丸底杯で体部下半は肥厚し、外面下半に指頭痕が残る。内面はヘラ研磨を行っている。4、5は白磁碗で、4はVI-2類に属し内面に櫛描文をもち、5はIX類で見込釉を輪状に搔きとるものである。6は白磁平底皿VI-2類に属すもので、見込に片切影の粗雑な文様を施す。体部下半以下は露胎である。7は龍泉窯青磁平底皿のI-3類である。見込に片切影と櫛描きの蓮華文を刻む。外底のみ露胎である。8は龍泉窯青磁碗I-3類に属す。内面に片切影と櫛描とによる精緻な水波文を施す。外底疊付以内は露胎で、外壁中位に厚く釉が溜っている。9、10は龍泉窯風の厚い底作りをなす青磁碗であるが、高台脇までしか施釉されておらず、別の窯の产品であろう。このほか外壁に幅広の線描き蓮弁文を飾る龍泉窯青磁碗も見られ、時期幅がある。

249号土壤 D-III-b・c区検出遺構である。近世井戸掘方である231号土壤に切られ、形状はほとんど不明である。地山白色砂に黄茶色砂が落ち込んでおり、奈良～平安時代初めの土師

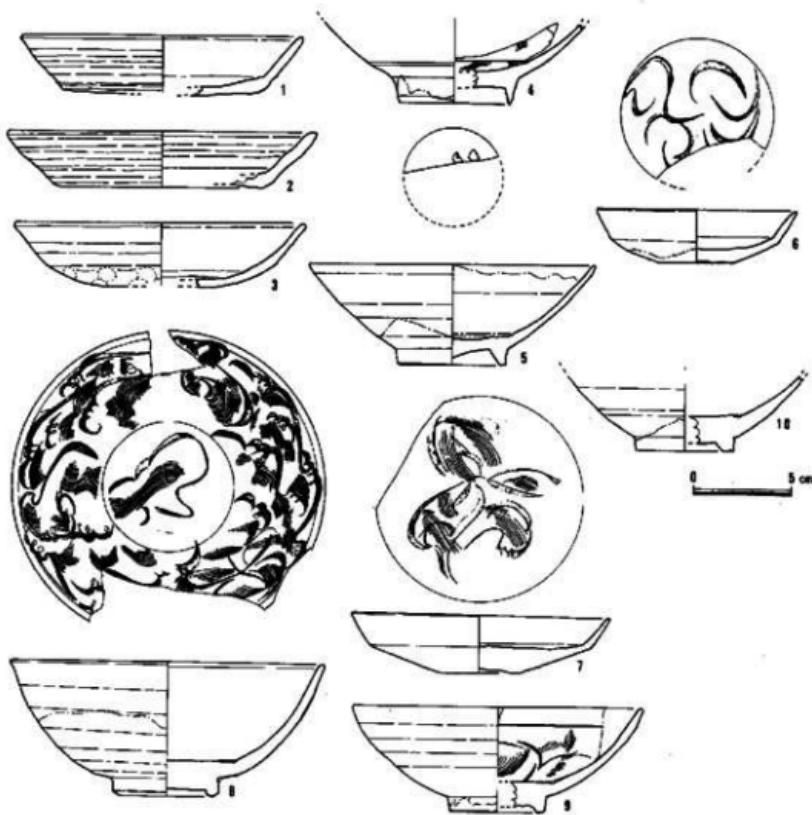


Fig. 90 248号土壤出土遺物

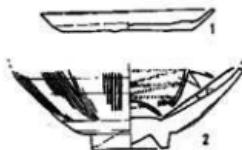
器變や高台付皿などの破片が出土している。以後の遺物は混っていないため、当該期の遺構と思われるが、性格は不明である。

250号土壤 (Fig.91) D-III-c-d 区検出遺構である。近世瓦組井戸とその掘方である。掘方規模は多くの遺構に切られて不明である。井筒は13枚の井戸瓦を組み合せ直径0.75mの正円をなすもので7段が残っていた。掘方からは中世以前の遺物も出土しているが量は少ない。図示した遺物は1が白磁碗VI-1類、2が同安窯系と龍泉窯青磁との中间形態をもつ碗である。

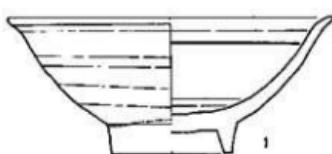
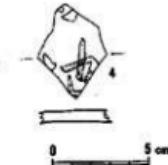
251号土壤 (PL-33-3) D-III-d 区検出遺構である。近代遺構である239号土壤に切られる。土壤の形状は明確でない。黒褐色砂の覆土で、床面直上に礫とともにイルカと思われる動物の



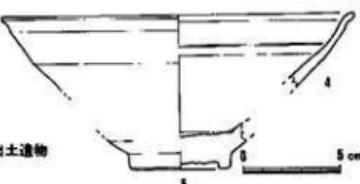
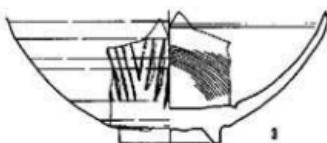
252号土壌出土遺物



252号土壌出土遺物



254号土壌出土遺物

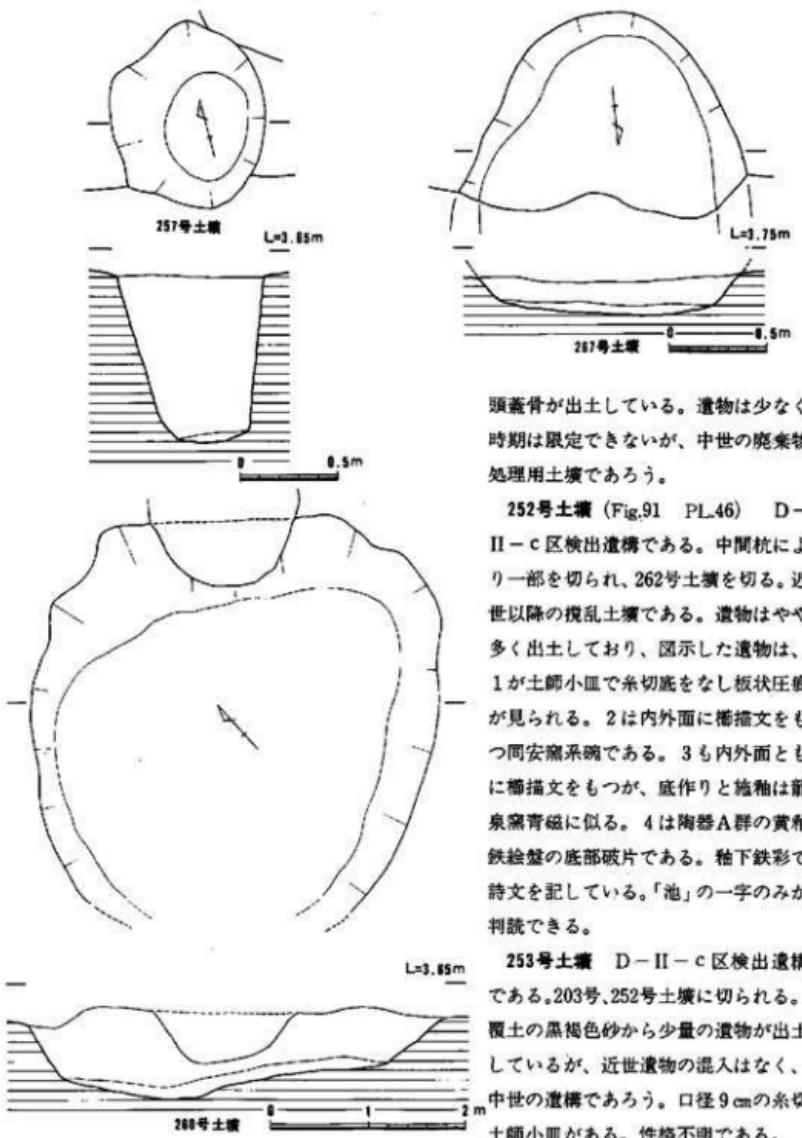


255号土壌出土遺物



256号土壌出土遺物

Fig. 91 250号, 252号, 254号, 255号, 256号土壤出土遺物



頭蓋骨が出土している。遺物は少なく時期は限定できないが、中世の廃棄物処理用土壙であろう。

252号土壙 (Fig.91 PL.46) D-II-c 区検出遺構である。中間杭により一部を切られ、262号土壙を切る。近世以降の搅乱土壙である。遺物はやや多く出土しており、図示した遺物は、1が土師小皿で糸切底をなし板状圧痕が見られる。2は内外面に櫛描文をもつ同安窯系碗である。3も内外面ともに櫛描文をもつが、底作りと施釉は龍泉窯青磁に似る。4は陶器A群の黄釉鐵絵盤の底部破片である。釉下鉄彩で詩文を記している。「池」の一文字のみが判読できる。

253号土壙 D-II-c 区検出遺構である。203号、252号土壙に切られる。覆土の黒褐色砂から少量の遺物が出土しているが、近世遺物の混入はなく、中世の遺構であろう。口径9cmの糸切土師小皿がある。性格不明である。

Fig. 92 257号, 260号, 267号土壙

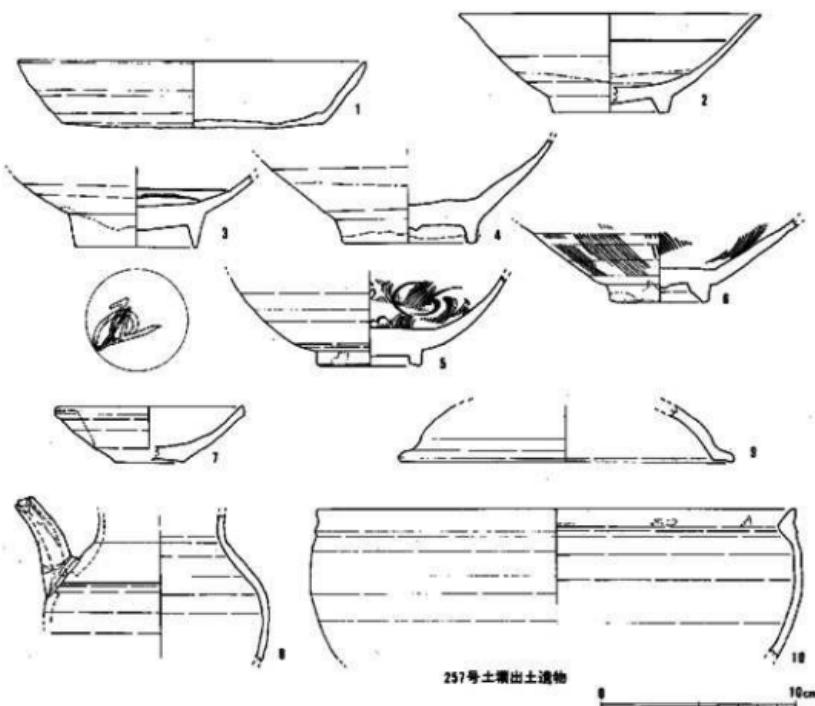


Fig. 93 257号, 259号土壌出土遺物

もつ青磁碗で、高台脇まで茶黄色のガラス質釉を施す。同安窯系のものであろう。4、5は同一個体と思われる灰青色釉を施した碗である。この他縄目叩のある瓦や上師質カマド破片、焼骨片などがある。12世紀半ばから後半にかけての廃棄物処理用土壌であろうか。

254号土壌 (Fig. 94) D-I-c 区検出

造構で径1.3m程の円形をなす。深さ0.9mである。茶褐色砂が覆土である。遺物は大半が小破片であるが近世以降の遺物は全く含まない。図示した遺物は次のようである。

1は白磁碗で厚い胎をなし、口縁を外反させるものである。2は内面に櫛描文を施す高台付白磁皿または浅い碗である。3は外面上に粗い櫛描文を、内面に細かな櫛描文を

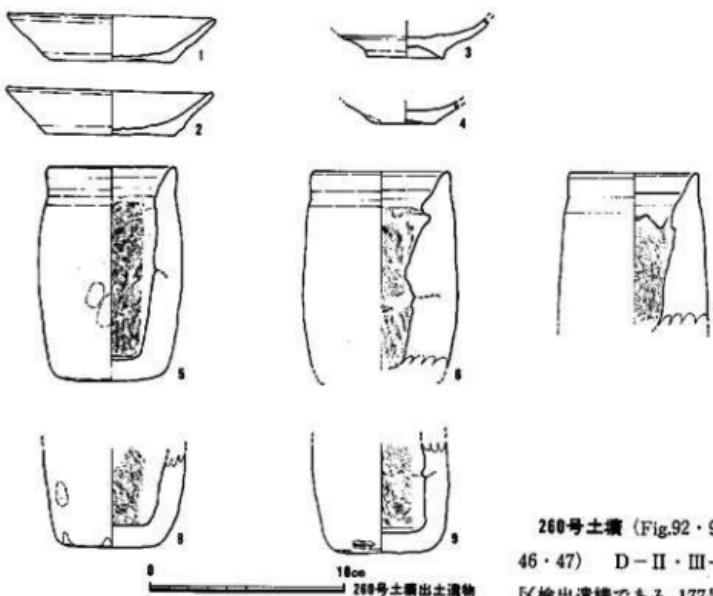
255号土壙 (Fig.91) D-I-b 区検出遺構である。8号溝を切る。径1.4m程。ほぼ円形の掘り方で、深さ約1.1mを計る。黒褐色。やや粘質のある砂質土が覆土である。火葬頭骨集積遺構に近接しこの覆土上層から頭蓋骨のみが出土しているが、火葬を受けておらず火葬頭骨集積遺構とは無関係である。出土遺物は奈良時代から中世にかけての土器、陶磁類が破片として少量みられるが、土師皿完形品が1点出土している。のことから、この土壙は円形土壙墓で、土師皿も頭蓋骨の脇にあることから副葬品である可能性が強い。図示した遺物は1が副葬品と思われる土師小皿で、口径9.8cm、底径4.9cmで器高1.4cmと底径が小さい。15世紀頃に位置づけられるものであろうか。2は陶器A群の小口瓶である。

256号土壙 (Fig.91 PL.46) D-III-b 区検出遺構である。200号土壙の下に掘り込まれている長軸1.0m、幅0.6mの長円形の掘り方で深さ0.6mを計る。出土遺物には近世以降のものを含まない。図示した遺物は、1が糸切底の土師小皿で口径8.2cmを計る。では青白磁碗で内面に細いヘラと櫛描の文様をもち、灰青色透明釉が墨付以外を除いて施釉される。3は見込釉を輪状に搔きとる白磁碗で、4は龍泉窯青磁碗で見込に片切花文をもち、外底露胎部に墨書を残すが判読できない。5は黄釉陶器の深い盤もしくは甕である。この他、粘板岩製の鏡や繩目叩きの瓦などが出土している。12世紀後半代の廐棄物処理土壙か。

257号土壙 (Fig.92・93 PL.46) D-II-c 区検出遺構である。8号溝に接する。長軸0.96m 短軸0.68mの長円形で深さ0.85mを計る。黒褐色土の覆土の上位を中心に奈良時代から中世までの瓦、陶磁片が混在するが近世の遺物は見られない。覆土下層からは人骨かと思われる骨片が少量出土しているが遺存状態は良好でなく明確でない。図示した遺物は次のようである。1は土師器杯の大形品で糸切底をなし、口径17.8cm、器高3.3cmを計る。このほか多くの土師皿類破片が出土しているが計測可能なものは、糸切底小皿で口径9cmが2点、10cmが1点だけである。高台付皿も1点ある。2~4は白磁碗である。2・4は見込の釉を輪状に搔きとり、4の高台側面には珪砂が付着している。3は内面に櫛描文をもち、高台内露胎部には花押風の墨書が残されている。5は龍泉窯青磁碗で内面に細かい櫛描きの水波蓮華文をもつI-3類である。6は同安窯系青磁碗で器壁内外に櫛描き文をもち、高台脇まで淡灰青色不透明釉がかけられる。7~10は陶器である。7は皿、8はB群の水注で灰オリーブ色の釉が薄くかかる。9・10もB群に属しそれぞれ蓋、鉢である。12世紀代の土壙墓の可能性がある。

258号土壙 欠番である。

259号土壙 (Fig.93 PL.46) D-I-d 区検出遺構である。長軸1.1m、短軸0.9mの長円形の掘方で深さ0.4mを計る。出土遺物は少量である。図示したものは、1が口径8.8cmの糸切土師小皿で2は陶器B群の平鉢である。このほか小兒窯棺墓破片、土師器高杯脚部破片などが出土壤している。13世紀代の遺構であろうか。性格は不明である。



260号土壤 (Fig.92・94 PL.

46・47) D-II・III-a・b

区検出遺構である。177号土壤に

接し礫が流れ込むような状況を示している。これから177号土壤より新しいと思われるが大きな時期差はない。一辺4mに近い隅丸方形の大きな掘方である。残存部からの比高も1m近い。16世紀終末から17世紀初頭にかけての廃棄物処理用土壤である。出土遺物には中世以前のものも混じるが、大半は当該期のものである。図示した遺物は、1、2が糸切底土師小皿で、底径が小さく、器高が高い。3、4は李朝の陶器皿である。5～9は土師質の焼塙壺である。いずれも同形で、内面に粗い織物圧痕を残し器壁は粗く凹凸が目立つ。器壁は厚く粘土の継ぎ目が中位に観察できる。口縁部内外面は横ナデ調整をして、外面はわずかに窪む。外面は底部も含めてナデ調整で、指頭圧痕が部分的に残る。この他車輪文を瓦当文にする軒丸瓦もあった。

Fig. 94 260号、262号土壤出土遺物

261号土壤 D-II-c区で検出されているが、浅い落ち込みで遺物ではなく、時代、性格は不明。

262号土壤 (Fig.94 PI.47) D-II-c区検出遺構である。8号溝を切る近世擾乱土壤である。図示した遺物は陶器皿で、有田内野山窯の産とされる。激青緑色釉を内面と外面口縁下

まで施し、外壁下半まで透明釉がかかる。見込釉は蛇の目に搔きとる。

263号土壙 D-II-d 区検出遺構である。203号土壙に切られている。径0.8m程の不整円形をなすと思われる。深さは20cm程で浅い。黒色粘質土が覆土で、土師皿類、白磁、須恵器の小片が少量見られる。近世遺物は見られず、中世の遺構であるが、性格はわからない。

264号土壙 (PL.47) D-II-d 区検出である。黒色粘質土の浅い落込みで、径0.8m程の不整円形をなす。遺物はいずれも小破片で少ないが、近世唐津の陶器片2点があり、近世の遺構と考えられるが性格は不明である。

265号土壙 D-II-d 区検出遺構で226号、247号土壙に切られる。長軸2m、幅1.4m程の不整長方形の浅い暗褐色砂の落込みで、明確な遺構ではない。遺物は少量で土師皿類や須恵器、甕棺、白磁などの小破片が見られるのみである。12~13世紀頃か。

266号土壙 D-II-e 区検出遺構であるが、206号、236号土壙に切られ全体形はわからない。浅く不明確な暗褐色砂の落ち込みである。遺物は少量であるが、奈良時代末~平安時代始めの土師器、須恵器の小破片だけで、当該期の包含層かもしれない。

267号土壙 (Fig.92 PL.47) D-I-c 区検出遺構である。8号溝に切られる。暗褐色砂の浅い掘方である。出土遺物には磁器類を含まず、8世紀頃の土師器甕や須恵器破片が出土するのみである。当該期の遺構であろうか性格は不明である。

268号土壙 D-I-b 区検出遺構である。227号、240号土壙に切られる。暗褐色砂の浅い落込みで全体形は不明。平安時代末の白磁片や土師皿片に混じって奈良~平安時代にかけての土師器甕、焼塙壺、瓦、須恵器などの小破片が出土している。性格は不明である。

269号土壙 (PL.46) D-I-c 区検出遺構である。221号土壙に切られる。茶褐色砂の浅い座みである。遺物は少なく8世紀頃の須恵器杯蓋が出土するのみである。人為的な遺構でなく奈良平安時代包含層の落ち込みかもしれない。

270号土壙 (PL.47) D-II-e 区検出遺構である。近代のポンプ式井戸である。掘方から奈良時代から中世にかけての土師器、須恵器、陶器の破片が出土している。特に平安時代半ばまでの遺物が目立ち、遺構または包含層を掘り抜いているものと思われる。

271号土壙 D-II-e 区検出遺構である。径0.8m程の円形掘方であるが浅い。土師皿類破片や白磁碗皿破片があり、12世紀代の廐棄物処理用土壙であると思われるが、奈良平安時代の土師器、須恵器破片も多く見られる。

272号土壙 欠番である。

273号土壙 D-II-c 区検出遺構である。204号土壙に切られる。近世の七輪や瓦があり、中世攪乱であるが、それらに混在して中世白磁、土師皿の小破片が少量見られる。掘方は明確でなく、204号土壙の一部かもしれない。

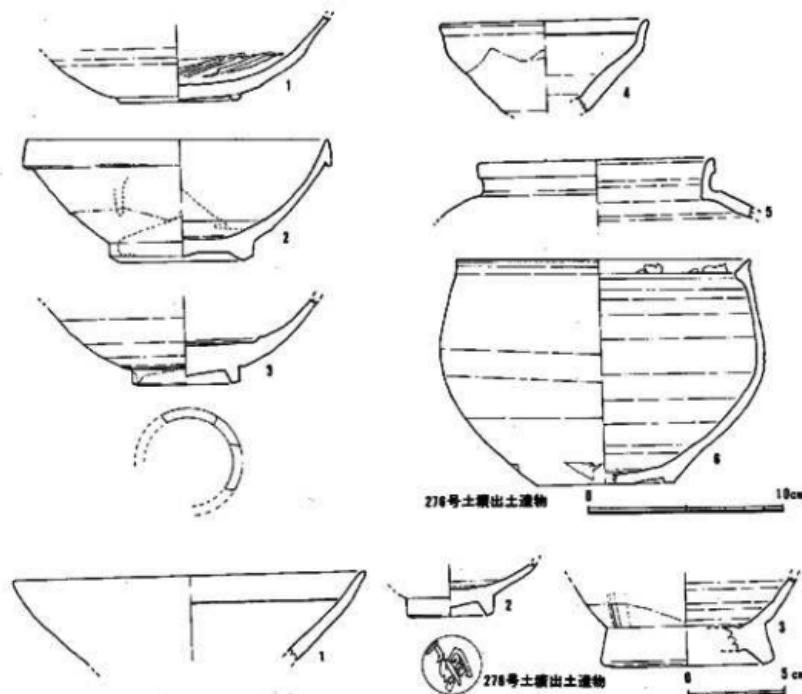


Fig. 95 276号, 278号土樣出土遺物

274号土樣 D-II-c 区検出遺構である。8号溝の床面に見られる浅い黄褐色の落込みであるが溝との前後関係は不明。あるいは溝埋土の一部かもしれない。土師皿、白磁、青磁小破片が少量出土しているにすぎない。

275号土樣 D-II-c 区検出遺構である。8号溝によって切られている。径1.1m程度であろう。12世紀後半代の遺構と思われる。白磁、青磁、陶器破片が少量出土している。廃棄物処理用土壤であろうか。

276号土樣 (Fig.95 PL.47) D-II-b 区検出遺構である。径1.3mのはば円形をなし、深さ0.55mを計る。12世紀後半から13世紀にかけての廃棄物処理用土壤と思われるが、それ以前の遺物も多数混入する。図示した遺物は次のようである。1は内黒土器で丸い高台を貼りつけ、内面を粗くヘラ研磨する。外面体部灰白色で下半に指頭圧痕が残る。2はIV類白磁碗で白化粧を施し、その上に灰白色半潤釉をかけている。3は灰オリーブ釉を高台脇までにかける青磁

確で、見込には釉を拭きとらず重ね焼した痕跡を残し、疊付にも重ね焼の跡をもつ。4は黒釉天目碗である。口縁直下をすっぽん口にする。黒褐色の光沢のある釉をかけるが細かなピンホールがあり、口縁端部は茶色の発色をする。5、6は陶器である。5は準A群の褐釉のうすくかかる四耳壺である。6はB群の鉢で淡褐色の釉がうすく全体にかかっている。口縁内側と体外下部に重ね焼の耐火土の目跡が残っている。土師皿類では小皿の小破片が14点見られるにすぎない。いずれも系切底である。中世以前の土師器壺、皿や須恵器も見られるがいずれも小破片である。

277号土壙 C-I-II-c 区検出遺構である。219号、289号土壙に切られており殆ど原形をとどめない。黒褐色砂質土中に龍泉窯I類青磁碗をはじめ、白磁、陶器が出土する。土師皿類も38点あるが、計測可能なものは、杯で口径16cmが2点、12cmが1点、小皿は9cm 2点、8cm 1点である。いずれも系切底である。このほか土師質カマド1点もあった。12世紀後半から13世紀前半の廐棄物処理用土壙であろう。

278号土壙 (Fig.95 PL.47) D-II-b 区検出遺構である。283号土壙に切られる。黒茶褐色砂を覆土にする浅い掘方であるが掘方線は明確でない。混在して多くの遺物が出土している。図示した遺物は、1が白磁碗でII類と同様の胎と釉をもつが器形的には違う。2は白磁高台付の皿と思われ、見込は釉を輪状に搔きとり、高台内に「丁網」の墨書きをもっている。3は白磁壺で、体部に縱方向の横描沈線をいれる。土師皿類も多く出土しているが法量は様々である。伊万里系の磁器があり近世搅乱土壙である。

279号土壙 D-II-b 区検出遺構である。177号土壙に切られる。長軸1.3m程の土壙であるが幅は不明。出土遺物は土師皿類がやまとまってあり、小皿で口径8.5~9cmが8点、杯で口径13cmが2点、16cmが1点である。いずれも系切底である。この他木炭と焼骨がある。13~14世紀代の火葬墓の可能性がある。

280号土壙 D-II-b 区検出遺構である。260号土壙床面に残る浅い茶褐色砂の落ち込みである。遺物は認められず、時期、性格ともに不明である。

281号土壙 D-II-b 区検出遺構である。260号土壙床面に残る浅い土壤で、掘方は明確でない。碟が5個置かれ、骨片が混じる。出土遺物は少量であるが、土師小皿に口径6cmのもの2点、9cmのもの2点があり、いずれも系切底である。14世紀代の墓の可能性がある。

282号土壙 欠番である。

283号土壙 D-II-b 区検出遺構である。径0.8mの円形をなす、近世の廐棄物処理用土壙である。博多人形、近世瓦、陶磁類に、中世以前の遺物も混在する。古墳時代の土師器壺破片などもある。

284号土壙 D-II-b 区検出遺構である。径1.0mの円形掘方で、近世搅乱土壙であり、少量の近世陶磁片が出土しているにすぎない。

285号土壌 D-II-b区検出遺構である。径0.8mの円形掘方をもつ。近世以降の擾乱土壌で少量の近世瓦、陶磁片が少出土するにすぎない。

286号土壌 D-II-a区検出遺構である。175号土壌の下面にあり、白色地山砂層への明茶褐色砂の落ち込みである。遺構の全体形は不明。奈良時代土師器甕、須恵器杯蓋の破片などが少量認められるだけであり、当該期の遺構と思われるが性格はわからない。

287号土壌 (PL.33-4) D-I-d区検出遺構である。径1.3m前後の円形に近い掘方で、深さ0.85mを計る。奈良時代の廐棄物処理用土壌であろうか。黒褐色砂の覆土中に、奈良時代土師器甕41点、須恵器杯身および蓋14点、製塙土器および焼塙壺6点などの破片が含まれており、これに混在するように古墳時代土師器片が12点みられた。いずれも小破片である。

288号土壌 D-I-d区で検出された。290号土壌に切られる。ピット状の浅い落ち込みで、遺物は出土していない。時期不明。

289号土壌 (PL.33-4) D-I-c区検出遺物である。近世以降の廐棄物処理用土壌である。205号土壌に切られる。径1.1mの正円形の掘り方をもち、深さ0.65mを計る。地山白色粗砂を切り、内部構造は見られないが井戸であろう。近世瓦や伊万里、唐津系の陶磁器に混じって中世後半白磁、青磁、土師皿などの小片が少量みられる。

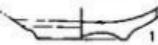
290号土壌 (PL.47) D-I-d区検出遺構である。歩道確保のために半分程は調査不可能であったが、径2.3mほどのほぼ円形の掘り方をもち、深さ0.9mを計る。多くの陶磁破片と少量の瓦、土師皿がある。14世紀代の廐棄物処理用土壌であるが、12世紀代頃からの遺物も多く混在している。白磁四耳壺の胴部破片4個体分が出土しているのが目をひく。白磁碗に「僧口」の墨書きもつものがあった。

291号土壌 D-I-d区で検出された径1.7mのほぼ円形の掘り方をもつ近世以降の廐棄物処理用土壌である。

292号土壌 D-I-e区で検出された茶褐色砂の浅い皿状の落込で、270号土壌に切られる。土師器、須恵器破片少量が出土している。奈良期の遺構であろう。性格は不明。

293号土壌 D-I-e区検出遺構である。大半は調査区外にかかり、形状は不明。七節皿類が16点程出土している。いずれも糸切皿で計測可能なものは口径16cmの杯1点だけである。

294号土壌 (Fig.96 PL.47) D-I-e区検出の近世擾乱土壌である。近世陶磁に混じり中世以前の遺物が出土する。図示した遺物は、1が高麗青磁と思われ、縁付を除いてオリーブ色不透明釉がかかる。2は白磁碗底部小破片で、実測不能であるが、



0 1 cm

Fig. 96 294号土壌出土遺物

外底に「于カ」ノ墨書きが残っている。

ピット群 これまで述べた土壙、井戸などの他に柱穴と思われるピットが散見される。しかしながら、後世の遺構によって旧地表面は大幅な改変を受けており、検出されたピットは辛うじて残されたもので、ピットの大半は既に消滅しており、それらの組織的な把握は不可能である。このため建築物の配置はおろか、建築物さえ確認できず、往時の市街地の復元は困難である。

近世石組土★ (Fig.97 PL.34) C-II-e 区検出遺構である。天端一辺1.6mのほぼ方形の掘方をもち、この掘方の三辺に60~80cmの長さの平石でめぐらし、上に長軸1.45mの巨大な石で蓋をする。掘方の断面は逆台形をなし、素掘りで内部構造物はもたない。覆土は灰と焼けた

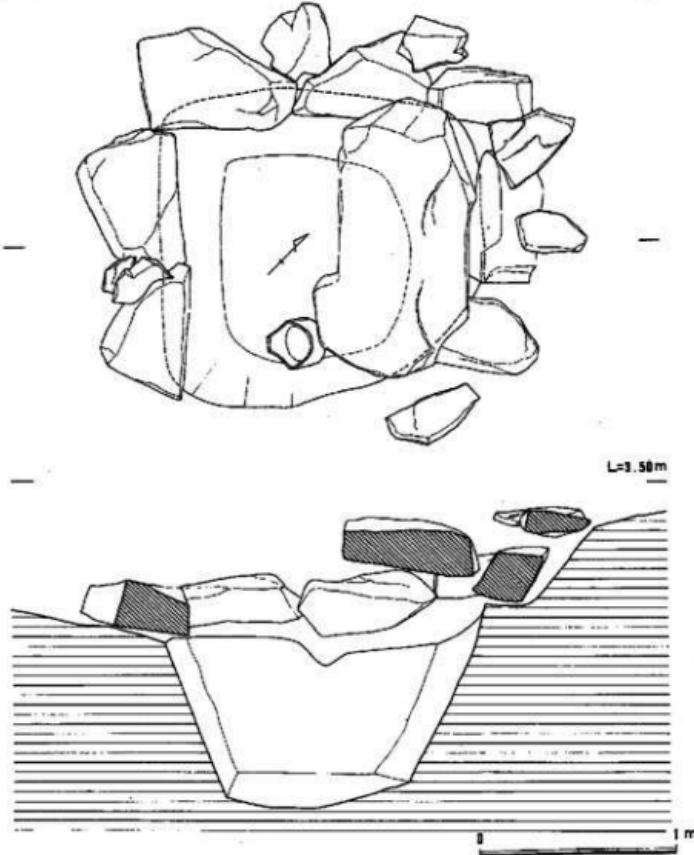


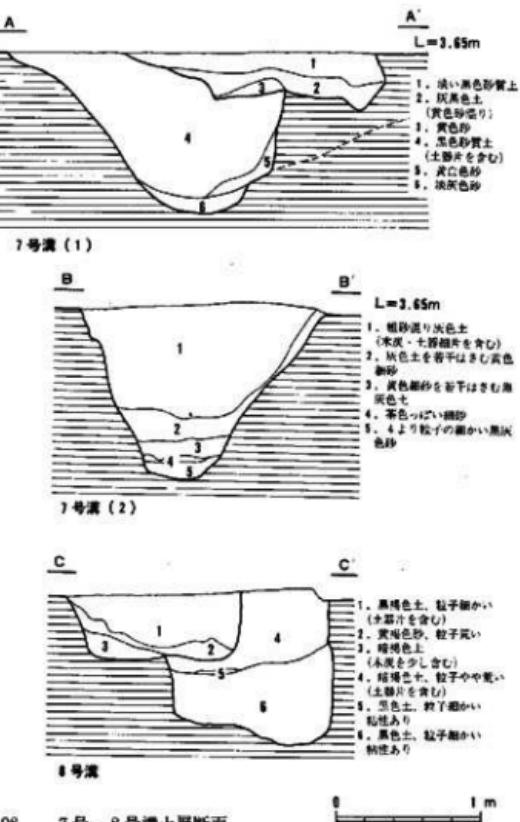
Fig. 97 近世石組土壙

石炭である。この中に七輪の完形品が1点含まれている。上部石組中に「寛永通寶」1点があった。土壌内に灰と焼石炭が充満していることから、結果的には灰の廃棄に充てられたと思われるが、大規模な上部構造をもつことから、本来的な機能は別にあったのではないかと思われる。

7号溝 (Fig.98 PL.35) C-I-d区からC-I-e区にかけて調査区を直線に斜断する形で掘り込まれており、方位は磁北にはば一致する。多くの遺構に切られており遺存状態は良好でない。断面形はV字形に近い逆台形をなす。地山砂層中に掘り込まれており崩壊しやすい状況であると思われるが、土留め板の設置等の構造物の痕跡は確認できなかった。床面には細砂層が互層をなしており、実際に排水等の機能を果たしていたものと思われる。上半は土器等

を多く含む黒色砂質土が厚く堆積しており、極めて短期間の間に埋められたものと思われる。この溝の最上面には土師皿類が多量に配棄されており、A、B区検出の1、2号溝と同様の状態を示しており、時期も14世紀前半である。

8号溝 D-I-a区からD-II-C区にかけて検出された直線に伸びる溝であるが、II区からIII区にかけては後世の攪乱により存否は不明である。7号溝との角度は約100°を計り直角とはならない。7号溝のように土師皿の大量廃棄は見られないが、溝上面に火葬頭骨集積遺構あって溝の廃棄年代は14世紀前半に求められる。



2) 遺構外出土の遺物 (Fig.99~101 PL.48~50)

遺構密度が高く後世の擾乱により包含層をはじめとする遺構以外からの出土遺物は多量である。紙面の都合上、墨書のある陶磁や銅鏡など特殊な遺物を図示、写真掲載をしている。以下図示した遺物について簡単に説明する。

1は糸切底土師小皿で口径9.6cm、器高1.1cmを計る。底に7箇所(推定)の穿孔をする。盤として用いられたものであろう。2は青磁碗で淡オリーブ透明釉が内面と外壁中位までかかり、冰裂がある。胎は灰色で粗く、削りも雜である。同安窯系に属すか。3は青磁碗で体は斜めに直ぐに開く。外壁にヘラ切りの放射沈線を刻み、内面にもヘラと掃による同安窯系青磁風の割花文を施す。底造りは龍泉窯風で疊付以内は露胎である。4は青磁小碗である。オリーブ色の越州窯風の胎がかかり、口縁を輪花になす。5は龍泉窯青磁碗I~4類で、内面に掃描と片切彫による細かな水波文を施し、内底は径4cm程の小さな区画をもつ。6は龍泉窯青磁碗でI類に属す。口縁は外に開き、内面に細かな水波文をもつ。7も龍泉窯青磁碗I類で古相の文様をもつが、器形には古相は見られない。8は同安窯系と思われる青磁香炉で、外面体部に斜格子の備描文をもち、高台脇と高台内に「太市カ」の墨書が二箇所残されている。9は龍泉窯系青磁皿で無文である。10は同安窯系青磁皿で、見込に片切彫花文と掃描雷光文をもつ。外底に墨書があるが明確でない。11~18は白磁碗である。11はV-1類に属す。12はVI-2類で見込に掃描文をもち、外底露胎部には意味不明の墨書が残されている。13はVI類に属し、外底露胎部には「十」の文字が墨書されている。14も同じくVI類で、外底露胎部には「王四郎カ」と読める墨書が残されている。15は見込釉輪状搔きとりのIX類で、外底露胎部に「僧口」の墨書が見られる。16もIX類に属す。外底露胎部には「祐吉」の墨書が残されている。17はVI類に属し、外底部には二行に「二口三十内」の墨書が残されている。不明分の一字は「蘇」の略字かもしない。18は見込に掃描文をもつVI類であろうか。外底露胎部に13と同様「十」の墨書をもつ。19は陶磁碗または皿で、綠茶色の不透明釉が、疊付と高台内外面を除いて施釉される。20~23は白磁皿である。20は葵筋底をなし青灰色をおびた不透明白釉をかけるもので、外底露胎部に判読できない墨書がある。「綱」の略字か。21はVI類に属し、外底露胎部に「王二」の墨書がある。211号、224号土壙出土遺物にも同様の墨書がある。このほか図示していない陶磁器の墨書についてはPL.48を参照していただきたい。22は高台付皿I-2類である。23は高台付小杯で青味がかかった半透明釉がかかるものである。24は陶器でA群に属す水注の頭部である。把手の跡が残る。オリーブ色をおびた黒褐釉がかかる。口縁端は露胎で重ね焼の跡があり、外体口縁直下にもベルト状に無釉部分がある。25、26は滑石製品である。25は人形であろうか。顔面にあたる部分の表裏にX印の削りを見せる。26は内側を小刀様の道具で抉込んだ器で円形をなすものと思われる。27は青銅製の和鏡である。径10.25cmを計る。全体に青銅で覆われてい

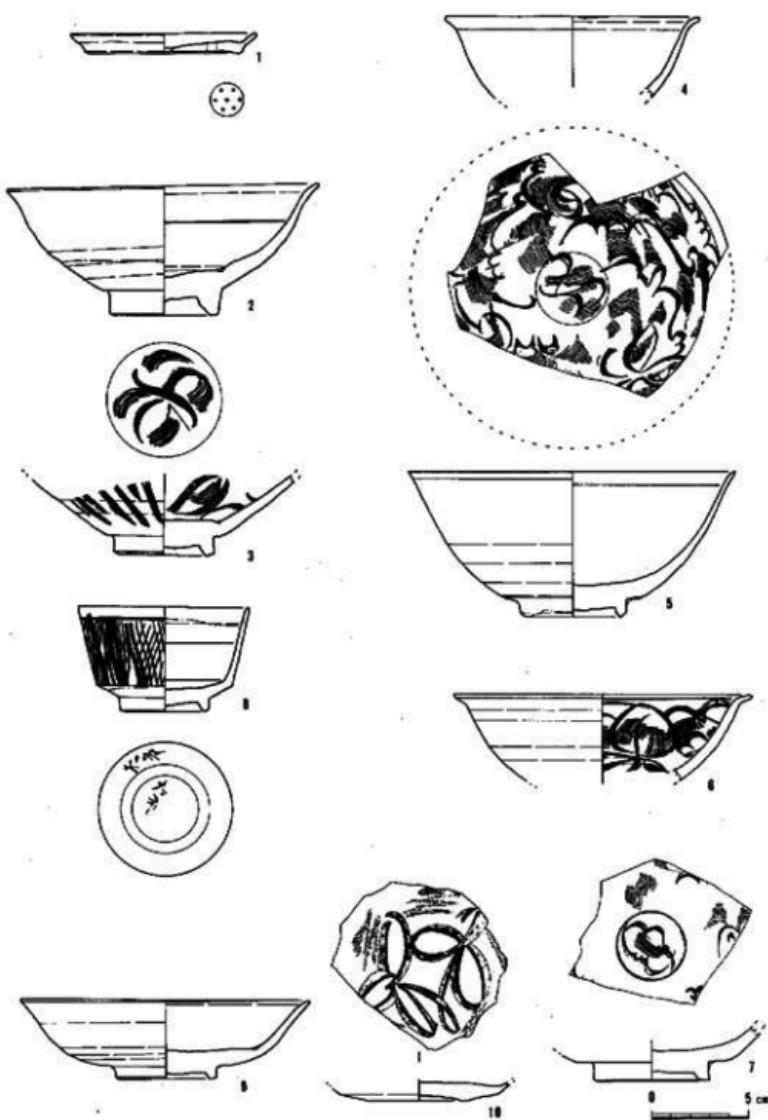


Fig. 99 C, D区遺構外遺物 (1)

II. 博多遺跡群 -地下鉄路線内の調査(2)-

124

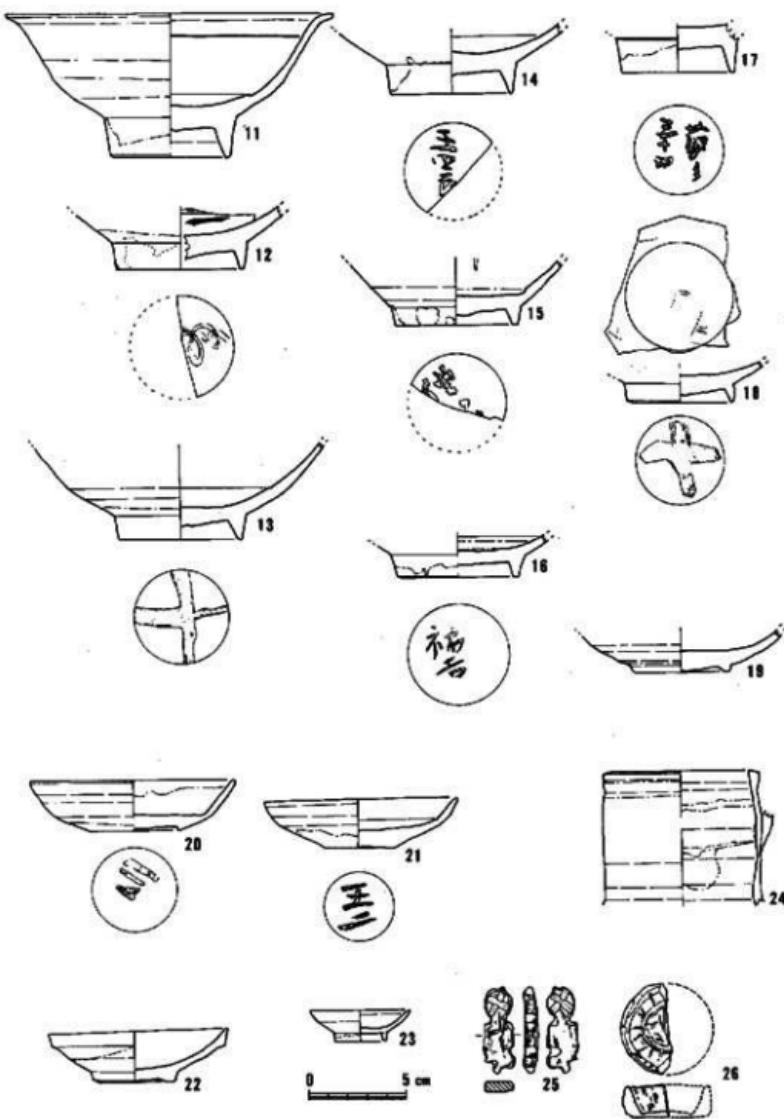


Fig. 100 C, D区遺構外出土遺物 (2)

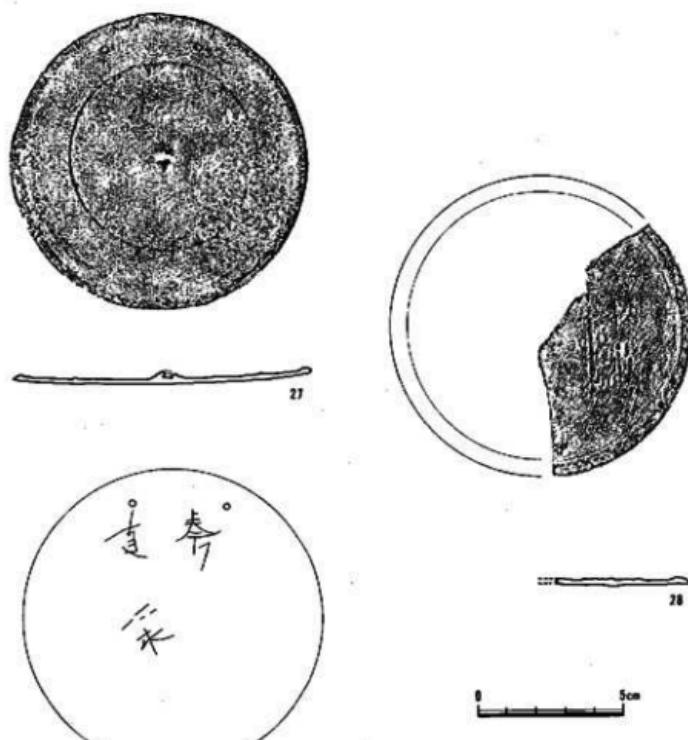


Fig. 101 遺構外出土遺物(3)

るが、遺存状態は良好で銅質もいい。背面には内区と外区を区分する小さな三角形の断面をなす凸帯があり、縁は小さなカマボコ状をなす。内区には鉢があるが欠損し、外区の一側に二箇所の二次的な紐孔が穿たれている。鏡面には「奉カ」、「直カ」、「来カ」等の文字が細線で浅く刻まれている。28は%ほど欠損しているが、復元径10.4cmの湖州鏡である。外縁は鈍い盛り上りを見せる。背面には長方形区間に縦二行の文字が鋳出されているが、磨耗がひどく判読はできない。

3) 墓

C、D区の調査においては、4基の甕棺墓を検出することができた。これらの甕棺墓は後世の擾乱を受け辛うじて遺存していたもので、状態は良好といえない。また、中世、近世の遺構からも、かなりの数の甕棺破片が出土しており、本来の基數は相当なものであったことが推察される。甕棺墓はA、B区においても13墓検出され、周辺の調査では博多第8次調査、第22次

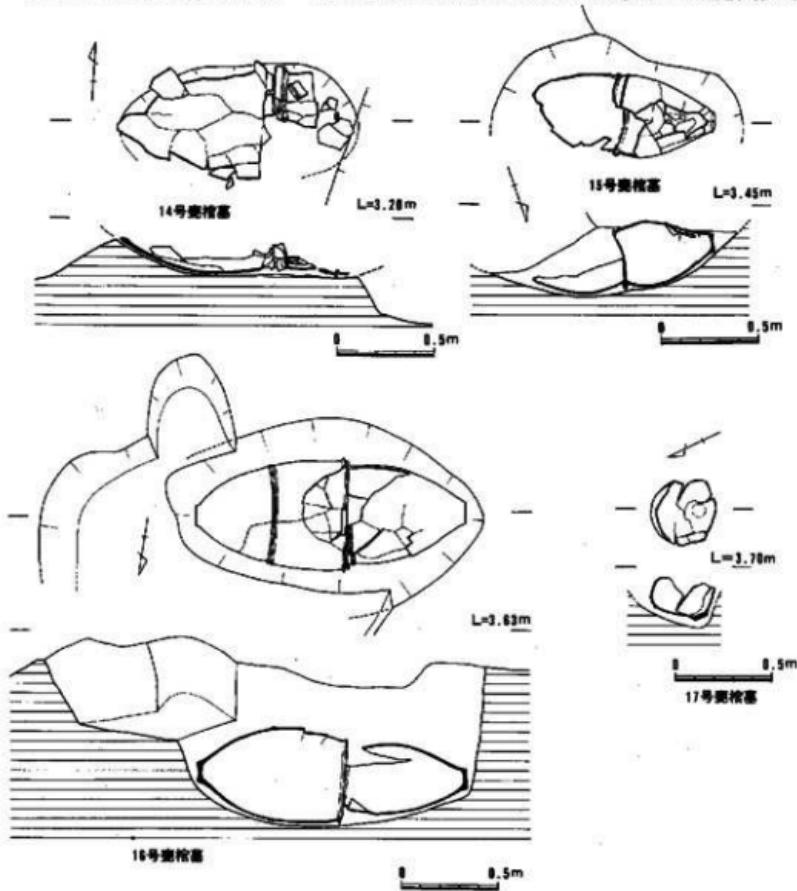


Fig. 102 14号, 15号, 16号, 17号, 甕棺墓

調査、第24次調査の各地点で検出されている。これらの甕棺墓はいずれも白色地山砂層に営まれている。これらの分布は、東長寺から櫛田神社方面へ開析する谷頭の縁辺をベルト状にめぐる恰好をしめしている。これら古砂丘上に営まれた甕棺墓は、経浜新町遺跡、藤崎遺跡、西新町遺跡など、博多湾をめぐる沿岸一帯の弥生時代墓制と共通性をもっている。これまでの博多遺跡群の調査では遺跡群南端付近の地下鉄壁柱布掘りの立会時に出土した後期の甕棺1基とのぞいて、他に甕棺墓群は発見されておらず、博多遺跡群を形成する幾つかの古砂丘のうちの一部のみ営まれたものであろう。このことは、博多遺跡群の地形の時代的な変遷を考える上でも

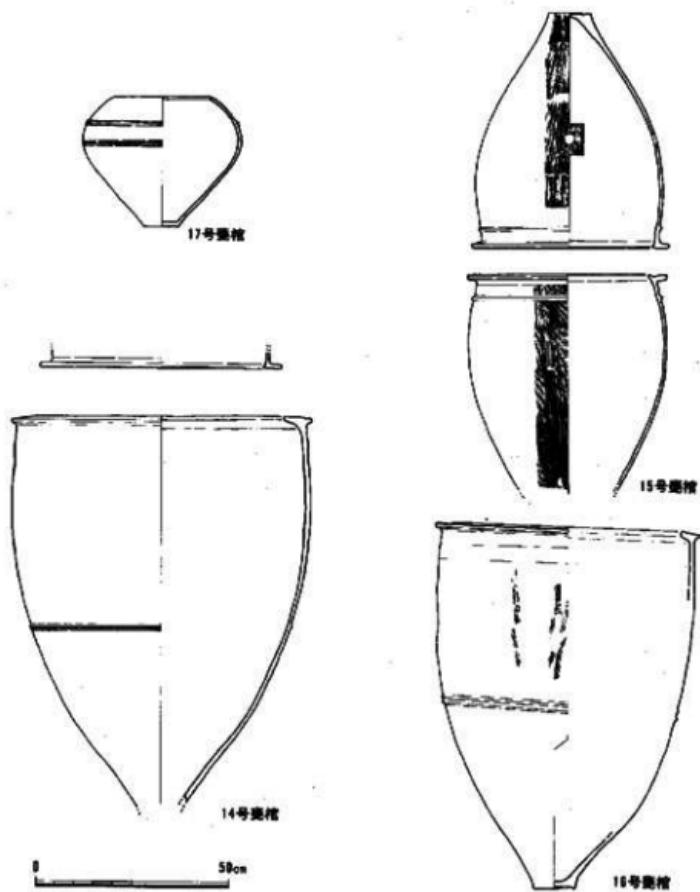


Fig. 103 14号、15号、16号、17号甕棺

重要なことであろう。

以上検出された甕棺墓について説明したい。

14号甕棺墓 (Fig.102, 103.) c - III - a 区で検出された。7号溝と134号土壌によって切られ、上甕の上方と胴部以下は欠失し口縁部付近が辛うじて残り、上甕も上半は欠失し%程度が遺存するのみである。墓壙の形状も不明である。方位はほぼ東西をとり、甕棺はほぼ水平に埋置している。接合式の成人甕棺墓である。上甕は大型の甕で、逆L字状の口縁部をもち、わずかに内側に低く傾斜する。外面は横ナデ調整を行っている。下甕はT字状口縁をなす大型甕で、わずかに外方に低く傾斜する。胴部中位よりやや下位に一条のM字状凸帯をもつ。器面内外は丁寧なナデ調整を行っている。

15号甕棺墓 (Fig.102, 103PL17-2) C - II - a 区で検出されている。134号土壌によって下甕の%は欠失しているが、上甕は一部上圧で割れているものの大旨遺存状態は良好である。墓壙のは半分ほど削られているため本来の状態は不明である。方位はN-70°-Wをとり、約10°の傾斜をもって埋置されている。接合式の成人棺である。上甕は逆L字状の口縁をもつ中型の甕形土器で、口縁直下に一条の三角突帯をめぐらす。底部はわずかに上げ底気味である。胴部中位に二次的な穿孔がある。外面は縱方向の細かな刷毛目調整を施している。下甕も上甕とはほぼ同形同大の中型甕形土器であり底部を欠失する。胴部上半には煤が付着している。

16号甕棺墓 (Fig.102, 103PL34-3) c - II - a 区で検出された。134号土壌によって墓壙の一部を切られているが、甕棺自体の遺存状況は良好である。墓壙は地山白色砂をほぼ直に掘り込んだもので、甕棺よりわずかに広い程度である。ほぼ東西方向に方位をとり、埋置角度もほぼ水平である。接合式の成人棺である。上甕は逆L字状口縁をもつ大型の甕形土器で、口縁直下に二条の三角突帯をめぐらしている。下甕は大型の甕形土器でT字状口縁をもち、わずかに外方に低く傾斜する。口縁内側が肥厚する。胴部中位に二条の三角突帯をめぐらしている。底部は上げ底をなす。外面口縁直下を横ナデ調整するが、以外はすべてナデ調整で、胴部上半にのみ刷毛目調整痕が残されている。

17号甕棺墓 (Fig.102, 103PL34-4) c - II - a 区で検出された。極めて高いレベルに位置しており、中世遺構などの掘り込みから辛うじて逃れた単棺の小児用甕棺墓である。上半は欠失している。墓壙は明らかでないが、わずかに北側に傾斜して立てた状態で埋置されている。頭部打欠きの甕形土器を用いており、胴部最大径をもつ位置とやや上位に二条のM字状突帯をめぐらしている。地表面に露出していた時期もあったらしく上半の表面は同化がはげしい。内面はナデ調整、外面は横方向のヘラ研磨がなされている。

これらの甕棺墓は弥生時代中期前半の後業から中期中葉にかけての年代が与えられ、周辺で発見されている甕棺墓群とも一致する。

第3章 結語

以上博多遺跡群の地下鉄1号線関係調査区C、D区の発掘調査概要を述べてきた。一部整理不充分なところがあり充分に意を尽せていないが、今回の調査の結果から幾つかの問題について述べ結語とする。

C、D区は中世遺物包含層が薄い上に、遺構密度が高いため切合いがはげしく、とりわけD区を中心とした近世以降の廃棄物処理用土壙の集中にはすさまじいものがあった。この廃棄物処理用土壙の中には焼塙壺を含む17世紀前半代の土壙も多く、これらの土壙は東長寺の当地での造営年代と一致し、かつ旧境内に位置することから、東長寺造営時のものである可能性が高い。また、Fig.13の「筑前名所図会」に描かれた東長寺の絵図には右端すなわちD区付近に小さな街屋が軒を連ねており、17世紀以降の廃棄物処理土壙については、これらの江戸時代の博多町民のエネルギーッシュな生活を裏付けるものである。これらの近世土壙から出土する肥前系、高取系の近世陶磁器は、本報告書では詳述していないものの、近世陶磁流通を考える上では重要な資料であるといえる。

今回の調査で特筆すべき遺構に、大量の首無し遺体の火葬場である175号土壙と、首級のみを茶毬に付した火葬頭骨集積遺構がある。この火葬骨についての解剖学的考察は、付録Ⅰにおいて詳述されており、多くに触れないが、頭骨集積遺構からは頸椎骨も多数出土している上、刀剣と思われる刃物の痕跡が残っており、打首になった遺体であることを示している。これらの遺構はいずれも14世紀前半代に位置づけられる。この遺構について故筑紫豊氏は、元弘3(1333)年の菊池武時の鎮西探題襲撃を記した東福寺僧良覚の「博多日記」の記述から、これらの火葬骨は戦いに敗残した菊池方将兵のものであろうとの説を発表された。^(註1)「博多日記」の一部を抄出する。「サテ御所ニ押寄セ合戦ニ及ブ。菊地人道(武時)・子息三郎二人ハ、犬射馬場ニテ討レ、菊池舍弟二郎三郎入道覺勝以下若党等。御所中ニ打入り、既ニ御壺ニ賣入り合戦致スノ間、敵(菊池方)七十余人打止メラレ畢ヌ。菊池嫡子二郎並ヒニ阿蘇大宮司ハ落チ畢ヌ。匠作(探題北条英時)御方モ或ハ討死、或ハ數聲手ヲ負ヒ畢ヌ。サテ合戦過ギテ筑州、江州(大友氏)以下鎮西ノ人々御所ニ参ラレ、即チ菊池入道・子息三郎・寂阿舎弟覺勝ノ頭以下若党ノ頭、犬射馬場ニ懸ラル。寂阿(武時)・三郎・覺勝三人ガ頭ハ、始メ四五日ハ懸ラレズ、後ニ之ヲ懸ケラル。寂阿并ニ子息三郎・覺勝ハ、別々ニ之ヲ懸ラル。夜ハ取テ御所ニ置カル。十ヶ日斗アリ、釘ヲ以テ打付ラル。札銘ニ云フ。謀叛人ガ頭ノ事、菊池二郎入道寂阿・子息三郎・寂阿舎弟二郎三郎入道覺勝云々。菊池方手負人等落行クノ處、國々ヨリ博多ニ懸上ル勢共行向ヒ之ヲ打取り、頭ヲ取り之ヲ進ムルノ間、犬射馬場ニ三重ニ之ヲ懸ケラル。五所ニ木ヲ結イワタシテ懸ラル。其後連々ニ所々ヨリ取進ムル落人ノ頭二百余也。」確かにこの記述は175号土壙、火葬頭骨集積遺構

の成因であるとするに説得力はあり、その蓋然性は高いと思われる。しかし、考古学的には、14世紀前半であるという年代観がほぼ一致するという点以外に積極的な証左はなく、遺体数が100人を越し、頭骨も打首になつたものであるという解剖学的所見をも含めた総合的な感触である。一方鎮西探題の位置についても櫛田神社の近辺にあったとされるだけで明確でなく、「大射馬場」の位置についても古地図の中に記された例はなく、正確な位置はわからない。このように残された問題も多い。今後とも文献史面からの研究と周辺の考古学的調査の成果の集積に期待せねばならないだろう。

今回の調査では二本の溝が検出された。A・B区の調査で検出された1、2号溝と7号溝はほぼ直交し、8号溝はほぼ平行する形となる。B、C区の境には大閣街割のものと思われる現街筋と直交する溝があり、1、2号、7、8号溝はこの新しい溝方向とは異なり、ほぼ南北または東西方向に方位をとるものである。溝の廃棄年代は14世紀前半であり、これらの存在は、14世紀以前の街割が、ほぼ東西南北を示すものであったと推定することができる。博多の区画の復元には欠かせない資料であろう。

C、D区の調査では、多量の遺物が出土している。これらの数量については、一部整理不充分な点があるため、遺物出土数量表を今回は作成しておらず、次回の報告に回したい。今回の調査では、奈良時代から平安時代にかけてのいわゆる律令時代の遺物が多く出土している。遺構自体は良好でなく、殆どが後世の遺構から出土している。これらには石帯をはじめ、瓦、焼塩壺などがあり、周辺の調査結果からも博多浜部の広い範囲に同様の遺物が出土していることから、宋人百堂の形成以前に官街的性格の強い地域であったことが推察される。墨書のある中国産陶磁類も多く見られた。A、B区や隣接する博多第4次調査地点と同様「丁綱」銘のものもある。これは、40点以上も「丁綱」銘陶磁を出土した第4次調査地点を中心に「宋商人丁某」の居宅があったことを示しているものであろう。この他「吉」「王二」「二王」など宋商とかかわりあるいはある名の中に、「王四郎」と読めるものがあった。これは承天寺建立で著名な宋商帰化人である「謝太郎国明」などと同様に、中国姓と日本人名の組み合さったもので、記されていた陶磁器の年代から、12世紀の前半代おそらく「宋人百堂」の時代にも「謝国明」のように日本に帰化した例があったのであろう。以外の墨書には「綱司」、「十」、「一」、「太市(カ)」や、花押様の文字、仮名文字などがあった。

以上簡単にいくつかの問題にふれたが、博多遺構群にあっては、今回の調査はわずかな部分であり、博多の全体像に迫るには周辺調査の集積と、充分な整理によって導かれたデータの作成が必要不可欠である。博多遺跡群の調査と整理のあり方をも含め今後に期待したい。

註1. 筑紫豈「博多日記」が解いた紙園町遺跡の謎 ふるさとの自然と歴史

福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集補遺

1984年に報告を行なった高速鉄道一号線の店屋町I区A-2-I区検出の、21号土壙（同書41~46ページ）出土の遺物に、下図の陶器が漏れていたので追加したい。あわせて、A-1-I区30号土壙出土の常滑大甕の口縁部も、ここに図示することとした。

21号土壙出土の遺物、残部は大きな壺の肩から胴にかかる部分である。ゆるい曲線を描いて大きく横に張った肩は、140度ほどの角度で、急に下に落ち込む。肩と胴の境い目には、きっちり棱がつけられている。最大胴径はこの後部にあり、52cmを計る。胴部は15cmしか残っていないが、次第に先細りになるものと思われる。全体の形は『新安海底遺物（資料篇II）』（韓国文化公報部・文化財管理局1984年）のカラー写真106の、黒褐釉四耳大甕に似たものであろう。この壺とは、肩の上に見られる、鋭三角形の耐火土による目跡など、器形以外にも類似点が見られる。相異なる点は、施釉法で、新安では口から底まで、全体に施釉してあるのに対し、ここでは、肩ま

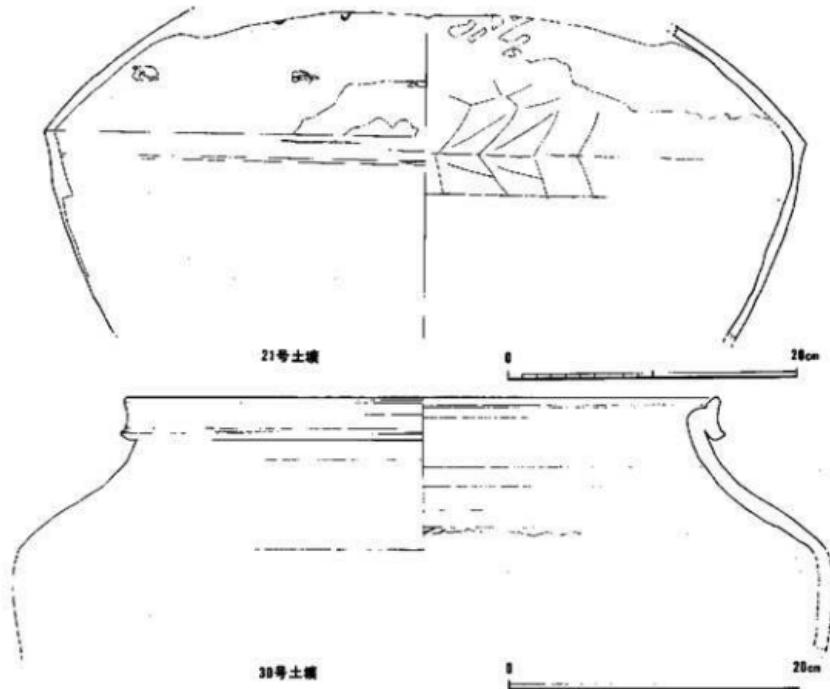


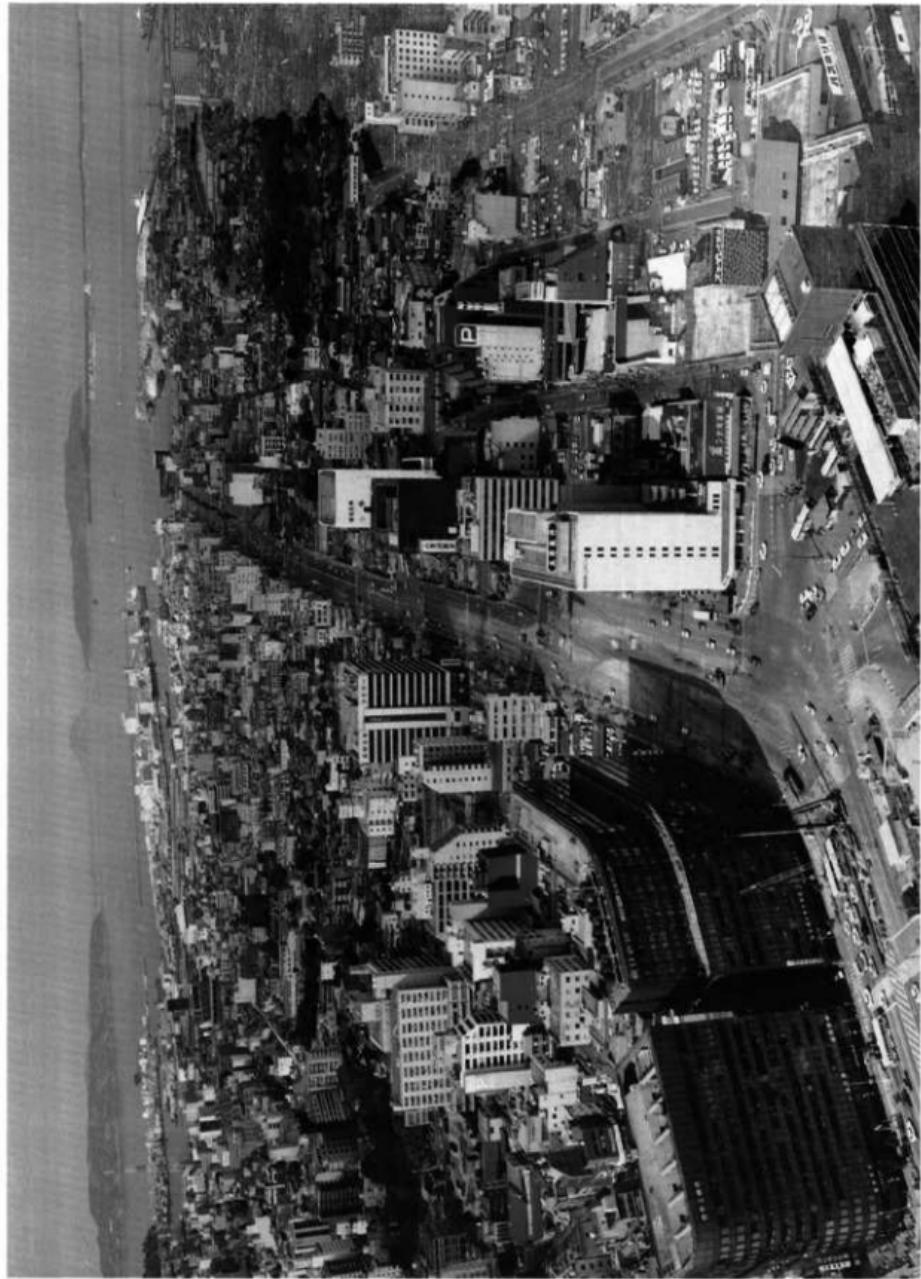
Fig. 104 A区21号、30号土壙出土遺物

での施釉で、胴部以下はきっちりと削ったように露胎に残してある。しかし器内では、肩裏の一部を除いて釉をまわしている。釉は黒褐色不透明で、粘性が大きく、厚い。光沢があり、氷裂はない。頸囲りには、1mmほどの太さの線で搔き落し、文様を施している。胎土は灰がかかった黄白色で、砂はほとんど目立たない。中国産の陶器のうち、A群とした土によく似るものである。器内胴部には、叩き締めの際の丸石様の当て具跡が凸凹に残っている。この種の陶器は、これまで博多で見たことがないが、新安海底遺物との関係で、14世紀前半の器形を考えることができよう。13世紀後半から14世紀後半ごろという、21号土壙の年代観と合致するものである。

写真図版

PLATES

縮尺不同
遺物番号は挿図と一致する。



博多城館 博多駅上空より



1. C・D区遠景（正面博多駅）



2. C区作業風景



1. C区作業風景



2. C区作業風景



1. C-III区土層断面（北から）



2. C-III土層断面（東から）



1. C区全景（東から）



2. C区下部検出遺構全景（北西から）



1. C—I区上部検出遺構全景（北西から）



2. C—III区上部検出遺構全景（北西から）



1. C—I区下部検出遺構全景（北西から）



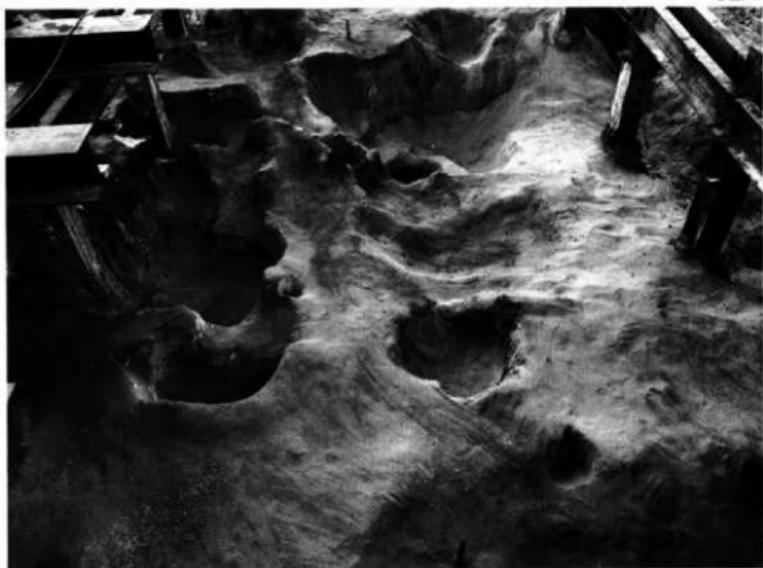
2. C—III区下部検出遺構全景（北西から）



1. D-I・II区上部検出遺構全景（東から）



2. D-I 区下部検出遺構全景（南東から）



1. D-II-c~e区下部検出遺構全景（南東から）



2. D-III区下部検出遺構全景（南東から）



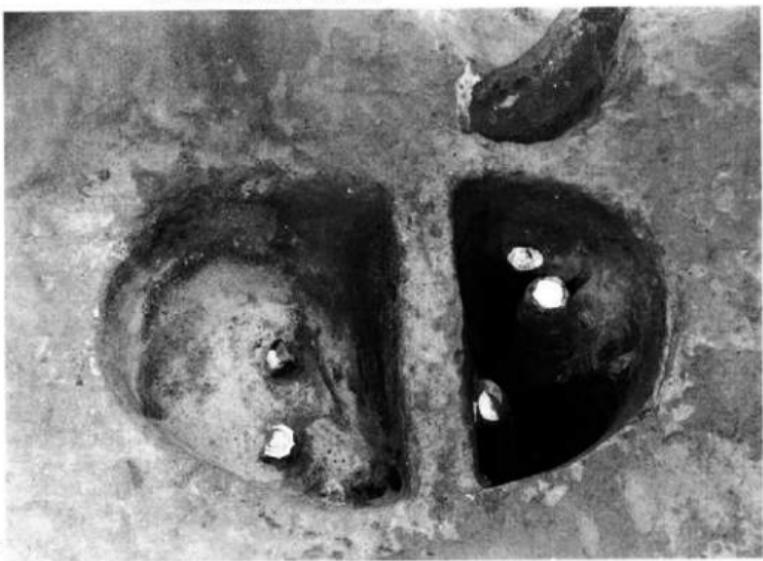
1. 97号土壤集石（南から）



2. 100号土壤集石（北から）



1. 102号土壤集石（西から）



2. 103号土壤（西から）



1. 104号土壤 (東から)



2. 105号土壤 (西から)



1. 116号土壤（西から）



2. 117号土壤（西から）



1. 118号土壙（南西から）



2. 118号土壙 遺物出土状況

1.
120号土壤（北東から）



2. 122号土壤（北西から）

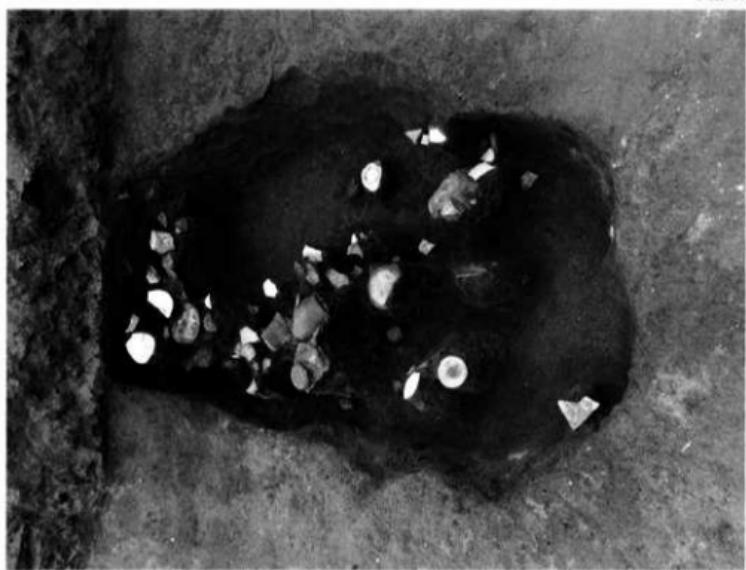




1. 124号土壤 上部土部Ⅲ集積（南西から）



2. 124号土壤 下部集石（南から）



1. 132号土壤（北東から）



2. 134号土壤・15号墓室棺蓋（北から）



1. 138号土壤（北東から）



2. 141号土壤（東から）



1. 147号土壠 (南西から)



2. 158号土壠 (北東から)



3. 160号土壠 (北から)



1. 161号土壤（南東から）



2. 161号土壤重物除去後（南東から）

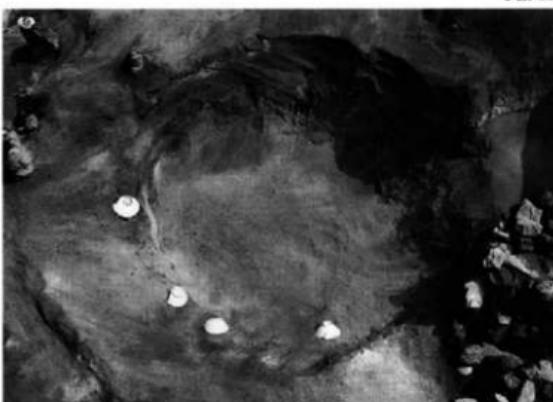
1.
164
号土壤集石
(北東から)



2.
164
号土壤
遺物出土状況



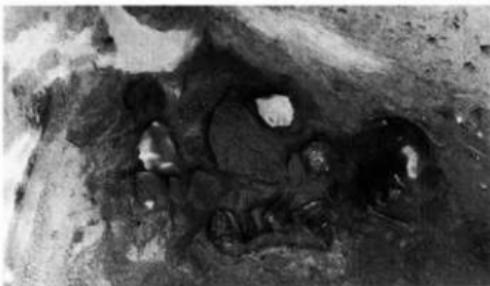
1.
167
号土壤
(南から)



2.
168
号土壤
(南から)

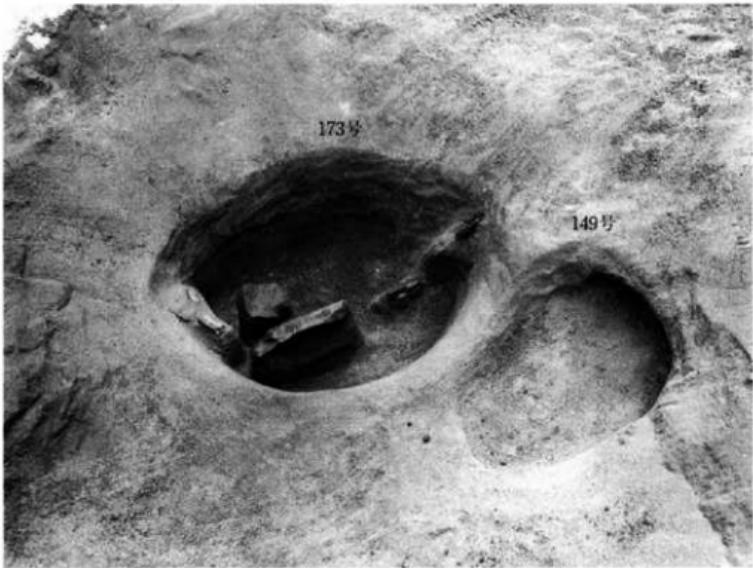


3.
168
号土壤
動物骨出土状況
(北から)





1. 169号土壤 (北から)



2. 149号, 173号土壤 (東から)

1.
175号土壤集石（北から）

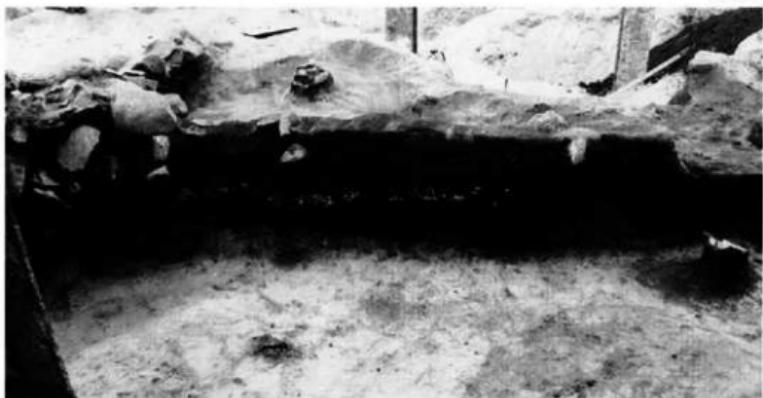


175号

177号



2. 175号, 177号土壤集石（南東から）



1. 175号土壤 石積土層断面（南から）



2. 175号土壤 石積土層断面（東から）



3.
175
号土壤
石積
銅錢出土
状況



1. 175号土壤 作業風景



2. 火葬頭骨集積遺構 作業風景



1. 火葬頭骨集積遺構（南から）



2. 火葬頭骨集積遺構（部分・北から）



1. 火葬頭骨等の遺構 頸寺出土状況(部分)



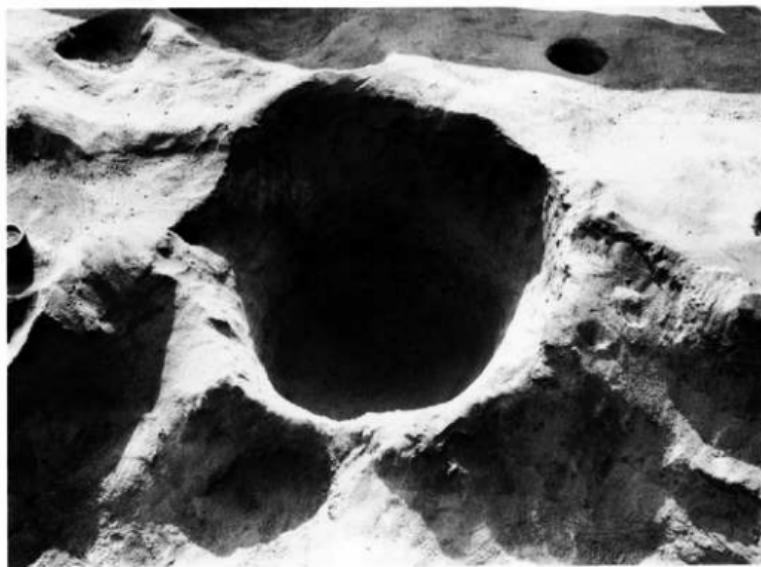
2. 菊池市議会の見学



3. 九州大学医学部永井教授の観察



1. 172号土壤（東から）



2. 177号土壤（北東から）



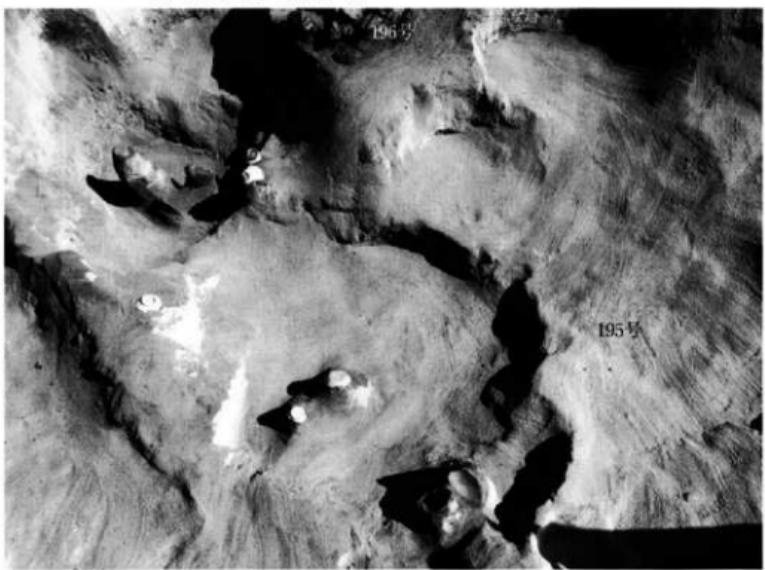
1. 180号, 181号土壤 (北から)



2. 180号土壤 鏡出土状況



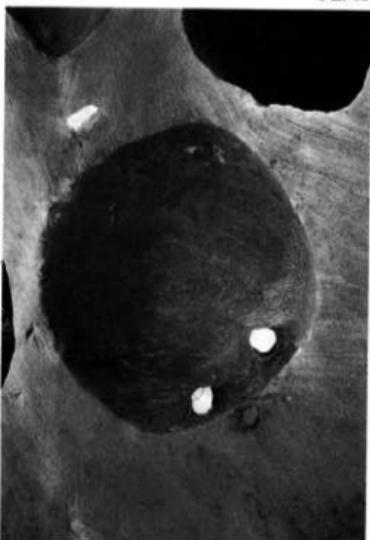
1. 194号土壤 (南西から)



2. 195号, 196号土壤 (南から)



1. 205号土壤 (西から)



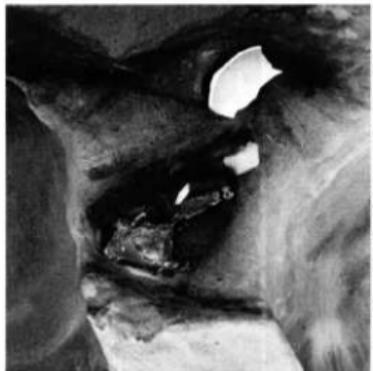
2. 211号土壤 (南から)



3. 212号土壤 (南から)



4. 214号土壤 (南西から)



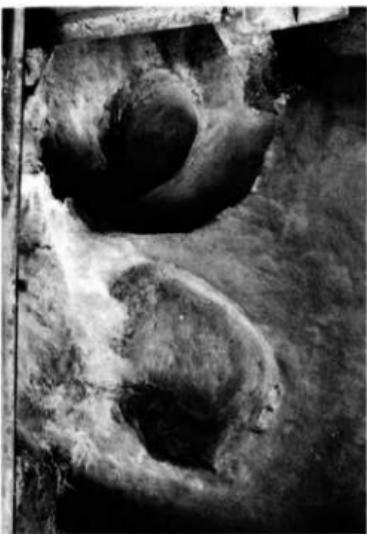
1. 225号土壤動物骨（馬）出土状況



2. 236号土壤（井戸・北から）



3. 251号土壤動物骨（イルカ）出土状況



4. 287号、289号土壤（北西から）



1. 近世石組遺構（南東から）



3. 16号甕棺墓（北から）



4. 17号甕棺墓（北から）

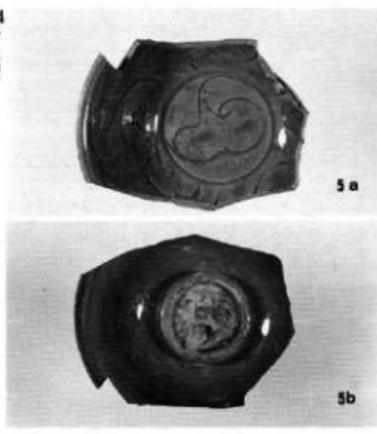
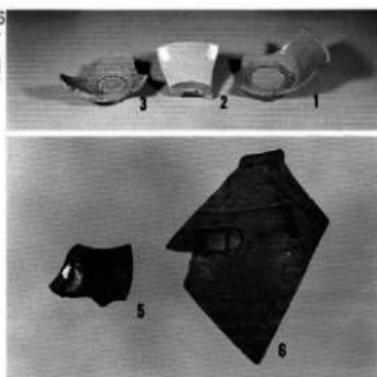
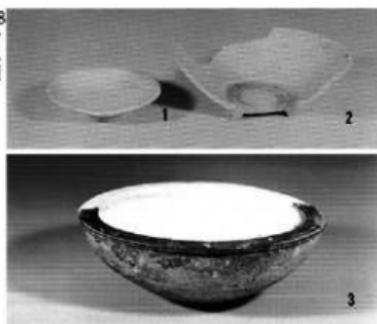
2. 近世石組遺構（天井石除去後 南東から）

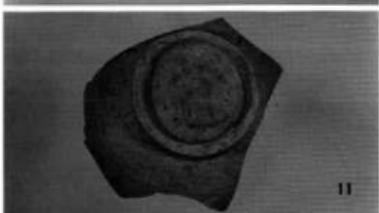
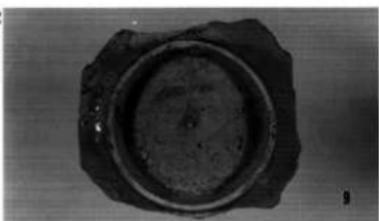
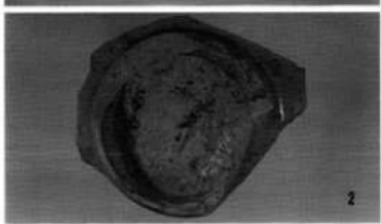
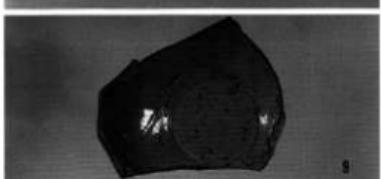
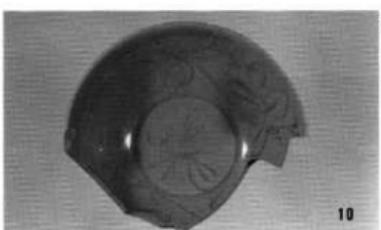
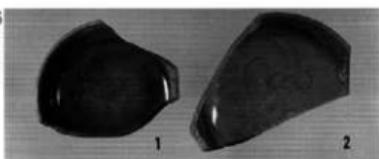


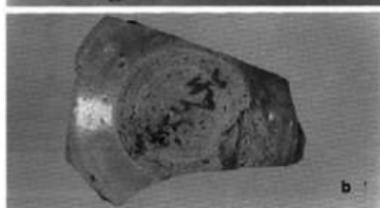
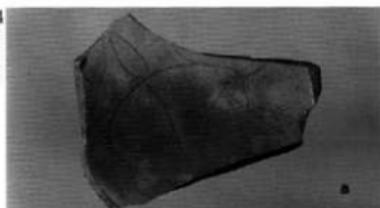
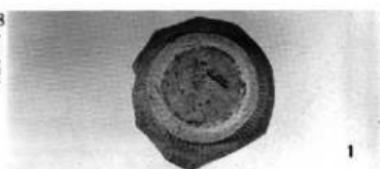
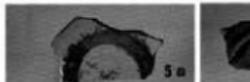
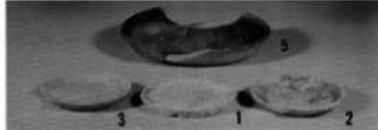
1. 7号橋 検出状況



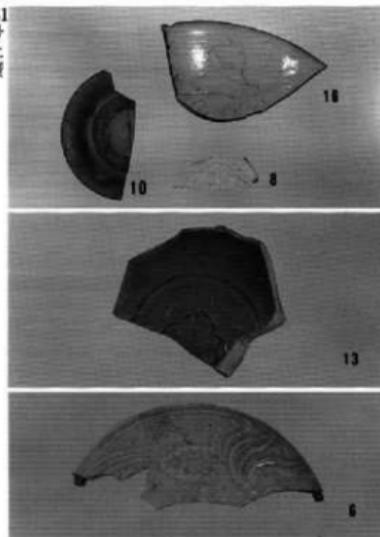
2. 7号橋 遺物取り上げ後 (北から)

104
号土壤116
号土壤118
号土壤118
号土壤

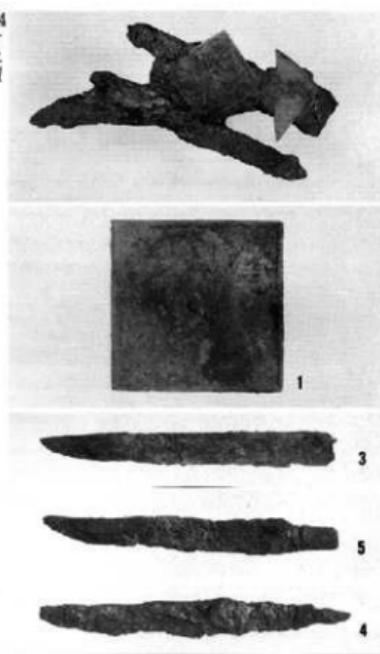
122
号土壤126
号土壤132
号土壤134
号土壤

145
号土壤153
号土壤154
号土壤158
号土壤159
号土壤160
号土壤161
号土壤

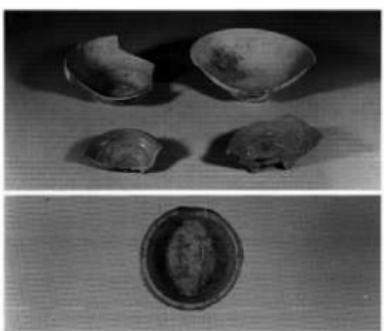
161号土壤



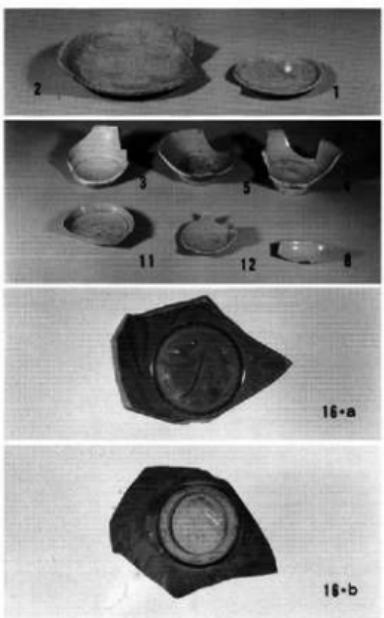
164号土壤

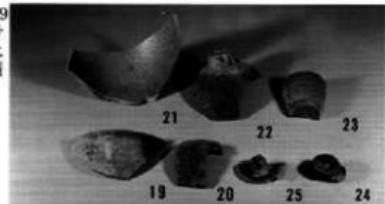
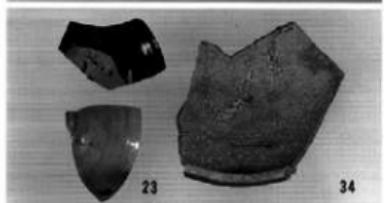
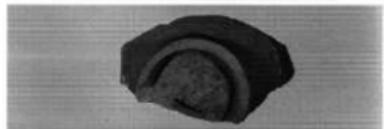
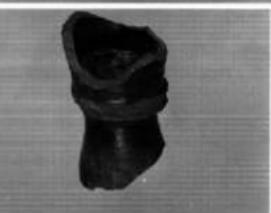
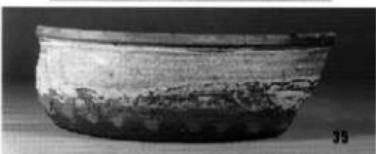


167号土壤



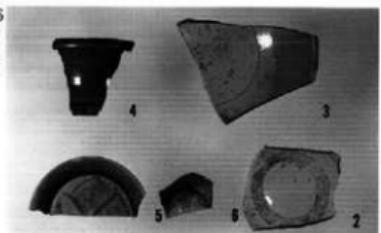
169号土壤



169
号土壤171
号土壤171
号土壤

175
号土壤

3

176
号土壤

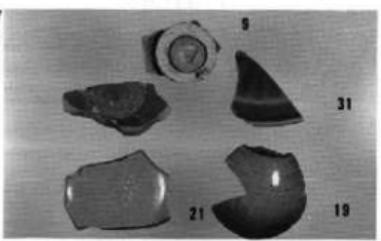
4

3



5

1

177
号土壤

9

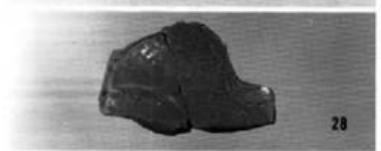
31

21

19



41



28



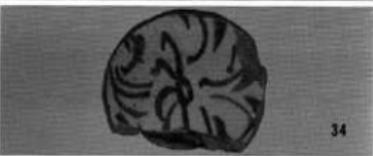
27



28



29



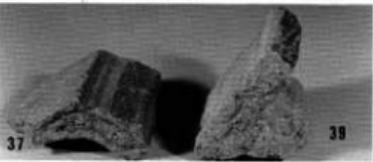
30



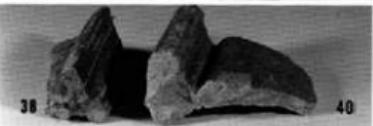
31

36

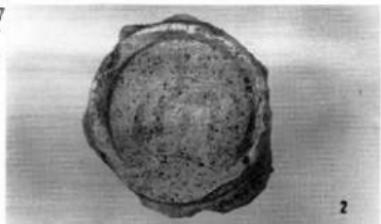
35



32



33

177
号土壤

2



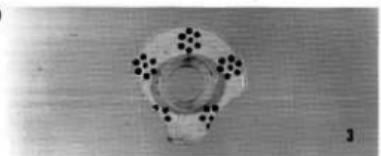
13



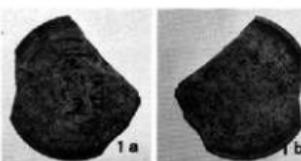
17



7

179
号土壤

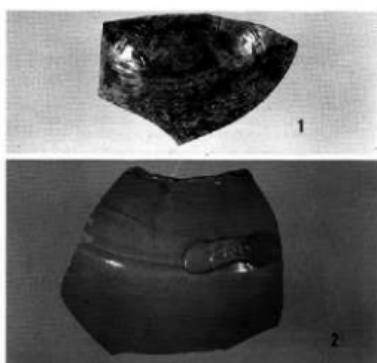
1

181
号土壤185
号土壤

1a



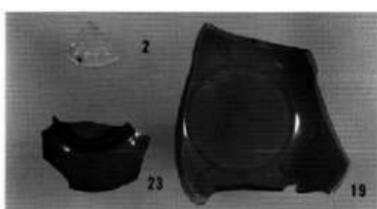
1b

187
号土壤

1



2

193
号土壤

2

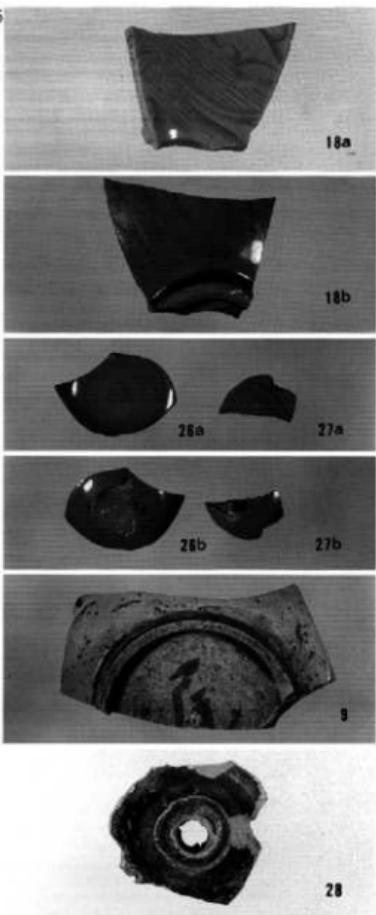


23

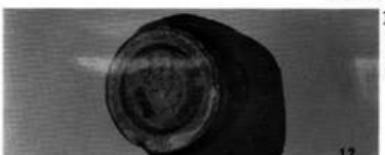
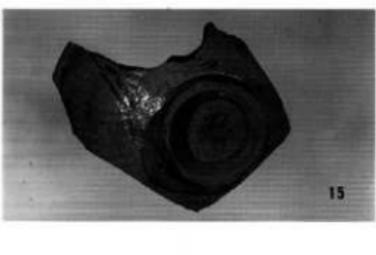
19

195
号土壤

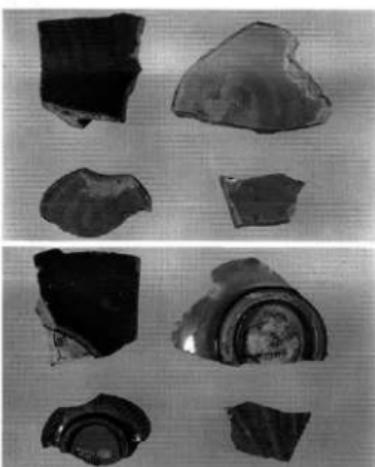
195号土壤



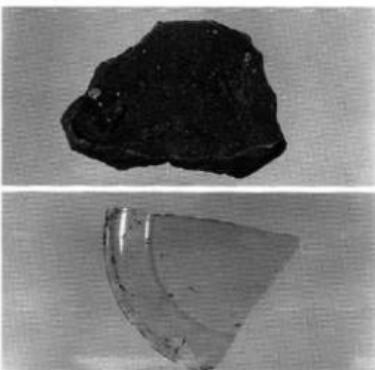
196号土壤



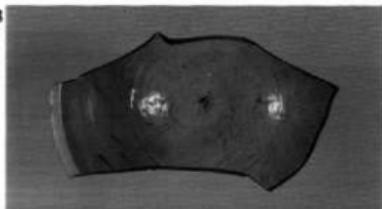
197号土壤



199号土壤



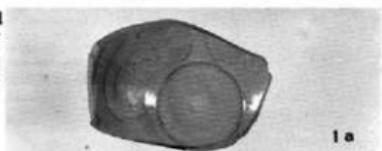
208
号土壤



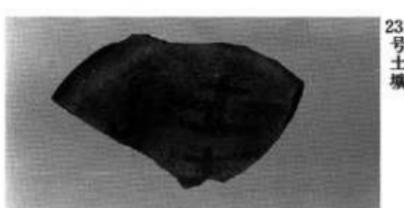
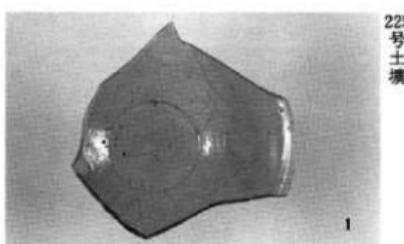
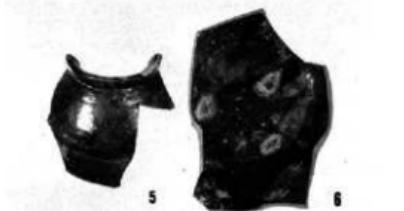
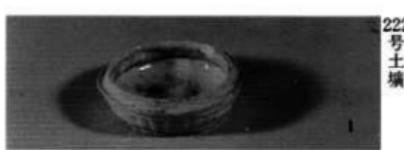
209
号土壤



211
号土壤



214
号土壤

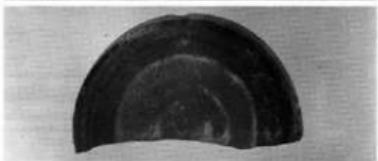
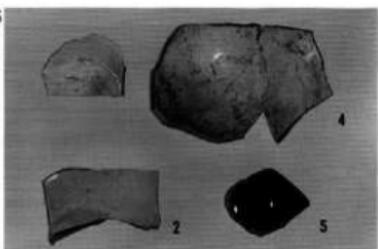
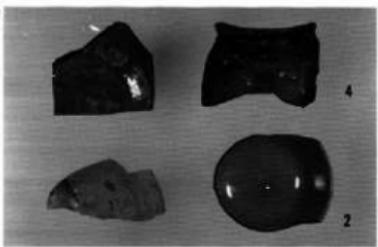
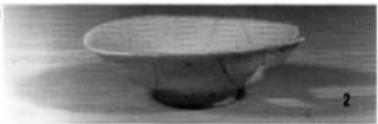
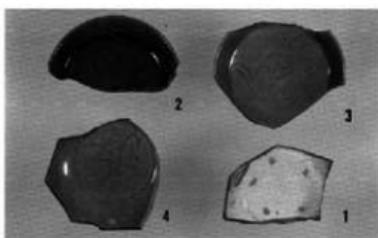
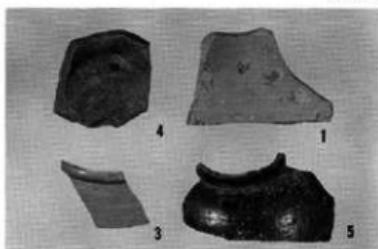
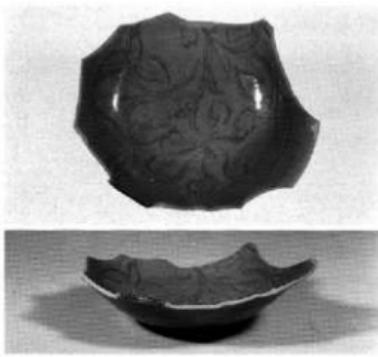


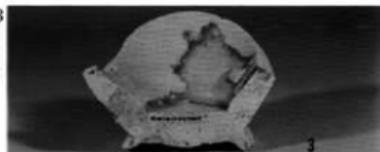
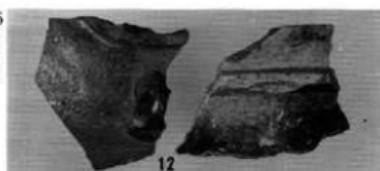
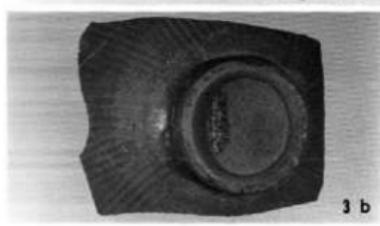
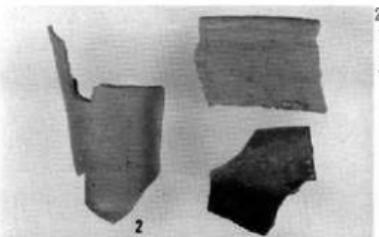
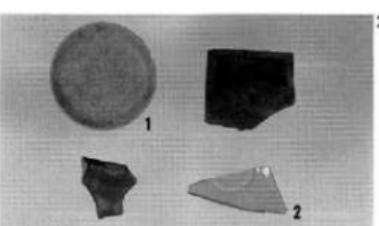
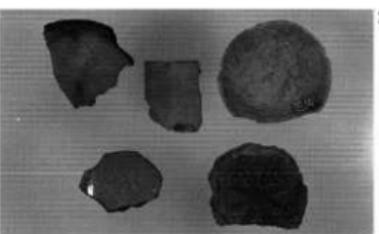
217
号土壤

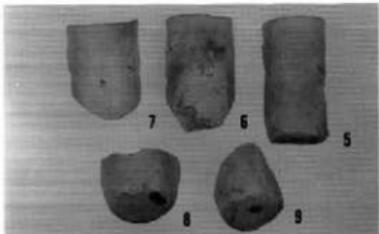
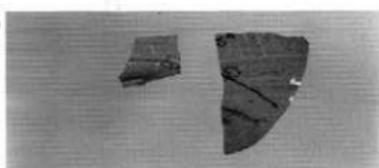
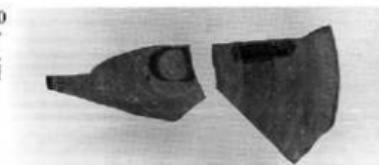
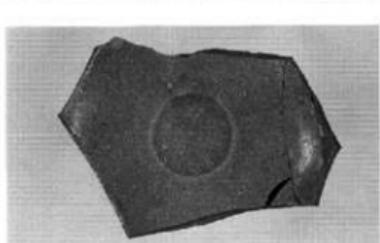
222
号土壤

225
号土壤

231
号土壤

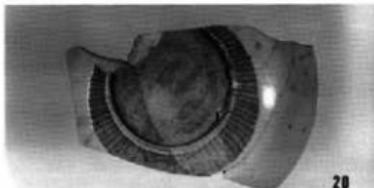
235
号土壤237
号土壤239
号土壤239
号土壤240
号土壤241
号土壤

243
号土壤246
号土壤248
号土壤252
号土壤255
号土壤256
号土壤257
号土壤259
号土壤260
号土壤

260
号土壤262
号土壤264
号土壤267
号土壤269
号土壤270
号土壤276
号土壤278
号土壤290
号土壤294
号土壤



18



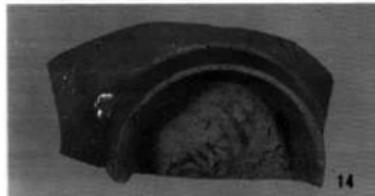
20



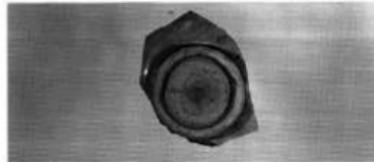
12



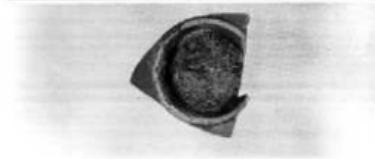
13



14



8





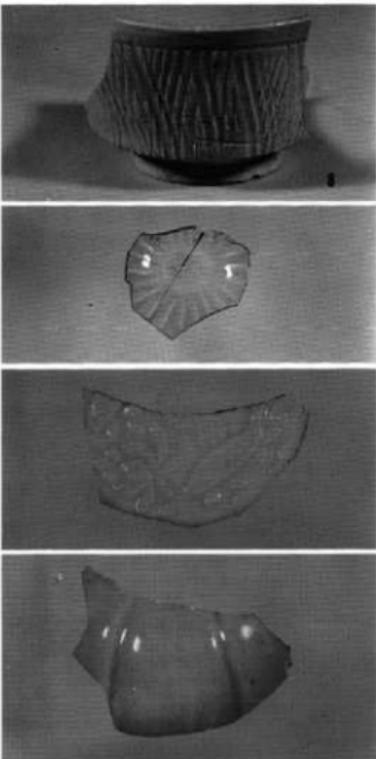
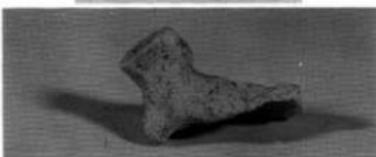
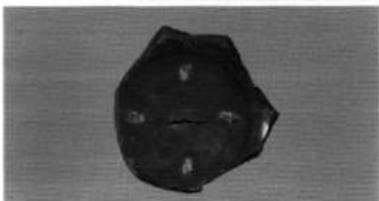
27 a

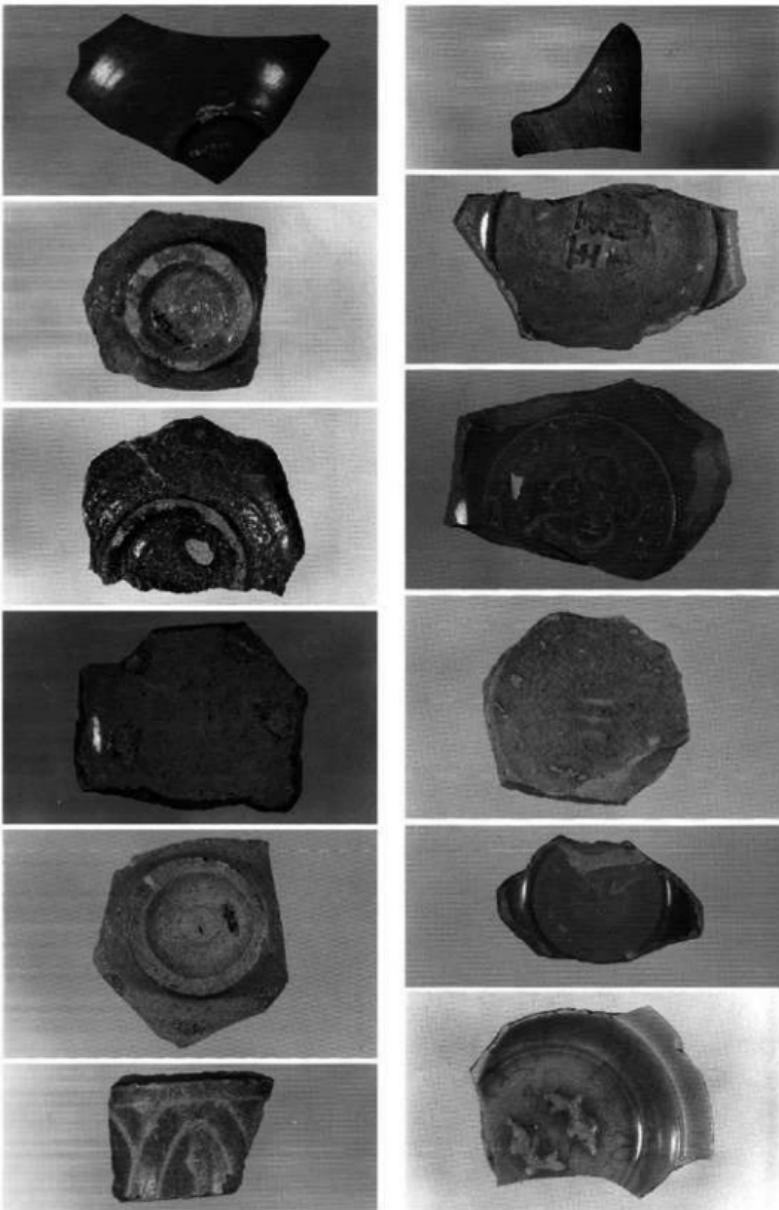


27 b



28





付編 I

祇園町遺跡D-I区出土人骨群

九州大学医学部解剖学教室

永井 昌文

はじめに

福岡市営地下鉄工事に際して昭和53年8月発見された標記人骨群は、ほとんど頭骨片のみに限られた夥しい焼骨の集積であることから出土当初から人びとの耳目を惹いた。

伴出した陶磁・土器片によって考古学的な所属時代は14世紀初頭と推定され、また場所的には旧「大射馬場」であるところから、当時福岡県文化財専門委員であった筑紫豊氏は、明治の博多の郷土史家山崎藤四郎翁がその編著「石城遺聞」中に採録刊行した「博多日記」を引いて、鎌倉時代最末期に鎮西探題を襲い事成らずして非運にも斉首された菊池一族の首級にあらずやとの見解を報道関係に寄せられた。

そのためか、菊池の末裔は勿論のこと、一般の人も異常な关心をこれらの焼骨に寄せたのであるが、残念ながらそれを証明する直義な証拠を欠き、結局は人骨そのものより精確な調査研究を筆者が依頼されることになった。とは言っても、対象は変形の著しい焼骨であって参考となる文献資料も乏しい。可能な限りの検討をすすめた経過と結果を下記する。

出土状態

昭和58年9月19日現地を訪れた筆者の記録では次の通りである。

同遺跡のD-I区を地表下約1.5mで斜によぎる溝中に、幅100cm長さ250cmに亘って深さ30cmの人骨片の集積がある。認められる限り頭骨片であり、しかも焼けている。表在していく確認できる下顎数でも10個はある。



火葬人骨群出土状況

整理経過

後日、上記の集積人骨を50cm方眼の10区（A～J）に分けて採取した。それぞれの区内の骨の種類について偏りや相違があるやもと配慮したからである。しかし格別の異同は認められなかったので後では一括して取扱った。

多量の骨片はいずれも破砕、亀裂、収縮、歪曲が著しく（第2～4図参照）700～800℃以上の温度での完全焼骨であることを物語っている。従って形態的特徴から種類を査定するのに困難を感じる骨片もないではないが、そのほとんどが頭骨片および上位頸椎片であることは疑を容れない。四肢の長骨片はわずかに片手にのせる程度の量であり、むしろ紛れ込みと見るべきであろう。

上記の如く変形が高度であるので、これらを接合し個体別に復元するのは不可能といってよい。ただ火を受けた後の取扱いで人为的で破折したと見られる骨片の若干は接合し得た。

個体数の推定

上位頸椎から上へ頭骨に至る全骨片の中から、特徴があつて鑑別し易く、しかも強固で良く残り、しかも1個体に1個所しかない部分を選び出してそれぞれの個体数を調べた結果は下表の通りである。

表の如く軸椎突起の110個、（第1図）を最多として、他はいくらくか少ないが、これは破碎した結果検索にからなかつたためであろう。ここで注意したいのは上位頸椎と頭骨各部の数が多少の相違はあっても比較的に良く相応していることである。それは上位頸椎を伴い打落された首級の数を思わせる。それは少なくとも110個と見るのが妥当であろう。

西	A	B	C	D	E	東
	F	G	H	I	J	

	特徴ある構成部位	個数
前頭骨	両側の額骨突起	右 98 左 98
頸骨	両側の前頭突起	右 109 左 107
側頭骨	両側の蝶形骨	右 104 左 97
後頭骨	外後頭隆起	93
下顎骨	両側の関節突起	右 91 左 89
環椎	前弓の歯突起窩と前結節	93
軸椎	歯突起	110
(第2頸椎)	前及び後関節面	

表 頭骨及び上位頸椎における部位別検索個数

性及び年齢の推定

この事は、これらの人骨群の性格を推量する上で重要と思われる所以少なからぬ努力をしたが思うようには成程が上らなかった。というのも変形の著しい焼骨であって個体識別もままならぬためである。現代人骨における性差、年齢差に關してはある程度の基礎資料が蓄積されているが、これ等を参考にする際に焼骨ではどう変形し、どの程度の収縮が見られるかは現在なお明確でない。諸家の実験的報告も条件によってまちまちであり必ずしも一致した結果に達していない。一方、今後のこのようないくつかの基礎実験のデーターが補足されたとしても、それから推量される性・年齢はおよそ確率論的なものであって、個々の焼骨について明確に断定しうるものではない。

上記の如き極めて困難な方法上の隘路があるので、現状では下記の程度の事しか云えない。即ち、正常頭骨において比較的性差が著しく、更に火を受けても歪曲の少ない乳様突起高及び厚において、焼けた場合の収縮率を10%と見て、このD-I区焼骨群は大部分が成人男性に属し、一部に性別不明の未成年（この場合は20歳未満）を含むようである。乳・幼児の骨は見出されていない。

刀創（第3、4図）

当時の闘争を生々しく反映して、若干の頭骨に刀創が見られるが、ここではその典型的な例を図を掲げて説明する。

焼けて反り返り一見接合しそうもない左右の頭頂骨である。しかし内面の中硬膜動脈の圧痕や部分的な矢状縫合の噛み合いなどから見て正しく同一個体の左右頭頂骨と断定される。矢状縫合の前端プレグマ部の左右にまたがって接線方向（幾何学的）の斬創が認められる。焼けて縫合で離開しているが、丹念に見ると生前に受けた同一傷と判断される。この例には更に左の側頭坦面をほぼ直線的に斜に走る長さ10cm以上の斬創もある。

まとめ

以上の焼骨に関する所見をまとめると以下の如くである。

1. 人骨すべて完全な焼骨である。
2. 頭骨片と上位頸椎片とがそのほとんどを占め、それ以外の骨は極めて少ない。
3. 鑑別容易で残存しやすい構成骨から推定した頭骨の個体数と、頸椎特に軸椎の歯突起から推定したそれとはほぼ一致し、少なくとも110体分はある。
4. 上記から判断して、斬首した首級を火葬に付したものと思われる。
5. 性別、年齢の推定は困難であるが、大部分が成人男性である可能性が高く、一部に性別

不明の未成年骨を含むようである。

6. 合戦の証拠と見られる刀創を残す頭骨がある。

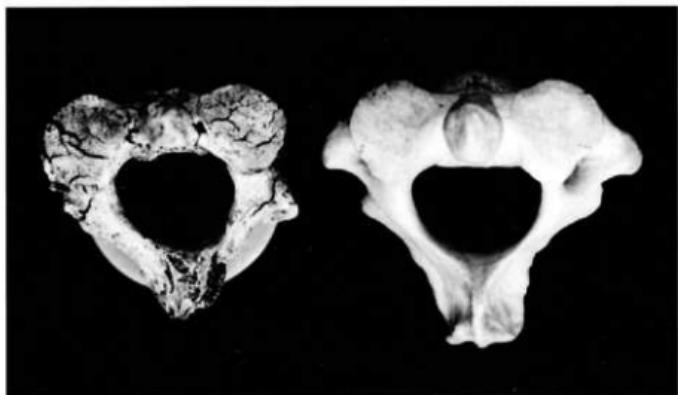
考察

問題は上記の事実と「博多日記」の記録との整合性であるが、目下のところこの記載と完全に矛盾する事実は見当らない。むしろこの日記の文献的価値を裏づけているとの感の方が強い。ただ一部の史家が逆に北条方の首級ではなかろうかとする疑惑については、時期的ズレも2ヶ月余しかないために、人骨の調査からは何とも云えないが、筆者としては中世史家の積極的証拠の提示が欲しいところである。北条政権末期にあくまで鎮西探題が襲撃して来た菊池一族を見せしめのために1ヶ所に大量に斬首した必要性は首肯されるが、その逆の場合打首にする必要がどの程度あったものであろうか。

文 獻

- 1) 池田次郎 1981 「出土火葬骨について」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43号、『太安萬侖墓』所収
- 2) Herrmann, B. 1977 On histological investigations of cremated human remains. *Journal of Human Evolution*, Vol. 6, p. 101~103
- 3) 日本人類学会編 1956 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」 岩波書店
- 4) 山崎藤四郎編 1890 「石城遺聞」

第一図 出土軸椎の全数(116個)上面観



第二図 上面観 (左)出土軸椎 (右)対照 現代人男性



第3図 刀創 左右頭項骨間を縦に走る矢状縫合前端と左側頭頂面を斜に走る新創



第4図 第3図の内面

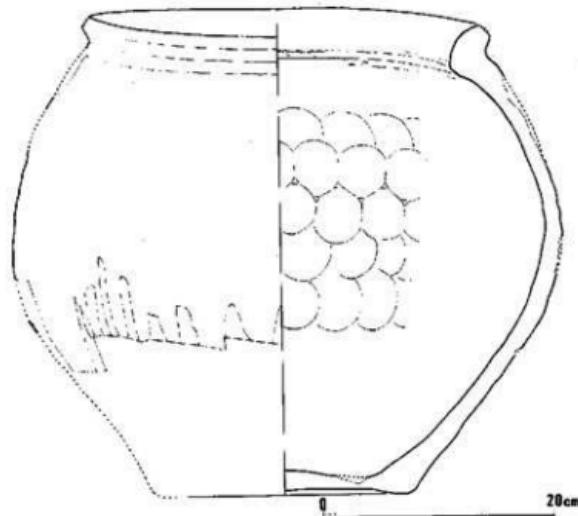
付編 II

博多遺跡群第6次調査略報

—福岡市博多区冷泉155番地の調査—

遺跡略号 HKT

遺跡調査番号 7932



A区21号土壌出土の甕 Fig. 4の遺物とともに、底部から浮いた形で出土。陶器C群に属する。褐緑色の釉が器内外に施されるが、大部分カイラギになる。器内上半部に橢円形の叩き跡がある。火にあたり表面の剥落が著しく、胎も黒灰色にやけている。(142ページ参照)



1 水注 越州窯系青磁

2

玩具・犬
景德鎮窯系青白磁



1. 調査に至る経過と遺跡の概要

宋人百堂に開通する東西南北の溝、
大間街割開通の現在街割平行の溝、
中国系商人で船主の存在を裏付ける墨書陶磁器、
中国大陆7州15窯製作の多種大量の輸入陶磁器、
各時代の建物と井戸群、
鎮西探題の北条氏を襲撃、集首されたと考えられる菊池一族110体の首級、
など、昭和52年12月に始められ、昭和56年3月に終結した博多市街の地下鉄工事に伴う発掘調査は博多中世史研究に多大なる貢献をしたと言えるであろう。

正直なところ、地下鉄工事以前の考古学は奈良・平安時代の古代史関連までが精一杯のところで、中世史関連遺跡の発掘調査は元寇防塁を除いて皆無に等しく、調査されたとしても偶然性に頼るところのものであり、問題意識をもち得ない段階であった。そのような意味で地下鉄関連の博多市街の調査は暗中模索手さぐり状態であって、かくも大きな成果を上げられるとは想像できぬ事であった。現在、博多出土の資料は研究者や一般の人々の収集を集め、わが国はもとより、中国、韓国、東南アジア、イギリス等の陶磁器研究者の目で直接確かめられ、重要な価値付けをされているところである。

今も続けられる博多市街の再開発工事に伴う発掘調査は、地下鉄工事に伴う発掘調査の成果が基軸となっているのである。

さて、ここに報告する「博多区冷泉町155地内」の遺跡は、博多遺跡群第6次調査である。昭和54年11月9日付で開発行為の届出が提出され、同年12月に試掘を行い、昭和55年3月初旬より同年4月一杯まで発掘調査を行ったものである。現在の発掘調査のはとんどが、開発者の文化財に対する認識の深い自発的届出事業であるに比べ、当時の発掘調査は開発者の自発的届出が皆無で、通りがかりの人々の通報によるところがほとんどであった。故に文化財保護の精神を開発者に理解して頂くのに長時間を要した訳である。調査、費用等が開発側に委ねられるところから、開発者の抵抗は厳しく、理想的予算数値に達せず、調査費用、期間、面積は行政側に大幅な譲歩と妥協を強いられた。故に調査は上層から下層へと一枚一枚剥がす理想的調査とはならず短絡した方法となった事を、博多市街、博多遺跡群発掘物語の中に銘記しておきたい。

遺跡の成果を記述する

奈良・平安時代の方形の木枠組井戸、鎌倉時代の木桶主体の井戸、木桶の上部に瓦を桶状に組合せた井戸、正体不明の柱穴群、それに11、12世紀代を中心の多種多様の輸入陶磁器である。

○調査組織 文化部長 志鶴幸弘・文化課長 井上剛紀・埋蔵文化財第2係長 柳田純孝
(昭和54年代) 調査担当 折尾学 池崎謙二 浜石哲也・整理担当 森本朝子

2. 出土遺構と遺物について

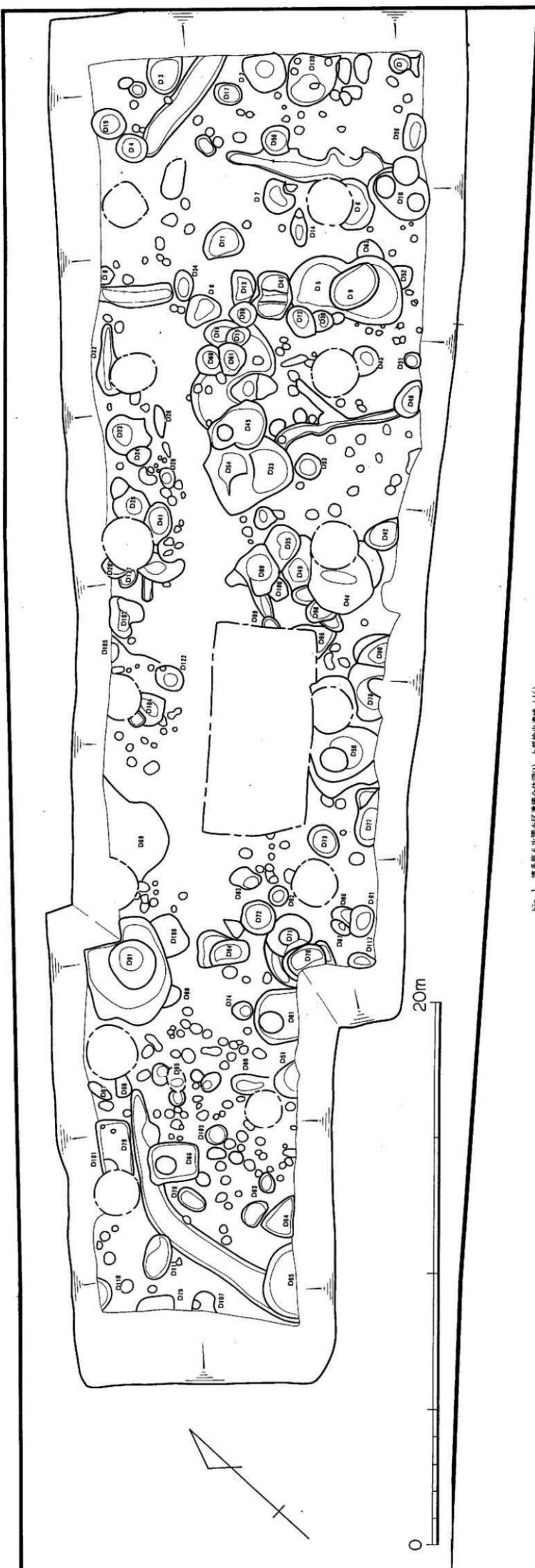
次に比較的しっかりした状態で検出された遺構をいくつか選んで紹介する。

9号土壙 Fig. 3 (PL.2) A区検出の井戸である。縦板で囲った底部70cm余りが残っていた。上部は既に早く削平されている。径70cm、堤方は削平部で120cmを計る。遺物は多くない。1は白磁平底皿III類。白化粧がしており、口縁は稜をつけて水平に外にひき出している。他に3個体ある。2は淡オリーブ色の青磁碗。胎土は灰色堅緻やや粗、氷裂のない透明釉がかかる。3、青磁鉢の底部。平底で全面施釉。灰黄色の胎土にオリーブ色透明釉が薄くかかる。外底に径3.5cmの器物の跡が輪形に残る。同じ胎土の器を、重ね焼したものであろう。4も同じような底部だが、底部より2cmほど上に、重ね焼の白い耐火土の目跡がある。胎土は灰色、釉は灰オリーブ色不透明である。3、4はFig.17の1のような器物の底部と思われる。陶器B群の鉢よりは格段に良質で、越州窯風の青磁である。5は陶器C群Y字口縁甕。褐色不透明釉が内外に施され、外には斜めの、内には青海波風の叩き目がある。図示した実測可能のもの他に次のような小片がある。白磁碗0-I、II、IV、V、IX類、同平底皿0-I、II、VI類、青白磁壺、陶器はA群を中心に黄釉細縁盤、磁灶窯の斗温山窯産青釉壺(21号土壙参照)など、B群平鉢2、四耳壺および群外の類無四耳壺。11、12世紀の白磁が中心であるが、2~4の青磁、斗温山窯の青釉壺に注目したい。

21号土壙 Fig. 4 (PL. 2) A、B区にまたがる土壙。深さ25~20cmで90cm×170cmほどのくびれのある長円形を呈する。遺物は底部より浮いた形で出土した完形に近い器物と、他に小片ばかり285片におよぶ白磁片をはじめ、国産の土器、須恵器、瓦器碗、土師皿(へら切底2に糸切底1の割)、A群に属する陶器多数、B群の壺、C群の無釉盤口水注、捏鉢などがある。又越州窯系青磁の壺片と注口がある。白磁片は碗II類が最も多く、11世紀を中心とする廃棄物処理穴に、重複して設けられた火葬墓の可能性がある。

1、2はへら切離しの土師器で、2の内面は磨かれ、こて跡がある。3は白磁碗II類でFig.23の2の形、灰白色胎に水緑色の釉がかかる。氷裂があり、露胎はうす茶を帯びている。外底にハマの一部が熔着している。4、同じくFig.23、6と同形の碗。5、6は高台付白磁皿のI~2に属し、他に2個体がある。7は白磁平底皿、うすくオリーブを帯びた透明釉がかかり、氷裂がある。8は、平茶碗型の黒釉の茶碗である。胎はベージュ色、釉は口縁近くではマホガニーカラーで、底の方ほど厚くなり黒くなる。表面に青く輝く部分がある。口唇と胎尻では銹茶色。火に会い、釉表は疊っている。同様の破片があと1個分ある。9は8と似た器形であるが、胎は黒っぽい灰色で粗く、露胎は茶褐色。いわゆる建盃に近い。釉は茶を含む黒で氷裂はなく、黄土色の糸目がかすかに出ている。10は陶胎の皿。灰色の胎土には白い砂や黒い点が少し混る。黒っぽいオリーブ色の釉がかけられ、口で合せて焼いている。口縁の造りに特徴があるが、B群

Fig. 1 喀多第6次露点区(连片含水带) 上部输出带(1/5)



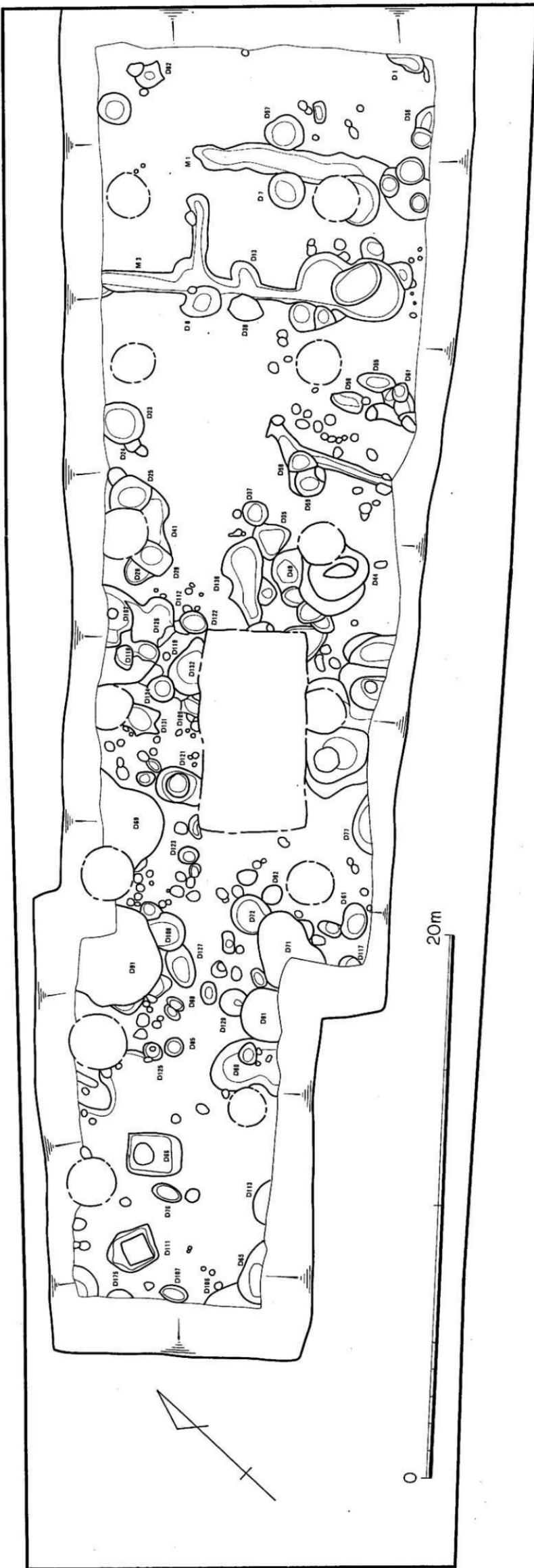


Fig. 2 [博多第6次調査区地質分体図2] 下部鉄出し帯 (1/10)

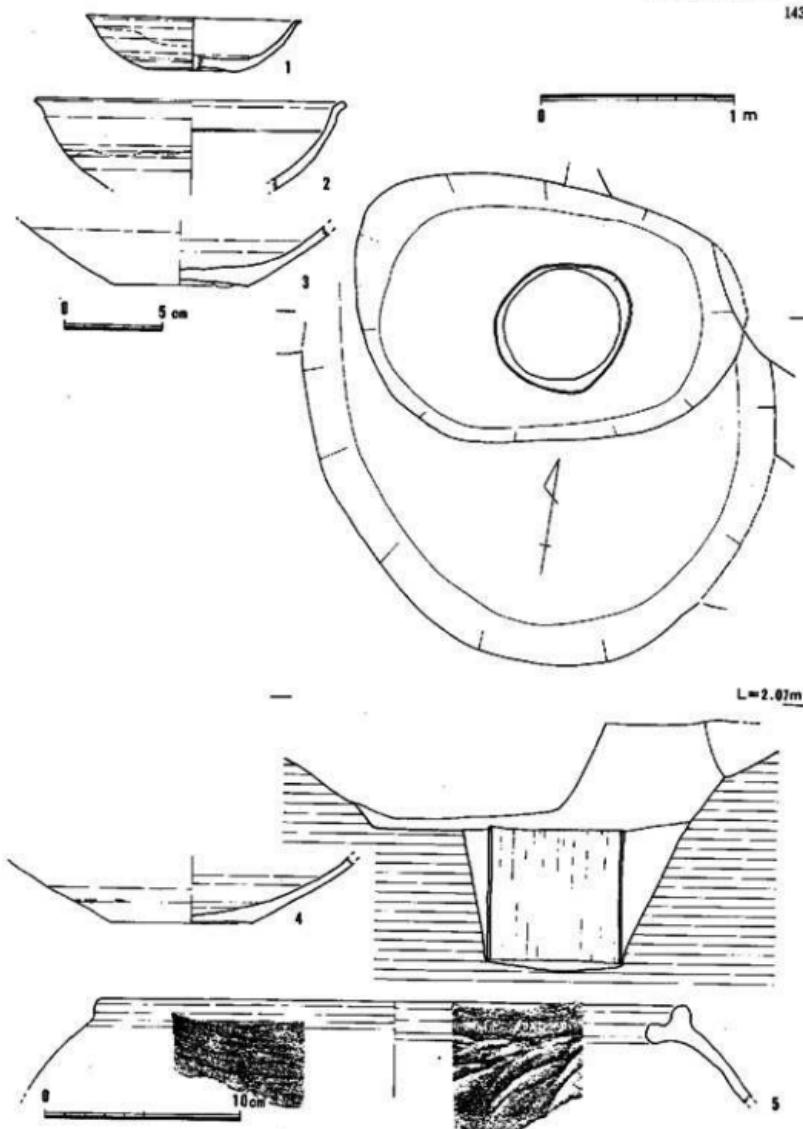


Fig. 3 A区9号土壤と9号土壠出土遺物

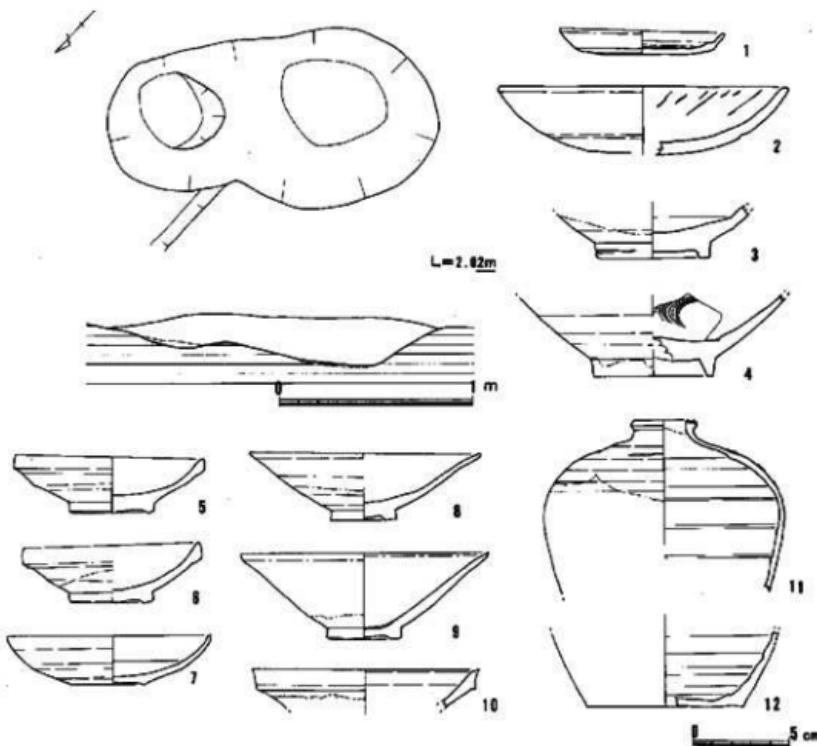
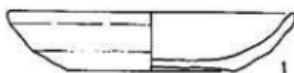
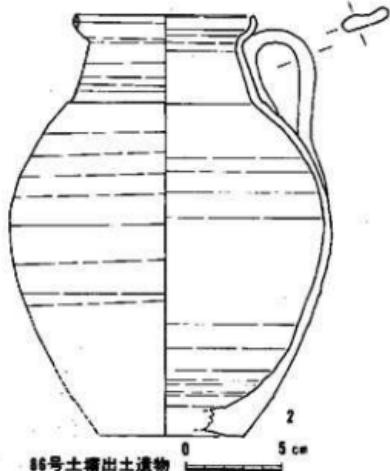
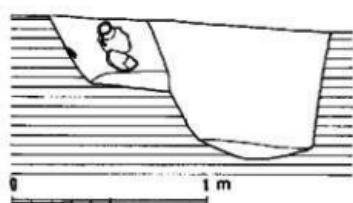
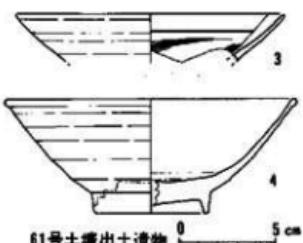
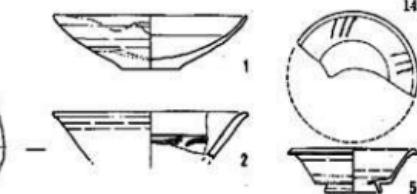
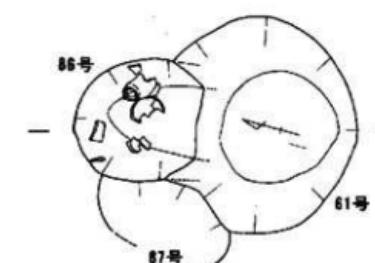


Fig. 4 A, B区21号上塙と21号土壌出土遺物

の陶器である。やや茶色がかったもう1個体がある。11、12はA群の陶器で、小口瓶とよく似た特長がある。ただ胎土はやや良質で、釉色は淡く、茶がかったオリーブ色の透明釉で、冰裂がある。この二つは別個体だが、ちょうど二つを合せたほどとの器高で完結し、12cm余りの壺になると思われる。現在までの資料では、泉州磁灶窯系の窯のうち、現在は南安県に入っている斗温山窯の壺が、最も似ている。5～9の遺物は本付編タイトルの下に図示した壺を中心に発見されている。また、この一括遺物以外の小片ばかりの中には内面に片切形の割花文と櫛による刺突文を施し、外面には粗い櫛で一面に斜線を施した青磁片がある。胎土灰色。オリーブがかかった透明釉がかかり冰裂がある。同安窯系の青磁で、一括遺物より古い遺物の可能性がある。



87号土壤出土遺物

Fig. 5 C区61号, 86号, 87号土壤と61号, 86号, 87号土壤出土遺物

61号、86号、87号土壙 Fig. 5 (PL. 2) C区検出の土壙である。61号は径120cmのほぼ円形の土壙で、86号、87号土壙と重なるが、前後関係は、断定できない。

61号土壙 古墳時代の土師器を含む土器、須恵器、研磨土器、土師小皿などと、白磁、陶器片が出土した。1は白磁平底皿II類、2は白胎透明釉の白磁小碗、Fig.24の1に近いもの。3はFig.23の6の類、4はVI-3類だが、口縁は水平に削らず、玉縁のようにふくらんでいる。5はFig.18の北方系陶磁に属する杯で、黄ばんだ白の、青のような細かい胎土に透明釉がかかっている。水裂が少し出ており、釉下には縁がかった焦茶色の線が三本づつ、四方に描かれている。高台の造りは70号土壙の黒釉杯によく似ている。図示した以外の輸入陶磁には白磁碗II-1と4、IV、V、VI類、白磁高台付皿I類、平底皿II-4、III類、白磁耳つき小壺、陶器A群の小口瓶、盤、準A群褐釉四耳大壺、B群の壺と、茶入れのような褐色緻密な胎に、焦茶色の釉がかかる薄手の小壺片がある。

86号土壙 1は白磁碗0-II類の無文。2、陶器の把手つき無釉盤口瓶である。胎土はB群に近く、乳褐色で黒ごまがたくさん吹き出している。把手の対面では、口縁をつまんで注口を作り出している。他に陶器C群の捏鉢、土器、須恵器の小片がある。

87号土壙 1は糸切底の土師皿、2は白磁碗、3は同じくV類、4は白磁平底皿III類である。他に白磁では碗0-II、IV、V、VI類があり、高台付皿II類、平底皿III類、と壺片がある。又、同安窯系の碗II類、皿II類と粗質の高麗青磁、陶器A群黄釉盤の小片もある。

以上三つの土壙は、61号が12世紀、87号は13世紀まで達する遺物を含み、86号の遺物は白磁皿の12世紀前半は確実だが、陶器は不明。遺物が少なく時期の確定は難しい。

63号土壙 Fig. 6 (PL. 3) E区検出の土壙である。長さ1mのそら豆形で、腹に当る処に径25cmの大穴が後から掘られている。遺物は古い穴の上面で出土している。1~4は土師皿、すべてへら切底、他に小皿4個体があるがみなへら切底である。5~10は白磁で、5、碗IV類、6は同じくV類だが胎土は精良で器壁は薄い。口縁の外反が強い。黄土色透明釉がかかっているが水裂はない。7~9は平底皿III類、10はこれらの皿に似た釉・胎の白磁で、壺の口であろうか。11は灰色堅致な胎に粘青磁のような釉が厚くかかっている。しかし龍泉窯には見られない形である。12、黒釉磁蓋。胎土は灰白色磁質、黒褐色の鉄雜がかかる。露胎は赤茶色。13、黒釉碗。濃灰色でやや粗い胎土に、茶を含んだ黒い釉がかかる。細かいピンホールが柑皮状に見える、口縁外反の天目碗である。14、褐釉盤。器形、施釉法、窯詰法は基本的には黄釉盤と同じ。胎土は砂が多く、灰色に堅く焼けている。褐色のあまり光らない釉がかかる。図示したものの他に白磁碗II-1、IV、V類があり、平底皿III類、Fig.24の2と同類の小碗、青白磁碗・皿がある。陶器ではA群の細縁小形黄釉盤、準A群大形褐釉四耳壺、B群の壺、C群の捏鉢3がある。黒褐釉が内面にのみかかる行平もある。染付小片も1個あるが、これは他からの流れ

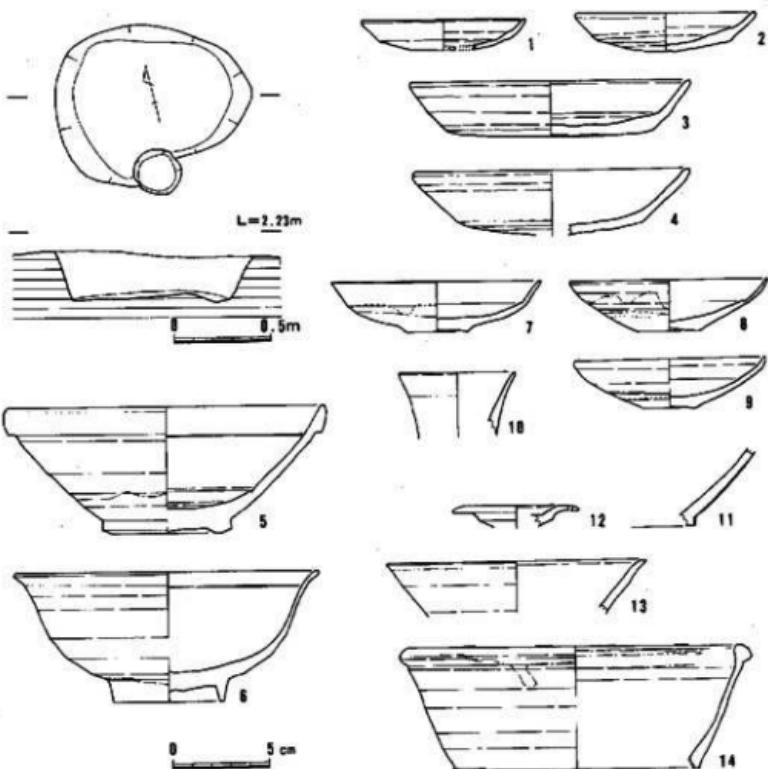


Fig. 6 E区63号土壙と63号土壙出土遺物

こみで、全体として11世紀後半～12世紀前半の遺物と捉えることができる。

69号土壙 Fig. 7, 8 (PL.3) C区検出の近世井戸。下層の桶組織板が二段、井戸瓦が二段を残している。瓦や板の裏側にたががはめてある。井戸は最下層に砂を敷き、小石を二層に分けてつめている。その上の砂層から土層にかけて、上の瓦がなだれ込んでいる。掘方からの遺物は多く、平安時代の須恵器・土器から伊万里まで、大きく5期に分けられる。輸入陶磁を含まない1期、白磁碗II、V類を中心とする2期、龍泉窯青磁I～III類を含む3期、明染付・李朝皿・備前播鉢を含む4期、伊万里（蒟蒻判）などの5期である。2期の遺物が実測可能のものが多くまとまっていた。

1. 土師皿。へら切底である。2. 青白磁碗。3～13は白磁で、3は碗II～1類。4. 同II～4類。5はV類。7, 8はFig. 23の6, 9に当たる。6も8と同じ類か。9～11は平底皿III類。12は、白磁

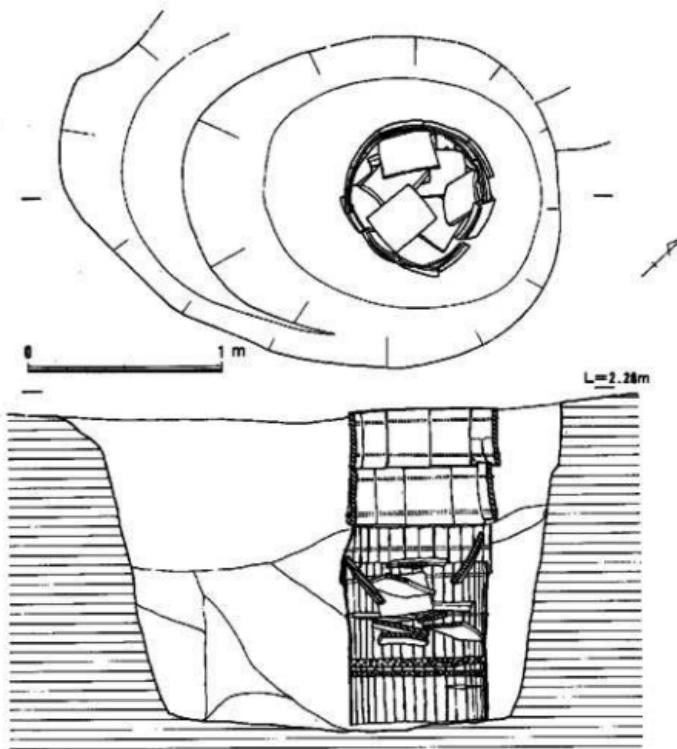


Fig. 7 C区69号土壙

碗II類と同じような灰白色でやや粗い胎、淡オリーブがかった透明釉で、細かい冰裂がある。

茄子のへたを象ったような形の蓋。13は、胎土は12の蓋に似るが、乳白色で冰裂のある釉がかかっている。非常に部厚い造りの合子身である。このような形の合子は広東省の諸窯と、福建省の南安などで報告例がある。当遺跡では他に同形のもの2個体と、Fig.26の26に示した小形1個体、計4個がある。14、15は黒釉碗。14は赤褐色に白い砂粒が混じる粗い胎土に黒褐色の釉。釉はつやがなく、大きなピンホールが並び、流釉現象もなく焼成不足と思われる。15は小片であるが、胎土は暗灰色で比較的こまかく、釉は褐色を帯びた黒で口唇は銹色、采目はない。いずれも口縁外反の範囲に入れられる器形の碗である。図示したものの他に、白磁碗II-4、0-1、V類。陶器はA群の小口瓶、黄釉褐彩盤と壺、準A群褐釉四耳大壺、B群四耳壺、C群捏鉢、そしてその他の頸無壺があり、全体として11世紀～12世紀前半の遺物である。

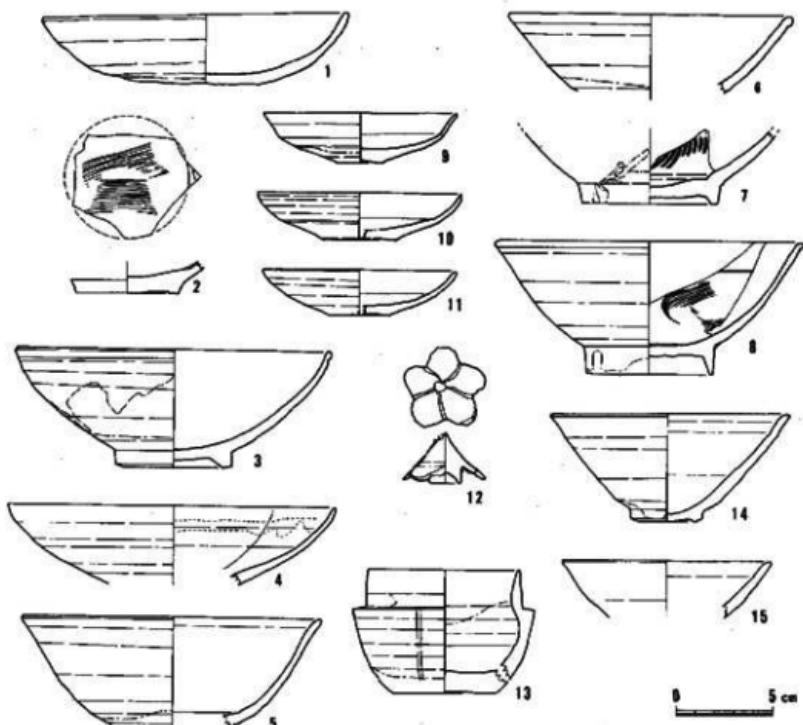


Fig. 8 C区69号土塙出土遺物

70号土塙 Fig. 9 (PL. 4) D区検出の井戸。最下部の桶枠のみが残る。遺物にはこんろの目皿や、陶器など、新しいものがある他は、11世紀に属するものがまとまっている。1～4は瓦器、2、3はいずれも体外下半部に指頭痕があるが、その上からよくなじて跡を消している。5～9は白磁で、5は碗II-1類。6はII-5類。7はII-4類。8はIV類。9は平底皿II類である。12は陶器A群で、青黄色の釉が流れており、磁社窯斗温山の小口壺底部である。10、11はFig.18にまとめた北方系の陶磁で、10はベージュ色の土に白化粧をし、クリームがかかった透明釉をかけている。疊付以下露胎で、内底には小さな目跡がある腰折の皿。11は灰がかかった白い、粉っぽい胎土の杯で、漆黒の釉をかける。高台脇以下露胎。口縁と見込で釉を割りとっている。他に実測不能の小片として、白磁ではFig.22の1～3と同類の碗、平底皿O-I、II類、陶器A群黄釉盤、行平がある。又、内面に劃花文を施し、余白を巻による刺突文で埋め、外面

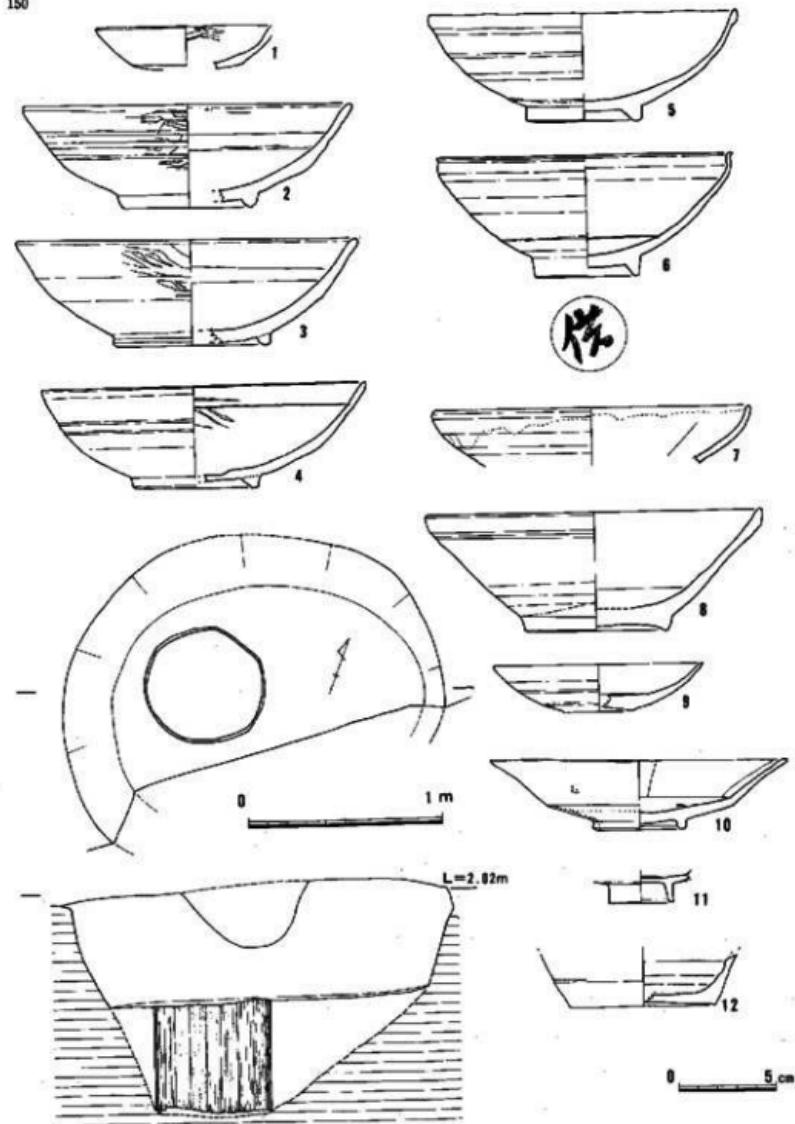


Fig. 9 D区70号土壤と70号土壤出土遺物

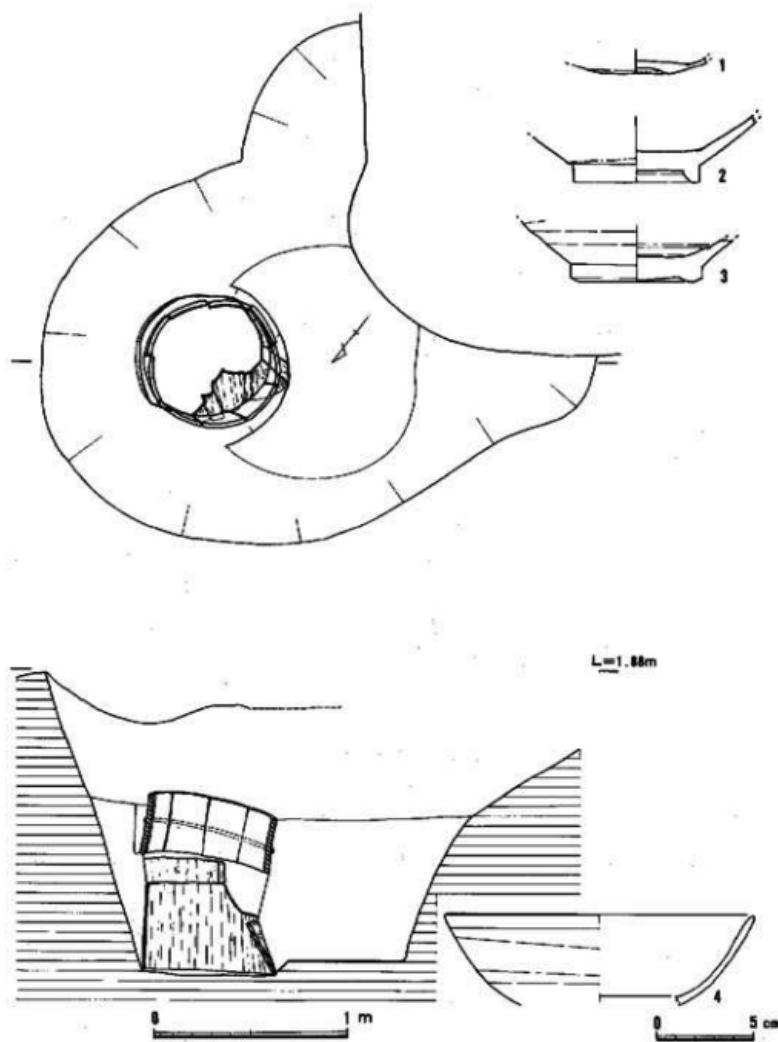


Fig. 10 D区71号土壤と71号土壙出土遺物

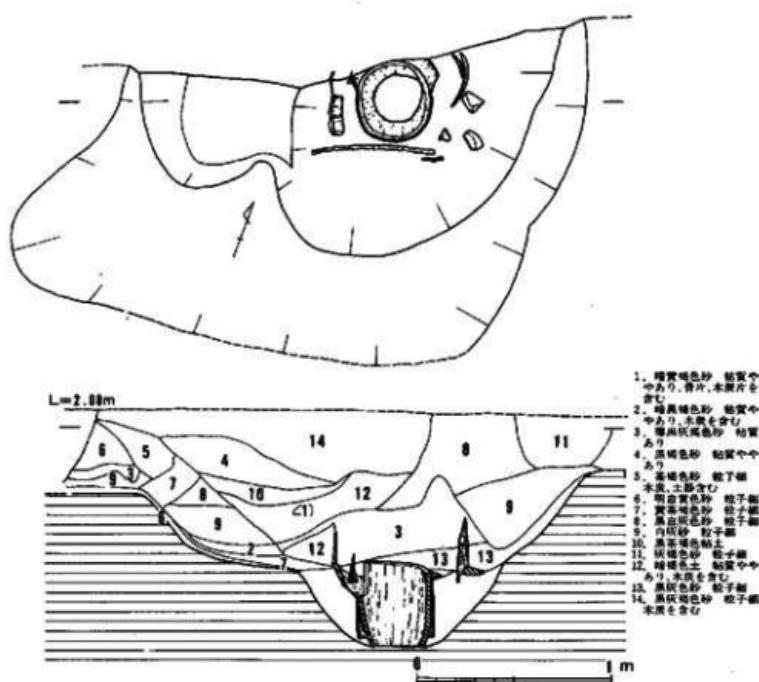


Fig. 11 C区102号土壤

では粗い鉢による平行斜線を施した同安窯系の青磁碗小片がある。6の外底にある「供」の墨書は、Fig.16の9の他、176ページに図示した天目碗にも見られ、この四個をほぼ同時代のものと考えることができる。

71号土壤 Fig.10 D区検出の井戸。下部は桶組、上部は井戸瓦を組んでいる。土器、須恵器、土師皿、瓦器碗、瓦などの小片、口禿を含む白磁、黄釉盤や、陶器C群の甕などの小片、ころ、輪形のハマなどが見られた。長い期間の遺物が含まれているが、中では図示したような実測可能の破片を残した時期の跡が濃いといえる。固はいずれも11~12世紀の磁器である。1、青白磁の皿。2、白磁碗II~4類、3、白磁碗IV類、4、白磁碗V類。

102号土壤 Fig.11, 12 (PL. 4) C区検出の井戸である。最下部に一木をくりぬいた井戸棒を据えてあった。上部はやや崩れているが、縦板を組んで四角い鉢を造っていたと思われる。掘方の埋土は図で見る如く大変複雑な様相を呈している。遺物は⑩、⑤、⑪層より出ている。1

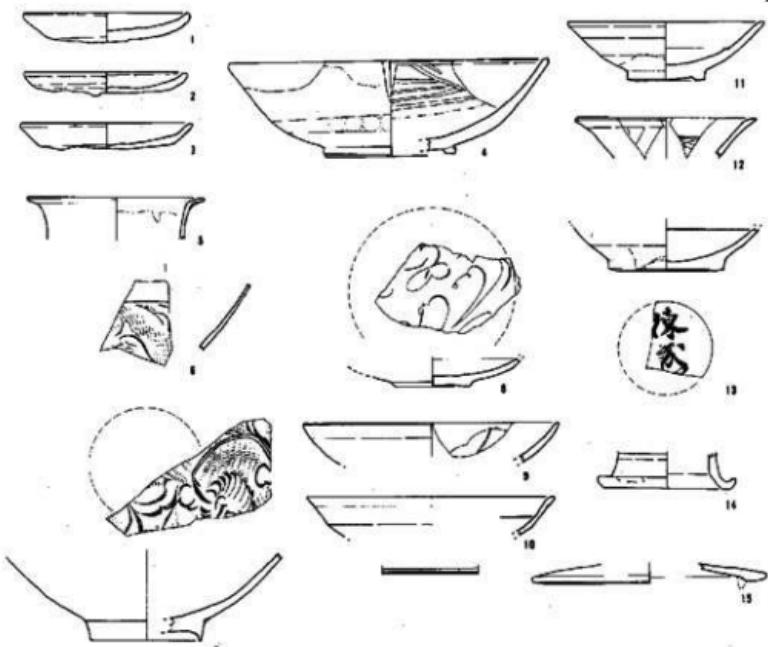


Fig. 12 C 区102号土壤出土遺物

~3、へら切底の上師皿。4は瓦器碗。5~7は青白磁で、5は瓶の頭。6、7は同一個体の碗。高台内まで施釉され、外底の中央のみ露胎である。8~14は白磁。8、9は平底皿0-I類で、Fig.20, 21と同類。10は高台付皿III類で無文の例である。11は同じくI類。12は小碗でFig.24の1に属する。13は碗IV類で外底に墨書が見られた。14は白磁碗II類と似た胎・釉で、何かの脚もしくは台と思われる。15は綠釉の蓋で、胎上はベージュ色精良、もとは黄味のある綠釉で光沢があったと思われるが、現在では大部分銀化している。華北の製品との指摘もあるが、詳しくは今後の研究にまちたい。以上に他に実測不能の小片として、青白磁の灯台、もしくは香炉と思われる破片、越州窑系青磁でFig.15の10と同じ形の破片で、11の類の瓶の頭と思われるもの、同じく小瓶、碗などの破片がある。又、白磁碗はVI~4類に分類される鐵絵文のある体もある。又、白磁碗II、IV類を中心にV、VI類も僅か見られ、平底皿III類、水注の注口もある。陶器はA群のI類、広縁の黄釉盤、II類の盤、III類の壺があり、褐釉のかかる行平や準A群の褐釉四耳大壺がある。B群の瓶、C群の壺や長胴四耳壺、捏鉢3がある。これらも11~12世紀前半の遺物と考えることができる。

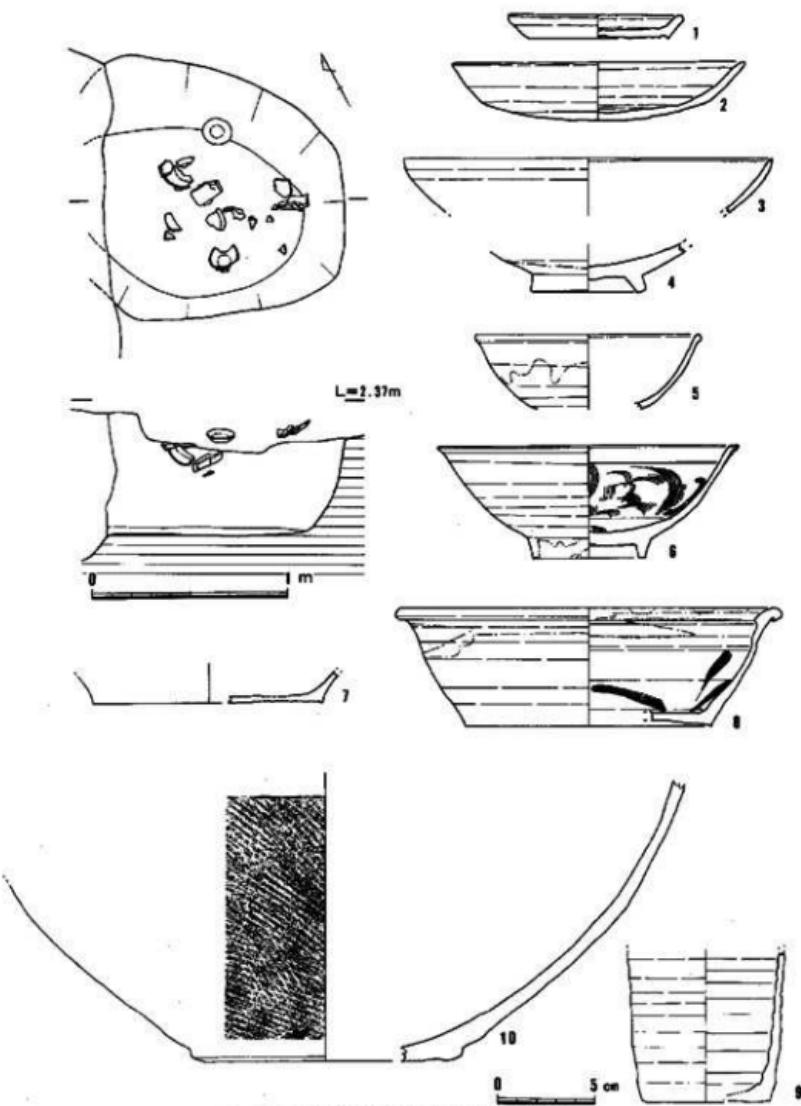


Fig. 13 D区108号土壤と108号土壤出土遺物

100号土壙 Fig.12 (PL. 4) D区検出の土壙。一部発掘域外にかかり全体を掘り出すことはできなかった。遺物は上部から一括検出された。1は糸切底の土師小皿、2はへら切底の土師皿である。3~6は白磁碗。3は大ぶりなII類、4はII-1類、5は小碗で、Fig.24の4と同類、6はVI類で内に都描文、外は無文の例である。7~9は陶器のA群で、7はIII類の盤、内面には黒褐釉がかかっている。8は青みの強い黄釉褐彩盤、小型で、口縁は中細とでもいべきか、細めの広縁である。9はIII類の小口瓶。10はC群の捏鉢である。口縁は欠けるが、捏鉢2であろう。以上の他に、白磁の碗IV、VI類、Fig.23の6の類、高台付皿I-1、III類と、陶器A群に属する褐釉壺、準A群の褐釉四耳大壺がある。

111号土壙 Fig.13 (PL. 4) E区検出の井戸、今回の調査で検出されたしっかりした遺構の中では、最も古期に属するものである。下部には曲げ物の枠を据え、上部は縱板を組んで四角の枠を作っている。板のつなぎ目には裏から板を当てている。遺物はやや古式の須恵器を含む平安時代の土器、須恵器、かまとなどが大量にあったが、中国陶磁は白磁碗IV類の小片1個のみで、他からの混入と思われる。

今回の調査では、これまで博多のみならず太宰府、京都など北宋末の遺物を出す地方でも、かつて報告されたことのない多種多様の中国陶磁が出土した。11世紀末以降の遺跡例は各地でも増加する一方なのだから、各地にないということは、博多の歴史的立地条件からみて、とりもなおさずそれ以前の遺物であることを推測させた。現時点では実年代を確定することは難しいがこれらの新顔の中には確かに11世紀末年よりは早い時期に生産されたと考えられるものがある。次にそれらをできるだけ多く紹介しておくこととする。

青磁 ここでは博多で遺物整理の際に龍泉窯系や同安窯系と分類している以外の青磁をまとめた。Fig.15 (PL. 5)は広義の越州窯系の青磁である。1、III。胎は灰褐色精良、オリーブ色の透明釉が薄くかかる。光沢あり氷裂はない。内底には細い線彫の精緻な花鳶鳥が二羽、追いかけて描かれるが、小さい山ひびが入っている。全面施釉の葵筒底には円形に白い硅砂が附着している。A区。2、香炉蓋。胎は蔚色を呈し精良。帯オリーブ透明釉が、表裏ともにかかっている。氷裂はない。唐草を透し彫で表わしている。同じ意匠の香炉は浙江省上虞寺前窯や臨海許市窯などの北宋窯址で出土している。A区下層。3、器形不明。胎土、釉とも2と同一個体というほどよく似ているが、器内上半は露胎で接合は無理。炉である可能性もあるか。A区。4、碗。胎土精良、灰色。オリーブ色の釉は薄いが光沢がある。外底は全面施釉で、円形に硅砂附着。E区。5、割花瓶。胎土は蔚色~暗灰色。細かい。器外は底まで全面施釉だが、器内は露胎である。オリーブ色透明釉には氷裂がある。外底には砂目附着。割花文があり器壁は厚い。E区。6、蓋。胎は精良緻密で灰色。オリーブ色の釉が全体にかかる。身受け先端部

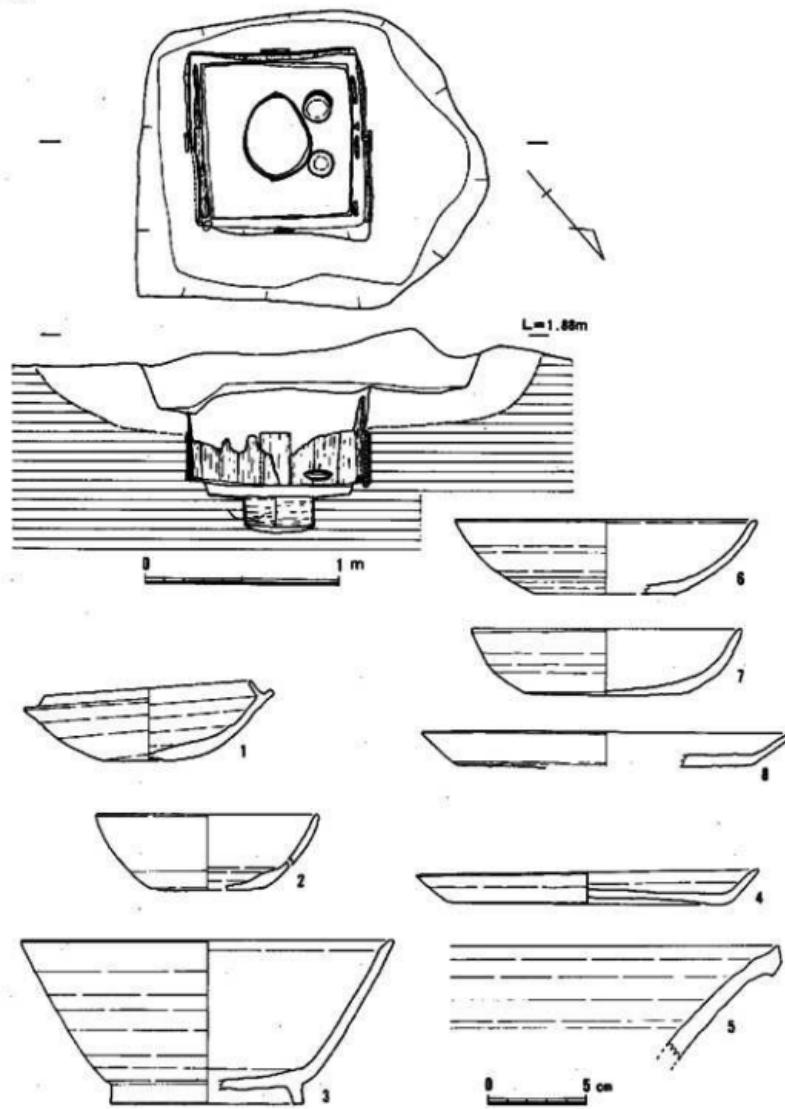


Fig. 14 E区111号土壙と111号土壙出土遺物

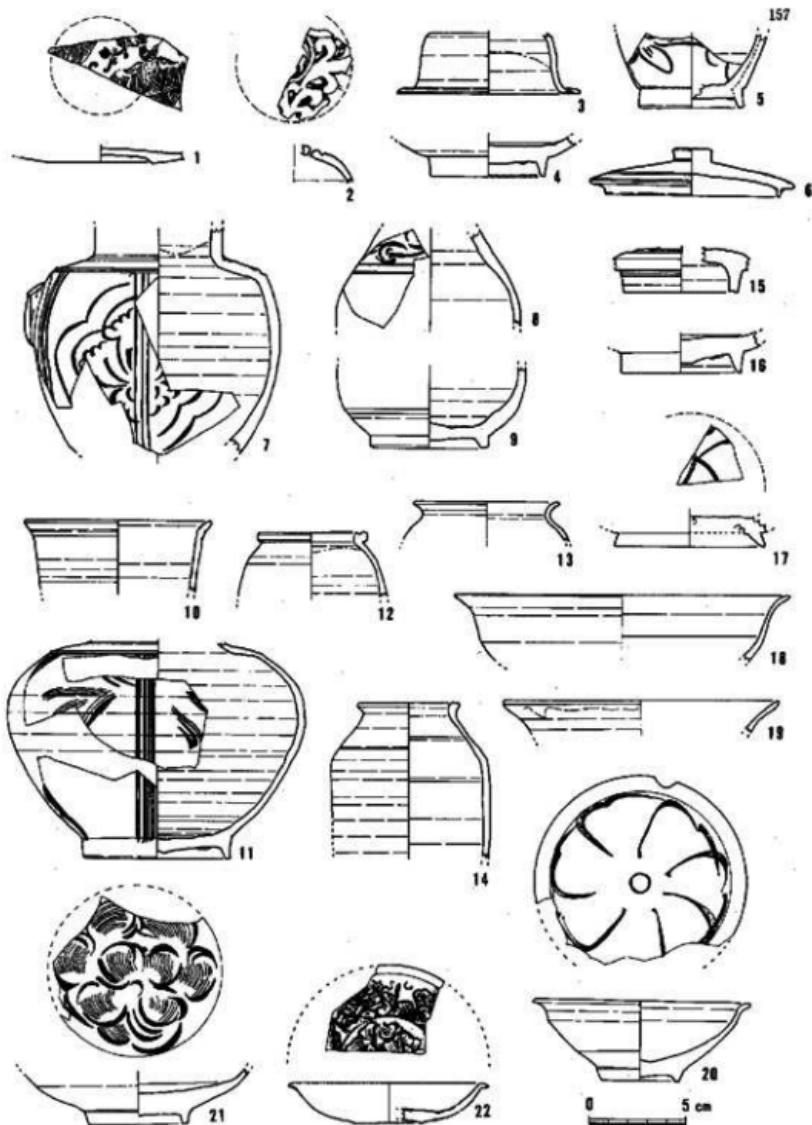


Fig. 15 出土遺物 青磁 (1)

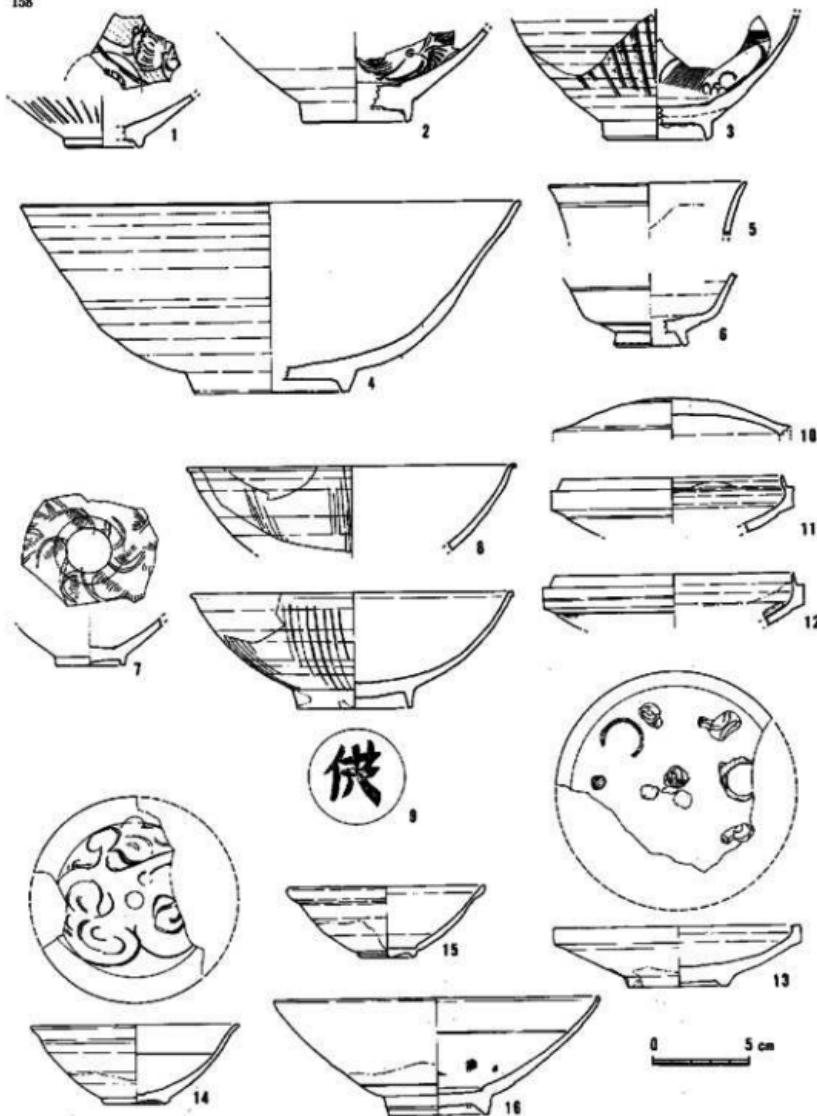


Fig. 16 出土遺物 青磁 (2)

に耐火土附着。A区。7、水注。胎土は濃灰色堅緻。オリーブ色の透明釉が薄くかかる。瓜形の体は二本組の凸線で、六分している。胸の両側面に窓を描き、中に花文を配する。丸のみ彫である。らっぽ状の頸と曲った注口、把手がつくと思われる。頸の付根と肩に凸線をめぐらし、はっきり区割している。内盤は露胎で器壁は厚い。B区下層。他に同類の破片が7、8個体分ある。8、9は同一個体で、洋梨形の壺。肩部に割花文がある。胎土、釉とも7の水注とよく似ている。器内底部を除いて全体に施釉され、高台付付に耐火土が附着している。B区42号土壤。10、11、水注。別固体だが大変よく似ていて、同一窯のものと思われる。胎土は灰色で精良緻密、薄造りである。釉は帶オリーブ透明釉で水裂がある。器内外とも全面施釉で外底に四個、大きな横長の砂目跡がある。10はC区122号土壤、11はB区24号と31号土壤出土。他に2~3個体分の破片があり、頸部に把手のついたものもあった。7や11、12のような水注の器形は、浙江省の北宋の青磁窯では、上虞寺前窯(上図1)、鄞県小白市窯、温州西山窯、紹興上灶官山窯、慈谿窯、兰溪嵩山窯(上図2、3)など、多くの窯址で報告されている。我国では、伝大津市南滋賀町勤学堂出土の白磁の例があり、北宋中期の典型作とされるが、最近の兰溪の報告では北宋早期の形と考えられている。12、瓶。胎土は暗灰色精良。釉は灰緑色不透明で水裂あり。B区33号土壤。13、壺。胎土は濃灰色堅緻。釉はオリーブ色不透明で水裂なく、残部に露胎はない。A区。14、瓶。胎土は暗灰色に黒点が少々混る。灰色の釉は口から肩にかけてはよく熔けて光沢があるが、下部は白くかけている。内部は口以下露胎。口に砂と他器を剥ぎとった跡があり、重ね焼をしている。B区。15、壺。胎土は濃灰色精良、焼成良。帶オリーブ透明釉がかかり、上面に鋭三角形の砂目跡がある。A区。17、碗。胎土灰褐色、小孔多し。茶オリーブ色透明釉には水裂がある。C区121号土壤。18、19、碗の口縁部。灰色の胎土にオリーブ色の釉がうすくかかる。D区、B区。20、小碗。胎土は灰色、よく磁化している。灰緑色半透明の釉は全面施釉で、外底に珪砂がいっぱい附着している。D区。21、高台付皿。胎土は灰緑色堅緻、オリーブ色の釉が全面に薄くかかる。外底に耐火土附着。B区下層。22、平底皿。全面施釉で底に4もしくは5か所目砂が附着している。印花文があり、釉は暗い青緑色でやや厚めにかかる。A区。



1. 上虞寺前窯 文物1963-1
2,3 兰溪嵩山窯 考古学叢刊2 1962

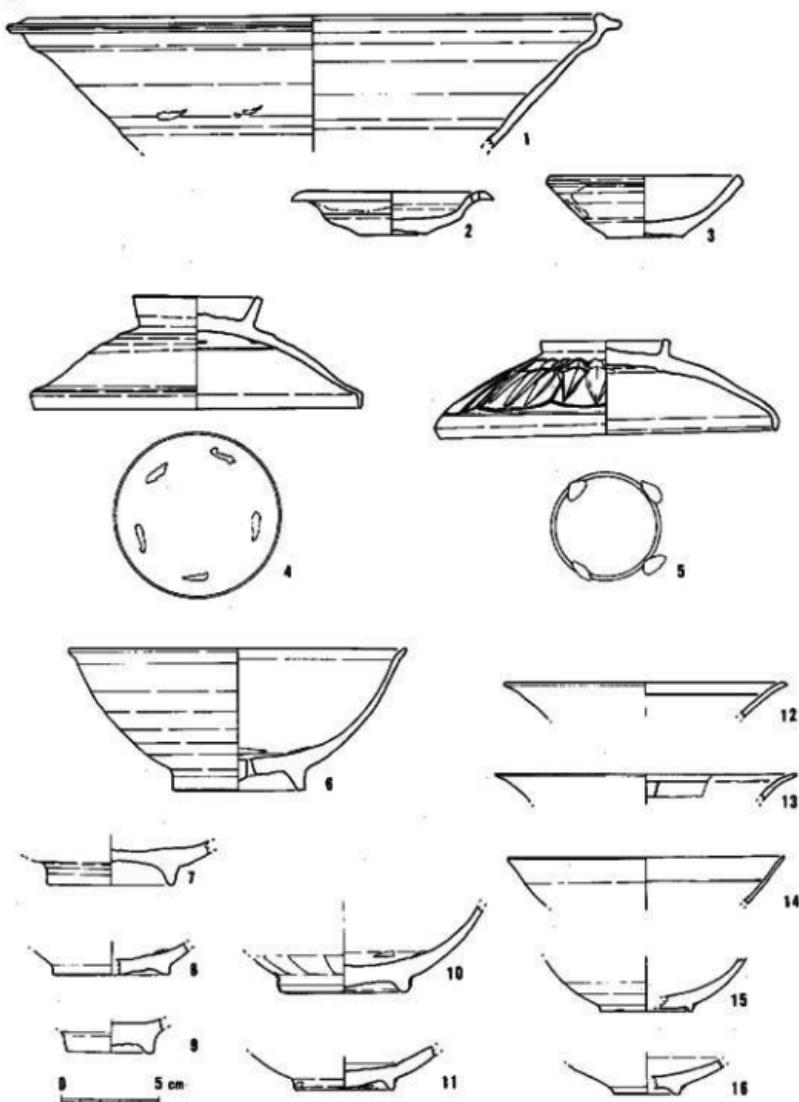


Fig. 17 出土遺物 青磁 (3)

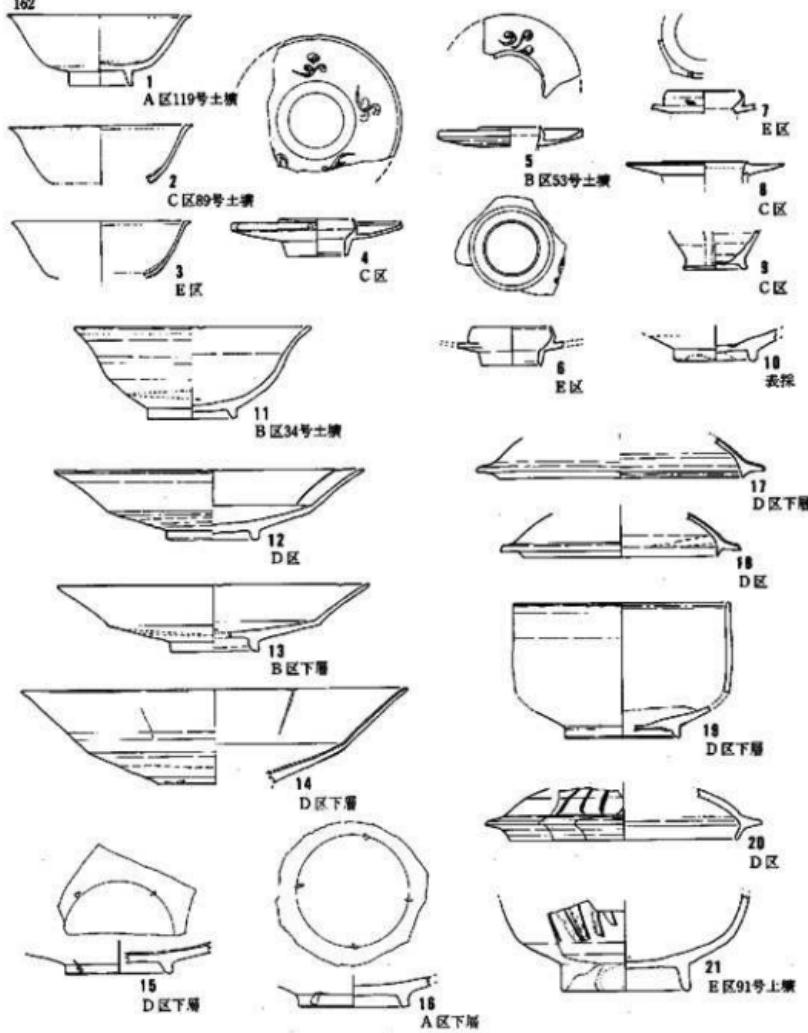
Fig.16 (PL. 6) 1~6は越州窯系でも、もう一つ新しい傾向を見せており、7以下は外底、あるいは体下半露胎という点からも、相異点の大きな青磁といえる。1~3は碗で、胎土はいずれも灰色堅緻、釉は底部の全面に施釉。外底に耐火土が附着している。2はガラス質の釉で非常に光沢がある。文様から、広州西村窯との指摘もあるが、西村窯では釉は底までかからないのが普通と報告されているので、やはり浙江省周辺に生産地を求める。これらは北宋後期の様式の青磁と考えられる。1からA区、E区、A区。4、鉢。胎土は灰色の土に黒い粉を混ぜたように見える。びっしりと細かい氷裂がある淡オリーブ透明釉がかかる。器全体に施釉の上、墨付のみ削って露胎にしている。5、6は同一個体で暗灰色の胎土にオリーブ色の釉がかかる。光沢がある。器内と高台以下には施釉していない。炉か。A区下層。7以下は外底あるいは体外の下半が露胎の青磁である。7、小碗。胎土灰白色、縁がかった透明釉がかかる。氷裂あり、外底は露胎で橙色を帯びている。8、9、同類の碗である。胎土は灰白色少々ごま混り。淡オリーブ透明釉がかかる。外底露胎。B区42号土壤、E区。他に10個体近くある。10~13 合子、同類の合子で、器内には小杯や皿3個と蓮を配していたものであろう。大部分はずれ落ちて痕跡のみが残っている。胎土は灰色でやや粗く、露胎や釉尻にシブが出る。白化粧の認められるものがある。釉は淡色の灰オリーブで、半透明。10~12はA区、13はC区。他にFig.15の8、9の壺と共にB区42号土壤から出た大きな底部がある。14、小碗。胎土は灰白色、露胎部は赤茶がかる。茶色っぽいオリーブ色の釉が不均等につく。氷裂がある。口縁部は虫喰になりやすく、茶色にやけることが多い。D区下層。他に10個体以上がB区を中心に見られた。15、小碗。胎土、釉ともに14とよく似ている。B区35号土壤。同じ土壤よりの1個と、D区72号土壤よりの1個を含む8個体がある。16、碗。胎土は淡灰色でやや粗い。露胎は赤茶がかる。釉はオリーブ色で渦り、氷裂がある。B区下層出土。この碗は1例のみであるが、釉色がやや明るく、口縁が内折せず、器内に描绘文のある例は、数個体の破片があった。10~16は、胎土や釉に似通った印象が強く、それは白磁碗II-3類や、平底皿III類につながっていくものであることに注目しておきたい。

Fig.17 (PL. 7) 1~3は、これまで陶器B群に分類したものであるが、今回の調査区では青磁としないわけにいかない高品質のものがあった。これは陶器B群を、主として越州窯系の青磁の末裔と捉えることの根拠になりうるものであろう。1、鉢。胎土暗灰色やや粗。オリーブ色の釉がかかり、口縁と体外下部に重ね焼の砂目跡が残る。E区。底はA区9号土壤で出土した。Fig. 3の3、4の類と思われる。2、蓋。胎土は灰色、灰オリーブ色の釉がかかる。底部は火まわりが悪く焼成不良のまま。A区。3、皿。胎土は暗灰色、白砂まじり。オリーブ色半透明の釉が内面と外上部にかかる。きっちりと底を削った平皿である。A区。

4以下は高麗青磁である。4、5は鉢にかぶせる蓋である。胎土は灰色。釉は越州窯系のものに較べて青みがあり、厚く、透明性に欠ける。鉢の先端部のみ釉を削っており、この部分と内

付録2. 萩多遺跡群第6次調査報告

162



0 10cm

Fig. 18 出土遺物 定窯・磁州窯系の陶磁

部天井部に珪砂の目跡がある。B区54号土壙、A区。6、碗。胎土は淡灰色に白砂まじり。釉はやや黄味がある。疊付のみ露胎でれんが色を呈す。内底には大きな砂目が5個残り、山ひびが入っていて液体は盛れない。B区23号土壙。7、8、10、碗。施釉法や目跡に、6と同じ特長を持ち、不透明な釉と粗厚な底部をもつ碗である。7からD区94号土壙、B区、B区54号土壙。9は上の3例と異なり、底部全面施釉で、疊付と内底に目跡4個がある。D区。11～16は碗もしくは皿で、いずれも灰色の胎土の上に青緑色の透明釉がかかる上質青磁である。12、14、16には水裂がある。底部では釉は全面施釉の上、疊付のみ削りとっている。数か所におく目には珪砂を用いている。11よりA区、表採、B区58号土壙、D区、B区、C区下層。これらの高麗青磁は、10～11世紀に生産されたものといわれている。

Fig.18(PL.7・8)では、定窯もしくは磁州窯系の遺物を紹介する。1～9は粉白色の精良な胎土で、非常に薄い造りの小形品である。1～3は高台の高い杯で、漆黒の光沢のある釉がかかる。釉は高台まで達せず、また、口縁部と見込では施釉後に釉を削りとっている。1からA区119号土壙、C区89号土壙、E区。この他にFig.9、11も同類である。4～8は杯托で、かすかに茶を帯びた透明釉がかかり、釉下には茶緑色を帯びた黒で文様が描かれている。Fig.5、5の杯は7と対かもしれない。4から、C区、B区53号土壙、E区、E区、C区。9は杯托と同様の釉がかかる小皿で、残部に文様は見られない。10～21はいずれも灰色がかったやや砂っぽい土に、まっ白の化粧土をかけ、透明釉を施している。一見ほうろう質を感じさせる白い焼き物である。10～16、21には見込に胡麻より少し大きいほどの目跡が4個あり、又高台の付根に4あるいは6個所、焼成以前に鉗子ではさんだような胎壁に達する傷が見られる。19は内は乳白色、外は柿色の釉がかけ分けてある。口壳。19には18、21には20の蓋がぴったりの大きさである。10から表採、B区34号土壙、D区、B区下層、D区下層、D区下層、A区下層、D区下層、D区、D区下層、D区、E区91号土壙。他に11と同形1個、12～14の形10数個があり、なお他の器形になると思われる碗・皿が数種ある。遺構出土のもので見る共伴遺物は11～12世紀前半のものであり、中国では北宋期に生産されたものと考えられる。杯托は山西省太原小井峪の11世紀中葉の墓（考古63年5期）より出土したものによく似ている。小さな目跡がある腰折の皿は、山西省霍県に報告があるが、この窯は主として元代に古定器を模した窯で、目跡の数も大多数は5個である。山西省介休窯は、北宋に始まり、小さな目跡をもつが、トチンの支钉は3個である。又報告では両窯ともまっ白の胎土を用いているとあるので、この両窯を生産窯と考えることはできない。しかしいずれこの辺の窯で生産されたものであろう。

Fig.19～22.11～12世紀の白磁の中に、胎土が灰白色、粉っぽい感じで粗く、時に化粧を施し、釉は薄く、黄みのあるものが多い。多くは水裂があり、釉尻にオレンジ色の渦が出やすいなど、似通った風合いを持つグループがある。このような見かけの特長を直ちに原料＝産地の特長とみる

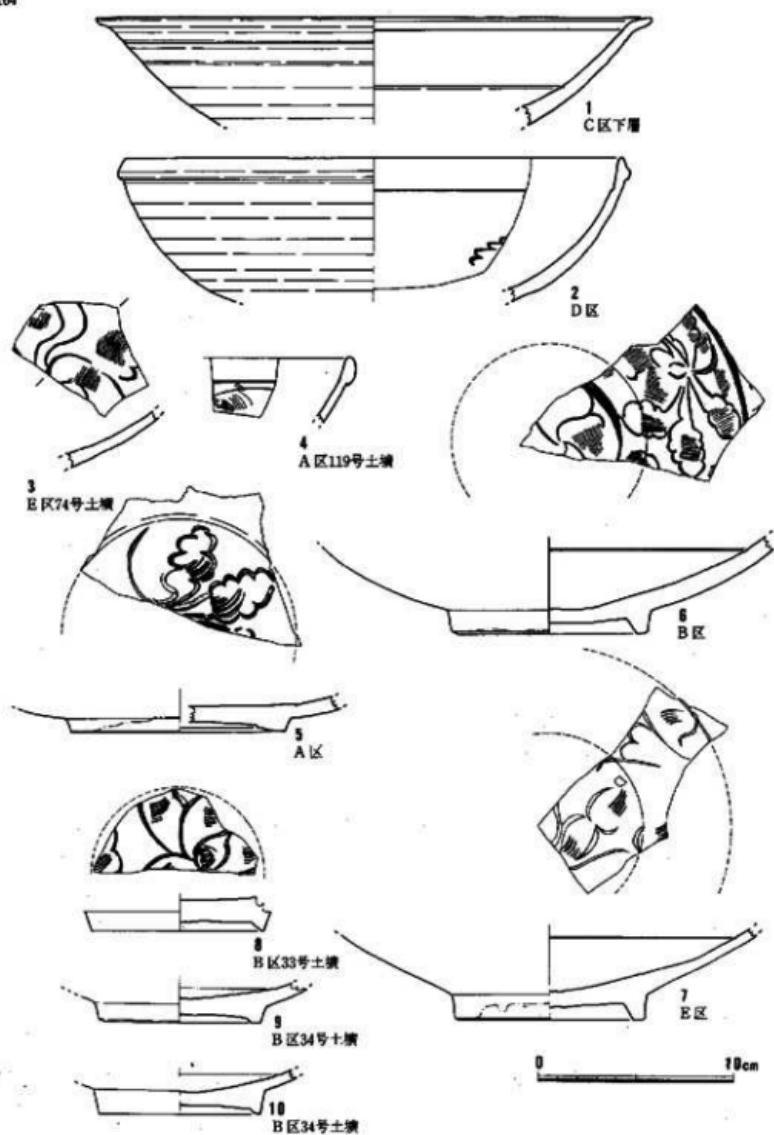


Fig. 19 出土遺物 広南風の白磁（1）

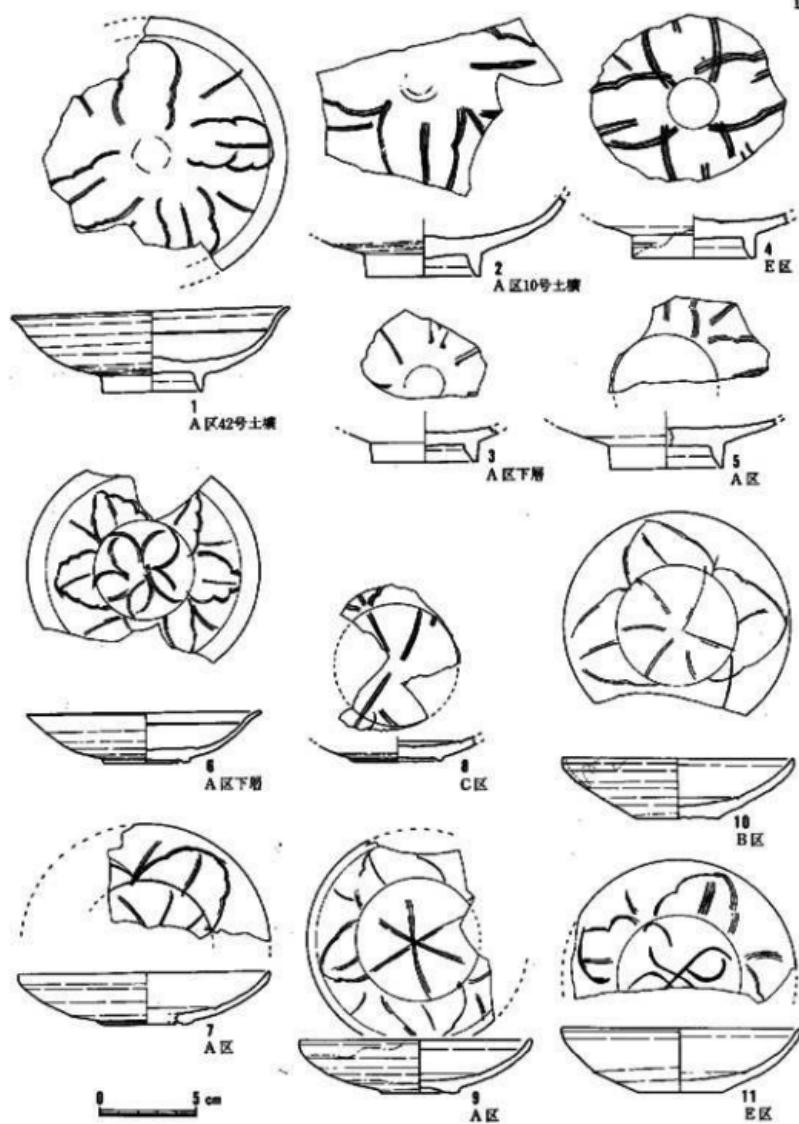


Fig. 20 出土遺物 広南風の白磁 (2)

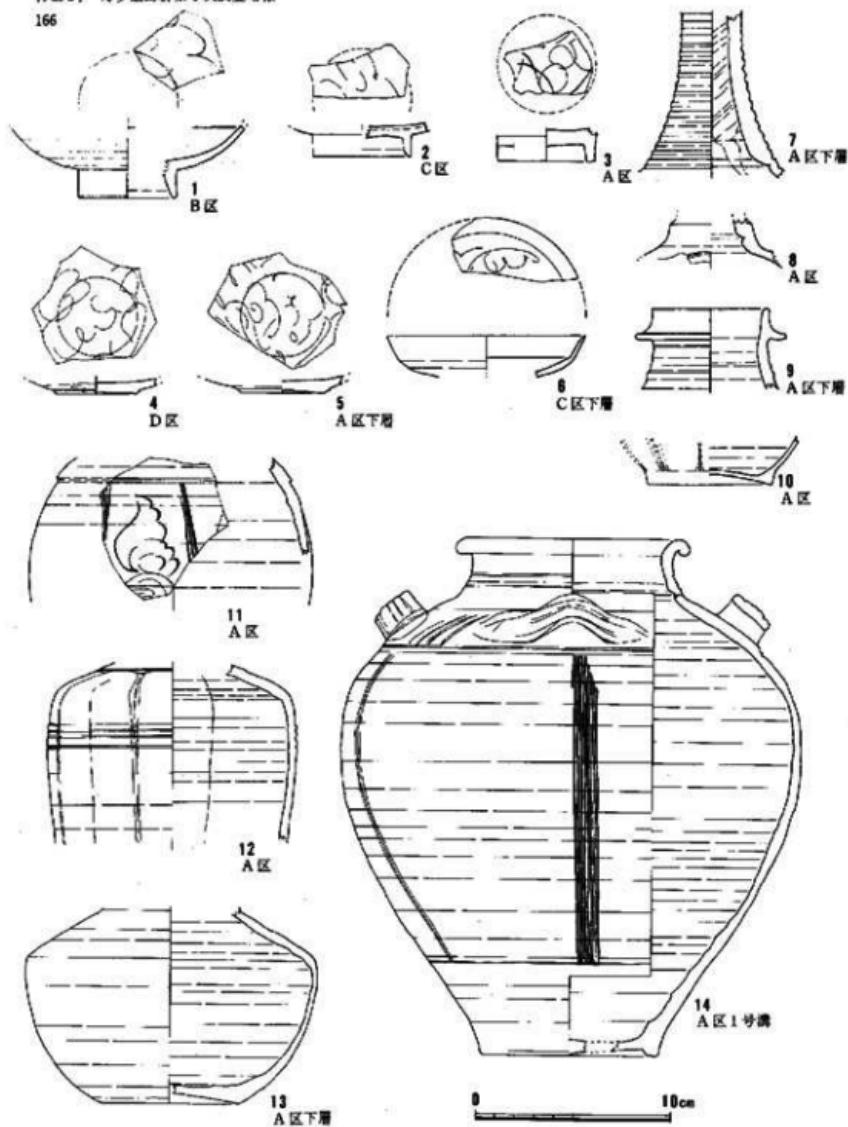


Fig. 21 出上遺物 広南風の白磁 (3)

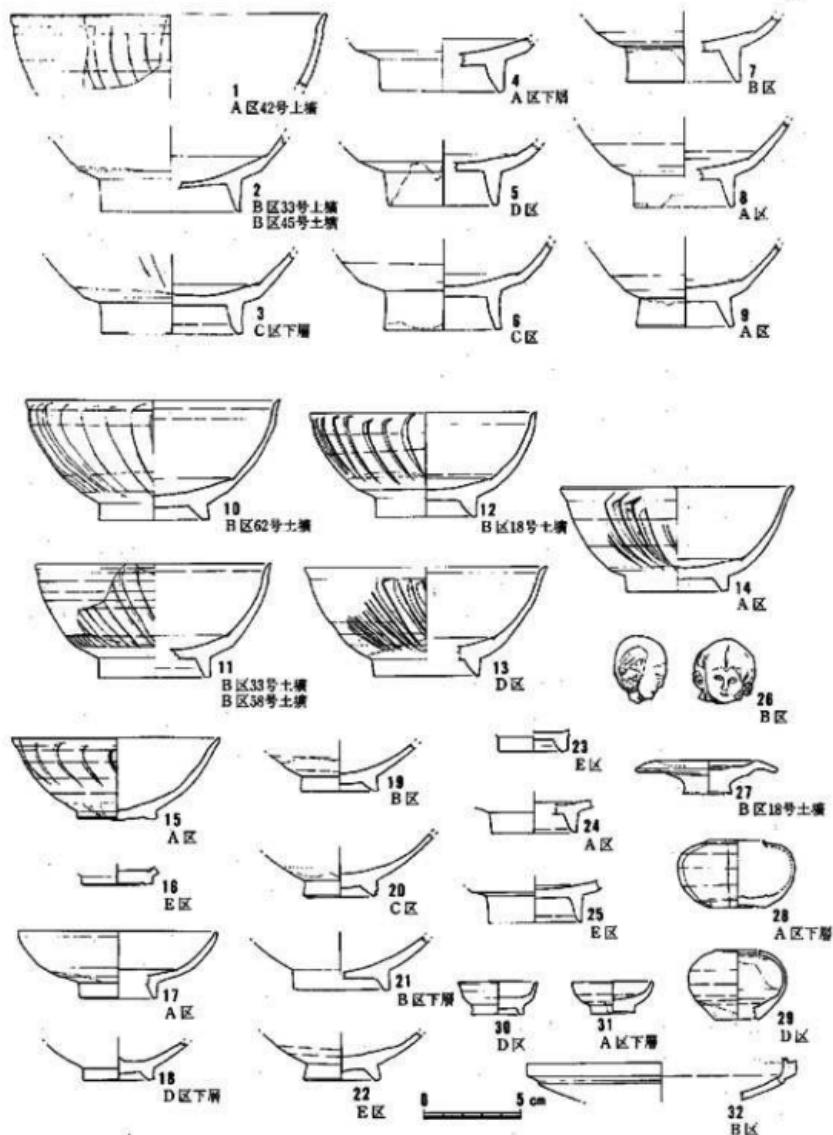


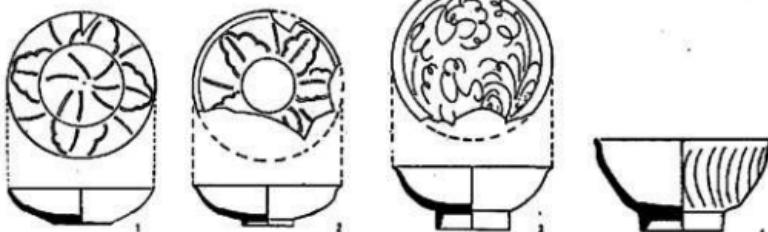
Fig. 22 出土遺物 広南風の白磁 (4)

ことはできないが、それでも原料や技術を含めた一般的な焼成の条件を示すものとして、地域的な特長として捉えることは許されよう。このグループは、84年の福岡市埋蔵文化財調査報告書105集で試みた分類で、白磁碗O-I、II、III類、III O-I、II、III類としたものである。本遺跡ではこの種の白磁が、かつてないほど多種多様、しかも大量に出土したので、まとめて紹介する。

Fig.19 (PL. 8) 大碗である。1は黄ばんだ灰白色の粗い胎に、かすかに茶を帯びた透明釉が薄くかかる。細かい氷裂がある。これはかつて福岡城址より出土したもの（福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集、Fig.16の12~16、1983）と同類で、口縁のつばが細くなった形と考えられる。口縁は1のように折れて外反するものが3例、2、4のような玉縁が7例ある。2以下は、1とは異なる釉調で、青白磁ともいいくべき、青みがかかった透明釉がかかる。施釉は高台まで、疊付及び外底は露胎、胎下に白化粧のあるものもある。6では見込に胎が厚く溜り、表面は青白くオパール状になっている。割花文は片切り彫というよりは丸のみで彫ったようで、あまり流麗ではない。小片だが、Fig.21でみるような線彫曲線文のものもある。広州西村窯出土の青白磁刻花大碗に同様な器形を見ることができ、西村窯では多く早期の作品と考えられている。この種の碗の時代を考える上で参考となろう。各出土地点は図に記入した。図示したものの他に19個がある。Fig.20 (PL. 8) は蕉葉文の皿を、Fig.21 (PL. 8) の1~6は線彫曲線文の皿を集めた。Fig.22、1~9は高足の碗、10~14は碗、15~25は小碗や杯の類である。これらと同様の器形と文様を備えた器物は、下図にも示すように広東省の潮州、惠州、陽江など、沿海地区の北宋窯址で数多く報告されている。報告者自身も潮州市博物館を訪れた際、潮州筆架山窯址出土品の中にその一部があることを確認しており、一応広東地方の白磁と考えておきたいと思う。Fig.21 (PL. 9) の7以下、Fig.22 (PL. 9) の26以下も、胎土と釉の質から同じグループのものと考えて一括した。7は潮州古窯址で採集された鳳頭壺の頸部を思わせ、12も同じ窯址からそっくりの水注が採集されている。

我国ではFig.21の高台つき皿と同類のものが、太宰府史跡第74次調査、S D205から、又Fig.22の1~9と同類のものが同じくSD215Aから出土している。Fig.21の4~6と同類の皿は京都でも発見され、報告者はいずれの場合も11世紀後半の年代を考えている。

潮州北宋窯址出土遺物
(潮州筆架山宋代窯址
発掘報告 1981 より)



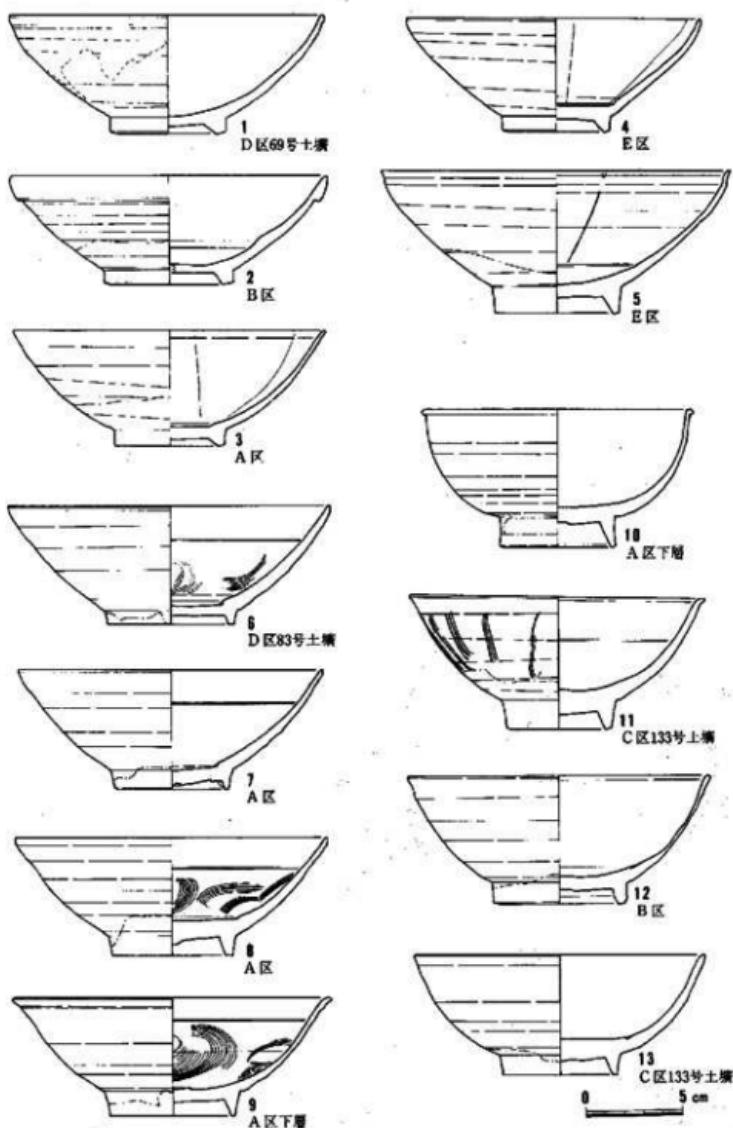


Fig. 23 出土遺物 白磁 (1)

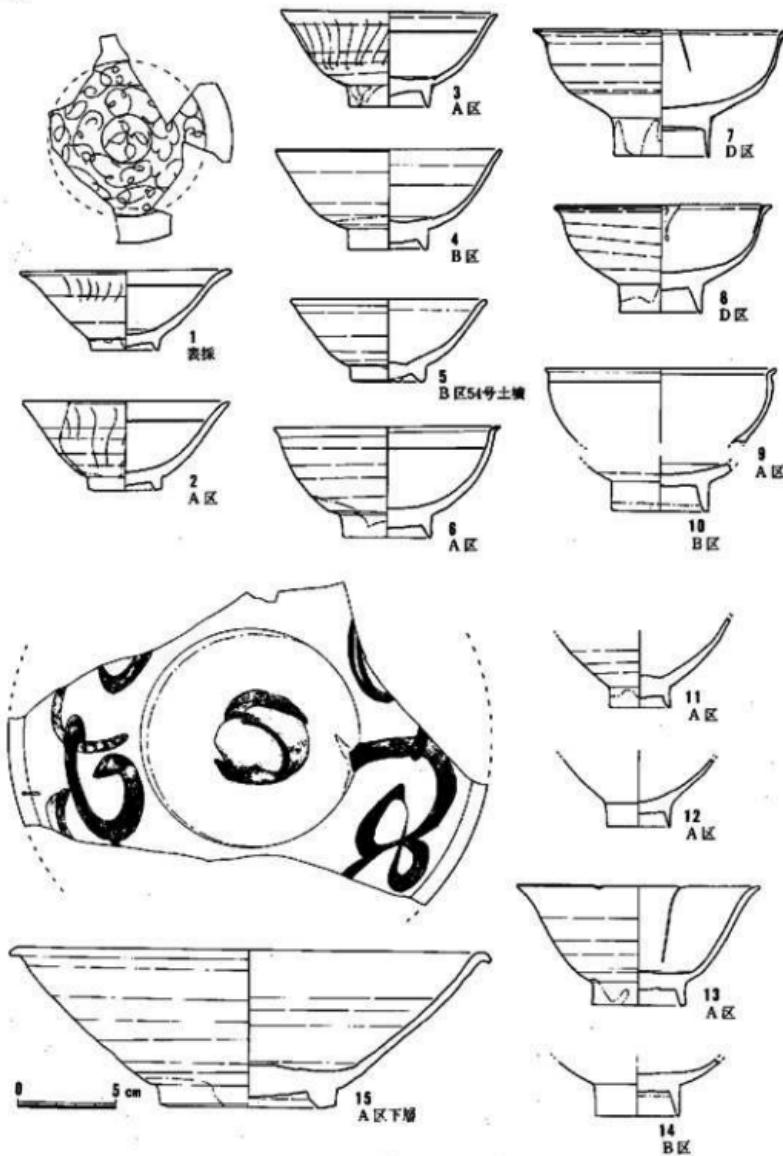


Fig. 24 出土遺物 白磁 (2)

Fig.23~26では、これまでに例がなかった形や、良好な標本が得られず、十分な形で分類ができるない白磁を中心に紹介したい。白磁碗のII類や皿のII、III類は、これでおおむね出そろったものと思われる。

Fig.23 (PL.10) 1~5は白磁碗II類である。高台は外側は垂直に、内側で斜めに削る共通の特長を備えている。胎土はガラス化しにくい成分なのか、いずれも粉っぽい感じが残り、灰白色、黄白色である。化粧土がかけられることも少なくない。釉色は概して不安定であるが、1、2、4では、黄ばんだ灰白色が主であり、3は黄釉と呼びたいほど黄褐色が強い。5では大体两者の中間が多い。それぞれの口縁は、定まった特長の内底と対応するので、分別は比較的容易である。又、3、4、5には、器内を白堆線で5分するものと、無文のものがある。数量的には、遺構外出土のものを数えて例とすれば、次の様である。1(600)、2(65)、3(51)、4(52)、5(29)。いずれも破片数である。6~8は、見込が平らで広く、体はほぼ直線的に斜行して、そのまま終わるもので、高台はあまり高くない。6は体内に太めの櫛で曲線文を描くが、7は無文。8は6の見込で、輪形に釉を削る例である。太宰府条坊遺跡の例では、6は11世紀後半~12世紀前半の地層から出土している。これは器形としては白磁碗IXと変わらないので、IX類の原形としてとらえることができるかも知れない。6や8の形には、白い良質のものが多いように見受けられる。なお、IX類は今回の調査でも下面遺構からの出土はめったに見られず、やや遅れて輸入される形と思われる。9、見込に径2cmほどの鏡を残し、囲りを削りこんでいる。体壁には太めの櫛で曲線文が描かれ、体壁は丸みをもって立ち上がり、口唇はふくらんでいる。これも太宰府条坊遺跡で11世紀後半~12世紀前半の層から出土することが報告されている。10、全形のわかるのは1例のみだが、高台に特長があるので検出しやすいものである。即ち釉は高台をくるんで裏側にまでまわっているが、高台の付根から半分ほどの高さまで、釉を削りとっている。非常に腰が深く、半球状の碗である。高台数個がある。11~13はV類に属するものと思われる。このようにほとんど外反のみられない例がかなりある。

Fig.24 (PL.10) 今回の調査では、青磁や黒釉でも小碗が多く、白磁、青白磁でも小ぶりの碗が多く、一つの特長といえる。1~10は白磁。1はもっとも上質で、胎土は白く、釉も透明で光沢がある。底は小さく、体は大きく開いて外反する。器内には細い線彫の曲線文が描かれ、器外にも軽く菊弁が描かれる。10数個体が数えられた。2、質は1より劣り、釉も不透明のものが多い。器内は口縁下の沈線を除き無文で、器外では、線彫の継線文のあるものと、無文のものとに分けられる。60個ほどの個体がある。3、4は白磁碗V類の小形品である。碗から、この小碗まで、種々の大きさのものがあり、その区分はなし難い。5は、見込中心が小さくふくらみ、口唇は細く玉縁に造っている。灰色の強いものが多く、白磁としては質の劣るものである。30個前後がある。7、8、この二つは同類で、大小50個ほどが、この両者の範囲

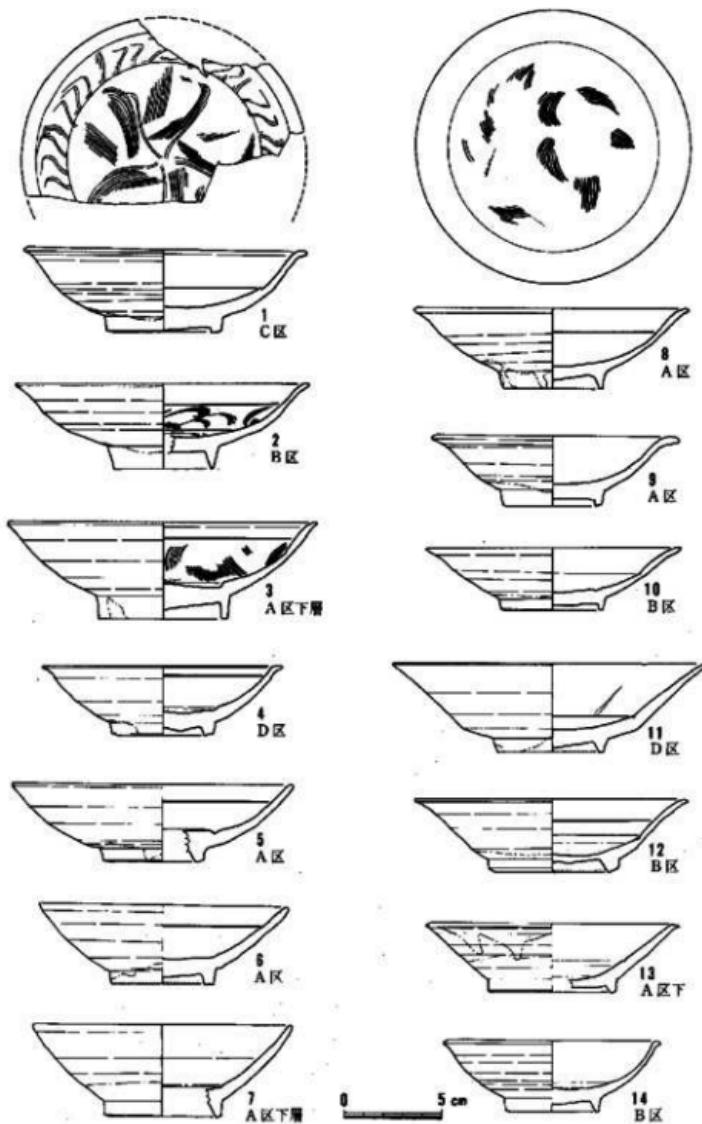


Fig. 25 出土遺物 白磁 (3)

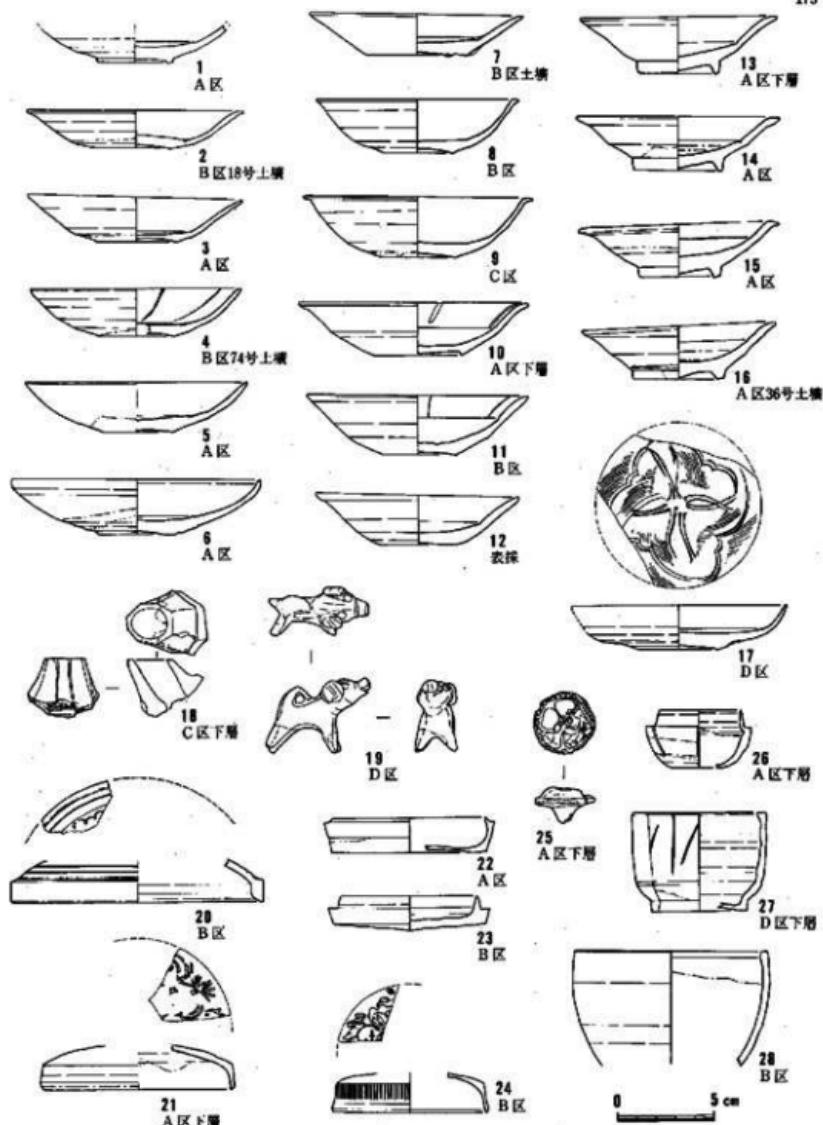


Fig. 26 出土遺物 白磁(4), その他

内に見出せる。又、口唇の刻み込みの有無や、器内の白堆線の有無など、多少の変化を認めることができる。11~14、数は多くないが、青白磁の小碗である。11は5と同様に見込にボッチを造るものである。体はあまり開かずにつわるものと見える。3例ある。12は内底が円く造られており、割花文がある。文様の有無は不明だが、同様の底部が他に3例ある。13は施釉は高台の中ほどまでだが、14では疊付をくるんで高台裏まで施釉し、外底のみを露胎にしている。15は白磁碗VI-4類に属するもので、鉄絵のある大碗である。残りが良好なのでここに紹介した。これと同じ型のものが、かつて大野城跡の経塚から発見され、東京国立博物館に所蔵されているが、1114年銘の経筒と共に伴している。器形が似ている点や、鉄絵のある点などから、これも広州西村窯の大碗との関連で考えられるものである。

Fig.25 (PL.10) ここに集めたものは浅碗、もしくは高台付皿ともいべきもので、命名は迷うが、とにかく器種も数量も多かったのでまとめてみた。最も多いのは8、9で有文、無文を合わせて150個は下らない。これは先年の分類でO-II類としたものである。同類のものが太宰府觀世音寺第2経塚から出土している。この経塚には年紀はないが、第1経塚には1116年の銘があり、12世紀前半には輸入されていたことが、明らかなものである。次に多かったのは1の類で、10個前後あった。これにも口縁下と見込みの沈線を残して無文のものが見られた。4は5~6個だが、いずれも胎が白く、青白磁風の釉が目立った。11、12はやや凹んだ広い見込から体が外反しながら開くもので、やはり5~6個がある。釉は青みのある灰白色のものが多い。11は器壁を白堆線で分けており、12は無文で、見込で輪形に釉を削りとっている。後者の例が多い。その他の器形は、碗に共通の口縁や文様、底造りを有するものが多く、口縁から底部まで揃わない場合には、碗と分別し難いものである。

Fig.26 (PL.10) 1~17は白磁皿の中で、目についたものを拾いあげた。1はごく小さな高台をもつ皿で、白磁平底皿O-I類である。Fig.20・21の蕉葉文や線彫曲線文の皿にも、このような高台が付けられることがあるが、無文のものは一般的に白くよく磁化した胎に、空色がかった氷裂のない釉がかかる。今回の調査ではことさら平皿II、III類が多かった。II類とIII類は、見込と外底の広さに対する、体の立ち上がりの幅、(互いに反比例の関係にある)で分けたのだが、その両極では形も明らかに異なり、又釉調にも差異があるにもかかわらず、中間の特長をもつものがたくさんあって、区分に困った。ただII類は口縁部に外反、直行、内弯をはじめ、体部の白堆線など変化が多いが、III類の方は画一的である。2~8はII類にみられる変化である。これら白磁平底皿II、III類は、白磁碗II類に胎土、釉とも似ており、互いに近い関係にあるものと見られる。9は、II類に属する8と同じ器形の青白磁皿。10~12は大変深めで新しい形のような印象を受けたが、IV-1類に納まるものであろう。13~16も高台付皿II類であるが、当遺跡ではこれまで主流だった末端肥大の口縁部のものより、15、16のように先細りのものが目立った。

この差に年代上の意味があるのかどうか、今後注意していきたい。17は平底皿0-II類で、オリーブがかったクリーム色を呈している。還元炎にかけられれば青白磁になるべきものと思われる。

18~28は、いはば一品物の珍品である。18は湖南省長沙窯の黄釉褐彩壺の注口。下に貼付文の端部が見えている。8角形の短かい注口である。当遺跡ではFig.15の1、越州窑青磁里をしのいで、最も古い中国陶磁といえる。19は白磁の犬の玩具。景德鎮産のことである。20は線刻文の、21は型文様の合子の蓋である。いずれも大きい平型の合子。両者とも胎は灰白色でオリーブがかった透明釉がかかり、冰裂がある。22も20に似た胎土、釉の合子の身である。23も合子の身だが、不透明な灰白色の釉が厚く器外全面にかかっている。24は褐釉の合子の蓋。25は型造りの灰白磁の小壺蓋で、甲は5弁の花型に造られ、周囲を連珠文で囲んでいる。空気抜きの小孔が一つうがってあり、故意か偶然か、褐釉が一滴したたったように着いている。

26、合子身。黄ばんだ白い胎土に、薄いクリーム色の釉がかかっている。小型ながら69号土壙出土、Fig.8の13と同質のものである。このような器形の合子は、広南で報告例が多く、福建省でも南安の窯址で発見されている。27はページュ色の細かい土に緑釉をかけた炉で、器内は露胎、釉はすっかり銀化している。上は陶器A群III類、おそらく泉州磁灶窯のものと考えているグループによく似ている。底は回転糸切底。28、器種不明。灰白色の胎に帯オリーブ透明釉がかかる。器外と器内上部のみ施釉してある。

4 まとめ

当遺跡の調査は厳しい時間的制約があり、緻密な調査を行なうことが不可能であった。こうした状況の中で、最低限、下層の調査だけでも、しっかりとというのが調査の目標となった。結果は予想以上で、これまで中国陶磁輸入の歴史の中で、謎の空白時代とされてきた11世紀の一角を埋める資料が、数多く発見されたのである。報告した図版からも見てとれることだが、これらの多くが、中国で北宋の窯とされる諸窯址発見の器形とよく似た特徴を備えており、これまでの我国の出土例からも11世紀後半、遅くとも12世紀前半迄には廃棄されたものと考えられる。

出土した遺物の中には、E区111号土壙で見られるような一部古墳時代を含む平安時代の土師器、須恵器も多かったが、通常福岡や博多周辺の遺跡でそれらと共に伴する晚唐、五代の輸入陶磁は、ほとんどといっていいほど見られなかった。その代り、北宋後期のみならず中期にまでさかのぼると思われる遺物が豊富で、狭い博多の中でも、その点で際立っている。

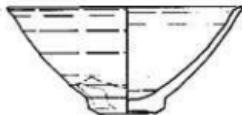
11世紀後半から12世紀前半は、いわゆる江南の白磁を中心に、越州窑系青磁、高麗青磁、それに陶器が少しずつ、というのが、我国での一般的な出土状態であるが、当遺跡ではこれに加えて広南風の白磁や、華北の白釉陶器、黒花白磁も少なからず出土した。これらの陶磁の輸入

時期が、これまでの白磁類と完全に重なるものかどうかは、今のところ明らかではない。ただ、広南風の白磁は、これまでの太宰府や京都の例では、11世紀後半と早めの時期に見られる、ということは、五代末、北宋初に一時途絶えていた日中の交流が再開し、日本における陶磁器の需要が確認されると、それに応じた生産体制が江南を中心に整うまでの間、既成の各地の製品が集められたと想像される。宋代に於ける各地の物資の集散は活潑で、北方の陶磁が大運河を通じて明州に到るものも、広南のそれが海ぞいに明州に運ばれるのも特に障害となるものはなかったはずである。今後とも時代を詳しくつめていくよう留意していただきたい。

次に注目したいのは、北宋代は確実と思われる陶磁器と共に、少なからぬ天目碗が出土したことである。天目碗、すなわち黒い釉のかかった小ぶりの茶碗は、宋代に盛んだった抹茶法と深く関わるものである。我が国の出土資料でも大体13世紀以降の出土が多く、これまで東西による日本への抹茶法の伝来と合致する線でとらえられてきた。僅かに京都で、12世紀後半の層からの出土が報告されたことがあるが、今回の調査ではこれを更に大きく上まわり。場合によっては11世紀後半にまでさかのぼると思われる。個体数も20個前後あり、孤立した例とみることはできない。器形は、器壁が直線的に斜行してそのままに終わるか、もしくは少し外反するものであった。天目碗は、北宋蔡襄の茶錄(治平元年、1064年刻石)にも「茶の色は白であるから、黒い蓋が合う。建安で造られるものは、釉みがかかった黒色で兔の毫のような紋があり、身はやや厚手で火にあぶると熱が長持ちして冷めにくく、最適である。よそのものは薄手であったり、釉がかかったりしていて、みなこれに及ばない。青白の蓋などは、開試をする人たちは勿論用いない。」(『中国の茶書』 東洋文庫 布目潮風、中村喬編訳 1985年版)とあるように、中国ではすでに11世紀後半には、支配階級の評価を受け、名声を博していた。そのようにもてはやされたものが、他の同時代の文化と共に我国にも伝来することは、むしろ当然であろう。ただ、すでに中国でも抹茶法と強く結びつけて認識されていた茶碗が、博多でどのように受け容れられたかは、興味ある問題であろう。出土した天目碗の中に2点、「供」の墨書きをもつもの(右図)があり、あるいは仏前に供える御供茶用の器ではなかったかと想像される。

紙数の関係で、今回ふれることができなかつたが、いわゆる龍泉窯系、同安窯系の青磁や陶器についても、新しい知見が得られた。機会を見て報告していただきたいと考えている。

(文中白磁碗II類の網分はFig.23の1~5をそのまま使用している。)



D区下層



E区

博多第六次調査の記録

1. 手前からE、D、C区遺構全景



2. 同じくA、B、C区遺構全景

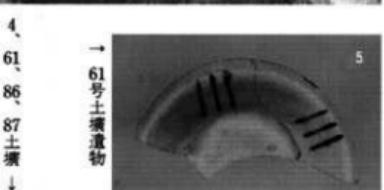
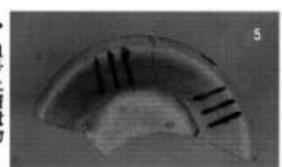
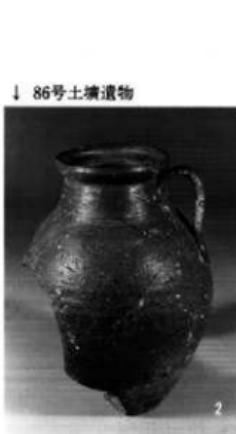




↑ 9号土壤遗物



↑ 21号土壤遗物

→ 3、
21号土壤4
61、
86、
87土壤→ 61号土壤
遗物

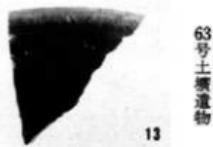
↓ 86号土壤遗物



63, 69号土壤



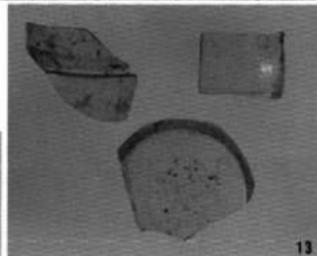
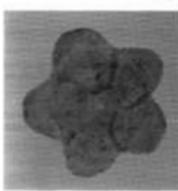
5, 63号土壤↓



63号土壤遗物

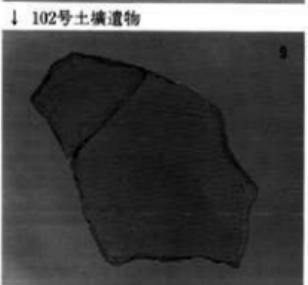
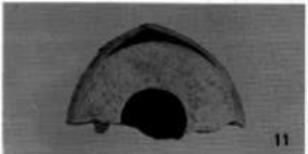
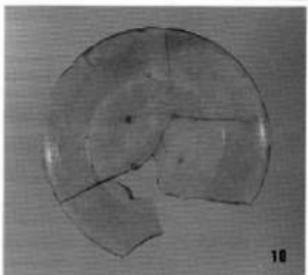


↓69号土壤遗物

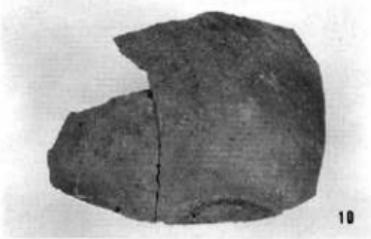
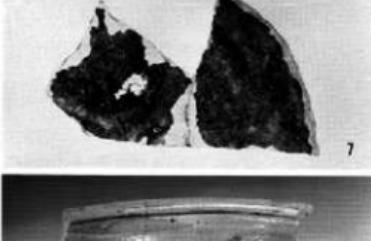


↑6、
69号土壤

70, 102, 108, 111号土壤



↑ 70号土壤遺物 ←



→ 7、III号土壤



↓ 102号土壤遺物

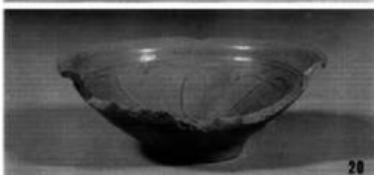
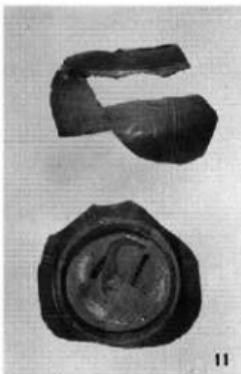
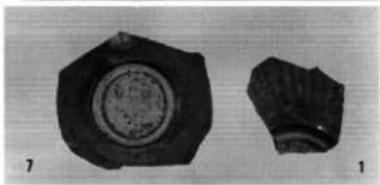
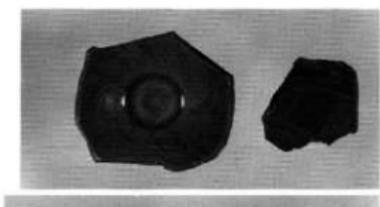
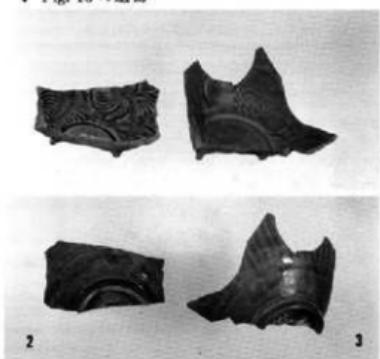


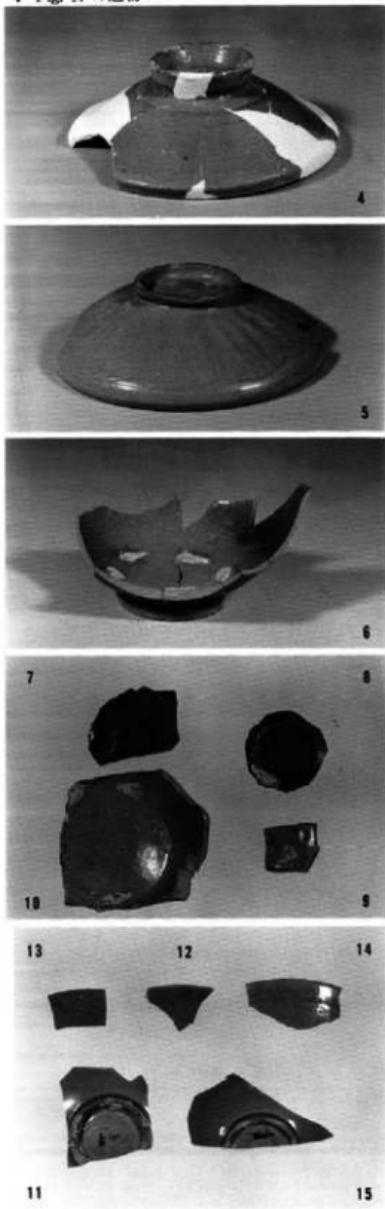
Fig
15
の遺物



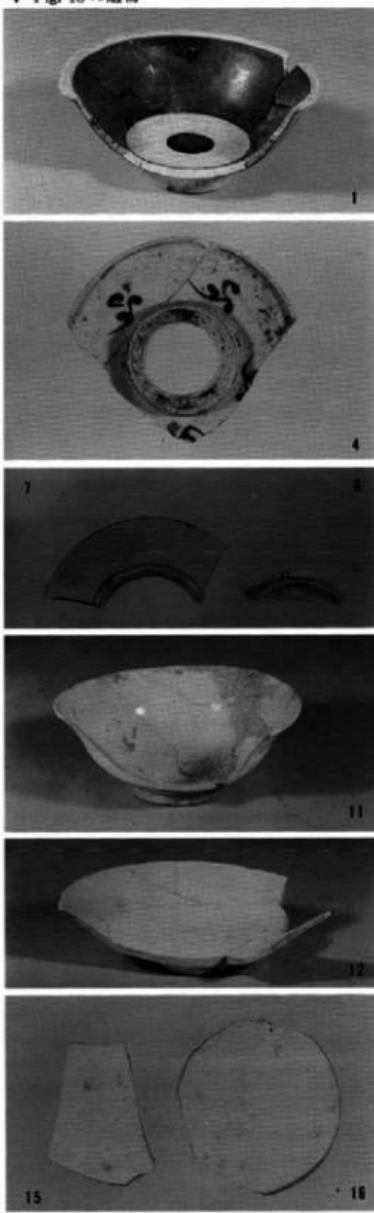
↓ Fig. 16 の遺物



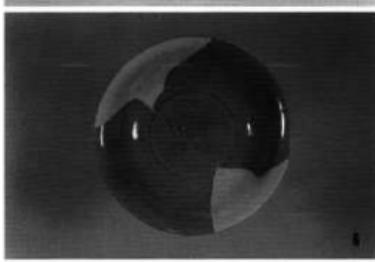
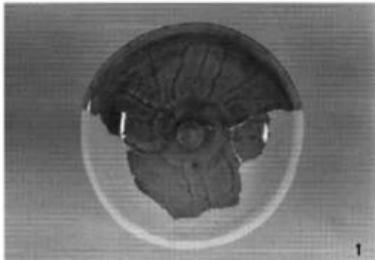
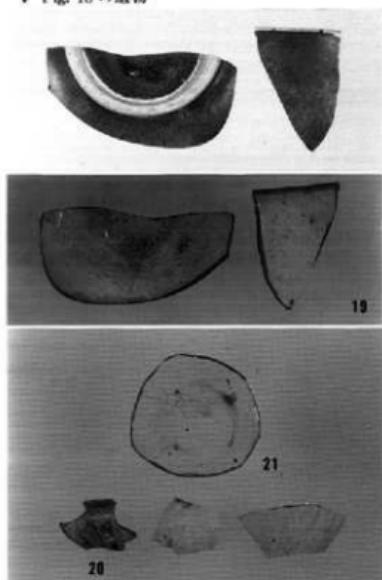
↓ Fig. 17 の遺物



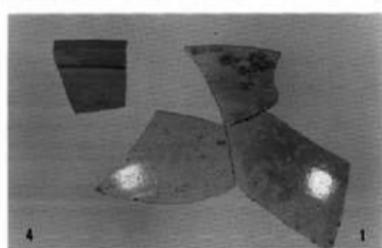
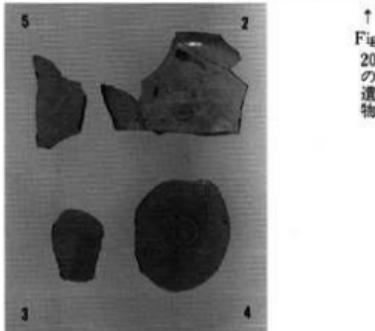
↓ Fig. 18 の遺物 高麗青磁・定窯・磁州窯系陶磁



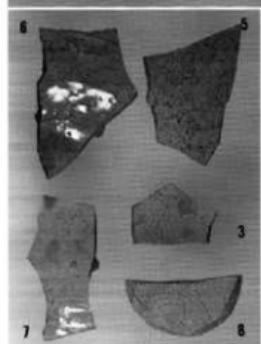
↓ Fig. 18 の遺物



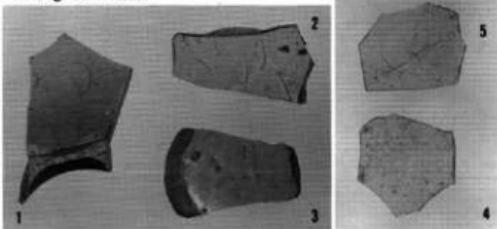
↑ Fig 20 の遺物



← ↑ Fig. 19 の遺物



↓ Fig. 21 の遺物



↓ Fig. 21 の遺物

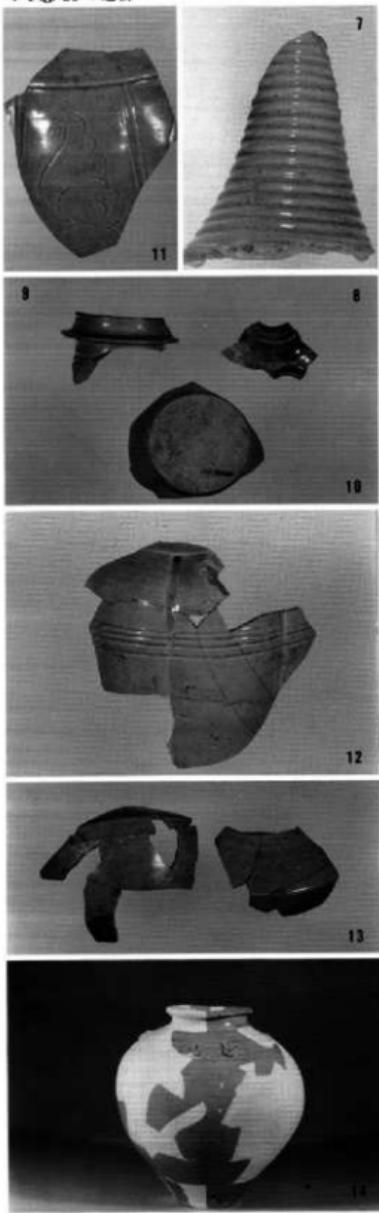
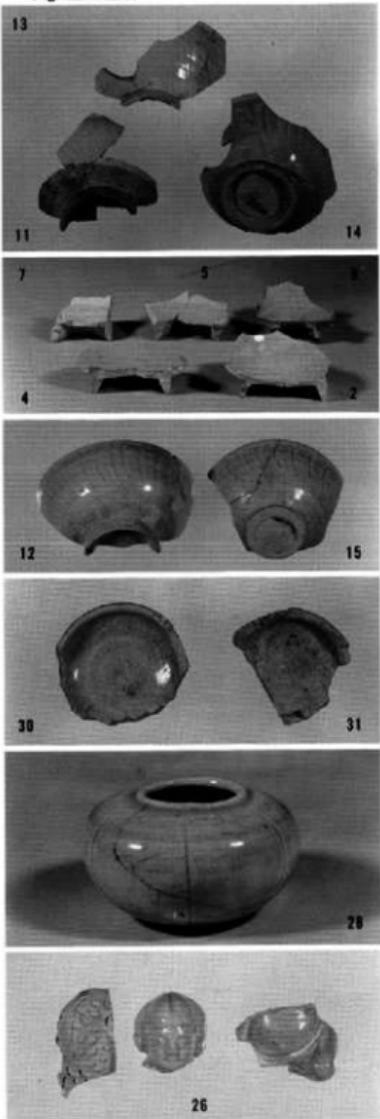
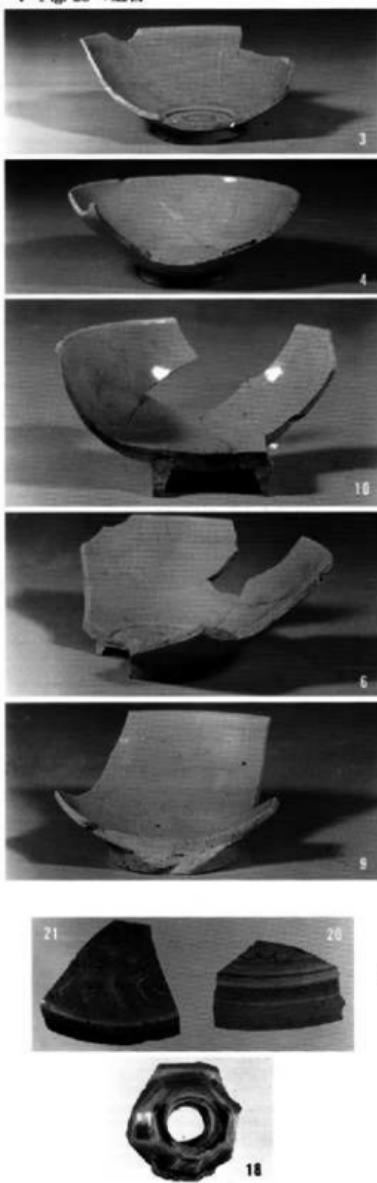


Fig. 22 の遺物



広南風の白磁

↓ Fig. 23 の遺物



↓ Fig. 24 の遺物

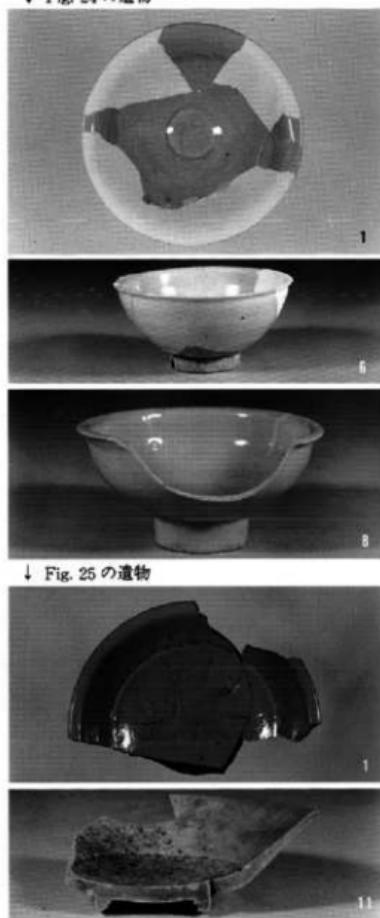
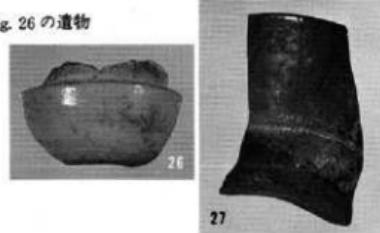


Fig. 25 の遺物



福岡市
高速鉄道関係埋蔵文化財報告V
博多

1986(昭和61)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 祥文社印刷株式会社
〒812 福岡市博多区博多駅南4丁目15-17